
ヒブリオフィリア

京理義高

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ビブリオフィリア

【Nコード】

N0140N

【作者名】

京理義高

【あらすじ】

本が人を殺すことは可能なのだろうか？

ある小説通りに行われている連続殺人事件に挑んだ、書物を愛した物達が繰り広げるミステリーです。

A・第二の事件

本は財産だ。

先人が作り出した作品は数百年前から生き延び、人々の血肉となっている。

この言葉達も後数百年は生き、誰かに根付くであろう。

本は生物だ。

表紙、頁のすべてに生命が宿っている。

本が大人しくしているのも、暴れ出すのも所有者の手にかかっている。

『ブビリオフィリア』の引用文

——作者不明

事件を知ったのは、新横浜で企業の面接を終え、どこにでもある定食屋で食事をしている最中だった。

二〇一〇年一月二十八日十二時頃、新横浜駅のロータリーから右手側の大通りを進んでいたら、ひと際存在感のある大手銀行の建物が見えた。それが目的地を過ぎている目印になっていた。慌てて持っているA4サイズの地図と見比べようと広げた瞬間、視界がぶれた。地図は歩道のアスファルトに着地した。

どうやら人とぶつかったらしい。

五十代ぐらいの男性でスリッ姿、小さな瞳の上にある広い額には大粒の汗が光っている。ビジネスマンだろうか、半開きの口は沈黙している。ぶつかった衝撃よりも、彼が持っているハンドバックに硬いものが入っていて、太もみに直撃した方が強烈だった。とつさに動いた手は、ハンドバックの底に触れる。硬いものは手を弾くように逃げていった。

彼は全身におびえた雰囲気をもっていた。

「す、すいません」

届いているかはわからない。ハツと急用を思い出したように踵を返すと、僕が進んできた方向とは反対側の、大手銀行がある方へ走っていったからだ。

今、立ち去った男をはき出した自動ドアが閉まった。見上げると縦長のビルにK書店の看板があり、窓ガラスを隔てて新刊のベストセラー本が行儀よく並んでいた。

舌打ちをした。地図を確認しながら歩いている僕は、確かに前方不注意だったかもしれない。しかし、こちらが謝っているのに、無言のまま立ち去られたのだ。悔しさが込上げてきた。さらに、あの男が最初から大手銀行がある方向に進んでいれば、ぶつからなかったのだ。

絶対あいつの顔を忘れないぞと思っていたら、自動ドアが開いた。藍色の前かけをしているK書店員らしき人物だ。眼鏡の奥は辺りを見渡してから、僕へと注がれた。羞恥を感じ、直に背を向ける。

「ついてないな……」

下半身が心もとない。というか冷えた。歩き始めてようやく気がついたのだけど、はいているトランクスの臀部がやぶけていた。叫びたい気持ちをぐつと堪える。早すぎる時間帯に来たのが仇となつてしまった。しょうがなく、辿ってきた道を逆戻りした。

足早で肩を落としている若者の後ろ姿を、あの書店員はどう観察しているのだろうか。笑いを堪えているのかも。変な被害妄想が癒着した。

振り返ってみる、気も起きなかった。

部屋まで戻って着替え、再び新横浜へ向かった。いつまでも、ついてないときはつづかない。その言葉を胸にしまった。

巨大な駅のエスカレーターを降りはじめると、視線を身に受けた。構内放送やら、話声やら様々な音がぶつかりあっているようなのに、シンジ、と名前を呼ぶ声が聞こえて来た。

注意を払った視線の先には、額を覆い隠す金色の前髪、それを跳ね除けるような大きな二つの目があった。かたわらの昇りエスカレーターに石崎美佐江いさなみさえがいる。僕が軽く手を上げると、彼女は微笑みかけてみせる。

「ねえ、話があるの」眉を沈ませた。

ただでさえ他人の目を奪う彼女に僕の姿が重なり、周りからどんな関係なのかを探られている気がした。

「い、今？」

すれ違った美佐江を目で追いかける。聞きたいことは沢山あったが、次々なだれ込んでくる乗客に道が封鎖されているので、逆走して体で追いかけるわけにはいかない。十五時からの予定も迫っていた。

「近いうちに部屋まで来て」

思わず身を引いた。

「あ、うん」否定の余地はなかった。むしろ期待を持ち始めていた。「お願いね」

と言に残し、僕の高鳴った鼓動も置き去りにした。彼女はプラットホームへと消えていく。その後をスーツケースがついていった。膨らんでいく期待を現実に戻した。似たような場面があったからだ。

美佐江は僕と同じ大学の理工学部に所属している。海の広さを数値で示すことができれば数億円の賞金が入ると豪語したり、数々の講義をことごとく休んでいたので、成績優秀とは言えないだろう。

あれは秋が深まってきた頃、洋服の買い物をしに行く予定だった電車ではつたりと会い——話したいことがあるの、といきなり切り出された。買い物を諦めた僕は、美佐江と一緒に、週末でしか使われていないような公園のベンチに座っていた。

枯れ葉が地面を舞っている。それを見ていた美佐江がこう切り出

した。

——カメレオンが死んだら何色になると思う？——

——舌が伸びるやつだね。カメレオンって——

訊きながらも、頭の引き出しを丁寧に探るように考えた。カメレオンなら、外敵から守る、あるいは餌を採る手段としてのカモフラージュのため、皮膚の色を周囲に合わせるイメージがある。生物の中でも、裏方の存在に思えた。

——そう。生きているときは黄、緑、黒、灰色に変えられるの——
彼女なりのヒントらしい。死んだら目立ちたくはないだろうなど、自らの尺度で考える。それぐらいの美意識なら、カメレオンには備わっていても可笑しくない。

——死ぬときの、周囲の色によって違うんじゃないかな。例えばあそこにある草むらだったら緑色だったり——

青々として若そうな草むらを指さした。

——最初はわからなかったな。わたしも——

含み笑いをする。「はずれ」を意味する伏線と同時に、美佐江はカメレオンと対話でもした経験でもあるのでは？ そんなあらぬ考えが芽生えた。

——答え、教えてよ——

——その前に話したかったことが——

言葉を飲みこんでから、肩で息を吐く。まさか、これが告白の空気なのか。唾を飲んだ。

関係ない話をして照れ隠ししていた。いや、カメレオンの件だけに、肝心の告白はカモフラージュさせておいて、『実は前からずっと、信二のことがす……』と切り出すのか。妄想が膨らんでいた。

——失踪した知り合いを見つけたいの。誰かに打ち明けていいか迷っている——

何度も考え抜いた末に放ったのだと思う。かなり深刻なことだというのに、流れるように話してくる。失踪した知り合い……と、愛の告白はどうしても結びつかない。期待はずれをカモフラージュさ

せる内容でもあった。

——失踪？——

——うん、何も相談なく——

姿を消してから二カ月は経っていた。その前からあまり連絡が取れなくなっていて、心配になり部屋に行ってみたら、いなくなっていたらしい。その子は美佐江の同級生で、両親とも死別していて、アパートに一人暮をしていた。自殺という言葉が頭をよぎった。

——いろいろ大変だったと思う。人に頼ろうとする子じゃないから

綺麗に整えられている栗色の眉が微動した。両親がいないのはどんな状況なのだろう。どれだけ大変な境遇なのか、逃げ場のない孤独を味わっているのではないか。

想像したところで答えは出なかった。

——警察には連絡したの？——

していない。どうしても自分の手で探したいというのが、美佐江の意思だ。どこか、自分の責任で失踪してしまったんだと思い悩んでいるようでもあった。それだけ彼女との絆が深いのだと勝手に解釈していた。

しかし、本当は違っていた。

——あの子の部屋に置き手紙があっただけ——

美佐江は携帯電話を弄り出して、画像を見せてきた。少々ぼやけている画像だが、鉛筆で書かれた筆圧の強い字だとわかる。

『しばらく留守にしますが、警察には連絡しないでください。もし連絡したら』

警察に連絡した場合の先が途切れている。

——絶対にやらないでほしいって気持ちには伝わってくるか——

この文面からすると、美佐江に探さないでほしいと言っているわけではなさそうだ。僕は唸った。

——でしょ。すごく嫌な予感がして、警察には連絡出来なかったの

美佐江はとりあえず大家さんに訊いてみたらしい。当然、所在は知られていなかったが、失踪した子からは家賃の振り込みがあった。――どこから振り込まれていたのか――

僕の言葉を遮るように、言う。

――個人情報になっちゃうから、教えられないんだって。あの子の友達である証拠があればよかったんだけど、説得するのも面倒になっちゃって。それで、自分で探してみようと思ったの――

――何かわかったことは？――

――あの子を殆ど理解していなかったことぐらい。友達に訊いても、何もわからなくて――

友達と聞いて、若干救われた気持ちになる。すっかり引き込まれていく自分を意識した。

――じゃあ、僕も探そうか？――

――今は大丈夫。しゃべってすつきりしたから――

美佐江はブランコから飛ぶように立ち上がった。

――カメレオンは死ぬときの感情によって皮膚の色を変えるの。敵に襲われて怖かったか、体が弱まって自然死したかで色が変わってくる。すごいでしょ――

反応を伺う前に、美佐江は僕の頭上を凝視してきた。

――白髪が生えてる。抜いてあげようか？――

答える間もなく、美佐江は僕の背後に回った。脳内からプチッと音がした。それは陽に当たって透き通る繊維のようだった。彼女に恥ずかしいものを見られているみたいで、落ち着かなかった。

――私のもみて――

――美佐江は金髪だから――

――いいから――

微かにシャンプーの香りがする。予想通り、白髪と金髪の見分けがつかないでいると、美佐江は化粧ポーチを取りだした。

――なかったよ――

――そう。よかった――

——苦勞してないんだね——

——白髪は髪の毛の寿命なの。苦勞の度合いとは関係ない——
訂正された。失踪した知り合いのことは何となくはぐらかされた。
それきり、連絡が途絶えていたのだ。

僕は面接のために憶えてきた言葉を復唱しながら駅を出た。青い空は背の高いビルの向こうに広がっている。長い人の列が、タクシ―乗り場へと伸びていた。

人生の大半を綺麗なかたちで打ち明けたような面接を終え、裏路地にあつた定食屋に入った。客は一人だった。夕刊を開いたり、閉じたりで落ち着きがなく、麦酒のコップを片手に持っている小柄なおじさんがいた。店主とのやりとりを聞いた限りテツさんと呼ばれている。テツさんは天井近くの棚に置かれたブラウン管テレビに耳をそばだてた。

「これは、アレだな」

店内の隅々まで聞こえるように手を叩いた。テツさん自身のみが納得している素振りである——アレって？　どれだよ？

気になった。そんな心からの要望に応じてくれるわけもなく、彼はテレビから視線を外さぬまま、麦色の炭酸を流し込んだ。気を利かせた店主は手を伸ばし、ボタンをカタツと押して音量を上げた。

新規発行される出版物は年間約七万冊にもなるのに対し、年初めから十月までの万引きによる被害は七十万冊を超えている。十年分の出版点数がたった十カ月の間で人の手に渡っているという前置きあつた。それから詳細が報道された。

白昼堂々の犯行。

じょうしつまひろし

被害者は城島博志、五十歳の会社員、書籍の万引き犯とされている。そう判断されていたのは、殺される直前にとある書店から盗まれた本と、遺体を持っていた本が一致したからだ。顔写真は公開していない。遺体は新横浜の路上で発見されていた。

心臓が高鳴っていく。

「目と鼻の先じゃねえか」

テツさんはメニューの書かれている札の方を見た。

上空から撮影されている映像は夕暮れどき、ビルの上に位置する路地を映し出していた。国道に繋がる場所で、警備員の周りには人だかりが出来ていた。

被害者の全身に二百七十箇所の切り傷があった。その一つが首の動脈を切断していたことから失血によるショック死と断定している。今のところ、遺体からの血痕もわずかであり、現場での目撃証言がなく、別の場所での他殺だとして捜査を進めていた。四時間前の十三時頃、第一発見者の通行人が通報している。対応が迅速にみえるのは慣れによるものや、予期されていたものだと思えてしまう。

既に一人の犠牲者をだしていて、似たような事件が起こっているというアナウンスされた。

八日前、つまり二〇一〇年一月二〇日に同じ死因での犠牲者がいるというのだ。死亡推定時刻は午後五時から六時までの間、テツさんが言ったアレとは、恐らく横浜市で発見された一人目の報道を知っていたが故の納得なのだろう。テツさんはお絞りで顔を摩擦させた。

城島博志と同様、一人目の犠牲者も万引きの常習犯であり、万引き現場の目撃証言がいくつか寄せられていた。彼の全身に百箇所に上の切り傷があり、一方で殺害されたときの目撃証言がない。これは、突発的な殺意によるものではなく、何かの目的を抱え、計画的に行った殺人であると、遅れた実感があつた。

まだつづいた。

自業自得と主張する一般市民や、出版、書店に携わっている者を容疑者であると当たりを付ける警察、果ては万引きされた本の熱狂的なファンが殺人を犯している等のストーリーを組み立てる者までいた。

「言いたい放題だな。まったく」

テツさんは呟いた。確かに、残された家族にとっては泣きっ面に

蜂の報道内容になっている。テツさんと店主は顔を見合わせ、最近の犯罪はわけがわからないものだと言わんばかりに、揃って首を横に振った。

「憐れんでいるようには見えませんか」

「いくら不況だつてな」

僕も同じ考えだった。盗んだ本を、そのまま新古書店に売ろうとしていいのか、純粹に読みたかった本なのかはわからない。ただ、社会現象になっていることは間違いなかった。テツさんは言いついでにもう一本の麦酒を頼んだ。

キャベツたつぷりの生姜焼き定食はすっかり冷え、肉は固くなっていた。悪いと思いながらも定食を残し、会計を済ませる。

「おい若者」

突然、声をかけられた。無視するわけにもいかず、僕を見据えていたテツさんの方を向く。「はい？」

「万引きはするんじゃないぞ」

外見で判断されたのか。僕はスーツ姿でどこにでもいる、無害な男の代表みたいな顔をしていると自覚があった。過小評価されている気がしてムキになった。

「しませんよ」と。頬が引きつった。

「だな。それがいい」

意外にも温かい笑顔だったので、拍子抜けした。

「あの、すいませんけど、現場って近くなんですよね？」

「ん？」テツさんはポカンとしていた。そのまま待っていても、得たい情報を引き出せそうにない。

「さっきのニュースでやっていた事件現場です。目と鼻の先だっておっしゃっていましたよね？」テツさんは記憶を手繰り寄せているようだ。

「君はここら辺の人じゃないね？」

店主が助け舟を出してきた。

「Ｙ市に住んでいるんです。今日は企業の面接があつて、こちらに

来ていたもので」

「駅前のロータリーがあるだろ」

電車を降りて、駅ビルを出たところだ。美佐江の残像へと想像が膨らんでいく。

「そうそう。駅から見えて真っ直ぐ行くな」

店主の説明を聞き終わってわかったのは、面接を受けた企業に近いことだ。

「ありがとうございます」

また来てください、店主は愛想良く言い、厨房の中へ消えていった。

「おい若者よ」先程よりもねっとりした声だ。絡み足りないといったふうに「まあ聞け」と、テーブルに肘をつき、両肩が胸より狭くなった。

「はい」

「野次馬するんじゃないぞ」

「どうしてですか？」

「近くに犯人がいるかもしれないし、捜査の邪魔になるからな。警察に任せておけばいいんだ。またテレビで報道されるだろ」

「わかりました」わかったのは報道されることのみだが。店のドアを開けてから言った。

「忠告どうもです」

携帯電話で美佐江の番号を押した。電波か、電源が入っていないという女性のアナウンス、『近々行く予定だから、都合悪い日あったら返信してね』と、メールを打った。

現場は本当に目と鼻の先だった。駅前のロータリー経由で大通りを進むと間もなく、複数のパトランプが光る場所があった。

周りは大通りを挟んで美容室やチェーン店の居酒屋が入っているビルが存在していた。車の往来を見積もっても、二階の美容室なら事件現場を正面から見渡せるのだらう。美容師らしき人が窓越しにチラチラ外を眺めている。居酒屋は窓ガラスの内側にシャッターが

閉まっていた。

ビジネスホテルといくつかの会社が入っているビル、その中央部になる路地の現場付近は立ち入り禁止区域で、トラ柄の紐で仕切られていた。路地は中型車が擦れ違えられる程度の道幅だった。奥へと進むに連れ、道幅が狭くなっていて、背の高い建物がつついている分、わずかな時間しか陽が当たらない場所なのかもしれない。

もし警察関係者が通行人を誘導しているのではなく、ヘルメットを被った警備員だったのならば、道を舗装している工事現場に見えていただろう。野次馬をかき分けないと現場は傍観できないと予想してただけに、この手薄な状況は少しばかり予想外だった。時間帯のせいなのか、通行人もそれ程多くはなかった。

トラ柄の紐の向こうは、シャッターを切る者や、メモを取っている者、他四名の捜査員らしき人がいた。中でもものすごい剣幕で現場を指揮している体格の良い捜査員は、気の短くなっている酔っ払いの言動に似て、離れている僕にも声が筒抜けだった。

「証拠を逃すなよ！」

地面に這いつくばり、ほふく前進をしている捜査員はくぐもった声で返事をした。

僕はゆっくり近づいていった。立ち入り禁止区域が足の届く範囲になると、歩を止めた。路地に入って二十歩分ぐらいの地面に人を象ったテープが貼られていた。あの場所で被害者が倒れていたに違いない。すると警備をしていた警察に声を掛けられた。

「すいませんが、ここで立ち止まらないようにしてもらえますか？」

彼は両手を広げた。

「わかりました。ちょっとお尋ねしたいのですが？」

交番を探していたのですが、なかなか見つからなかったものでといいわけをし、僕はK書店までの道のりを訊ねた。ついでに就職活動中のどこに大学に在籍していることもしゃべった。職務質問をされたからだ。彼は御苦労さまですと言い、丁寧に解説してくれた。「ありがとうございます。何かあったんですか？」

「ええ、詳しいことは教えられないんです」

おさえた口調の中に余計なことは詮索するな、帰って勉強しろ大學生よ。そんな感情が入り混じっている気がした。僕は軽く頭を下げ大人しく退散した。

視線に入っているテレビは音声だけを受信する不良品になっている。買い替えも修理もせず、ここ数週間は放置している。安物だ。

帰宅したらまず何をしますか？ 的なアンケートがあつたら、迷わずテレビを付けると答えられたのは二年ぐらい前だ。連続ドラマを、眼球もしくはディスプレイかに穴が開くぐらいみた時期でもある。日常をロケーションにし、役者が非日常を作り出す。やがて涙を誘う。毎回山場があつて、仲間と次回の予想をし合うのが楽しくて仕方なかった。

殺人事件をテーマに扱っていたとしても、犯人はびっくりするほど早期発見され、そこには感動が生まれるのだ。人殺しの登場人物が回を重ねるごとに良心的な人だと思えて来る。実は取り巻く環境を改善するために行った犯罪だと知り、誰が悪かつたのかがばやける。

現実はその上手くはいかない。白黒がはっきりしていて、殺人は極悪であり、殺意の真相はどれも耳を疑いたくなる。動機なんてものは、あつてないようなものだ。殺人罪の罰が軽すぎると思わされるのがほとんどだ。

なぜ、テレビで報道されていた事件が気になったのか。

僕は万引きを実行した経験はない。被害者と交友関係でもあればまったく別なのだろうが、第一の事件発生から七日経過していた今も、そのような知らせはなかった。強いて言うなら、未来の就職先になりうる場所の近くで殺人が起こったのが影響しているのかもしれない。美佐江と会ったのも影響しているだろう。

そう思うと引かなかった。嘘について、後に残ったシコリみたいな引っかかり方だった。蔑ろにすべきではない気持ちが芽生えてくる。

考えれば考えるほど、別の方向へと発展していく。

この殺人事件を、世の中は否定しているのだろうか？ 本心でだ。ネットの掲示板には、それが顕著にあらわれていた。多数決をとれば、恐らくどんな殺人であれ否定の決議がされるだろう。目には目を、人殺しには人殺しを、捕まえたら死刑で決定だなんて匿名の書き込みがあった。どれも幼稚な内容に思えた。殺人を否定するにしても、先人の書き込みでまともな意見の一節をコピーアンドペーストしている者までいた。そうになると、まともな意見さえ間抜けな印象になる。

ところが殺人を肯定する書き込みは、あまりにも理路整然とした意見が目立った。個性があり、引き込まれて行く。

これで書籍の万引き犯が減る。軽犯罪者は裁かれても仕様がな。その結論に集約しているようだ。

妙な胸騒ぎがした。

布団に入った。電気を消しても、胸騒ぎは持続していた。むしろ目を瞑っている分、妙な胸騒ぎに神経が集中してしまい、上手く就寝できるか定かではなかった。

うなじの下あたりから、全身に訴えかけて来るような痛みがあった。シュツという音が、遅れて聞こえて来た。食道に隙間風が入ってきて、乾燥してくる。夢の中である自覚があつたのでひどく混乱した。後ろにまわした手に温かい液体の感触があり、視野に入れるのが怖くてたまらなかった。

——ツツ、ツツ、ツツ——

音が連続した。変調音楽みたいに間が狭まり、音が皮膚を擦っている。殆ど時間が立たないうちに、僕の視界にある皮膚は切り傷からの血がにじみ、綺麗なストライプ模様になっていた。

地面にひれ伏した。誰かにされたのではなく、自らの取った自然

の行動だ。指一本動かせなくなったら、まず重心が傾いている方へと倒れる。揉み上げの辺りまで地面に食い込み、身動きが取れなくなっていた。

——フォンハイキテ——

ぼやけた音でそう聞こえた。

『——なに？』

僕はそう言ったつもりだ。くぐもった、めり込んだ地面から反射して来る声だ。耳には『なに？』ではなく『バアヌイ？』と聞こえてきた。

しかし、うなじの下あたりから開いた傷口の背後に声が漏れたのだろうか、反応があった。

——フォンハイキテ——

さっきよりも大きな音で聞こえる。いや、これは耳で聞いているのではなく、心にそのまま介入してくる声なのだろうか。

——フォンハ——

きっとそうだ。介入してくる声を、僕が認識しきれていないのかもしれない……

そんな夢で起された。

首筋に薄ら汗をかいていた。粘つくくなる前に掬いとった。

夢判断でもすれば、深層心理がわかるのだからけども、とても調べる気にはなれなかった。金縛りのせいだと勝手に決め付け、身を起こした。

鏡の前で自分の顔を写し、息を吸う。

「フォンハイキテか」

呟いてみた。母国語ではないのかもしれない憶えのない言葉、考えても何のことだかさっぱりわからなかった。

B・本をパクって旅に出る

美佐江からメール返信はなく、二日間耐え抜いたが、出向くことにした。とにかく訊きたい話が沢山あり、気になって仕方なかった。彼女の住まいは、僕のアパートから歩いて行ける距離にあり、大学への通学路でもある。レトロな店が立ち並び、中央に軽自動車ぐらいの道幅をもつ歩行者天国、その上をトタン板の屋根が覆っている商店街である。今日みたいに、いくら陽がさしている午前中であっても、薄明かりなのだ。

その一角が、美佐江の住まいだ。二十歳を過ぎたばかりの女の子が、近くにある大学に通うって理由で借りたものだから、商店街の住人は困惑していたらしい。

立地条件だけからすると、たいていは終電を逃した大学生の溜まり場になるのが定説なのだけれども、溜まり場たる空間条件を満たしていないのだろう。彼らは陰気な雰囲気敏感で、商店街を避ける。ひとつの番地を隔てた隣にある学生通りを、学生の群が歩いているからだ。その通りにはファーストフード店から始まり、新しく参入してきた店が立ち並んでいる。

美佐江の住まいを、通りすがりの人は時折覗きこんでくる。右から読んで『密造書展』、いかにも怪しい名前の看板を残しているせいもあるだろう。元々は古本屋のテナントになっていて、住み込みだった店主が立ち退いたのは二年前だった。

『密造書展』は左右の壁を一面本棚が占領し、さらに空間を二分する中央で起立した本棚は、前後に収納スペースがあるため、厚みがある。美佐江は二年間でこれらの本を集めたのだ。

二階は住居になっていた。開いていた入口のガラス戸を横へと開き、並んでいる本を眺めた。深呼吸すると、軽度の立ちくらみがした。貧血とは違い、殺伐とした神経をなで廻され、怒りを知らない草食系動物になった気分だった。

「お客さん、売り物じゃありませんよ」

奥から聞こえてきた。ただ、その声は僕がたずねようとしてきた美佐江ではなかった。裏声で女の声を演出した男の声である。モノマネをしているのであれば、全然似ていない。

「勝手に入ってもらっては困ります」

それは書店だと思って入ってきた客に注意する、美佐江の口癖だった。

「知っているから」

「なんだ、信二か」

奥から現われたのは部筑栄太郎^{ぶつくえいたろう}だった。大量の本をクリーム色の縄で束ねていたものを手に、僕の居る前で解き、中央にある本棚の空きスペースへと納めていった。どうやら美佐江の指示があつて古書店で購入した本だったらしく、持ち帰る際に買い物袋が破けてしまい、近くにあつたホームセンターで購入した縄を使って束ねたらしい。

「紹介するよ」勿体ぶった。

僕は呼吸を忘れた。もしかや付き合っているのか…… 動揺を感じ取られないよう、無関心を装った。

「ここは書斎だ。売り物はどこにもないからな」

知っている話だったので、さりげなく聞き流した。

「美佐江は？」僕は天井を見上げた。「昨日、新横浜駅であつてさ。話があるからって呼ばれていたんだけど」

別段、不思議ではないといった表情をしてきた。

「海外旅行中。今頃はスリランカにいるんじゃないかな」

「海外旅行！ 呼びだしておいて……」が、勝手に盛り上がった自分が悲しくなる。彼女にとっては単なる気まぐれだったのか。

部筑は欠伸をした。目を覚まさせてやろうと思ひ、

「お前達、付き合っているの？」安直に聞いた。

「付き合っていたら、海外旅行に同席するだろう。普通」

胸をなで下ろした。しかし、余計に新横浜で呼びとめられた理由

が気になりだした。彼も僕と同じで呼ばれたんだとしたら、海外旅行に行っている意味がまったくわからない。

「いや、待てよ——そう思っているのは俺だけかもしれないな」

と考え直す。美佐江はストーカーにあっているらしくて、部筑に相談を持ちかけていた。そのせいもあり、最近はずっと一緒に行動していた。

「ストーカー？」

「ああ。二、三ヶ月前ぐらいから、汚い格好をした男につけられているらしいんだよね。ストーカーされる憶えがないらしいのに」

「被害にはあっていないのかな。下着を盗まれたとか？」

「単純につけられているだけ。でな、美佐江は自分がモテているって勘違いする女じゃないし、俺と一緒にいるときはストーカーの影もなかったから、もしかすると、俺と一緒にいようとする口実なんじゃないかって思い始めた」

ありえなくはない。二重の黒目がちな目に凛々しい眉毛、背は僕より五センチ以上高く、服のセンスも悪くない部筑だ。容姿端麗の二人が街を歩いている姿は絵になる。僕のここ最近、就職活動に忙しく部筑や美佐江と顔を合わせていなかった。知らない間に、二人がそういう関係になってのことだってある。ならば、新横浜で呼びとめられた理由、それはストーカー被害から守ってほしいのではなく、部筑と付き合うための恋愛相談だった！

頭を振った。

「ふーん。で、部筑がどうしてここに？」

「留守番だよ。本には触れないって条件でさ」

「なるほど。流石、書籍ソムリエだな」部筑は満更でもない笑みをしてきた。

書籍ソムリエの言葉が一般化されるまで、自分を天然記念物であると満足しているのだと思う。その手の資格もなければ、職業として認められている話しも聞かない。広いネットの世界では、ニックネームとして使用しているかもしれないが、あくまで彼のスキルと

は程遠い、まともな書評家だと予測できる。

なので、正確な表現を用いるならば自称書籍ソムリエである。

「読んでいる分にはいいからって」

部筑は芥川賞全集の第八巻を手に取り、ページを開いた。二百九十九ページ目の『プレオー8の夜明け』で顔を寄せている。あろうことが、いきなり条件を破ろうとしているのだ。僕は慌ててそれを止めさせた。

書籍ソムリエは能力の一種だ。目隠しをした状態で本を与え、手触りを確認してから舐める。そして題名と作者を言い当てる。だから、読んでいる分にはいいとしても、本には触れほしくないイコール本を舐めるな、という意図があるのは当たり前なのだ。

「やらせてくれよ。アンソロギー本は難易度が高い。日々、訓練していないと、腕が鈍るんだ」と言い、舌を上下させてきた。

「留守番、出来なくなるぞ」

複雑な顔をした部筑に、面接した企業から内定をもらえそうな話をした。確かな手応えがあった。労ってほしい気持ちもあったが、彼には興味がなかったようだ。

「まだ住む場所を転々としているのか？」心配そうに聞いた。

部筑は本を棚に戻した。

「悪い？」

「どこも」本心じゃないのを、表情から読み取ったらしい。

「転がりこめる場所を沢山作っておくのが、サバイバル時代を生き抜く秘訣だ。貧乏人には特にな」

「確かに」

金は一銭もたかっていない、そう自分を正当化しつつ、いつもの無料で泊めてもらう方法論の長い講釈が始まりそうだったので、気になって話を切り出した。

「俺もそのニュースは気になっていたんだ。美佐江が出発した二日前はずっと部屋に籠ってテレビ見ていたぐらいだったな」

生放送のワイドショーやら、ドラマの再放送を見た後に、十七時

のニュースで万引き犯殺人事件の報道がやっていたらしい。

「局アナウンサーが、かなり動揺した顔で『ただ今入ってきた情報です』だぜ。かみまくりだし、あれはまだ新人だな」

元々は別の特集をするはずだったのが、事件報道に変わったらしいのだ。とすると、僕が定食屋で見たものは、かなりタイムリーだったことになる。

部筑は詰め寄ってきた。

「どうやって殺されたと思う？」

「急に聞かれても……」

捜査をしているわけでもないし、殺人方法にはあまり興味がなかった。僕が話をしたかったのは、あのニュースを見ての反応であり、ちゃんと説明だっと思っていた。

「まずは簡単に考えてみようぜ。他の場所で殺されたとしてだ」

かなり乗り気らしい。仕方がなく便乗した。

「あの場所で争ったら、誰かしら気がつきそうだしな。白昼堂々で、不可能に近いかも」

「どうやって他の場所に導いたと思う？」

「そうだな。例えば犯人の知り合いだったとしてさ。携帯かなにかで呼び出して——」

万引きした本目当てで殺した、と言おうとして、言葉を切った。ある考えが浮かんだからだ。

被害者が本を手にしていた事実から、犯人が万引きされた本目当てではなかったという証拠にもなる。しかも、高額でせいぜい五千円ぐらいの本のために人殺しをするとは考えづらい。

「知り合いが全員、万引き犯かよ。偶然にも程があるぞ」
「だな」

「一人目は金子大輔、十九歳の大学生、最近やっていた二人目の城島博志、五十歳の会社員」

「会社員なら、お金に困っているとは思えないんだけどな」

「万引き理由は後まわし。今は殺人方法だ」

腕を組んだ。殺人方法と言われても、ちっともアイデアは浮かんでこなかった。

「うーん」

間を埋めるように、考えている態度を取った。

「あまり深刻に考えるなつて。老成するぞ」

この程度の思考で老成するのであれば、僕はもうおじいちゃんクラスだ。部筑は

「柔軟に考えようぜ」と言う。そうしているつもりなのだが。

「部筑はどうなの？」

「万引きしても、警察には捕まりたくないのが心情だろ。それを利用するんだよ。例えば、犯人がその現行を観察していて、『俺はパクっているの、見たんだぞ。言うとおりにしないと、通報するぞ』って脅したら、声を潜めて誰かに聞こえないようにするし、大概は言うとおりにするだろ？」

素直に従う方が珍しいに決まっている。

「どうかな。自分は万引きなんてやっていないって、反論するんじゃないの？」

「だから良いんだよ。認めちゃったら、通報でもなんでもしろつてなるだろ？ 計画が台無しになる」

「わからないな……」彼の言う計画が不明慮なのだから、理解できない。

「わかれよ！」

そう叫び、手のひらが飛んできた。その動きは遅く、僕は背中を反ってかわす。無言の圧力をかけてみた。

「今のは冗談としてもだ」

やっぱり。頭の回転を速くさせるデモンストレーションだからなとまで言ってきた。実際、頭に血がのぼったのだけは確かだ。

「殺人犯が『一緒に万引きをやらないか？』と勧誘する」

わざわざ声を変えた。部筑の中では、犯人像が浮かんでいるのかもしれない。

「同族だからと安心させる手だな」

「勧誘した殺人犯は、相手に拒まれても、同伴してもらって書店の人に聞いてみるという切り札をもっている。レジの売上計算と相手の所有品を整合すれば、犯罪確定だからな。監視カメラに映っているかもしれないし。万引きした事実を拒む力が強ければ強い程、切り札の威力も増していく」

「やっと、殺人方法になるわけか」

今朝のニュースで、いくつか明らかになった事実がある。話にあった二人の身元と、本の題名だった。

「全身にあつた二百七十箇所のは傷は意外な意味があつたんだ」

と断言した。僕は先を急かした。

「第二の被害者が持っていた本は、『どん底から億万長者への道』ビジネス書だ。ハードカバーで発行されてから七年、今では別の出版社から文庫本も出ている」

「それが、意味あるのか？」

「大ありだ。ハードカバーが文庫本、どっちを持っていたかで、意味が変わってくるんだ。その本は文庫化にあたり、加筆修正と末尾の解説、同出版社の広告も入っている」

「ページ数と内容が若干違うんだね？」

「そうだ。ハードカバーなら総ページ数がきっかり二百七十。もうわかるよな？」

心臓の鼓動が肋骨を叩いた。

「被害者の傷と同じ数……」

「だな。偶然とは思えない数だ」

「……何のために」

「休憩しよう。喉が渴いた」

咳き込んだ部筑は二階への階段を登っていく。

「缶コーヒー買ってきてくれ」が聞こえた。

『密造書展』を出て左手側に十字路があり、そこを右手側に曲がったら、自動販売機が三機並んでいて、鳥居みたいな商店街の看板

が出口になっている。アルミ缶を持つ手のひらに広がっていく熱を感じた。被害者の傷と万引きされた本の総ページ数の関連性についてぼんやり考えていると、

「おつり、取り忘れているよ」

帽子を被ったおじさんに注意された。伏し目がちでお礼し、駆け足で戻った。

「ふう」。カフェインは気管支拡張作用があるからな」

プルリングまで僕に開けさせた部筑は、カフェインの興奮作用、利尿作用までを説明した。

「気管支拡張作用はコーヒーに含まれるテオフィリンだよ」

訂正をする。デテイルに拘って、飲みに誘った女の子を引かせてしまった経験を思い出し、苦笑いした。

「第一の事件は何カ所の傷があっただっけ？」

「百十箇所だ」

「それも、被害者の持っていた本のページ数と同じなのかな」

百十ページと言えば、けっこう薄い本だ。

「わからない。そっちの方は公表されていないからな」

となると、話を広げようがなかった。

「犯人は、『どん底から億万長者への道』の本に何かしらの愛着があっただのかな？」

「億万長者の著者に恋をしていたってか」

部筑はふざけているわけではなかった。内容の半分はサクセスストーリーらしく、お金を手に入れて、女性と遊びまくった経験談が書かれている。

「数が多ければ、あっても可笑しくはない話だ」

僕は首を横に振った。「可笑しいだろう」

著者に恋をしていたから、万引きした被害者を殺した。なんてありえない。

「お前の尺度で決めるなよ」

「じゃなくてさ。加筆修正された内容に手掛かりがあるとか？」

「著作権の問題だ。著名人の文章を引用して、けっこう売れたものだから、無断引用だったのがバレたんだ。誰々の作品から引用したって記載があつたのに訴えられたんだから、こわい気もするが、和解してまで文庫化したのはすごい根性だな」

そして売れた。事件があつたから、爆発的ヒットになるのも時間の問題だ。また、著者の経歴には、少ない資金で起業したことも書かれている。『どん底から億万長者への道』のほかに、もう一冊の本を出していたが、版元の会社が倒産したとかで絶版になっているらしい。

部筑は缶コーヒを直角に傾け、最後の一滴まで飲みほした。

「読んで、実行しようとしたけどさ、どん底のまま。真似する気も起きなかった」

自虐する。しかし、優位に立っている素振りだ。

「捨ててあるものを、中古で売り出そうなんて書いてあるんだぜ。物品は質屋に売れたとか本は新古書店に売るなんて勿体ない。企業して売りだすノウハウまで書かれている。俺はそうして成功しただつて」

古本用語を基にしている、流行りの『せどり』だ。誰がやっても成功するという、自信に満ちた導入分から気に食わなかったらしい。部筑のような考え方の人でも、釣って、読ませてしまった著者は成功したといえる。

「こついった本はウンザリだ。こんな本を書くより、ノウハウを金儲けの手段にしている奴が、本物なのか偽物かを見分ける本を書いてほしい」

「それなら、著者に恨みを持つだろう」

部筑は手を叩いた。「的を射ている」

来週末の夕方、『どん底から億万長者への道』の著者である社長が生放送に出演予定となっていた。本の内容を解剖し、事件を検証する緊急特番、ネットの番組表に載っていたらしい。

「デリカシーがない連中ばかりだ」

「訴えられたの、そのせいじゃねえ？」
「だな」

僕ら一般市民が推理できるのは、そこまでだった。

時計の針は十二時を指していた。部筑は涙を溜めているような、輝いた目で僕を凝視してくる。

「旅に出よう」

「旅かよ？」

「荷物はいらない。体があれば充分」手筈は整っているという口ぶりである。

「ついでにこれもな」

『美景体系』と題された写真集、そこに掲載されていた一枚の写真が、彼の言う旅の目的地だった。

丁村、低雲丘。

褐色の綺麗な花が平地を敷き詰めていて、真つ青な空をバックに、元々あった大地が削られて、草が自然と生えてきた感じの丘だった。かなり小ぶりな丘である。上手く加工されたコンピューターグラフィックにも見えたが、その景色を取った写真家は、『美景体系』が発行される前に亡くなっていたのを読み、正直な感想を控えた。

書斎の端っ子に、天井と外壁の間の四方には鏡が備わっていた。

『密造書展』が経営されていたときの名残であり、部筑はそのひとつに自分の顔を写した。

「なんでここなの？」

「俺達を呼んでいるから」

「呼んでいる？ …… 聞こえてこないけどな。何も」と彼の冗談に半分のつかってみる。周辺のパンフレットも用意されていた。山と海を同時に満喫できる観光地、その歌い文句は、東京外にある繁華街の名称を。銀座としているようで胡散臭くさかった。

「待てよ」

スペアキーを取り出し、外へ出ようとしている部筑に声をかけた。

「早くしないと日が暮れる。早く来いって」

と言つても外はどんよりした曇り空で、この時間でも日が暮れているように思えた。

「時間は待つてくれない——か」

「その通り」

大人びた口調の部筑は、予め用意していた、

『何かあつたら連絡ください090—××××—×××××』の張り紙をし、美佐江の書斎に鍵をかけた。

電車の走行音がする方へと向かうには、橋を渡る。学生通りに立ち並んだ店と商店街を区切った狭い河川が流れていて、『密造書籍』の裏手側とも隣り合っていた。

B 1・本をパクって旅に出ている

新幹線での部筑は、座席をめいっぱい倒して終始、音楽を聞いていた。生音をそのまま録音したであろう古いロックバンドの演奏が、イヤホンから洩れていた。頭を上下させてリズムを取り、動きを止め、耳に焼き付けるように瞳を閉じる。

「目的地へ急げ！ 人生は短いぜ！ 若き日々は特急だ！」
それを英語で口ずさんでいた。

速度を増すごとに広がっていく緑、建造物が増すごとに、近くになつていく停車駅。血液中に染みわたっていくように旅への期待が高まっていく。下腹からジワジワと実感できた。

私鉄に乗り継いだ。進行方向とその逆側の方向に座席が設けられていて、僕達は対面する形で座った。乗客達は長い一駅間をのんびり過ごしていた。聞きなれない方言で喋るお年寄りがほほえましくもあり、僕は足元に溜まった温かい空気で半分眠り、半分覚醒していた。部筑は窓の下部に肘を着き、難しい顔をしていた。

乗車券をいれる木箱が、改札口がわりになっている無人駅であり、到着する頃になると、それと同じような駅を何度か目にしてきたので、珍しいさも半減していた。

澄んだ空気を吸い込む。鼻孔を鋭く突いてくる感触があった。二時間も座りっぱなしだったので、背伸びをしてみると、生き返った気がした。

駅前は土塀で仕切られた木造の民家が数件立ち並んでいて、その一軒一軒が所有しているのだろうか、民家の数十倍はあろう面積の田原が控えていた。コンビニエンスストアや居酒屋、カラオケ等はもちろん存在しない。昭和の追体験をしている感覚であると部筑は形容しているが、まさにその通りであり、僕達の存在そのものが場違いに思えて来た。

場違いといえ、アスファルトとその上を走っていく車も同じだ

った。緑の色彩を放っている広大な山々が、アウエーの観客達になっ
ている。

いつまでも待っているより、次のバス停までと決めて歩いたら、
T村の看板が見えて来た。子供が網を持ち、無我夢中で昆虫を追い
掛けている絵が挿入されていて、部筑がそれを実演しようと走り出
した。彼の背中がどんどん小さくなり、僕も急いで追いつかなけれ
ばならなかった。結局、走りださなければ、バスに乗り遅れていた
ところだ。

貸し切状態であるバスは蛇行する山道に入った。短髪の運転手は
しかめっ面をバックミラーに写し、ギアをチェンジする。彼の機嫌
は運転に現れていた。対向車がないのをいいことに、幅の狭い道
路でスピードを緩める気配がない。エンジンは悲鳴をあげ、後部座
席に陣取っていた僕の体を揺さぶってくる。窓の外と運転手から目
が離せなかった。

カーブの瞬間、大きな遠心力がかかった。その反動でダッフルコ
ートのポケットから顔を出した文庫本を落としそうになった。この
運転は文句を言うべきだと、部筑に声をかけようとした矢先、彼が
尋ねてきた。

「お前、本持っているんでしょ？ 当ててみようか」

「さっき、部筑の前で読んでいたし、知っているだろ」

部筑は首を九十度回転させて、すっきりした鼻と大きな目の横顔
を覗かせた。

「ブックカバー付きで、わからなかった」

言われてみれば、ゴム素材のブックカバーが文庫本の表紙を覆っ
ているのを思い出した。

「どっちにしても、ダメ」

それが答えだった。

最初、彼の言いだした能力を信じられなかった僕は、部筑の本棚
にあったもので試した。次の機会に古本屋で買った本を抜き打ちで
試してみた。いずれも当たった。厚さ、ページを捲ったときの感触、

舌触り、で、わかるのだというのが彼の持論だ。もちろん、買った本は彼の本棚に収まる結果となった。いくら二年來の付き合いとはいえ、同性の唾液がついた本を、他の本と接触させるのも、持っているのも気持ち悪い。それらを知った後、彼から本を借りた記憶はなかった。

「楽しもうぜ」

と言いながらも、自分の能力を披露しようとはしなかった。

初めは彼のスキルを普通に驚いていた僕だったが、いつしか心変わりしていた。

—— いったい何の役に立つのか？

就職を目前に控えた僕だからこそ、この問いは色濃くなっているかもしれない。部筑は本屋に勤めているわけではない。将来の夢を、書籍関係の仕事に向けているようにも思えない。そもそも、先のことと話しあったら、決まってはぐらかされるのだ。もう何年かは遊ぶのだと。この旅が、彼の未来を象徴しているかのようだ。

三十分バスに揺られ、停車ボタンを押した。

路肩に位置する停留所へ降り立った。僕らのほかに、前輪タイヤの窪みがある席にすわっていたおじいさんは、物珍しそうな眼差しを送ってきた。その意図がだいたい予想ついた僕は、錆ついた時刻表と腕時計を見比べた。

「なあ、二時間に一本ってやばくない？」

午後三時四十分を示している。通り過ぎて行ったバスは、二十分前に到着するはずなのだ。

「山だからな」当たり前だろと言った態度である。

「日が沈みそうだし」

あえて後ろ向きな発言をする。自然の脅威なのか、土地全体の醸し出す雰囲気なのか、まったくわからない嫌な予感がしたからだ。部筑は欠伸を噛み殺した。

「山だからな。俺達の住んでいる神奈川の発想は通用しないから」
「地元民みたいだな」

「良かったら移り住んでもいいな」

期待を膨らませた声で言ったかと思えば、停留所から控え目に伸びている登山道をズカズカと歩いていった。街灯はない。バスで登ってきた道を巡回する形でもあり、やや下りだ。

固い土の道を過ぎた先には、雑草の生えている道になっていた。その伸び具合からすると、使用頻度の低い道としか思えない。少しでも目測を誤れば、泥まみれの靴で散策する羽目になりそうだ。地盤の良さそうな道を歩いていても、スニーカーの靴底が完全にめり込んでしまう箇所もある。高く聳える木々達が日の光を遮り、つま先にまで寒さが伝わってきた。

右手側の曲がり道に入り、いきなり急こう配の坂が現れた。老木の根っ子は地面からむき出しになっていて、階段の役割をはたしている。吐き出した白い息をまた吸い込んで、膝に手を置きながら登った。このまま部筑に遅れを取ったら恥だ。だが、その考えも長くはつづかなかった。

「行き止まり？」

部筑はバックを探って、懐中電灯で照らした。上への景色がまだあるのにも関わらず、登山道はそこで途絶えていた。

「いやいや、トンネルがあるし」

部筑が指を差した方向には、斜面を無造作に切り取って、大きなドリルで開けたかのような黒い穴がかるうじて見えた。僕は目を凝らした。

「トンネルって……あれは何かの巣でしょ？」と言う前に、毛むくじやらの熊を想像していた。

「調べてこなかったのかよ」

「無茶いうな」

急に連れてこられたのだから。両手を差し出し、手ぶらを示した僕に、苦笑いしてくる。

「あれが低雲丘の入り口」

「入り口？」

彼の言うとおり、その穴は中を覗いて見る限り、トンネル並みの舗装がされていた。心霊スポットに成りうる様相はしているものの、生き埋めになる不安は和らいだ。

「フウウー！」

部筑は奇声を上げ、反射する自分の声で笑った。俺の声ってひどくね？ と同意を求めてくる。低くて幾分こもったいつも聞いている声だ。

彼は外壁に足をかけて三角飛びをした。天井に伸ばした手が着いて、ガッツポーズを送ってきた。

「ここが、例の場所だな？」

腕を組み、大きく息を吸った。部筑は返事の代わりに「さむ」、そのままの感想を述べた。

満天の星空が開かれた森を照らしていた。落ち葉の群れは未舗装の道を平坦にしている。所々、掘り返した跡みたいなものがあつた。綺麗な花は存在していない。『美景体系』写真の画像と比べても、かなり見劣りする場所だった。

「なあ、本当にこの場所なのか？」

思い返せば不自然極まりない。写真集に取り上げられるぐらいの場所だったら、案内の看板ぐらいはあるはずだ。

「一人の写真家が亡くなる直前、誰かに伝えようとした場所なんだぞ。人生観だつて変わったのかもしれない。失礼だろ」

そう言われると、身も蓋もなかった。

「もっとテンションあげろよい」

飛び上がった体で体当たりしてきた。細身でも背の高い部筑、その衝撃で思わずよろける。

「うざいな」

「楽しいくせに」

「違うから」

と、僕は内側から込上げてくるものがあり、やがて二人は破顔した。

丘に登りきったところで、部筑は膝を折り、尻を浮かせる体勢で座った。高さは十メートルぐらいだろう。周りを取り囲んで切る木々の先端より少し低い視線だったので、山の下方にあるはずの海の景色は隠れていた。

ただ妙なのは、丘を中心とした半径二十メートル程の木々は、裸の枝が剥き出になっていて、その外枠が紅葉で彩られているのだ。つまり、景色を隠しているのは、外枠の紅葉だった。

「ここで人が殺された」殺された、をゆっくりと発音した。僕はとっさに地面を指さした。

「他にどこがあるんだよ」

「えっ……マジかよ？」

これは部筑の嫌いな問いかけである。特に引き締まった表情のときは怒り出しかねない。ただ、いちいち気にしている余裕がなかった。

「殺されたやつはある本を万引きした前科があった。それに腹を立てたつてのが、動機だったらしい」

この場所へ来た理由がなんとなくわかった。「無理があるだろう。もつと違う恨みを買っていたとしか……」

僕の知っている報道には、この地域で殺人事件が起こったというものはない。

「あの殺人事件とは別件だ」

念のため確認した。あの殺人事件とは、横浜、新横浜で二人の犠牲者を出していた事件だ。

彼の話がもし本当なら、二人の犠牲者も同じ動機で殺されたと考えられる。嫌な予感が頭をよぎり、周りを見渡した。ふと、今立っている地面で目を止める。土にふりかけたような灰が混じっていた。

「嘘だろ……」

地震で大地が盛り上がったかのようなこの丘に、死体が埋まっているのかもしれないの……剥き出しになっている柔らかそうな土

が多いのは…… そのせいか。

さつきとはまったく違った景色に思えた。

「殺人の心理なんて、知るかよ」

話を終わらそうとしている部筑に、必至で考えてから言った。

「で、でもさ、こんな場所で殺すなんて、可笑しくないか？ 死体を運んで来たにしても、車通る道だつてなさそうだしさ」

「そんな道があつたらデースポットになる。最悪だ」

ならないと想った。殺人があつたのなら心霊スポットだ。少なくとも、地域住人は警戒しつづけるだろう。僕がこの場にいるのは、無知だったからだ。

「犯人が呼び出したのかな？」あまり考えたくはないが、探るように訊いた。

「本が人を殺したんだ」

「はっ？」

聞こえなかったふりをしていた、いや、片方の耳から筒抜けになっていたのが正直なところだ。

「本が人を殺したんだ。間違いない」信じ込ませたいのか、感情が込められている。

「ちゃんと調べてないんじゃないか？」

「いくら捜査をしても、自殺の跡がないし、人が手を下した形跡もなかった。本が殺したとしか考えられないんだ」

眉間に人指し指を置いた部筑は目を閉じる。瞼が震えていた。

「おい、大丈夫かよ？」

「ある物語の話だ」

怒りを堪えた。冗談にしてはちつとも笑えない。しかし、部筑が僕の反応を見て、楽しんでいるようにも思えなかった。大きく息を吸うと、委縮した体に血液が流れていく感覚があつた。

「なんだ、脅かすな。じゃあ着ている服が殺していたって結末でも出来るし」

丘から足を滑らせ転落死するというガツカリする結末だって考えら

れる。果ては夢オチと呼ばれている物語のタブーをやらかしているかもしれない。

「それはない」あっさり否定してきた部筑は、目線を上方に走らせてから、さらに言った。

「ベルリンには、五階建てぐらいある本のオブジェがあつて、その下敷きになれば終わりだろうが、それもない」

「どうやって本が殺したつていう証拠があるんだよ？」

「本が人を殺した方法だつて書かれていない。ミステリー小説の自費出版本だつた」

いくつかのエピソードが謎のままになっているし、要は伏線の回収が完全ではないらしい。謎解きは読者に委ねたかったのか、あるいはそこまで考えていない可能性を疑った。

「作者の意図まではわからん」

「とある理由で、連載を中断の小説は別にしてもさ。売られている小説だつたらありえないよな？」

「特にミステリー小説だつたらありえないな」と補足し、部筑はつづけた。

「ただ、後書きには、半自伝的な小説となるであろうと記載されていた」

「本当の出来事をなぞっているとも言いたかったのかな？ いや、『なるであろう』だから、書かれた後に起こるつて予言していたのか？」

「だろうな」

再び、緊張が走った。半自伝的とはいえ、五十パーセントが本場で、五十パーセントが嘘だとは限らない。予言となれば特にだ。

「似ていると思わないか？」

「似ているけど——本の世界だろ」

部筑は実際の事件と結びつけようとしていた。確かに、目撃証言はないようだし、自殺とも考えられない事件だ。しかし、本が人を殺すなんて、ありえない。絶対に犯人はいるはずだ。

「この謎を解き明かせば、現実で起こっている事件に繋がるかもしれない。いや、きっとそうだ」この根拠のない自信は天性なのだと思う。

「……すごい自信だな」

「騙されたと思って、調査協力してくれ」

今日だけで何回騙されたと思っているのか。頼む、部筑は頭を下げてきた。ここで嫌だと言えば、土下座する勢いがあつた。

「とにかく、その自費出版本を読ませてくれよ。部筑のあらすじのみでは見当もつかない」

「手元にはない。これから探しに行くんだ」

「探しに行く?」

「ああ、手元にはないからな」

「タイトルは?」

「『ビブリオフィリア』。訳して書物愛」

顔を上げた彼の目は輝いていた。僕は天を仰いだ。

B 2・本をパクって旅に出てみた

今日宿泊する旅館に到着するのが予定より遅れていた。旅館は『希林寿』という名だ。T村に存在するたったひとつの旅館でもあり、帰り道になってからそれを言い出すのもどうかと思ったが、この旅はすべて部筑にまかせっきりだったので、あまり文句は言えなかった。

部筑が携帯電話で連絡すると、旅館の管理人がバス停まで迎えに来てくれることになった。

「おい。女性の声だったぞう」興奮している。電話をしている最中のガッツポーズはそのせいだ。

「別に、珍しくないだろ？」

「無関心を装おつても、嬉しさがにじみ出ているぞ」

確かに、嬉しいことは嬉しい。

「まあ、男だからな」

「期待しておいて、がっかりしても態度に出すなよ」

部筑の方が心配である。彼は思ったことを口出すのに躊躇いがないからだ。

バス亭で足踏みをしながら待っていた僕達は、坂を登ってきたバンのフロントライトに照らされた。目を背ける前に光が消える。黒髪を後ろで束ね、体は華奢でも丸顔の、綺麗なおねえさんが車体から降りてきた。

「鹿野紀子かのきしこと申します」

優しい声で言う。丁寧だったので、僕も企業面接でやったような自己紹介をした。

相当、急いできたのだろう。化粧つ気がなく、エプロンの上からダウンコートを着ていた。

「そつ、低雲丘を見ていらしたのですね」

上がった頬に下がった瞼で、いかにも幸福を呼んできそうな頬笑

みだ。

「以前は名所だったんですよ。低雲丘を訪れに、北海道から来られたお客様もいました」

「今も有名です」

部筑は写真集の話をした。ただ、綺麗なころの写真ですよ、と言った瞬間に後悔した表情になる。そのタイミングで、冷たい風が吹いてきたので、車内に入るよう誘われた。

「後ろ狭くてごめんなさいね」

幅を利かせていたのは、段ボールだった。青野菜の香りが漂っていて、奥の方にはカバーの掛けられた鎌まであった。

「収穫とかしているんですか？」

「はい」マニュアル仕様のバンを手際よく発進させてから、

「近くの田んぼでは米を収穫していますし、山菜の採取だってしていますよ」

ハンドルを握っている左手に結婚指輪がはめられていた。詮索するようで、家族で旅館を経営しているのかは聞けなかった。

「へえ。自給自足ですね」

「近辺の村では、自給自足が生きがいになっている人ばかりなんです」

と、鹿野紀子は楽しそうに住人の話を始めた。

エンジン音がお腹に響いてくる後部座席で、二人の後頭部を眺めていた。

「もう少し早く来れば良かったです」部筑は夜の景色を見ながらそう言った。

「あまり見られませんでしたか？」

鹿野紀子は顔を伺っているようだ。

「俺らが来たときは日が暮れていましたから、あまり」

鹿野紀子の、少々困った顔がバックミラーに映った。

「宜しければ、明日、またお送りしますよ」

「いえ。明日は調べたいことがあるので」部筑はあっさり否定した。

山を下りていくと、バスで辿ってきた道をそれた。十分位走ったろうか。右手側に光を放つ小学校ぐらいの大きさはある建物が見えた。

「あれって地元の小学校ですか？」

「会社なんですよ」

鹿野紀子はバンの速度を緩め、門の前で停車させた。『？エコノミーテクノ』と立派な広告塔があり建物に繋がっている。建物の周りは広範囲に渡り森林が刈り取られていて、人工芝が敷き詰められていた。

「確か環境開発をしているとかで、けっこう新しいですよ」

「へえ」

「建設するのにあたって、村民とは揉めたのですが、村長の伯父が経営しているものですから、しょうがなかったみたいで」

建物の横に倉庫のようなものがあり、待っていたら、シャッターが半分まで開いた。その中は丸太や加工された木材で一杯になっていて、業務用のトラックらしき大型自動車が出てきた。

「環境開発するのに環境破壊か。なんだか矛盾しているな」

「ですよ」

海沿いの大通りからわき道に入り、磯の香りが薄くなったところで『希林寿』の外観が露わになった。二階建ての平屋で、一戸建ての家を大きくした感じの旅館である。入口の上は横長のバルコニーになっていて、二階の各部屋に通じているのだろう、等間隔に木板で仕切られている。その外側にオレンジ色に光ったちょうちんが並び、丁寧に刈り込まれた庭園には小さな池があった。

「お疲れさまでした。直ぐに夕食を用意しますので、部屋でお待ちください」

一階は浴場と食堂があり、四部屋の客室と、ロビー、受付がある。関係者以外立ち入り禁止と書かれたドアの先には、泊まり込み用の部屋だった。

「忙しいときは、あの部屋が住処になるんですよ」

「鹿野さん一人で切り盛りしているのですか？」と尋ねた。僕達以外、『希林寿』にはまったく人氣がなかったからだ。

「ええ、現在はそうしています」

「大変ですね。丁村でたったひとつの旅館と聞きましたし」

「いえ、ご覧の通り、ご利用して頂けるお客様は少ないものですか」

二階には五部屋の客室があり、案内されたのは二階の奥だった。

淑やかな香りを漂わせていたのは十つの畳みで、駐車場から見上げたバルコニーに通じていた。

「一階の浴場はご利用いただけるようにしていますので」

と言い、バスタオルや浴衣の置き場所まで丁寧な説明があった。

「わかりました」

ツツツツというスリッパの足音が遠ざかると、部筑は窓を開けた。開けっ放しでバルコニーに出る。外は黒い風が吹きこみ、窓を揺らしてきた。

「おい、暖房が利いているんだから閉めろって」

反応はない。彼の後を追った。

「自然に囲まれているのって、いいよな」

見上げた空には、満天の星を隠しつつあるチャコールグレーの雲があった。何かに急かされているように流れていくその雲は、やがて半月の光をも遮断した。

「ううーさむ」

部筑は部屋の中へと入っていった。

沸いた湯でお茶を入れるなどをして一息ついた。することなかっただけけれど、座椅子に背を委ねていると、眠気を催してくる。

部筑が部屋の隅々まで観察している姿を遠目にみつつ、僕はウトウトしていた。

たおやかな身のこなしで料理を運んできた鹿野紀子に見とれていた。盆に乗せられていた産地直送の海産物と、取れたての山菜が中心の料理を残さず食べた。特に山菜のお浸しが美味しくて、自分の

胃袋が限界になっていたのだが、おかわりを要求しなくなった。

「この辺に図書館あります？」

料理を片付けに来た鹿野紀子へ、部筑は言う。

「ありますよ。場所をお教えしましょうか？」

「是非とも」

部筑は地図を持ってくると言った鹿野紀子の作業を手伝うため、盆に積まれた残りの食器を一階の食堂の奥にある調理場まで持っていった。

「手伝いまでしてもらって、すいません」

鹿野紀子は地図を片手に持っていた。

「いえいえ。こちらこそ、洗い物の邪魔をしてすいません」

テーブルに広げた地図を取り囲んで座った。

「左近字図書館ですか」

「はい、近くの小中学校には図書室がないので、学生さん達が多く利用されています」

『希林寿』と、距離にして六キロぐらい離れていた。低雲丘への山道とは違った山道を登っていく経路だ。その山道に沿っていくつかの民家が点在していた。

「明日に行ってみます」

「行き帰りはお送りしますよ」

部筑は考えてから、手を横に振った。

「帰りは大丈夫です。散歩がてらで戻ってきますから」

「ですが。歩道が狭いものですから、危険ですよ」

昼間乗ったバスの運転手がこの山道を通ってきたらどうなるかを想像し、お言葉に甘えなくなった。しかし、宿泊は明日朝までの予定である。部筑は立ち上がった。

「大丈夫です」有無を言わさぬ空気を放った。

「運動不足を解消したいですから」

と瘦身の彼は言い、僕達は部屋に戻った。午後七時を過ぎていた。「低雲丘について調べてくれ。名前の由来やら、歴史やら、地元の

図書館なら資料はあるだろうから」

「部筑はどうするの？」

「俺は例の自費出版本を探してみる。後は、その本の通りの事件が本当にあったのかを新聞で調べる」

「聞き忘れていたんだけどさ、その自費出版本をどこで見つけて、いつ読んだの？」

「美佐江の父親がな――」

海外出張の多い、メーカー勤めの会社員という話は美佐江から聞いていた。

「先週、日本に帰国したとき、たまたまニュースを見たらしい」

父親の大学時代の友達が書いたミステリー小説の内容と、実際に起こった万引き犯殺人事件の内容が似ていたことを、美佐江に話していた。しかも、その本には横浜、新横浜、それぞれで殺人事件が起こっていると言われていた。

「似ているって、そういうことだったのか！」

「ああ。そうだけど」

本が人を殺した描写だけが似ているのだと、早とちりしていた自分を誤魔化かすように、咳払いをした。

「じゃあ、読んだのは美佐江の父親かよ？」

「そうだ。俺は読んだなんて言っていないからな」

「別に、責めているわけじゃないけど……」

全部受け売りだった。さも自分が読破したかのように振舞えるのも、ある意味才能かもしれないが。ただ、好奇心で娘に熱弁している姿は、ちよつと変わっている父親像を想像させられた。

「大学時代の友達は、この辺に住んでいたのかな？」

「わからない。でもこの辺を舞台に書かれていたのだから、地元図書館に置いてあるかもしれないだろ」

「少なくとも、一度は訪れていないと書けないと思うからな」半自伝的とあれば、なおさらだ。

「本になって、あの結末がばやけた内容に驚いたらしいぞ。半自伝

的なんて後書きもあつたから、彼のことをあまり知らなかった自分を気に病んだらしいし。まあ、それがいつまでも記憶残させたんだろうけどね」

「最後までちゃんと書けつて意見はしなかったのかな？」

「さあ。美佐江の父親との面識はないし」僕も同じだった。

「なら、美佐江が帰国するのを待つて、父親に合わせてもらつて詳しい話を聞けばいいでしょ？」

「あまり頼りにしたくはない」

わかる。初対面の大学生が世間を騒がせている万引き犯殺人事件を追っているなんて聞けば、大概が怪しむはずだ。考えているうちに気が変わりそうになった。

「なあ、何でそこまで拘っているの？」

「彼女から持ちかけられた話だし、事件調査を望んでいるからな」

美佐江にそんな趣味があるとは思わなかった。いや、まったく別の動機があるとしたら。例えば、

「もしかすると、二人目の犠牲者が発見された日に、新横浜に居たのつてさ」

「さあ、たまたま空港に行く途中だったんじゃない？」

「いや、空港だったら、新横浜は遠回りだし」

なぜ、気がつかなかったのか。僕はかなり重要な話を聞き逃していた。

「美佐江もこの事件に興味を持っている。事件現場で野次馬していても可笑しくないでしょ」

「野次馬していたら可笑しいんだよ。でも、それ以外考えられない」

「なんじゃそりゃ」部筑は呆れた。

美佐江と新横浜で会つたのが一月二八日の十四時三十分頃、殺人事件の報道はその日の十七時の二ニュースでやっていった。

「しかもかなり新鮮な情報だったんだろ？」

「その前は、どのチャンネルでもやっていなかったからな」

「美佐江はテレビで報道されるより前から、事件現場を知っていた。

裏を返せば、美佐江は事件が起こるのも知っていた……」

「面白い発想だな。疑っているのか？」

「違うけど」

言っではみたものの、疑いの感情を持ち始めているのは事実だった。きつと、重要な手掛かりを持つているはずだ。

「第一の事件があつた日、俺はずつと美佐江と一緒にいたんだぞ。

第一の事件と第二の事件は、殺害方法が似ている。警察は同一犯とみて捜査しているしな」

「……そうか」安堵と、嫉妬が絡み合つて複雑だった。

「まあ、帰国すればわかる。それまで留守番させてもらつているから、ちよつとは力りをかえさないとまずいでしょ」

僕は麦酒を頼んだ。

新横浜の定食屋にいたテツさんの顔を思い出す。きつと、彼も麦酒のために働いていたのだろう。上司に命令されるだけされても、文句を言わず。文句のはけ口を定食屋に設定して。

C・T村、低雲丘の調査

「よく眠れたようですね」

階段を下りてきた僕達に、鹿野紀子がほほ笑みかけてきた。

「ええ」

若いうちはぐっすり眠れるものですからと賛美されて面映ゆかった。チェックアウトの時間は十時までだったので、後三十分残っていた。

鹿野紀子に送ってもらい、左近字図書館に到着した。到着するまでの間、速度を上げたとき、運転席の下から後部座席の脚置きにすりとりプリクラが滑ってきた。映っていたのは鹿野紀子と随分歳の差が離れていそうな男だった。二人は左手を前に突き出し、薬指の指輪を見せつけるようにしていた。

僕はあまり詮索しない方が妥当と考え、いや、見てはいけないものを見てしまった感覚に襲われ、運転席の下にそっと戻した。

左近字図書館は茶色の木目の外観をしていた。森の中をイメージしているのだろう。遠くからだ、山に溶け込んだ図書館として映った。

本館と書かれた建物に入館するなり、受付に座っている同年代ぐらいの男が頭を下げてくる。青白い顔をしている彼の傍で、部筑はこう話しかけてきた。

「この図書館は、本が盗まれてもわからない仕組みだな」

睨まれた。僕は慌てて部筑を連れ書架のある広い部屋へと入った。後ろから咳払いが聞こえる。

「失礼だろ」

「別に、間に受けてくれた方が、彼らのためじゃん」

「ここは万引きするような人がいないんだよ」

「うわー偏見もっているな」

入口で荷物を預けるシステムも、防犯ベルが鳴る機器もない。確

かに素通りで出入り可能な図書館だった。

「じゃ、調べるか」

低雲丘についての資料は、階段を上がった二階の奥にあった。地元の資料が並んでいる書架のなかに、夕行の地名にちなんだ本がある。僕は辞書やら百科事典を手元に置き、本を開いた。発行年が一九八五年だから、二五年前になる。僕が生まれる三年前だ。

名前の由来：冬の季節、木々の枝に付着した霧氷が雪と重なって雲のようになる。丘からの景色が、雲の近くに立っていると錯覚したことから、低雲丘と名づけられた。

霧氷は霧のいたずらというふうに、一夜にして山に花を咲かせる冬桜。霧が零度以下に冷やされ、水蒸気のまま流されてきたときに発生する。木の枝や岩にぶつかった瞬間、その刺激で過冷却の水蒸気が個体、すなわち氷片になる。

歴史：二百年以上も前から存在していたと、文献に記されている。七十年前まで、村の祭りごとを低雲丘で行っていた。丘の頂上で火を焚き、豊作を願った。一説によれば焚書の儀式もされていた。

すかさず調べた。焚書とは、学問・思想を権力によって弾圧するための手段として、書物を焼き捨てることだった。

次の項目には、儀式の意味について書かれていた。

だが、政治的背景から、その時代に焚書を行っていたとは考えづらい。丘の上で焚書ではなく、使い古した本を燃やす儀式をしていた説が有力である。霧氷の出来やすい環境を整えるためである。燃え盛る本の煙が辺りの樹木を壊死させ、裸の枝のみが残る。裸の枝は低雲丘の光景をより神秘的なものにする。という古くからの言い伝えがあった。

ここまで調べて、部筑の様子を見に行くことにした。彼は文芸書のコーナーをうろろしながら、何やら呟いている。その表情は決して収穫があったようには思えなかった。

「見つかったか？」彼の耳元でささやいた。

「外に出よう。作戦会議だ」

建物の脇に喫煙スペースがあり、自転車が止めてある駐輪所と併用だった。その数からするに、図書館職員は自転車通勤を義務付けられているのかもしれない。部筑はマウンテンバイクに跨り、両足をペダルに置いた。

「全然だめだ。図書館員に内容を説明しても、取り合ってくれない」担当したのは女性の職員らしい。眼鏡をかけているおばさんと聞いて、さっき貸出本の返却を承っていた人が思い浮かんだ。

「書架の本をすべて読んだ人のみが採用されていたら、そんな逸材、日本中探してもいないでしょ」皮肉を交えてから、

「検索かければ出て来るのでは？」

バランスを崩した部筑は、舌うちをした。

「検索用のパソコンがないんだよ。修理に出しているとかでさ。ありえないか？」

利用客が使える検索のパソコンが一台しか存在しないと言うのだ。左近字図書館の客数を見れば、それだけで事足りるのかもしれないが。

「『ビブリオフィリア』を職員の頭で検索してもらって、本図書館にはありませんって、はつきり言われたし」

「国立図書館にいかないとないのかな」

「そうそう。まったく、どうなっているんだよ」

部筑は肩をすくめる。

「地元を舞台にしているんだぜ？ 本は地域貢献しているのに、地域が本に貢献していないなんて、ひどくね？」

「だから、卑下するわけじゃないけどさ、自費出版だし」

そう、国立図書館の書庫でさえ、自費出版をすべて置いているとは限らない。

「読んでいる奴なんていない、か……」

部筑は、目を細めた。

調べた結果を話した。彼は上の空で聞いている。

「これでわかった？」

「書いてある内容があやふやだな。どれを信じていいものやら」

「詳しい人がいたら、聞いてみようか？」

「探しておいてくれ」

「鹿野さんぐらいかな。あの人の伝手があれば」

部筑は自らの思考で忙しそうだった。

「どうせだから、少し読書でもしていこうか？」

他にどんな本が並んでいるか、興味があつた。

「俺はもう少し調べてみる」

「村関連の歴史を辿る作業だ。別館に資料室があるらしい。」

僕らが入館すると、アポイントを取った客を待ちわびていたかのようになり、眼鏡をかけているおばさんが声をかけてきた。名札には加藤の文字がある。

「あの、すみません」

「あつ」

部筑は声が裏返っていた。つい後に後ずさりしている姿から、僕達のやり取りを聞かれたらと思っっているのだろう。

「調べてみたんですけど、小説『ビブリオフィリア』は貸出中になつていました」

「なんですって！」

部筑は態度を急変させた。ネット検索で左近字図書館の書籍データベースを調べれば、『ビブリオフィリア』はあることもわかる。そんなオチだった。

「いつ？」

加藤に詰め寄る。受付の男が心配そうに見守っていた。

「ええ、五日ほど前になります」

「返却予定は？」

「当館は貸出期間を一週間としていますので、普通なら二日後です」

「その人の名前は？」

「個人情報ですので、お教えするわけにはいきかないのです」

貸出するには、村か、その周辺の住人である証明が必要だと、

受付の張り紙に書かれていた。

「返却されたら、連絡ください」

部筑は一方的に携帯電話の番号を教えた。それとなく聞いていた受付の男がメモを取っている。

「あの、予約は出来ない規則になっていますけど、宜しいでしょうか？」

「ダメです。貸出してくれって頼んでいるわけではないんです。あの本がどうしても必要なんです」

部筑から顔を背けた加藤は、受付の男に視線を送った。彼の唇はチャックで閉められている。

「規則を破ってください」部筑は折れなかった。

「……わかりました」

聞きわけの悪い利用客を、あまり相手にしてこなかったのだろう。その弱々しい対応で可愛そうになってきた。と思ったところで仲裁する言葉も思いつかず、気まずい空気の後、僕は散策した。

背表紙に張られているラベルが、書架に陳列されている。多くの読者によってたらい回しになった本達は、光沢が失われ色が抜け落ちていた。手に取った本に息を吹き駆けると、空気中へと舞い散る埃で顔をしかめた。

「彼らの寿命は」

僕はビクツと、体を動かした。加藤だ。

「扱った人間によって左右されるのです。環境を作り出すのも人間ですから」

ならば、もう少し大切に扱われてもいいんじゃないか。しかし、加藤の表情は、こちらにも事情があるんだと訴えているようにも見えた。

「なるほど」僕は本を戻した。

「何かあったんですか？」

「この地域では、本を修理してくれる場所がありませんから、他の図書館に比べ、廃棄率が高いんです」

胸にしまっておくつもりではあるが、果たして、教えて大丈夫なのかと思うぐらいの内容だ。

「寂しい……ですね」

「はい」

「先程は、友人が失礼してすみませんでした」

「いえ。あなた方のように、本を探そうとしている人は、絶対大切にしてくれます」

「経験上ですか？」

「ええ、そうですよ」

本をテキストするために舐めなければ、部筑は誰よりも本を大切にしますよ。とは返せなかった。この図書館の裏事情をしゃべったのは、部筑の言動が効いていたのだろうか。あるいは、周知されているのか。後者を聞いてみた。

「知っているでしょうね」

トラックの荷台に積まれた本を、定期的に搬送しているとつづける。次々に新しい本が入荷され、古くなった本は去っていく。焚書の歴史が頭を駆け巡った。しかし、それ以上、口に出すのを憚った。まるで、余計なことまでしゃべってしまったかのように。僕はさりげなく話を変えた。

「T村に詳しい人を知りませんか？」

聞き方がまずかった。加藤は余計に疑問を煽られた顔をしている。僕は低雲丘の名前の由来やら歴史を調べている説明をした。

「大学の卒業研究で低雲丘を調べているんです」

加藤はやつと頷いてくれた。

「黒岩さんなら、詳しいよ」

親しみやすい対応になった。本来の加藤だと思い、頬が緩んだ。

僕は年上の人に敬語を使われるのが嫌いだった。

「ずっと住んでいらっしゃるんですかね？」

「そう、T村の生き字引よ」

信頼のおける知人を紹介している口調だった。

教えてもらった住所と、地図を照らし合わせた。場所的には、低雲丘に近い。しかも、連絡先まで教えてくれた。

「ありがとうございます」

「研究がんばって。応援しているよ」

僕は照れ笑いを隠すために、頭を下げた。

本館と別館を繋いでいる通路には、縦長の机が置かれていて、その上にパンフレットが並んでいた。左近字図書館の案内が記載されているパンフレットをもらい、別館の地下にある食堂へと向かう。

メールで連絡してから待っている余裕もなかったのだろう。訝えない表情をしていた部筑は、調べた成果はなかったのもあり、出された料理をまずそうに食していた。

「黒岩さんに聞いてみよう」

加藤のアドバイスに従うよう提案した。どの道、宿の予約を入れていなかったなので、滞在時間も限られていた。

「納得いかない。どうしても、事件を隠しているとは思えない」

「なぜ？」

「勘」予め用意していた反応の速さだ。

「でた。全部調べてないのに、それはないでしょ」

「だってそうだろ。平和な村であれば、負の遺産を隠蔽するに決まっている。ましてや人殺し。田舎なら、それが可能だ」

「偏見だな」

だいたい、半自伝的小説の内容が、T村で起こっていると信じて疑わない方が変だ。

「違う」

部筑が何か言おうとしたとき、着信音が鳴った。

「番号非通知って誰だよ」

「いいから出るよ」

「もしもし、部筑です……あ……はい。……えっ？ 開いている？」

彼は電話を持ち替えた。みるみる表情が強張っていく。その様子から、良い知らせでないことだけはわかった。

「今、Z県のT村にいるんです。これからすぐに戻りますので。それまで見張っていてくれませんか。……三時間か四時間ぐらい……お願いしますよ」と頭を下げる。

「あっ、切りやがった。くそ」ディスプレイに悪態をついた。電話をかけ直すか迷っている。しかし、番号非通知であつたのを思い出したようだ。

「どうした？」

「『密造書展』に泥棒が入ったらしい」

コップの水を飲み干してから、部筑はそうささやいてきた。

「はっ？ 泥棒って、いつ？」

「知らん。さっき見つけたらしいから、昨日の深夜か今日の早朝だろう」

「そうか。僕らが出たのは、昨日の昼ごろだし」

——てか、それしかないし。

「戸締りしたのかよ？」

「信二も見えていただろ」

「入口は、な」

「帰るぞ」

タクシーを呼び、駅へと向かった。

D・書齋にあった本の行方その1

駅から商店街までのアスファルトには雨の降った跡があり、オレンジ色に染まっていた。そこから微かに放たれる、雨の乾いた匂いがした。泥棒の知らせを受け、帰ってきたのは十六時過ぎだった。部筑の携帯電話が書かれた張り紙、入口は施錠されたままになっている。

「あれ……」

僕が頭上を指刺す。二階の窓が開いていた。

「畜生。あそこから侵入したのか……」

『密造書展』の一階と二階の間は平面の外壁になっているので、向かいのシャッターの閉まっている店から、窓際に飛び移ったとは考えづらい。となると、梯子を使わないと無理な高さだ。

「入ってみよう」

中央の棚にあった片面の本が、ごっそり消えていた。僕達は立ち止まり、茫然とした。

「盗まれたとしたら、これだけの本を持って、二階から逃げたのかな？」

「無理だな。本が消えたとは思えない」

「ありえないって」

「じゃあ、どうやったと思う？」

ざっくり見積もっても、消えた本は数百冊ぐらいあるだろう。

「わからない。二階も確認してみよう」

書齋の奥にある木製の階段を登った。二階は1Kの間取りで、仄かに香水の香りが漂っている。

「荒らされている形跡はない」

敷きっぱなしの蒲団、それを見下ろしている筆筒やら押入れやらを覗いてから、部筑が言った。彼は下着類があっても躊躇いが無い。ひらりとレースのパンツを摘み、僕に向けてきた。

「どこも昨日のままだ。変態の仕業ではなさそうだ」

「……変態はお前だろ。仕舞えよ」

「ひどいな」部筑はその場に座り込んだ。入り込んでくる冷気を遮断するのに、窓に手をかけようとした。

「触るな！」

手は、窓の寸前で止まった。

「いきなり大きな声だすなよ」

振り返った。

「犯人の指紋が残っているかもしれないんだ。閉めるのなら、手袋をして、外から触れられない箇所を持つんだ。いいな？」

「……了解」

僕は美佐江のクローゼットから、毛糸の手袋を取り出して、窓をしめた。

「部筑は触れてないの？ T村に行く前とか」

「触れてない。ずっと閉め切っていたからな。窓の鍵が開いていたのも知らなかったし」

「そうか」

「無くなったのは、本だけか……」

それは、お金を盗まれるよりまずいことを意味する。もちろん、部筑も承知していた。以前、ゼミで一緒だった男が、常に本を読んでいる美佐江をこう形容していた。

——美人なのに、活字中毒なんて勿体ないよな——

彼にとつて、男らしい、女らしいと同列に、美人らしい、若しくは美人はこうあるべきという美学があつたのだらう。僕は賛成も反対もなかった。もし恋人がそう思っていたとしても、彼女は自分の生活スタイルを変えるとは思えない。しかも、美佐江は活字中毒者だけではない。

新横浜で起こった事件、僕が彼女に疑いを持ったのは、彼女の趣向が背中を押してきたからだと解釈できる。

美佐江は書物愛者だ。

「美佐江になんて言えばいいんだ」

泣きそうな声で顔を抑える。報告したときの反応を考えると、とても可愛そうに思えてきた。

僕は部筑の背中をポンとたたいた。

「事実を話すしかないよ。フォローするから」

「――」

裏手の戸を開けてみたら、いくつかの本は裏手の河川に捨ててあった。薄いミルクティーのような濁った水にページがめくれ、水中でひらひらと漂った本達がある。たぶん、ハードカバー等の重い本は沈み、軽い文庫本は流されたのだろう。

「……こういうことだったのか」

「川に捨てるなんて」

「夜中になれば、誰も歩いていないからな……」

虚ろな目を川の流れに向けている。つまり、夜中であれば侵入者がいたとしても、咎める者がいない。そう言いたかったのだ。

「ん？ 待てよ」

部筑は辺りを見回した。そして小さな物置まで確認した後、

「縄もなくなっている」意外な事実を知ってしまったかのように言った。

「縄？ 何の？」

「本を束ねておいた縄だよ。昨日、信二が来たとき、あっただろ見ただろ？ 見せたよな？ 執拗に問いかけてきた。」

「ああ、クリーム色の縄ね。確か解いて中央の本棚に納めてから、そこらへんに放置していたやつか」

「なくなってる」

「あれなら、東急ハンズとかに売ってそうだから、買ってあげばいいでしょ」

「……そうだな」

「なあ、ストーカーの仕業じゃね？ 旅行に出かけているのを知って、忍び込んだとか」

「だから、そんな男は見たことないんだよ」

部筑は蚊の鳴くような声だ。もうひとつ考えられるのは土地勘のある商店街住人の仕業だ。美佐江を快く思っていない人物がいる。いや、たんに騒動を起こしたかったのか。どちらにしろ、じっと待っているわけにもいなくなってきた。

通報してくれた人の名前を聞いていなかったのを、部筑は後悔し始めた。意気消沈している彼をみて、安堵している自分がいた。美佐江が部筑に気があるのであれば、もっと堂々としているはずだから。

僕達は通報もせず、交代で見張りをしていた。事体を大きくしなくなかったからだ。それにこうしていれば、美佐江をストーカーしている奴も見つかるかもしれない。

仮眠する番になっても眠りがおとずれず、部筑も同じだった。最初は使命感に駆られて張り詰めていたものの、それが二日とつづけば意識が朦朧としてくる。きっと、張り込みをしている刑事や探偵はもっと過酷なのだろう。

『密造書展』の前を歩く人達は、午前一時を境にぱったりと消え、午前七時ぐらいからまた現れた。まるで決められた時間を歩く通行人エキストラのようだった。

昼間は手分けして、『密造書展』に侵入した者を目撃した人を探した。ついでに怪しい男を見かけなかったかも知れぬ。商店街の住人、河川に沿った建物にいる人達、通り過ぎる人達までも捕まえては、逐次説明を加えた。最初は耳を傾けてくれるが、結局誰からもめばしい証言は得られなかった。

運悪く警察が商店街を巡回し始めたのをきっかけに、僕達は部屋に籠った。これが商店街に店を持っている者で、僕達が客引きだったら店は潰れていただろう。もっと親身になって話を聞いてもらえ、他人を引き付ける方法はないものか。真剣に考えた。

次の日、スーツケースとお土産用の紙袋を携え、美佐江が帰国し

た。『密造書展』の前に立っていたときだった。

「信二も来ていたんだ。目充血しているし」

美佐江は、大きな目をパリクリさせる。僕はガラス戸に背中を密着させた。

「待っていたよ」

「何で？」

「こっちが聞きたいぐらいだ。」

「覚えてないの？」

頭皮と髪の毛の間に指を入れ、ふわりとさせた美佐江は微笑んだ。
「嘘だつて。疲れているんだから話はあと」

「喫茶店でもいいかないか？ ちいさいのが商店街にあるでしょ」

「そこどいて」

「あ、いや」

中からガラス戸が開き、転びそうになった。部筑は作り笑いを浮かべている。

「おかえり」

「ただいま。ブックも疲れている顔ね。何かあったの？」

ブックとは、美佐江がつけた部筑のあだ名だ。ただし、僕がそのあだ名を口にする、と、不機嫌になる。

「いろいろあつてね」

「調べておいてくれた？」

彼は曖昧に頷き、自転車で蕎麦の出前をしているような形の手のひらで、足を交差させた。

「まずは中へ入ってください。姫様」

「気持ち悪いし」

美佐江は書斎を通り過ぎたところで振り返った。鋭い視線が、僕達を突き刺した。

「ねえ、本がないんだけどさ」中央の本棚を顎で示した。部筑は絞り出したような声で口を開いた。

「……実は」

泥棒にあい、河川に沈んでいる本のことを、慎重に説明した。

「ええええ！」

耳を塞ぎたくなる悲鳴が響いた。心配になった人が、『密造書展』に駆け寄ってきた。

「すいません。なんでもありませんので」

と、僕は弁明した。しかし、正確には美佐江が追いついたことになる。

「ちょっと。どういうことなの？」

静かだが、有無を言わさぬ迫力があつた。そこで丁村の話をする。角が立たないよう、部筑は若干の脚色を加えていた。

「ごめん」

美佐江は腕を組んだ。

「部筑も悪気はなかったんだし……」

その後がつづかない。僅かな間が永遠のようで、飲んだ唾が喉に引っ掛かった。

美佐江は深い溜息をついた。

「棚にあつた本はリストアップしているから、買い揃えてきて」動こうとしている彼女を引きとめた。

「む、無茶だよ」金銭的にも、体力的にも。

「じゃあ、絶対にこの事件を解決して。そしたら許してあげる」

この事件とは、万引き犯殺人事件を意味していた。

「えっ？ 許してくれるの」頭を垂れていた部筑は、顔を上げ、目を見開いた。嬉しがつているようだが、どれだけ難題を押しつけられているのかわかっているのだろうか。彼らの膨大な目標を、僕が静観してから現実へと引き戻す。この三人でいると、いつもこんな役目になる。

「絶対、警察よりも早く解決するの。ついでに、わたしの本を川に捨てた犯人も捕まえる」

「……犯人を」僕は床を見つめた。

「でないと、許さないから」

二人して頷いた。

「でもさ、何で警察より早く解決する必要があるわけ？ 美佐江の本を捨てた犯人ならわかるけどさ。殺人事件は僕達が関与するより任せておいた方がいいんじゃない？」

「普通ならね。でも、今回の事件は普通じゃないの」

「どういう意味？」

「わたし達の事件かもしれないから」

「ますますわからなくなってきた。わたし達の事件？ 美佐江が事件現場にいたことが関係しているのだろうか。又は、わたし達と表現しているのなら、僕や部筑も関係しているのか。」

「よろしく」

「待ってくれ！」

「何よ？」

「二階の窓には触れないでくれ」

本を捨てた犯人が二階の窓から侵入していた事情を話し、指紋が残っているかもしれないからと、部筑は注意した。

階段を上がっていく美佐江を見送る。身近な存在だった者が、どんどん遠くへ行ってしまう感覚だ。鼻屑にしていたマイナーなバンドが、ブレイクしてしまう寂しさに似て、胸の中が痞えた。しかし、彼女の心が読めないことによる嫉妬が含まれているのも察していたから、軽い口調で、部筑へ耳打ちした。

「て、どうするんだよ？」

「チャンスじゃないか」部筑は満面の笑みで、親指と中指を使ってパチンと鳴らした。

「正直もう終わったかと思ったけど、俺達はついている」

「本気なのか？」

「当たり前だ。もし、美佐江に嫌われたら」

「大学にはいられない」

「その通り」

部筑が美佐江に頭が上がらない理由は、泥棒の件以外にもあった。

D 1・書齋にあった本の行方その2

一年前の夏。

単位不足の彼が留年を左右するテストがあつた日だつた。僕は寝坊した。時計を逆算して考えると、かなり急いでもテスト開始時間には十分は遅れることがわかり、十五分遅れで校門に辿り着いた。足を止めてしまったら大量の汗が噴き出て、いろんなやる気を失いそうな感じを意識していた。その時、部筑が広場で知らない女性と対面していた。しかも、女性は二人いた。一人はスラリと背の高くて、もう一人は丸顔の古着が似合つた女性だ。明らかに、深刻な話をしている様子だつた。

それが意味しているものがなんとなくわかつていた。部筑は同時に複数の女性と付き合つていたことを、数週間前の帰り道、他人事のように話してきた。あまりにもぞんざいだったので、その関係を持続出来るとは思えなかつた。

僕は部筑の背後に回り込んで近寄つた。ひと段落着いていた。静かな口調で話していた女性二人が部筑を見つめた。

——どっちと付き合う気があるの？ ——

背の高い女性は、一刻も早く煮え切らない部筑の本心を知りたかつたのだらう。ねえ、を連呼した。

部筑の顎の筋肉が動いた。しかし、発した言葉が聞こえなかつた。僕は、さらに距離を詰めた。背の高い女性は強張つた表情を崩さず、

——あなたは何か大切なの？ ——

——本——

部筑はつきり言つた。彼女らは流石にたじろぐ。ところが、そんな突拍子もない回答で、女性が納得するはずもなく、怒りの度合いは増すばかりだつた。

女性を応援したくなつていたのだと思う。恋愛経験が殆どなかつた僕にとっては彼の境遇は恵まれ過ぎていた。その後の展開が知り

たくて胸が躍った。

ふと、僕を追いついていく姿があった。部屋に漂っている匂いをまとった美佐江だった。

――修羅場中にごめんね――

――誰？ あんた――

女を忘れたかのようなしかめっ面だ。二人は部筑と深い関係を持っている、新たな女性だと思ったに違いなかった。

――関係ないでしょ。てかさ、彼はあなた達を、付き合っていると思っていないよ――

――わかった口、聞かないでよ――

――はあ――

丸顔の女性も、穏やかではなかった。

まだわからないの？ と、美佐江は目を見開いた。

――体の関係が持ちたかっただけ。遊びよ。そういう男だから――

部筑は否定も肯定もしなかった。今思えば美佐江は彼の本心を代弁していたのだろう。女性と本気で付き合うような性格を持ち合わせていないからだ。二人は『最低』とか『信じられない』と言い残し、その場を去った。

それから、部筑の噂が広まった。つるんでいる僕にも波及していた。アダルトDVDを購入しているところを携帯のカメラで激写され、その画像がネットに載せられた。ぐらいならまだ良かったのだが、あらぬ噂まであった。

友達として浮気は良くないと忠告しておけば、少しは事態が丸く収まったのかもしれない。しかし、月並みな忠告で彼を白けさせるのが怖かったのだ。

まさか、大学生にもなって、いじめがあるとは信じられなかった。そして、瞬く間に友達を失った。大学時代の友達なんて、何かあれば壊れてしまうものだと思えるほど強くなかった僕は、一時空に閉じこもるようになった。この平和な世の中に、自分が含まれていないように思えた。

しかし、美佐江は選挙前の議員が街頭演説をするように、大学の広場で噂の撤回を呼び掛けた。色眼鏡で観察していた者も、少しずつ受け入れていき、交友関係の芯にある亀裂は戻らなかったものの、ぎくしゃくした空気は正常に戻った。つまり、美佐江を怒らせて絶交なんて言われた日には、僕らの大学生活が壊れてしまうのだ。

回想を打ち破ったのは僕達を呼ぶ声で、二階にあがった。

美佐江はスウェット姿で正座していた。訊きたいことは四つある。

一つ目は失踪した知り合いの行方。

二つ目は新横浜で会ったときに話そうとしていた内容。

三つ目は報道される前に事件現場近くにいた理由。

そして先ほど浮かび上がった警察よりも早く事件を解決しなくちゃいけない理由だ。いや、まだあった。スニーカーのこと。

なるべく彼女の機嫌を損ねないようと考え、一つ目を選んだ。

「前に公園で話してくれたことあったでしょ？」

「カメレオンの話ね」——いや、失踪した知り合いの話だよ。

と言おうとしたが、美佐江はカメレオンクイズに不正解だった僕の話をはじめた。

「どうせ知りませんでしたから」と、すねる。

「カメレオンの死んだときの状態を知っていたわたしとブックが警察だとしたら、知らなかった信二は今のわたし達なの」

「例えているの？」

その問いに、美佐江が面倒くさそうに答えた。

「少なくとも警察は報道されている内容以上に事件のことを知っている。捜査も進んでいるはずだからね。その点では報道でしか情報を知らないわたし達は不利なの」

まさか僕らのやりとりを棚に上げてくるとは思わなかった。

「美佐江はわたし達の事件かもしれないって言ったよね？」

「うん。恐らくわたし達の事件ね」

「全然、意味がわかないよ。それなら直ぐにでも解決しないとヤバ

いはずじゃないの？ 海外旅行に出かけている暇もないぐらいだと思っただけだ」

しゃべって、いきなり後悔した。機嫌を損ねないようにと考えていた矢先の失言である。泳いだ視線は何食わぬ顔をした部筑を捉えた。フォローしてくれそうにない。

しかし、意外な答えが用意されていた。

「スリランカに行ったのは、失踪した知り合いがいないか確かめたかったからよ」

「へっ？」

驚いたのは、僕だけだった。部筑はある程度の事情を知っていたようだ。

「カメレオンが死んだときの様子を教えてくれたのは、失踪した知り合いなの。あの子は大学で動物学を専攻にしていたから。スリランカはカメレオンが生き生きと生活できる場所だし」

「スリランカに行ったら、失踪した知り合いがいるんじゃないかと思ったのか？」

美佐江は当然のように頷く。スリランカがいったいどれ程広くて探すのが困難なのか知っているのだろうか。ただ、部筑と同じく思い立ったら即行動の彼女だ。僕の価値観をぶつけてみても、あまり効果はないはず。

話の発端は、部筑に失踪した子の相談をしたときだったらしい。

カメレオンと聞いた彼は中学生の思い出を話した。英語の教科書に掲載されていたスリランカの子供の顔が、彼にそっくりであることから、スリランカ人のハーフだからかわれていた。

「真剣に話をしているんだからって、それを話して怒られた時は冷や冷やしたけどな。その後、スリランカはカメレオンの生息地で有名だって教えたら、つぎの日には飛行機で飛んで行ったから」

「見つからなかったけどね」

美佐江は瞳を閉じる。

「まあさ、ストーカー駆除にはよかったんじゃないか？ 美佐江が

旅行にいつている間に、俺が住んでいるところを目撃していれば、もう来なくなるでしょ」

「怪しい男でもいたの？」

「……いや」

ストーカーのことにはあまり関心がないようだ。

「わたし達が警察よりも有利な点もあるの。コーヒーを入れたら話すから待ってて」

丸いテーブルに乗っているコーヒート、それを囲んだ僕達。すっかりくつろいでしまい、ちっとも話そうとしない美佐江に痺れを切らせた。

「新横浜にいたのってさ」僕が一番訊きたかったことだ。

「あれはね。旅行前に寄ったの。信二に会えるとは思わなかったけど」

「いや、それはわかる」

「万引き犯が殺される場所を知っていたの」

肺が収縮する。ひどく息苦しく、呼吸も忘れていた。

「……知っていたって。まさか……」

美佐江の表情はぼんやりしていた。どこか遠くを見ているか、あるいは何も見えなくなっただかのように。しばらくしてから言った。

「犯人は、わたしじゃないよ」

「犯罪予告があったとか？」部筑が訊いた。

「予告通りね。犯人は物語を忠実に再現しているだけなの」

「その物語って？」

「『ブビリオフィリア』。T村で探していたんでしょ？」

美佐江は大きな瞳で部筑を見つめる。

「うん——そうだけど」

「次はT村で殺人が起こる。間違いないわ。それがわたし達の有利な点」

美佐江は悪戯を思いついた子供がするような含み笑いをした。

あり得ない現実を目の当たりにすると、話しの範疇であれ、強張

った体を通り越して眩暈がやってくると実感した。新横浜で美佐江が話したかったのは、事件捜査の協力だった。なんとなく予想はしていたものの、意気消沈していたのも事実だ。確かに新横浜駅の雑踏ではしゃべれない内容でもある。

『ブビリオフィリア』が手元にない。読んだことがあるのは美佐江の父親で、この事件に関心を持ち始めたのが彼だとなれば、話は簡単だった。

「父親に会わせてくれないか？」

美佐江は膝を崩した。

「別にいいけど。かしこまらないでよ」

「ヒントが『ブビリオフィリア』にあるんだとしたら、その方法しかないんだ」

「ブックに聞いたのね？」

「俺は、殆ど伝授したよ」

「話がはやいね」

美佐江は五郎さんという大家に家賃を払わないとやばい、と言い眠りについた。三人で川の字になって寝る。随分と久しぶりの睡眠だったような気がした。

D 2・本と水死体

僕達が疲れを癒していた昼下がり、商店街が慌ただしくなった。といっても、先に起きて本を読んでいた美佐江の主観であり、僕と部筑はいつもと代わり映えのないように思えた。

二階からの景色は、博物館に展示されているようなミニチュアの商店街だった。あえて時代に逆行し、古き良き時代をそのまま真空パックさせている感じだ。こちら辺を仕切っている市長の狙いなのかもしれない。

屋台に似た飲み屋『モダン酒場』の周りに人だかりが出来ていた。僕らを除いて六人、美佐江を先頭に、僕達も加わった。おでんの煮えた匂いが鼻孔を攪り、人だかりを掻きわけて食べまくりたい衝動があった。が、財布の中身はとことんさびしくなっていて、好き勝手に注文できる状況じゃないのも知っていた。

「おじさん、どうしたの？」

肩をポンポンと叩かれた浅黒いおじさんは、振り返り、ニヤついていた。

「おー美佐江ちゃんかい？ 旅行はどうだった？」

呑気だった。そして視線が集中してくる。僕らは飲みに来たわけではなかったので、手持無沙汰になった。ただ、集まっている人達も、昼間から飲んでいるわけでもなさそうだ。

「楽しかったよ。それより、皆で集まっているけど、どうしたの？」

誰かが話し出すのを待っているのだろうか。皆、一様に顔を見合わせた。

「邪魔でしたら、俺達席を外しますが」

部筑は言い、僕は頷いた。美佐江と目があつた割烹着を着ている初老の店主が口を開いた。

「阿武隈川の下流を知っているかい？」

「うん。その川から合流している川でしょ。下流だから、海に近

いのかな」

「ああ。そこでな——その」

言葉を濁す。美佐江に肩を叩かれたおじさんは、頭を垂れた。他の数人もそれに倣った。

「……水死体が見つかったんだよ」

「えっ？」

「水死体だよ。水死体。首に縄が巻かれていてよ。縄の片方には本を束ねていたってんだから、気味が悪いっいたらありやしない」

肺のあたりがピクリと動いた。昨晚、河川敷で釣りをしていた人に発見されていた。部筑は顎に手を置いてから、

「つまり、束ねていた本の重量を使って殺害されたってことですか？」と、冷静だった。

「さあな。詳しくは知らねえんだ」

店主の話では、発見された場所の水域は数メートルではきかないとのことだ。水底に束ねていた本が置かれていて、浮かんできたであろう水死体は、その重量でエビぞっていたらしい。

「充分詳しい情報かと思いますが？」

あから様に探るような目を向ける部筑はきつと疑っているのだろう。店主か、若しくはここに集まっている人達全員を。

「急に神奈川県警の人が来るものだからな。教えてもらったんだよ。知っている情報があつたら教えてほしいなんて言うもんだから、あれはたまげた」

昨晚、警察が商店街を巡回していたのはそのためだったのか。僕なりの点と線が繋がった。

「聞いてくるってことは、水死体の身元が判明しているんですね？」

店主は首を傾げた。僕も部筑の聞こうとしている意図がさっぱりわからなかった。それを見越していたのか、部筑はつづけた。

「昨晚起こった事件だというのに、商店街で聞き込みをしている。

阿武隈川の下流なら、周辺から聞き込みを開始していくのが普通でしょう？」

美佐江はここから阿武隈川の下流まで五キロぐらい離れていると補足した。

「いや、身元は聞いていないな。この川と合流しているから、捜査は上流へと辿ってきたんだろ」

「でも、その川か、さらに上流のところから人が流されてくるのは、どうしても考えづらいです」

「そうね。合流した場所だったら深さもあるし、流れも速いけど、その川なら子供だって流されそうにない」

美佐江の大きな瞳は店主をとらえた。

「あの流れと水嵩で人が流されるのは無理があるかな……」

どうも腑に落ちなかった。神奈川県警が捜査協力を依頼してきたとはいえ、一般人にそこまで詳細にしゃべるのだろうか。

「本当のことをしゃべってください」

部筑が力強く言うのと、一同は黙り込んだ。まるで口合わせをしていたかのようにもあつた。

魚屋を営んでいる、髪の毛をピカピカになるまで剃ったおじさんが威勢のいい声で客引きをする声が聞こえてきた。

美佐江は首を百八十度にふつた。

「ねえ、五郎さんは？　ちよつと用事があるの」

「五郎さんは昨晚釣りに行ってから……あつ」

厚化粧で酒焼けした声おばさんは慌てて自らの口を塞いだが、遅かった。

「何か隠していますね？」

「なんで君たちに詮索されなくてはいけないんだ？　え？」

「ごめんなさい」

店主が声を荒げたのを、美佐江が弱々しい声で謝った。すると、店主は後頭部を掻いた。

「いや……参ったな。その……美佐江ちゃんに言っただんじゃねえんだ」

「実は私の本が盗まれていたんです」

「そこのかい？」

と言つて、店主は『密造書展』を指さした。

美佐江は数冊の本が川に捨てられていたことも含め包み隠さずしゃべった。驚いている顔を伺いながらも犯人に心あたりがないかを質問した。

「もしや」

汚れが目立つ紺色の帽子を被ったおじさんが口を開いた。

「どうしたんだい、ともさん？」

「先日な、泥棒が入ったかと思つて連絡したんだよ。前日には開いてなかった二階の窓が開いてて。そのときは連絡先の書かれていた張り紙があつてな。ええと……」

ともさんは、なかなか出てこない記憶をごまかすように顎へ手を置いた。

「部筑という名前ではありませんでしたか？」

「そうそう、確かそんな名前だったような気がするな。電話に出たのが美佐江ちゃんじゃなかったから、びっくりしたよ」

まあ、張り紙の連絡先に見知らぬ男が出たのだからわからなくもない。対応の悪さに、電車内で散々愚痴られていたのはつらかったけど。

「部筑は俺です」

美佐江の家賃を受け取るはずだった五郎さんは、仕事後にふらりと釣りに出かける趣味を持っている。と言つたのは、ともさんだった。帽子のつばを後ろに傾け、咳払いをした。

「第一発見者は五郎さんだった」

そこで店主にバトンタッチした。朝の六時までやっている『モダン酒場』、明朝の午前一時頃にやってきた五郎さんの様子はいつもと違つたらしい。憔悴していて、心ここにあらずの状態だった。

五郎さんは川で釣った魚をこの店に持ってきて調理してもらった日もあったが、その日は釣りに行つていたと言いながら収穫はゼロだった。ただ、釣れない日の方が多く、いちいち気にする人でもなか

つたから、別の悩みがあつたのだらうと思つていた。

五郎さんは相手に分らない程度に何やら呟き、ひらすら日本酒を飲んでいた。徳利を持つ手が震えていて、その飲むペースを見兼ねた店主は止めに入つた。

「世の中不景気だろ？ 家賃の滞納者で頭を悩ませていたんだと思つていたんだが」

聞いた美佐江が、顔を強張らせたのを見逃さなかった。

「五郎さんがかい？」

口を滑らせたおばさんが入りこんできた。

「それはない、ない。家賃の滞納者には怒鳴り込みにいく人だよ。私なんて、一ヶ月滞納しただけで大変だったんだよ」

どうやら、商店街でスナックを営んでいるママらしい。ついでに、宣伝を掛けてきた。

「あんた達も今度遊びにおいで」

宣伝乙という言葉をぐつと堪えたら、店の名前に連絡先が書いてあるマツチを渡された。僕は曖昧に応えた。

「まあ、そうだな。んで、呂律が回らなくなってきた状態で、言いだしたんだよ。人が川に浮いているところを見たつてな。もう、泣きだしそうだったな。俺は人が流されていたのかつて聞いたよ。そしたら五郎さんは警察へ連絡した。ここの住所は俺が教えたんだけどな」

「直ぐに通報しなかったんですね？」

「怖かつたんだろ？ 信じたくなかつたのかもしれないよ」

「五郎さんはいつごろ戻ってくるかわかる？」

「さあ、どうだろうね。わかんねえや」

「じゃあ、戻ってきたら連絡するよう伝えて。連絡先は知っているでしょ？」

「わかつたけどよ、美佐江ちゃんは何で五郎さんに用があるんだい？」

「家賃の相談なの。三ヶ月分滞納しているから、早く払いたいの」

美佐江の切羽詰まった様子に、店主はわかったから落ちつきなつてと宥めた。

「五郎さんは美佐江ちゃんには甘いからね」

そう言ったスナックのママは、二人のやりとりを目を背ける。嫉妬の色を帯びていた。

商店街の人達と別れてから、即座に訊いた。

「さっきの水死体は本に書かれてた？」

美佐江は首を横に降った。

「次は丁村で殺人が起こると思っていたから……予想外だった」

「じゃあ、『ブビリオフィリア』通りに犯行をしている者とは別に、殺人事件を犯している人間がいるのかな？」

「まだ他殺と決まっているわけじゃないし」

部筑の言い分も一理ある。殺人事件はごまんと起こっている昨今、いくら近場で起こった事件とはいえ、すべてが『ブビリオフィリア』通りに動いているとは限らない。むしろ万引き犯を狙った殺人事件に便乗した者がいた、と考えるのが自然なのかもしれない。二つの事件とは殺害方法が明らかに異なっているし。

「それに、調べたいことがあるんだ」

部筑は美佐江の顔を見た。

「流された本ね？」

「ああ、これから川を辿っていかないか？」

「いいけどさ。水に浸かつちゃった本は、乾かしてもダメでしょ」

「流された本を見つけたところで、意味があるのかな」

本自体を回収しようとは思っていない。と、部筑は素っ気なかった。

「事件の解決と盗んだ人を捕まえれば許してあげるんだから、これからのことを考えよう」

美佐江に賛成だった。いくら警察より有利な点を持っているとはいえ、事件が本の通りに動いてくれるとは思えない。そもそも、単

なる偶然の一致を疑っていた。

「ならまず、被害者の首に巻きつけられていた縄と本を手に入れる方法を考えよう」

「もつと難しくないか？」

「難しいけどやらなくちゃな。美佐江の書斎から投げ出された本が殺人に使われている可能性があるから」

「なぜに、そういう発想になるかな？」

「協力するわ」

美佐江は演技染みた口調で語り始めた。『ブビリオフィリア』に描かれている犯人は、タイトル通り病的な程の書物愛好家らしい。四方の壁をすべて本棚で埋め尽くしている書斎は知り合いや家族さえ立ち入ることは出来なかった。本の貸し借りはもつてのほかであり、掃除のために本を移動した日には怒り狂ったというエピソードもあった。

裏を返せば、犯人が怒り狂った姿を知り、誰も立ち入ろうともしなかったのだ。

「変わってるな」正直、怖い。とても友達にはなれそうになかった。

「俺はなんとなくその気持ち、わかるな」

「他人の本を平気で舐められる部筑が、わかるわけないだろ」

部筑はチツチツチツと音を立てて舌を鳴らし、人差し指でメトロノームの動きを再現した。

「書籍ソムリエになるには、誰よりも本を愛していないと出来ないのさ」

そう気取っている。本を愛すも何もない。読んだこともないタイトルや、会ったこともない作者の名を言い当てるのは、自己満足にしか思えないのだから。

「五十回ぐらい聞いたかな。で、本の犯人と美佐江を漁った犯人は、何か関係がありそうなの？」

「うん、わたしの本を捨てた憎き犯人が、殺人を犯したかもしれないってことよ」

「違うんじゃないか？」と部筑。

「なぜ？」

「書物愛好家なら、いくら他人の本だって粗末にしないだろ」

「ご名答。わたしの本を捨てた憎き犯人が殺されたかもしれないって考えた方が利口かもね」美佐江はあっけなく、意見を軌道修正した。

「うーん、なんとなくは」

僕は首を傾げた。

「二人は呑気でいいな。俺にはヤバい匂いがプンプンする」

「それは、今始まったことじゃないでしょ？」

「いや、だから聞いてくれ」

美佐江の書斎から無くなったのは本だけじゃない。縄の束ごとなくなっている。水死体が自殺したのか、他殺なのかはまず置いておくとして、もしその二つが使われていたのなら、俺が容疑者になるというのが部筑の言い分だった。

「そうか！ もしそうだったとしたら、縄に残っている指紋でばれちゃうのか——でも、水に浸かつちゃった指紋って、採取できるのかな？」

「さあ」

「採取はできないんじゃない？」僕の問いに、美佐江は曖昧だが答えた。

「どっちでも関係ない。もう一度言うぞ。縄の束ごと無くなっているんだ。俺はその束にこれでもかつてぐらいに触れた。それで、水死体が発見された場所の近くに、縄の束が置かれていたらどうなるか？」

「部筑が容疑者になる」

「わかってもらえたようだな。ただ、物的証拠になりそうなのはもう一つある。美佐江に頼まれて行った古書店は？」

「『限界文芸店』でしょ。わたしは常連客なんだからね」

と、購入して一度も読まれずになくなってしまった事实に、嫌味

を込めた。

「はい、姫様、すいませんでした」

大袈裟に謝った。

「あそこの店主とは、美佐江の使いで来ましたって言うと、人が変わったようになり、丁寧に対応してくれた。そのおかげで、二時間ぐらい話しこんだよ。たぶん俺の顔も憶えていると思う。しかも、あの本には『限界文芸店』が販売しているという刻印がされているんだ。それは水につかっても消えないと思う。もし殺人か自殺にかわれているのならば、警察は『限界文芸店』の刻印に目を付けるだろう」

「捜査が進みやすいつてことが。哀れだ」

「捕まったら、一度ぐらいは面会に行つてあげるからね」

美佐江は泣きまねをした。

部筑は証拠が残つていそうな現場に顔を出すのはまずいからと慎重になり、第二の事件があつた新横浜に向かった。僕と美佐江は商店街の川沿いを下つて行き、それと同時に五郎さんからの連絡を待っていた。

「ここまでくると、本が沈んでいるかなんてわからない」

阿武隈川へと合流する地点にある橋の上で、美佐江がそう言った。それまでに何冊かの本は見つかったものの、苦勞して拾い上げると予想通り本は見る影もなくなつてしまつたものばかりで、乾かしても意味がなさそうだった。

「川も濁っているしね」

僕は河川敷を歩いた。橋の下で隠れるように煙草を吸っている不良がたむろし、鋭い視線を投げてきたり、ランニングをしているおじさんが追い越していった。

美佐江は河川敷の歩道を隔てた向こう岸にあるところの、川べりの上にある教習所を背伸びして見やった。河川敷の歩道と川の間には伸び放題の草木が茂っていて、彼女の身長では、そうしないとはっ

きり見えないからだ。車とバイクは互いに道を譲り合い、限られた道路を徐行している。その教習所の敷地から川までの距離はわずかだった。つまり、敷地のすぐ下は川に繋がっていて、こちらの河川敷にある歩道もなく、人が歩けるスペースもない。

「これって意味あるのかな？」

「わからないけど、部筑が捕まったらやばいし」

「けっこう友達想いなんだね」

笑顔を向けてきた美佐江は、僕から目を離さなかった。

「なんだよ、急に？」

「信二って、他人に影響されやすいでしょ？」

「まあ、そうかもしれないかな」

と、曖昧に言った。凶星なので、否定するのも無理があったからだ。

「いつもブックの後をおっている感じがする」

「それって、金魚のフン。あいつの真似しようと思っても、出来ないし。結局僕は僕だと思っただけだな」

「でも、なんだかんだで、事件捜査に協力してくれているでしょ？」

—— やつと得た親友を失いたくないから。

本心では思っただけでも、なかなか言い出せない。

「興味があったからかな。誰にでも協力するわけじゃないからな」

「ありがとう」

美佐江はしつとりした雰囲気醸し出していた。

歩んできた河川敷の歩道は、目に見える範囲で途切れようとしていた。そこは阿武隈川の下流にあたり、さらに先は港へと繋がっている。川幅は末広がりになっていて、捜査員と思われる紺色の制服に帽子を被った男四人は、夕焼けに照らされながら、黙々と作業をしていた。そのうち二人は捜査の邪魔になるから鎌で刈っているのだろう、現場と思われる地点を中心に、伸び放題だった草木が途切れていた。

僕達は散歩がてらに立ち入った通行人を装い、現場に近づいた。すると、一人の捜査員らしき男が駆け寄ってきた。

「すいませんが、あちらから回り道をお願いします」

男は川べりの上にある住宅街の道路を指さした。

「あ、はい。何かあったんですか」

「ええ、ちょっとした事件がありました」

事件、と聞いて、はったりをしてみようと思った。

「事件ですか？　もしかして、噂の殺人事件？」

「うそ、あの噂って本当だったの？」

美佐江は口を手を当てた。さり気なく、地元民をアピールする。

「知っていましたか。昨晚、その川で水死体が発見されたんです。殺人事件の線で捜査しているところなので、一般の方は立ち入らないようにしてもらっています」

「どうして殺人事件だとわかったんですか？」

興味ある野次馬なら、訊いても可笑しくはない内容だろう。

「はい、状況から判断しました」

「被害者の身元はわかったんですか？」

「申し訳ありませんが、それ以上は言えないんです。事件が判明次第、新聞かテレビで報道されると思いますので、そちらで確認してください」

「わかりました。捜査がんばってください」

僕達はあまり執着すると怪しまれると考え、その場を立ち去った。川べりを登って振り返った。捜査員が鉛筆大くらいになっている。辺りを見回すと、点在した街灯も設えてある。それにより、夜になっても多少の明かりはありそうだ。

「やっぱり、他殺だったんだ」

「決め手があったんだろうね」

「あの分だと、縄が残っていたとしても、回収されているよね？」
「間違いなく」

部筑には悪いが、警察から本や縄を回収することなんて、僕が将

来総理大臣になることぐらい難しいと想う。また他殺と断定しているという報告を、午後五時頃、待ち合わせの駅で部筑にした。彼は最初から諦めていたかのような口調である。そして、

「もう、俺達で捕まえるしか方法はないな」

その声は、聞こえて来る電車の音と重なった。

彼が得た情報と言えば、新横浜の現場を観察し、あのロケーションでどうやったら殺人が成立するのか不思議でたまらないという、僕の印象と全く変わらないものだった。

改札口を通った辺りで、書齋が何ものかに荒らされたことと、阿武隈川の事件は父親に話さないでくれと、美佐江は懇願してきた。

「余計な心配をかけたくないの」

僕と部筑はそうするつもりはなかったたので、即座に納得した。

E・著者の行方

意外なことは重なった。

美佐江の口から父親である石崎義男は、横浜にある支店に勤務していた。駅周辺の住所から見積もって、第一の犠牲者が出た場所と目と鼻の先の場所だ。彼は仕事であつても、美佐江の電話に応じ、就業時間が終わる午後五時半、会う約束をしてくれた。

横浜行きの電車は地下へ潜った。電波が届かなくなったのだろう、隣に座っている美佐江は携帯電話をパカんと閉じた。

「就職先近くで第二の犠牲者が出たから、美佐江の父さんは他人事と思えないな」

昨晚、連絡があつた。面接を受けた企業の人事部から内定をもらつてうれしいはずなのに、どことなく気分は冴えなかった。部筑は取っ手に背を預け、横開きのドアに自分の顔を映し出している。

「内定出たんだ。おめでとう」ちよつとわざとらしい。

「祝ってくれる？」

「うん。事件が解決したらね」

「言うと思つた」

地上へと登つていき、後ろを歩いている部筑を確認する。人口の多さが日本一の市だけあつて、平日の夕方なのに人があふれんばかりだ。

南口を歩いて五分程度でオフィス街が開けている。若者をターゲットにした店と混在した感じでもあり、サラリーマンはどこことなく窮屈そうだ。

「あのビルね」

八階建ての広々とした建物を指さした。美佐江と比較しても見劣りしない受付嬢に話をし、入口の脇にある外来客用の打ち合わせブースで、並んで座った。

ブースに入ってきたのは、狭い額で血色の良い中年男性だ。細い

顎の輪郭や筋の通った鼻が、どことなく美佐江に似ている。中年男性は会釈をしてきた。

「どうも、はじめまして」

彼は胸ポケットから、名刺を取り出した。株式会社Dタント、技術部の部長、石崎義男とある。僕達は名前の自己紹介で応じた。

「あなたが部筑さんでしたか。娘から話は聞いておりました」

丁寧な義男に対してぶっきら棒な部筑だった。

「お忙しいところ、すみません」

気まずい雰囲気にならないよう、僕は下手に出た。

「気にしないでください。美佐江の友達とあれば、いつでもウェルカムです」

半笑いで応じる。義男の瞳の横に添えられている笑い皺がなびいた。時間に追われていても、決して顔には出さないのだろう。偉そうな態度を取られてしまったらどう対処しようか迷っていたので、彼の人柄を見て安堵した。

部筑は辺りを見渡してから、単刀直入に尋ねた。

「実は『ブビリオフィリア』について聞きたいんです」

義男は声を出して笑った。

「参りましたよ。私がその話をしたら、美佐江が興味を持つものだから。言い出したら聞かない性格なもので」

部筑は深く頷き、美佐江は頬を膨らました。

「部筑さん達も巻き込まれたのでは？」

「捜査協力してもらっているの」

「同意してもらっているのか？」

「もちろん。乗り気なんだから。ね？」

と、僕達の顔色を伺ってきた。「はい。微力だとは思いますが」

義男は姿勢を正した。

『ブビリオフィリア』に書かれていた殺人事件が現実として行われている。初めに目をつけたのは義男であり、美佐江の話と比べてみても、差異はなかった。

「殺害方法については、本の中には書かれていないんです。ですが日時と場所は書かれている内容とまったく同じです」

「第一がここ横浜、第二が新横浜ですね？」

「ええ。例の事件は、会社内でもちよつとした話題になっています。日中人の流れがあるこの辺りで、未だに目撃証言がないのですから、犯人はかなりの用意周到であると考えられます」

「承知しております」

「娘を危険な目にあわすのは、父親としてどうかと思われるでしょう？」

素直に肯定しづらい。それを察したのか、美佐江が面倒くさそうにぼやいた。

「わたしだって何度も反対はされたけどね」

当然だ。と注意した。僕もそう思う。

「ですが、お二人がついていれば、安心できます」

なんだか、過大評価されているようで、足元が落ち着かなかった。義男はつづける。

「『ブビリオフィリア』では、殺される人間が決まっています。既を起こってしまった第一の事件が大学生の男性、第二の事件が五十代の会社員の男性。そしてこれから起こるであろう、T村では四十代の会社員の男性です。あなた達はそれに該当しない。だから、美佐江が捜査するのも承諾したのですよ」

さらりと言つてのけたが、良く考えればすごい理由だ。

「出来るだけ、協力するつもりです」部筑は断言した。

ただ、物語上の内容と実際に起こった事件が酷似しているとはいえ、義男はなぜ『ブビリオフィリア』をそこまで信じ切っているのだろうか？ 僕はゆっくり聞き出していこうと思った。

「わかりました。では、お話ししましょう」

ガラス戸の向こうに通行人が歩いている。仕事から解放された清々しい表情をしている。ところが、こちら側が非現実な側面に立っているのに、向こう側が非現実を歩いているようだ。

「私の古い友人が『ブビリオフィリア』を発行したのは、十九年前になります。全部で十冊。作者以外の人の手に渡ったのが二部のみでした。一冊は丁村の左近字図書館です。もう一冊は私の手元にありました」

『ブビリオフィリア』が手元にないから、義男は過去形で語っていた。すかさず部筑は、行方を訊いた。

「四ヶ月ぐらい前、友人がかえしてほしいと申し出てきましたね。そのとき、今の話しも聞いたんですよ」

「それで手元にはないんですね？」

「ええ」

「では、カバーだけ持っていたのは、どうしてでしょうか？」

部筑が訊いた――カバー？

『ブビリオフィリア』の本カバーは手元にあるらしく、丁度返そうとしたときに置き場を失念していたらしい。義男の古い友人は、カバーはいらないから直ぐにでも返してほしいと懇願してきいたのだ。

「その人には、中身が大事だったんでしょうね？」

「そうでしょうね。とても慌てている様子でしたから」

「慌てていたのは、なぜだと思いますか？」

「あまり現実的ではないと思いますが……友人は何らかの形でこうなることを予知していたのかもしれませんが。殺人事件の道具となる前に、自ら回収しようと焦っていたのではないかと」

小説、『ブビリオフィリア』は近未来を舞台にした内容であり、本が人を殺せるようになるには、テクノロジーが発展した十九年後が現実的であると作者の意図があった。それが今年の年月になっているというのだ。「半自伝的小説になるだろう」という後書きが蘇ってくる。

本が人を殺したのであれば完全犯罪になる。

生命を持たない物体が、罪に問われたなんて聞いたことがない。せいぜい、品質改良して、注意を促すぐらいだ。

それを再現しようとした場合、犯人が直接手を下さずとも、本が人を殺したと見せかけるテクノロジーが必要だ。殺害方法の詳細が書かれていないのは言うまでもないが、実際は難しいと義男は補足した。本の中に爆弾が仕掛けられていて、開いた瞬間に爆発するなら別だが、当然、人工的な細工が必要になってくる。

犯人は殺害方法に拘りはなく、殺害自体に意味があつたのだと結論つけていた。

ならば、『ブビリオフィリア』を知り尽くしている作者本人が犯人で決定じゃないかと考えられる。

「どうやって見つけたんですか？」

その話を広げてどうするんだよ。部筑の質問に突っ込みを入れたくなった。

「後になつてわかつたのですが、出張で留守にしていた時に、家内が私の書斎を掃除していて、本棚の裏にあつたのを見つけたらしいんです。それを美佐江がこっそり持ち出して、用が済んだら書斎の机の上に置いていたのですけどね」

「なるほど」

「やあ、驚きましたよ」

作者が不明だつた『ブビリオフィリア』、部筑は書籍ソムリエの能力を駆使して、カバーのみで小園猛を言い当てた。こそこのたけるそれはつい先日、美佐江が部筑に相談したきっかけでもある。だから義男は部筑のことを知っていたのだ。

まあ、『ブビリオフィリア』のカバーを、部筑が舐めたことは話していないのだろう。義男がつづけた。

「カバーにはその名前の記載はありませんでしたし、娘にも教えていなかったんですから。どこかの探偵に調査依頼したのかと思っていました」

「それで、カバーだけはまだかえしていないのですね？」

「ええ、見つけたときは遅かつたのです」

「遅かつた——と言いますと？」

義男は、テーブルに両手を置き、前のめりになった。

「実際、かえそうとは思っていたので、連絡したんです。しかし、電話に出たのは神奈川県警の方でした。友人の携帯電話じゃないのかと訊いたら、相手は否定しませんでした」

平塚に住所がある小園猛は、義男の実家からもそう離れてはいない。最初、神奈川県警が電話に出たのは、何らかの形で逮捕されただと考えていたらしい。

「ただ、罪を犯す人間ではないので、直ぐに考えを改めました。友人の両親は他界していますし」

その先が言いづらそうだった。美佐江が先を急かす。

「……若くして奥さんを亡くされて、子供は家を出ている。そう思い、嫌な予感がしてきました。それで状況を突き詰めようとして、古くからの付き合いがあったことを話し、詳しい話を聞かせてくれとおっしゃいました」

「それは、どうしてですか？」

「三ヶ月前、私の友人、小園猛は自殺しました」

義男の眼は、僕達だけの秘密であり、それを約束してくれと言わんばかりの、強い光が灯っていた。そして閉じられる。二〇〇九年の十月二十三日に、小園猛は死んでいた。

「非情に残念です」

僕の予測は外れた。『ブビリオフィリア』の作者本人が犯人ではない。

E 1・著者の行方は……

小園猛が自殺した場所、それが丁村の低雲丘の頂上であると聞いたのは、Dタントの社員が顧客との打ち合わせのため近くのブースに入ってきて、僕達が会議室に移動した後だった。純白の壁に包まれた六畳程の空間が、無機質な空間となってしまったかのように思えた。

あの場所は部筑に驚かされたところ。嘘だと知るまでここで死体が埋まっているかもしれないなんてあらぬ想像をしていたのは、当たらずとも遠からずというのか。

「先日、俺達も低雲丘に行っただですよ。あそこで自殺する方法と言えば限れています。首をつって死ぬのは無理です」

「そうですね。私も現場に行きましたので、わかります」

「身体に害を及ぼす薬品を飲んだとか？」

「いえ、小園は自ら石油をかぶり、『ブビリオフィリア』と共に燃えたんです」

剥き出しになっている柔らかそうな土に、ふりかけたような灰、あれは焼死体の残骸だったのか。そして、図書館で調べた低雲丘での儀式、僕はそれを言った。

「残っていた灰が燃えたときのものであるかはわかりませんが、焚書の歴史は『ブビリオフィリア』に書かれていました。本を粗末に扱っている者達を浮き彫りにしたかったのでしょう。本を葬り去っている描写は、実に詳細まで書かれていました。殺人事件の犯人は最終的に持っていた本から自然発火して死んでしまうのですが」

本が人を殺したような事件だが、小説内でも結局犯人は存在していたのだ。僕は少しがっかりさせられた。

「本から自然発火した？」

「そう書かれていました。ただ『ブビリオフィリア』の犯人は自殺するつもりはなかったなので、自殺した小園が物語を忠実に再現しよ

うとしたわけではありませんね」

「犯人の年齢とか、性別は書かれていなかったんですか？」

「計画を決意した時点では今年で二十二と。誕生日までは書かれていませんでしたから、二十一歳か二十二歳でしょう。丁度、小園が書き始めるあたりの歳ですね。性別、は書かれていませんでした」
「なるほど。そうすると、同じような末路を辿ったにしても、今起こっている事件と小園猛さんを結び付けるのは難しいか。自殺したのが三ヶ月前だしな」

部筑は溜息をついた。

「横浜で起こった事件が三週間前、どう考えても無理ね」

「第一に、小園さんはなぜ自殺してしまったのですかね？」

背中を反らせ、腕を組んだ義男は小さく唸った。

「わかりませんね。悩みを打ち明け合っていたのは大学生のとき以来、殆どありませんでしたし、あの本を返却したときだって数年ぶりの再会でしたから」

「最近になって、環境が変わったとかありませんかね？」

「うーん、小園は出版社に勤めていましたが、その会社が数年前に倒産したのを新聞で読んだぐらいでしょうか。私と会ったときは、既に別の会社に再就職したって聞いていましたから」

と口を噤んだ義男がその調子であり、美佐江と部筑も流石に自殺した理由の推測まではしなかった。

静けさを断ち切るように、会議室のドアがノックされた。三十代ぐらいの男が義男を呼び出しにきたのだ。義男は後ではダメかと訊き、男は環境推進部の関係者が集まっているので難しいと困っている様子だった。

「すいません。ちょっと来週の出張のことで打ち合わせしなければならなくなりました」

「いいいえ、こちらこそお忙しい中、急に押し掛けてしまい、申し訳ありませんでした」

僕は就職活動で培った振る舞いを、存分に発揮させた。その姿を

部筑と美佐江に見せつけてやりたかったという意図もある。

「多分、二時間ぐらいで終わると思うんですが」

「いえ、本日は失礼します。日を改めますので、またお願いします」
出口まで見送られてから、義男の後姿を見送った。

僕達はそれぞれの岐路を辿るはずだったのだが、結局、美佐江の部屋に泊まることになった。駅を降りた頃、美佐江はこう言った。

「ねえ、一人だと心細いの……」

静まりかえる。一瞬であっても、か弱き乙女だと感じて動けなくなった僕は、『今晚は俺がついているから大丈夫』と部筑がくさいセリフを吐いたことで目を覚まし、二人きりにさせるのが心配になったのだ。

「疲れているのなら、帰ってもいいんだぞ」

一人好きであることを知って、言っているのだろう。それにしても、『信二も泊っていつてよ』の言葉が美佐江から発せられなかったのが悲しい。

「いや、三人で行動していた方が安全だからな」
「いろんな意味でだ。」

美佐江の部屋に漂っている匂いが馴染んできていると、自分の衣服に染み込んでいる匂いを嗅いで思ったとき、父親の話をはじめた話の節々に愛情を感じられていた。彼女の年頃で父親を敬愛している子は珍しい。ただ、僕が対面した義男の印象では、清潔感、立ち振る舞いからしてそれも当然なんだと考えられた。

しゃべり疲れた美佐江は一方的に部屋の電灯を消し、寝息を立て始めるのに時間はかからなかった。

「美佐江は年上が好きらしいぞ」

耳打ちしてきた。一つ上という自分の年齢を、久しぶりに感謝した。

「なあ、美佐江って好きな人いるのかな？」

僕は声を潜めた。クッションを枕代わりにした部筑は、
「いるんじゃないの。本人に聞いてみれば」

他人事だ。実は知り合ってから美佐江の浮いた話を聞いたことがなかった。ただ、僕も同じなので声を大にできないのだが。

「男に興味はあるよな？」

どうしても、告白してきた男をあっけなく断る場面が浮かんでくる。少なくとも、その手の話を二つや三つは聞いていた。

「付き合っているや……」

部筑は眠りに入った。

次の日、五郎さんは『密造書展』に直接出向いてきた。まだ寝ている二人を残して入り口に姿を現すと、角刈りで、額に深い皺を刻ませている背の低い初老のおじさんが立っていた。

「あれ、美佐江ちゃんは留守なのかい？」

濁声で、所在なさ気に言う。彼の血の気が多い噂を聞いていたので、僕は緊張気味だった。

「いえ、今二階で寝ています。呼んできませんようか？」

「おう、そうだったか。いや、邪魔してしまったみたいだ」

彼は側頭部を掻いた。硬そうな髪がジヨリジヨリ音を立てる。

「誤解しないでください。上には男友達ももう一人いますんで、美佐江さんとはそういう関係ではないんですよ」

なんでこんなムキになっているのかと、早口でまくし立てた後に思った。

「ふーん、あの子はモテるからな」

「ですね」

「連絡くれて言われたもんだから。来たんだけどよ」

「五郎さんですか？」

彼は頷いた。

「話は聞いています。家賃の話があるとかで」

「ああ、なら起きてからでいいからよ」

身体を横に向けた五郎さんを制止させ、待っていてもらうよう伝えた。

結局二人を起こすのに数分かった。美佐江は起きてから化粧に取りかかったので、部筑と一緒に五郎さんの相手をした。

「そうかい。美佐江ちゃんの大学の友達か」

「はい、いつもお世話になっております」

部筑は僕の横で顔を擦っている。五郎さんは彼を、目を細めて睨んだ。

「許してやってください。彼の態度は悪気があるわけじゃないんです」

「おお。違うんだ。こうしてやらないとな、目が悪くてみえないんだ」

視力が0.1なのに、眼鏡は嫌いだからかけないんだと言う。

「じゃあ、今年で二十一か？」

「いえ、美佐江さんより学年は上で二十二歳です」

「おお、もう卒業か。いや、その年なら、貸している部屋を出ていく学生が多くてな。困っているんだよ」

五郎さんは微笑んだ。どこことなく愛嬌がある。すると後方から素早い足音がした。

「思ったよりも元気そうね」

美佐江はスウェットから、ロングコートにジーンズへと着替えていた。

「はは、商店街の連中から聞いたんだな？」

「皆、噂好きだからね」

「まっただ」

美佐江は福沢諭吉がプリントされた冊を十枚渡す——安い！滞納期間は三ヶ月だったはず。僕は商店街に住もうか本気で悩み始めた。ただ、美佐江には優しいという言葉も蘇ってきた。

確かに受け取ったと、ポケットにしまった五郎さんは僕達を見渡し、俺も青春時代に戻りてえな、そう羨望した。

「ねえ、水死体を発見したときのこと、詳しく教えて」

五郎さんは、もう警察と商店街の連中全員にしゃべった、なんて

冗談を言い豪快に笑った後、表情が引き締まった。

「いつものように仕事を終えて、まつつぐ釣りに出かけたんだよ。なかなか釣れなかったものだから、移動して阿武隈川を下って行つたわけよ。途中で気が変わってな、今日は釣りより散歩でもするかって思つて歩き続けていた。そしたら、川に変なものが浮いていたものだから気になったわけだ」

「河川敷の歩道から発見したの？」

「そうだ。夜の内に発見したんだよ」

「警察は他殺つて決めているみたいだけど、何でなの？」

「へっ、もう公表しているのか？　なんだよ、言わないでくれって念を押されたばかりなのに。沢村のやろう、しょうがねえな」

沢村とは取り調べをした神奈川県警の刑事らしい。五郎さんは自分のことをまったくしゃべらない彼が、好きになれない男だと形容した。

「まあ、他殺で捜査してねえと、俺もあんなに長く取り調べはされてねえか——実はよ。水死体のほうい解剖つう名だったかな——まあ解剖をしたわけだ。そしたら、首の部分になんだか知らねえが、自殺ではつかない傷があつたってよ」

殺害されそうになって、抵抗した痕跡でもあつたのだろう。

「それともうひとつ。肺に入り込んだ水の量で、殺してから沈めたってわかるからな」

五郎さんは怒っているわけでもなく、舌うちした。

「んで、ちよつと離れたところに縄が置いてあつた。刃物がないと切れねえ縄だつて」

部筑は急に咳き込んだ。咳をして、余計に喉がかさついて、さらに大きな咳が出てしまっている様子だ。

「大丈夫かい？　この時期は風邪がはやっているからな。うつさないでくれよ」

「いえ、昨日カラオケで歌い過ぎて、喉を痛めているんです。気にしないでつづけてください」

彼の嘘はスルーした。

「現場で刃物は見付からねえって話だし、自殺するのにわざわざ縄まで持ってこないだろうから疑っていたんだろうな。置いてあった縄に指紋が残っていたんだ。しかもな、良く聞いておけよ——」
言葉を切った。言われなくても、彼の煙草の匂いが混じった口臭が気にならなかつたぐらい聞きいつている。

「その縄から被害者の指紋は検出されず、別の人間の指紋が検出された」

五郎さんは話をしている間、次第に熱が入ってきたのか、語尾を強調した。

「なっ、他殺の決め手になったわけよ」五郎さんはウインクした。

「被害者の身元は聞いていないの？」

「おお、聞いているよ。田中満高たなかみちたかだったかな、二十八歳で無職の男性。かなり長い髪の毛が水面に浮かんでいたんで、女かと思ったんだけどな」

唇の端には、唾が溜まっていた。

「世知辛いよな。隣町で一人暮らしをしていたが、ちょっと前に住所不定になったみたいだな。ホームレスってやつか。髪の毛を刈る金もなかつたに違いねえ」

「田中さんか。殺される前の行動は聞いていない？」

「それはわからないな。今頃必至になつて捜査しているんじゃないか」

警察は残された指紋を手掛かりに、捜査を進めているらしい。部筑危うし、アリの証言はしてやるぞ、僕は思った。

「何もわからずか……」

美佐江は腕を組み、怒っているふうにもとれる顔で言う。

「何かわかつたら連絡して。些細なことでもね」

「随分とこの事件に入れこんでいるな。美佐江ちゃん、刑事みたいだぞ。何かあったのかい？」

「私達も事件を捜査しているから——このことは誰にも言っちゃだ

めよ！ いい？」

「……おう」

美佐江の気迫に五郎さんは気圧されている。奥さんに怒鳴られて、委縮しているであろう家庭環境を想像するのは容易かった。

静かに立ち去った五郎さんを尻目に、

「捜査しているの、しゃべって良かったのか？」と部筑は目を細めた。五郎さんはここから見える不動産屋のテナントに入っていた。「うん、ちよつとまずかった。これから気を付ける。二人も、誰にも言わないでよ」

美佐江は念を押してくる。

「美佐江と五郎さんが口をすべらせなければ、ばれないんじゃない？」

「そつか。って馬鹿にしてない？」

「気のせい」

「全然そうには見えないんだけど。信二はどう思う？」
僕は空気になりたい。

F・狙われている者

週末の夕方、僕達は株式会社Dタントを訪れた。それまで、開いている時間に大学の講義を受けていた。卒業間際とはいえ流石にさぼりつつけることはできず、普通の大学生に戻ったり、離れたりした。もちろん、知り合いには事件捜査の話はしていない。ただ、近くで殺人事件が何件もあったのだから、その話題で盛り上がったいる学生は少なくなかった。

美人受付嬢は退社している以外にも、ロビーは静かだった。その分、近くの居酒屋が繁盛しているのだろう。打ち合わせにはもってこいの状況になっている。しかし、約束の時間を三十分遅れてやってきた義男が案内したのは会議室だった。丁寧に紙カップと飲み物まで用意されている。

「遅れてしまい、申し訳ありません。今日は思う存分時間がありますから」

ネクタイを緩め、ジャケットの前ボタンを外す。

「前回の続きですけど——」と部筑は前置きし、義男のその動作を見守った。

「『ブビリオフィリア』を読んでからでないと、話しにならないと思うんです。小園さんの家族に残っているか、聞いてみたりしましたか？」

「ええ。残念ながら、連絡が取れない状態でして」

例の、小園猛の携帯は神奈川県警が持っているし、実家の電話は使えなくなっているらしい。両親は他界していて、奥さんを若くして亡くされているのだから、当然と言えば当然だ。

「では、T村の図書館に行くしかないか？」

部筑は、T村がある方角でも見えているつもりなのか、遠くを見つめた。義男は部筑の意図として、ことが不明だといったふうに視線を天井に投げかける。

「今現在の話をしますと、丁村の図書館にも残っていないはずですよ」と言った。

「えっ？」

僕と部筑は、図書館の職員に貸出中だと訊いていた。

「彼と会ったとき、左近字図書館から万引きされた事実を、小園から聞いていますよ」

「何ですって！」

部筑が声を荒げた。すぐさま確認してみると意気込んだが、僕はそれを制した。左近字図書館の職員に横柄な態度で接する彼の姿が想像出来たからだ。

「ちよつと待つていてもらえますか？」

ポケットの中にくたびれ果てたパンフレットを取り出し、左近字図書館に連絡を入れた。午後六時、閉館時間は三十分過ぎている。

三回目の通話音が鳴り、加藤を呼び出してもらつと、帰り仕度をはじめているところだった。

『ああ……以前たずねてきた方ですね？』

加藤は忙しないのか、ひどく他人行儀だった。

「はい、『ブビリオフィリア』の貸出状況を聞きたくて、ご連絡しました」

『ご、ご丁寧に、ありがとうございます』

落ち着こうとして余計にしどろもどろになっている口調だ。『ご連絡ありがとうございます』と発音するまで二回も言い直した。

「貸出から一週間経っていますから、もう返却されていますよね？」

『……実は、まだなんです』

「期限が切れているのですか？ その人に連絡したんですか？」

『はい、連絡がつかないんですよ』

僕達がそこまで執着しているとは思ってもしなかったから、加藤は動揺しているのかもしれない。小さな子供を追い詰めている感覚があり、自己嫌悪になりそうだ。普通ならそこで諦めがつくのだろう。ところが、こちら諦めるわけにはいかなかった。

「連絡がつかないのは本当だとして、元々『ブビリオフィリア』は置いていないのではありませんか？」

電波が届かなくなったかのように、加藤の声がぴたりと止まった。僕は「もしもし、聞こえていますか？」を繰り返す。

「電波が悪いのかな？」液晶パネルに表示されている電波は二本、僕は立ち上がり、聞こえるように足音を立てて移動した。

『聞こえています——あの』

「よかった。公衆電話でかけ直そうとしたもので」

思いついた嘘をつく。会社内のどこかに公衆電話は設えてありそうだが、加藤が返答に詰まっているだけなのはわかっていなかったからだ。『すいません。知っていたのですが——どうしても言い出せなくなつてしまいました』

「万引きされていたんですね。それも随分前に」

『はい。随分前です』

努力して報われなかった物事を、諦めてしまったときのような口調で加藤は言う。

「いいんですよ。僕らも少々強引でしたし」

口調から状況を察しているのだろう、部筑は僕を睨んできた。それを心配そうに見守る美佐江親子がいる。

「でも、どうしてそれを隠す必要があったんですか？」

『……ちよつとここでは言いづらいので』

加藤は声を潜めてきた。少しの間待っていたら、遠くから加藤を呼ぶ声が聞こえてきた。

『帰宅したらご連絡しますので、宜しいでしょうか？』

「いえ、近々、またそちらへ伺うつもりですので、そのときにも聞かせてください」

左近字図書館に『ブビリオフィリア』がないのだとすれば、万引きを隠蔽していた理由について教えてもらうという優先順位は低い。そう判断していた。

「やはり、ありませんでした」

「クソ、あのおばさん、嘘ついていたのか」

部筑は怒りを噛み殺していた。すると、美佐江はフォローした。
「本を万引きされたんで、ありませんとは言えなかったんでしょ」

図書館員としてのプライドなのか、規則なのか。

「もう、どっちでもいいや」

「投げやりね」

「だって万引きされているのなら、そいつを見つけ出すなんて考えたら事件解決よりも面倒くさそうだしな。放っておこう」

頭の中は、ある考えが浮かんできて、支配された。部筑は『読んだ活字はいずれ空から雨のように降ってくる。賢い人が天気予報士で、間抜けなやつは靴を飛ばす小学生だ』と言ったことがあり、意味不明なものにも関わらず言究もしないで心ない返事をした憶えがあった。しかし、今は美佐江の言った『つぎの事件はT村で起こる』の言葉が本当に空から降ってきた気分だった。

「出版元に連絡しても、在庫はないんですね？」

「難しいでしょうね。発行してから随分経っていますし、処分されているでしょう」

義男が視線を落とすと、僕は美佐江の方を向いた。

「なあ、ちよつと前に言ったでしょ？ つぎの事件はT村で起こるってさ」

「犯人が『ブビリオフィリア』通りに動いてくれればね」

阿武隈川の下流で起こった水死体を懸念しているのだろつ。美佐江は自信なさ気になっている。

「もしそうなるのならば、図書館から『ブビリオフィリア』を万引きした人が危なくないか？」

「そうか。きつと狙われる」

殺人の動機を万引き犯としているのならば、ターゲットにはなりやすい。加藤か図書館の関係者に詳しく話してみれば、『ブビリオフィリア』を万引きした者の目星がつくのではないかを考えた。

「でも、随分前に万引きされたものだし——それに」

と言った美佐江は義男に視線を投げかけた。咳払いをした義男は、席を立ち、僕らに背を向けた。

「次に狙われているのは、私です」

F 1・狙われている理由

ひどく喉が渴き、水の入っている紙カップを持つ手が震えている。口を付けるだけでテーブルに置いた。

「本当なんですね？」部筑は念を押す。

「間違いありません」

抑揚がなかった。そして口を閉ざしてしまった。美佐江はわかっていただのに、改めてことの重大さを再確認しているような態度になっている。狙われている者を目の当たりにして、もう後戻り出来なくなっている気がした。

しばらくして、部筑が言った。

「わかるよう、説明して貰えませんか？」

「私は来週、T村に出張予定なのです。先日打ち合わせをしていたのも、そのためです」

次の殺人事件は今年の二月、詳しい日時までは書かれていないが、恐らく義男の滞在する来週末いっぱい、どの日かに狙われることになっていた。場所は低雲丘、殺害方法は本によって殺される。ただ、それだけでは納得できるはずもなく、僕らの反応を伺っていた義男は、どこから話すべきかを吟味している様子だった。

「もしかして、出張予定の場所は『？エコノミーテクノ』ではありませんか？」

「はい。ご存じでしたか？」

「ええ、憶測ですよ。以前訪問させてもらったとき、環境推進部の関係者の方が集まっていると聞いたので。それに『？エコノミーテクノ』はT村観光をしていたときに見ましたから——失礼ではありますが、あのような場所には似つかわしくないつて思いましたし、印象に残っていました」

「何でもご存じなんですね。弊社にほしいぐらいの人材ですよ」

「いえ、技術に関しては無知なので、厄介者を抱える羽目になりま

すよ」

部筑は自分の発言で笑い、義男を巻き込んだ。

「『？エコノミーテクノ』は弊社の子会社になります。主に製造をする工場となっています」

六年前に創立された会社だった。丁度、Dタントに環境推進部ができたことで、当時、義男は新規プロジェクトを立ち上げる際、義男は頭を悩ませていた。新規プロジェクトとは、要約すると開発の革新だった。その一環として、会社を立ち上げる話しもあった。

「奇しくも小園から借りていた『ブビリオフィリア』の内容からヒントを得たんです。会社の創立を提案したのも私になります」

「環境開発をするって聞きましたが？」

部筑は睨むような視線を送った。

「はい、弊社の製品を開発するために、T村の資源が必要と考えました。それが『ブビリオフィリア』に記されていたのです。後付けで調べてみたところ、日本中を探してみても、T村ほど適している場所はありませんでした——しかしながら、環境開発のコンセプトがあるにも関わらず、森林伐採による環境破壊をしているように思える。と、部筑さんの考えられているのでしょうか？」

「ええ」

「あの環境を目にして、良く勘違いをされるのです。しかし、環境破壊はしていません。弊社は刈り取った森林を製品に使うと同時に、新たな資源を生み出す装置も開発しているのです。いわば森林の成長を促すための装置です」

抽象的に表現しているのは、社内機密に触れないようにしているからなのかもしれない。僕は社内機密の重要性について、企業説明会で散々聞かされていた。

「『？エコノミーテクノ』で、その装置の実験も行っている？」

「はい。出張の目的は、その開発の監査になります。大まかな開発フローは、ここで設計を行い、T村の工場で製造を行います」

「で、出張と石崎さんが狙われていることとの繋がりは？」

「『ブビリオフィリア』に出て来る丁村での殺人事件、その被害者は限りなく私の経歴に似ているのです。いや、描写されている背格好も、仕草も、本名さえも同じですから、すべてを投影していますね。古い友人が書いた小説なのだから、私を投影した登場人物が出てきてもおかしくはないでしょう。ところが、私が辿っていく人生まで予言していたかのような結末になっていました」

予言……半自伝的な小説となるであろう。の後書きが連想される。今の話で、狙われると言い切れますかね？」

「また、最終的に明かされる犯人の、丁村への愛着は書籍と同等でした」

自然保護団体も真つ青になるほどのナチュラリストらしい。新たに参入してきた会社が環境破壊をしているのに強い恨みを持ち、その会社を創立させた発案者が殺される。殺人動機としては、ただ漠然と万引き犯が憎くて殺していく第一、第二の殺人よりも、よつほど現実味のあるものだった。

「その被害者こそが、私なのです。しかし、既に書かれている書物に環境破壊はしていませんと弁明しても意味はありません。犯人に直接訴えかけるしか方法はないのです……」

義男は握りこぶしを作り、皮膚が白くなるまで力を込めていた。

「被害者の金子大輔、城島博志も、同じように酷似しているものは書かれていましたか？」

「先程の話と重複しますが、彼らは場所と日時と職業、それに万引きをした者という共通点があります。裁かれる対象としては、不条理なものがあります。ただ、私を投影しているような、人物の細かい描写は省かれていました」

「小園さんは、執筆される前に断りは入っていたんですか？」

「ええ、彼が執筆するのに当たり、登場人物に使わせてもらうかもしれないという申し出は受けていましたよ。それに全国で流通される書籍ならともかく、自費出版本は十冊ぐらいしか出回らないと聞いているので、被害者になっても、犯罪者になっても、どう使って

くれてもかまわないと答えました。出来あがった原稿を読ませてもらって、感想も述べましたし、私が投影されている箇所は手直しなしでいい、そう承諾しました。あくまで物語上ですからね。かたく考えなかつたんですよ」

「小園さんを不幸にさせるような、何か恨みを買っていたってことはありませんか？」

義男はすぐに答えられず、頬に人指し指をめり込ませた。

「ない——とは言い切れませんが」

「あつたとしても、小園猛さんは自殺しているし。それは関係ないか」

部筑はつぶやいた。

「関係、大ありじゃない！」

声を荒げた美佐江はつぶけた。

「最初は簡単な口約束だったのかもしれないけど、今は『ブビリオフィリア』通りに殺人が行われているのよ。軽く思わないで」

「……すいません」

「おいおい、止めなさい」

義男は我が子に注意した。

「それに、小園猛さんは自殺してしまつたとしても、彼を受け継いでいる者がいるってことも考えてよね」

「彼を受け継いでいる者？」部筑の問いに、美佐江は頷いた。

「美佐江がこの事件を解決しようとしたのは、父親が狙われていること以外にもあつたのか？」

「うん、失踪したのは知り合いの話をしたでしょ——その子は小園猛の娘、小園由美子（ゆみこ）なの」

僕の胸板はピクリと動いた。動物学を好み、カメレオンの生体に興味を持っている女の子。

「なあ、写真とかないの？」

部筑が訊くと、美佐江はハンドバックを漁り、一枚の写真を取り出した。中央に折り目が走っていて、右下には、一年前の日付が記

載されている。一年前、成人式で二人一緒に取った写真であり、百六十センチの美佐江と同じ目線の高さだ。顔の輪郭は卵型で線の細い身体をしている。色白の肌で、切れ長の目、長い黒髪を後ろで束ねていた。顔のつくりがはっきりしている金髪的美佐江とは対照的だが、どこか守ってあげたくなってくる雰囲気があった。

義男と美佐江の話を統合すると、両親を失い、天涯孤独になった小園由美子だ。彼女が失踪したのは二ヶ月前、小園猛が自殺した一ヶ月後になる。それに、今年で二十二になる。性別の書かれていない犯人像にぴたりだ。彼女なら父の死で自殺を起こして殺人に走る可能性は充分にあると、美佐江は考えていた。しかし、彼女が理性を失うような子ではない。その葛藤があるようだった。

「確かに、小園猛さんを自殺に追いやった者は、交友関係だと考えるか。小説に出て来る人物が実在する人物だったとすればなおさらだ」

「でもさ、第一、第二の書籍を万引きした被害者は、小園猛さんと実際に繋がりはあったのかな？」

部筑に問うたつもりだったが、口を閉ざしていると義男が答えた。「小園は大学時代、私と話しあっている時にこんなことを言っていました。あれは、一緒に飲んでいたときです。日本の法律についての話題になり、『人様の物品を万引きする者達の実刑は軽すぎる。自分が裁く立場であるならば、もっと刑を重くするだろう』と。彼は出版社に就職するために努力していましたし、夢かなって、勤務もしていました。書籍の万引きが増え始めた頃だったので、許せなかったんでしょう」

「万引きでつぶれてしまう書店もありますからね」

「わたしも由美子から聞いていたよ。小さい頃から他人様に迷惑かけることは絶対するなって教育されてきたんだって」

「小園らしい」

義男はしんみりと相槌をうった。

「会社から帰ってきて、不機嫌になったり、八つ当たりするのは決

まっつて出版社が発行している本が万引きされたときだったらしいよ」
「……責任を感じていたんだろっな」

「だから、小園猛さんはミステリー小説として万引き犯への恨みを書き、それを受けついだ小園由美子さんが実際に殺人事件を起こしているのか。筋が通るな」

部筑は顎に手を置いた。

「盗まれた本は、小園猛さんが勤めていた出版社の発行しているものだったのかな？」

僕が言うと、部筑は着ているセーターを捲り、ズボンに挟んでいた文庫本を取り出した。第二の被害者が持っていた『どん底から億万長者への道』である。売り切れていたハードカバーに比べて百ペーじ近くも増えているらしい。僕達が阿武隈川を散策している間、新横浜の書店で購入してきたものだった。義男は手に取った。

「大手出版社のもですね。小園の勤めていた出版社ではありませんん」

「万引き犯で、場所、日程、職業があれば誰だっつてよかったのかな？」

義男はパラパラとページを捲っている。

「誰だっつてよかったんだろ？ ピンポイントで小園猛さんと繋がりのある本を万引した奴を狙っていたら、どれだけの確率になると思っっているんだよ」

「計算して答えを出したら天文学的な数値になりそうね」

美佐江は理系モードになっている。顔全体が輝いているようにみえた。

「だろ？ 今まで本通りに殺人が行われているだけでも、奇跡に近いぐらいだ。それに繋がりを求めているなら、少なくとも生きている間に殺人はできないっしょ」

「待つてください。繋がりが無い、とは言切れませんよ」

義男は捲っていたページを三分の二程度の場所で止めた。もし、ちゃんと読んでいたのならば、相当な速読スキルを持っていること

になる。

「■お金はどこにでも転がっているの項目に、捨ててある雑誌や書籍を発見したら、そのまま通り過ぎたらダメと書かれています。どんな本であれ拾い、初心者の上場している新古書店かネット通販で売るべき。そして上級者は起業して新古書店を作るか、ネット通販のシステムを作ってしまうべきだ」と

「はいはい、ハードカバーの方で読みましたよ。俺の美学では真似できないですね」

部筑は浅く座り、煙草を吸う真似をした。

「もう、ブック、ふざけないでよ」

「冗談だって。つまりは書籍のリサイクルによって、出版社の経営を圧迫しているってことですよね？」

「そうですね。小園の反感を買う理由になります」

「ただ、反感を買うような書籍が万引きされたとしてですよ。万引きした犯人を殺す動機になりますかね？」

「これを書いて有名になった著者を恨むべきでしょうね」

「ですよ」

部筑はその話を膨らませたくないのだろう。まだ動機よりも殺人方法に執着しているのかもしれない。「あの場所で殺人なんて出来るのかな」と呟いた。義男から本を渡してもらい、同じ箇所を読んだ。

——二百七十ページ目の項目だ。これは？ 被害者の傷と同じ数……

と、口に出そうとしたときだった。

義男の発言は部筑の意向もかき消すと共に、すべてを払拭させた。「本日の生放送番組でやっていたのですが、この本の著者は自宅に届いた手紙があつて、それは『脅迫状』だったと証言していましたよ」

「なんですって！」

出張の準備を終えた義男は、会社にあったTVを見ていたら約束の時間に遅れてしまったらしい。本日放送のことを、すっかり忘れ

ていた。

「新横浜のどここみに、場所を指定されていたようです。時間は殺人があった日、単身で来なければ、ゴーストライターを雇っていることをばらし、殺すと脅迫されていたようです。著者は事実無根だと証言していました。それまで警察に通報しなかったのは、良くあることだから、無視していれば何も起こらないと鷹をくくっていたらしいですね」

書籍ソムリエの部筑は、実はゴーストライターによって書かれたものだったら、本に印字された作者ではなく、ゴーストライターの名を言い当てることが出来るのだ。芸能人が書いた自伝なんかは、そのパターンが多く、読まないのに購入している姿を見かけたことが多々ある。

他には、しゃべっている内容を書籍化するにしても、しゃべっている人の名を言い当てるのではなく、しゃべっている内容を活字化する編集者の名を言い当てる。それらに関して、証明するには出版社の協力がいと不可能であり、あまり信ぴょう性はなかったが、部筑の前ではごまかしが効かないのだ。

『どん底から億万長者への道』を手にしていたのだから調べ済みだろうし、否定もしていないので、ちゃんと作者が書いたものなのだろう。

人気作家は大変だなとは思ったが、僕が『殺人予告』を受け取ったらたぶんパニックになる。携帯に入ってくる架空請求のメールだけで、二、三日眠れずに悩んだこともあるぐらいだからだ。

「俺は『どん底から億万長者への道』を売るためにやっていたとは思えませんがね。それが生放送で初めて告白するインパクトを狙っていたんじゃないですか」

義男はそうかもしれないと答える。わざわざ身を危険にしていまする行為といったら、テレビ番組の視聴率よりも、自分の著書売るために行ったと考えられる。

「それで、約束の場所にはいなかったのね」と、美佐江は眉を上

げた。

「そうだね。著者は今までメディアにいつさい顔を出さなかったし、出版された本にも顔写真を載せていなかったから、社内の人間が『脅迫状』を送りつけたのではないかと疑っているよ。それで指定された場所で本当に殺人があったのだから、驚いていたな」

「なるほど。本当に殺人があつて、黙つておけなくなつたんでしょうね」

「そうとも考えられますね」

「犯人は、呼び出してきたと思われる著者を被害者である城島博志と間違つて殺してしまったのかもしれないと？」

「ええ」

「待つてくださいよ。そうになると、万引き犯を狙つた殺人事件じゃなくないですか？『ビブリオフィリア』には、第一、第二の被害者は万引き犯つて書かれていたんでしょ？」

「犯人にとつて、予期せぬことが起こつたのかな？」僕が言う。

「偶然、万引き犯が殺されてしまったとしても、元々は『どん底から億万長者への道』の著者を殺そうとしていたのなら、話がかわつてくるじゃない？」

義男は首を横にふつた。

「違うよ。第一、第二の被害者は万引き犯と書かれていたけど、明確な事件の背景は書かれていないんだ。著者に『殺人予告』があつて、偶然の成り行きで別の万引き犯が殺されてしまったとしても、本の内容と実際の差異はないだろう」

「偶然つていつてもさ、確率論でいけば奇跡みたいなものだよ。信二か部筑が将来、総理大臣になることくらい非現実的なんだから。父さんだつて、狙われているかわからないよ」

僕の受け売り。さり気なく傷つく表現だ。もちろん、彼女にはそんな気はなさそうなぐらい、神妙な顔つきになっている。義男が狙われている事実を認めたくないだけなのだろう。

「いや、著者は生放送でこうも言っていました。以前に発行した本

は沢山擦ったのに全く売れず、倒産してしまった出版社には迷惑をかけた。そして、出版社の名前を聞いたとき、私は驚きました」

「まさか……」

「小園猛の勤めていた出版社の名前があがったんです」

『殺人予告』と潰れた出版社の関係か。著者が謝罪した裏には根深いものが潜んでいるのかもしれない。

「ここからは推測になりますが、『脅迫状』を送った者と犯人は別物と考えてみたらどうなるか？ 犯人は何らかの理由で『脅迫状』を送った事実を知っていた。『殺人予告』を送った者は実際殺人を犯そうなんて考えていなかったが。犯人はそれを利用して、万引き犯を殺し、『殺人予告』を送った者に罪をなすりつけようとしている。私はそう思っています」

「そうか」僕は手を叩いた。

新横浜の現場検証で報道されているものは、他の場所で殺されてから、運ばれたのではないかと言われていた。つまり、死体を『脅迫状』にあつた指定場所へと運んで、放置し、『脅迫状』を送った者に疑いがかかるよう仕立てた。

「ええ、殺害方法がどうであれ、本の内容と差異はありません」

責任を感じているのは、仕事で家族を失ってしまった小園猛だけではなく、仕事で友人を失ってしまったであろう義男も同じなのかもしれない。

「出張の延期は出来ないますか？」

「そうしたいのは山々ですけどね。大事な仕事ですから。犯人も、殺人予告もない状況で、とある小説通りに殺人が行われていて、その小説が手元にないのだが、私の命が狙われているから身を隠したいと申し出たところで、誰も取り合ってはくれません」

「そんな……」美佐江は言葉を詰まらせた。

「義男さんはなぜ、小説通りに殺人事件が起こると信じているのですか？」

「意味はありません。ただ――」

「ただ？」

「……犯人は丁村へと、必ず来ます」

義男は額に浮かんでいた汗を、ハンカチで拭った。彼は何かを隠している、と直感した。しかし、問い質しても抽象的な答えしか返ってこなく、みるみる青ざめていく顔色に、それ以上の追求を憚られた。

美佐江は出張の手伝いをしたいからと、義男と一緒に、彼が住んでいる実家へ帰った。誰も止められることなく実行されている殺人事件、万が一、丁村でも起こってしまうのを想定して家族で過ごす日を大事にしようとしているのだろう。

小園由美子の写真を貸してくれないかと提案した部筑に、写真は一枚しかないからと、写メールの画像を携帯電話に送信した。もちろん、さっき見せてもらった写真と同一人物だとわかったが、長い前髪が顔の輪郭を隠していて、少し陰気な印象のある画像だ。

親子の後姿が小さくなり、やがて街に溶け込んでいく姿を見て、絶対救ってあげたいという衝動に駆られていた。

G・覚醒

部筑が横浜の事件現場にも行ってみようと言いだし帰り間際、義男に教えてもらった場所に立っている。横浜駅北口から歩いて十分ぐらいの、境内が設えてある公園だった。外柢を囲んだ石造りの塀、ジャングルジムと砂場。周りにはマンションが立ち並んでいて、車の往来が激しい通りはその影になっていた。反対側の出口は階段にも繋がっていて、高台のある神社に続いていた。

だいたい捜査は完了したのだろうか、とても金子大輔が殺された場所とは思えないぐらい、閑散としていた。

僕らはひと通り公園内を歩き終わると、時間を持て余した。

「本当にここで事件が起こったのかな？」

白い菊の花一輪だっておいていない。

「そうだな。ちょっとさびしい気がする」

こうしていると、十九年の短い人生だった被害者が哀れになってくる。まして、死の直前、万引きをしていた事実を知った両親は傷を抉られる思いをしているに違いない。得体の知れない居たたまれなさがあった。僕が十九の時と言えば、部筑、美佐江と知り合った三年前だった。

文化人類学の講義を受けていた。トランクライザーを乱用する人種の考察が主題であり、たまたま、隣の席に居合わせた部筑がいた。彼はいつも寝ていた。講義が終わる頃になると起き出して、さも今まで講義を聞いていたかのように、教授へと質問したりする。整った容姿も手伝って、その姿は目立っていた。

講義は中盤になり、プロジェクトでドキュメントを観賞していると、感電でもしたかのように飛び起きた。

——終わってたか？——

——いやいや、驚かさないでくださいよ——

——あれ、話すのは初めてだったけ？——

腕を組んでいた教授は、僕達に向かって咳払いをする。大人しく、講義が終わるのを待った。

講義は出席確認とノートを取っているだけで単位が取れることを教わった。その情報料として、僕のノートをコピーさせてくれと、後から言ってきた。あまりの横着さに、友達になっていいものか悩んでいたが、生徒が立ち去り、静まり返った講堂でこう言った。

——あんたは、神経質すぎるな——

僕の言動や、静脈が浮き出ている、筋張った手の甲で判断したらしい。インチキ占い師のような判断の仕方ではあるが、正直なところ凶星だった。若いのだから、細かいことは気にせず、もっと好き勝手やるべきと、大人に言われたことがある。

——神経質すぎると、大事なものを見落とす——

なんて、何もわかっていなさそうなのに達観したようなセリフが鼻に付いた。大きなお世話だと反論した。

来週の講義まで『ジプシーの日常』を読み、感想を聞かせてくれとお願いされ、結局、図書館で借りて読んだ。その本は、世界を放浪し、行き当たりばつたりの地で飽きるまで住むとった内容だった。粗筋を読んだ限り、ありふれた本のようにおもいがちだが、触れることがなかった世界が広がっていた。未踏の地なのに、情景が浮かんできて、いつの間にか、自分が旅をしている気分にならせてくれた。興奮覚めやらぬ口調で、部筑に感想を述べた。衝撃だったのは言うまでもなく、それがきっかけで、一緒にいる時間が多くなった。

——退屈だな——

カフェテリアにいた部筑は、そうもらした。

——帰るか。途中まで一緒だろ——

部筑は返事の代わりに、大学の門がある方へと歩き出した。温い風の通り道になっているような、校舎の廊下を進んでいると、後ろ

から女の子の声がした。初対面の美佐江だった。

—— ねえ。『ジプシーの日常』読んでいたでしょ？ ——

ああ、部筑は素っ気なく返事をした。

—— わたし達、同じ匂いがしたの ——

はあ、ぶつきら棒に返事をした。美佐江も、『ジプシーの日常』を読んでいたらしい。お互いの名前を知るまで、美佐江は『ジプシーの女』と呼ばれていた。

帰り道、部筑との会話に集中できず、『ジプシーの女』の潤んだ唇から放たれた言葉が、頭を駆け巡っていた。

—— 『ジプシーの女』は、何で僕達が読んでいたの、知っていたのかな？ ——

講義のとき以来、『ジプシーの日常』の話しをした覚えがなかった。

—— 簡単だろ。図書館の貸し出し履歴を確認したんだよ ——

僕が『ジプシーの日常』を借りる前に、部筑も同じように借りていた。しかし、図書館の貸し出し履歴は、本の背にあるバーコードと学生書でデータ管理されていた。図書館員を務めている人達はいわゆる派遣会社から雇われていて、生徒に貸し出し履歴の情報を漏らせないはず。

—— そんな制度、守られているかは怪しい ——

—— だな ——

僕達のどちらかを、前から気になっていたのか。そうだ。そうに違いない。いたのは僕と部筑、二分の一の確率。どことなく、自分を見ている時間の方が多かった気がする。高揚してきた。

—— なあ。同じ匂いって、どういうことかな？ ——

—— 知るかよ ——

部筑は呆れていた。

—— なんでそんなに気にするんだ？ 気があるのか？ ——

—— 違うって ——

それから、僕達三人は、一緒に行動するようになった。

少しでも強い風が吹いてくれば、将棋倒しになりそうな自転車の群れがあつた。その傍らにある、マンションの非常階段から降りてくる者がいた。スーツの上にカーキ色のコートをはおった、三、四十代ぐらいの男。乱れた髪の毛の下にある、切れ長の目はこちらをチラチラとみてる。街灯が放っている冷たい光に照らされて、その姿は不気味だった。

「あれ、君はどこかで会わなかったかな？」

男は公園の敷地に入ったところで声をかけてきた。ずっと視線を外さなかった部筑が応じる。

「気のせい、ではなさそうですね」

「そうだ。新横浜の……」

どうやら、部筑が単独で調べていた新横浜で会っているらしい。

男は薄い皮製の手袋をしていて、胸ポケットから手帳を取り出した。
「さわむらたかし 神奈川県警の沢村貴志です」

五郎さんから聞いた名だった。しかし彼は阿武隈川の事件を追っていたはず。もちろんそんな疑問をぶつけるわけにはいかず、身分証明書の提示命令が出たので、学生証をみせた。

「その大学なら、ここから離れていないね。何をしていたのかな？」

「横浜駅で遊んでいた帰り道ですよ」

「そう、住んでいる場所も近いんだ？」

「ええ、大学から歩いて行ける距離ですね」

沢村は首を傾げ、息をスウーと音をたてて吸いこむ。

「空耳かな？ 事件がどうのこうの、って聞こえたんだけどな」

非常階段が見えるマンションの、二階の角部屋で張り込みをしていたと沢村は言い、指を刺した。確かにあの距離なら声がまる聞こえた。とぼけているように見せかけて、僕達の行動を逐一チェックしていたらしい。頬が引きつった。

「帰りに立ち寄ったんです。テレビでこの場所は殺人事件があったって報道されているし、俺達もこの場所は知っていたんで」

「ふーん、単なる野次馬根性だとしてもな。二人して新横浜までも足を運ぶかな。捜査員じゃあるまいし」

「二人して？」

沢村と僕は初対面のはずだ。

「そう、信二君は、被害者が発見された日に、新横浜の現場に顔をだしているはずだよ」

忘れていた。僕はあるとき、職務質問をされていたのだ。たぶん、警備をしていた捜査員から聞いたのだろう。学生書を提示しただけで憶えているのだから、さすが刑事さん、と感心している場合ではなかった。

「犯人は現場に戻ってくるとでも言いたいのですか？」

部筑は挑戦的だ——やめろ。頼むからやめてくれ。

「気が早いな。誰であっても疑うのが仕事だからね」

「協力しますよ」

「いや、証拠がないから、君たちを即、取り調べってわけにはいかないんだ」

頭の中で考えがまとまった。容疑者にされるかもしれない部筑が沢村を前にして物怖じしていないのは、こうなることを知っていたからなのだろう。しかし彼は、意外な事実を打ち明けた。

「俺らは被害者です。先日、不法侵入されて、物を取られましたし。正確には、友達のものなんですけどね」

すると、沢村の眼つきが変わった。

「警察には被害届を出さなかったのかい？」

「ええ。いつ出そうか迷っていたもんで」

「うーん、最近、そういう人多いんだよね。良かったら、これから案内してくれないかな。不法侵入された場所に？」

「いいですよ」

——大丈夫か？ 美佐江の許可は取っていないぞ……

ただ、殺人事件の犯人を捜査しているのに精いっぱいであり、正直、美佐江の書斎を荒らした者の捜査に手が回りそうになかった。

「ちよつと、その友達に連絡してみていいですか？」

「ああ、本人の許可がないとね」

受話器の向こうの美佐江は勝手に行動していたことには少々ご立腹ではあったが、家族と過ごしていて寛大になっているのかもしれない。口調はやわらかで家宅搜索をするのかを気にしていた。

「君の友達は被害者なわけだし、本人の許可がないと、家宅搜索は難しいだろうな」

沢村の言葉をそのまま伝える。すると、拒否された。

「はは、ダメか。じゃあ、その書斎を見せてもらうことは出来るかな？」

美佐江は、一階の書斎であれば問題ないと言った。ただし、奥と二階には絶対に入らないでねと念を押される。そのやりとりを聞いていた沢村は苦笑いした。僕が電話を切ると、

「なんだ。指紋とかの採取はしないのか」

部筑は肩を落とす――良くいうよ。盗まれた縄に自分の指紋が残っているかもしれないと凹んでいたくせに。部筑のせいで僕はさつきから冷や冷やされっぱなしだった。

「しょうがないね」

刑事と肩を並べて散歩するとは、夢にも思っていなかった。フラシクというか、気さくな先輩と話しているような感じがした。ぼろが出ないよう、沢村に言っではいけないことをリストアップし、何度も繰り返した。世間話がつづき、刑事の苦労が知れる。失敗談などは、身近に感じられるエピソードも多かった。

「あの商店街か。先日、足を運んでいてね」

「なぜですか？」

「別件の殺人事件があつてね。目撃者が近くに住んでいるんだ」

僕は商店街に足を踏み入れた。

『モダン酒場』から賑やかな歓声が聞こえてきた。有名な固有名詞、

メダルのこと、冬季オリンピックの話題だとわかる。店内で生中継を観戦しているのかもしれない。店先からはみ出すようになって、テーブルを囲んでいた一人が歩いてくる僕達を確認すると、目を反らし、すぐさま静かになった。その瞬間、

「ただ、偶然にしては出来過ぎているな」

沢村が消えてなくなりそうな声で呟いていたのを聞き逃さなかった。

「どうも。盛り上がっているみたいですね」

「良く見かけるね、刑事さん」

割烹着を着た店主が声をかけた。『モダン酒場』に集まった面々の殆どは、以前に阿武隈川の話をしていたときの者達ばかりだった。「先日はお世話になりました。何か変わったことはありませんでしたか？」

「別がないよ。それより大学生二人を連れて、今日はどんな用事があるんだい？」

「お知り合いですか？」

「……ええ、ちょっとね」

店主の齒切れが悪かったのは、沢村の後ろで睨みを利かせている部筑を見たからだろう。僕達が捜査をしている、と商店街の人達に五郎さんが口をすべらせているのではないか、想像するだけで血の気が引いていった。

「刑事さんに協力してもらっているんです。先日話した、不法侵入者の件で」

と、部筑は率先した。

「ああ、そういうこと」

彼らに愛想良く挨拶をして別れた沢村は、

「へえ。仲いいんだ」と関心した。

「ん、まあ、教えてもらったのも、商店街の方からでしたから」

「じゃあ、しばらくの間、留守にしていたとか？」

「ええ……こいつと一緒に旅をしていました。友達は海外旅行中で

した」

もし本件で沢村が聞き込みをするのなら、いずれかれると思っ
たのだろう。少なくとも、通報したおじさんは知っている。部筑は
具体的に丁村の名までしゃべった。

「丁村か」

考え込んでいる沢村に、部筑は写真集の話をする。卒業旅行だっ
たのだと、彼はでっちあげた。

「『密造書籍』か。物騒な名前だ——あ、いや失礼。ここにあった、
すべての本がなくなっただね？」

書斎を何周も歩きまわった沢村は、地面に目を落としながら歩き、
ぴたりと止まった。

「ん？ この長い髪の毛は？」

屈みこんだ。

「かなり長いですね」

立ち上がった沢村は二十センチ位の癖がない髪の毛を手に吊るし
てから、僕と部筑の頭上に視線を走らせた。

「君達は最近髪の毛切ったりした？」

部筑はここ数年、ずっとボウズのままだし、僕も以前は少し伸び
ていたが、就職活動を始めた半年前から短めになっていた。

「そうか。男にしては長いよな。ここの所有者のものかな？」

「いえ、あの子はずっと金髪ですから。別人のでしょう」

「心あたりはないかな？ 髪の毛長い人物が出入りしていたことか
？」

「ないですね」

「わかった。念のため」

食品を保存しておくような、ジッパーのついたビニール袋を取り
出し、その長い髪を入れた。

「その、報道で、本を万引きした者が殺されているって聞いている
んですが、さっきの場所で起こった事件の被害者は、何か本を持っ
ていたんですか？」

「ホテルとか、旅館のガイドブックだよ。写真とか評判が書かれているやつ。君達みたいにな、どこか旅行に行く予定だったのかもしれないね」

「ガイドブック」

「そんなに驚くのかい？ なんなら見せてあげようか」

ポケットに手をつ突っ込んで、何度も引つ掛かりながら、B五版でオレンジ色をしたカバーには『ホテル、旅館ソムリエガイド』と書かれているそれをさしだしてくる。

「これは、被害者が実際に持っていた本なんだよ」
僕が手に取った。

とてつもなく、重いように思える。いや、何の予兆もなく偏頭痛に襲われたのがそう思わせていた。鋭利な痛みへと発展し、頭が割れそうだった。

このままでは、持っている本を落としそうだった。
目を閉じた。目の前はオレンジ色の球体がゆっくり旋回している。そして、何かが訴えかけてきた。

《俺ハ 殺サレタ——》

《——父ノ 知り合イ 命令 サレテ》

《恨ミヲ モツテイタ 出版社ノ 本ノ万引キハ モウ止メタノニ

——》

《——過去ヲ 忘レ 本ノ万引キハ シタクナカッタノニ》

《二度ト 見タクモカッタ アル本ヲ盗ミ——》

《——ソレヲ持ッテ アル場所ニコイト 指定サレタ》

《母親ニハ ソノコトヲ言エナカッタ——》

《——友達ニモ 先生ニモ イヤ 友達ナンテイナカッタケド》

《誰カニ 言ッたら 万引キシテイタコトヲ バラスッテ 脅サレ

タカラ——》

《——学校ニバラサレたら 省カレル 母親ニハ 迷惑ヲ 掛ケタ
クナカッタ》

《モウ　ワスレタカタ　父親ガ　悪イコトヲ　シテイタコトモ
スベテ――》

《――家ノ　近クデノ公園デ　着信ガアッタ》

《指定サレタノハ　神社デ　本ヲ　持ッテ　行ッタ――》

《――誰モ　イナカタ　ト思ッテイタラ　後カラ　首筋ヲ切ラレ
タ》

《何ガ　起コッタノカモ　分カラズ　カハ抜ケテイッタ――》

《――俺ハ　変ナ　機械デ　切刻マレ》

なんだ、なんだ、なんだ。

「まあ、ネットで調べられそうですし、あえて万引きするかなと思
いまして」

部筑の声で、その訴えかけてくるものはなくなった。いや、切刻
マレで終わっていたのかもしれないが、正確には不明だ。とりあえ
ず、他人に支配されている感じがなくなり、大きく息を吐いた。

「若い世代の考え方は違うね。おじさんが若い頃はガイドブック片
手に旅したもんだよ」

「でも、旅館のガイドブックですよ。地図の載っている観光ガイ
ドならわかるのですが」

「変わらないって。旅に憧れをもったら、どちらも欲しくなるもの
だ」

あれだけ激しかった偏頭痛は収まっている。汗が鼻と目の間をす
べつていく。

「信二？　汗かいているけど、大丈夫か？」

自分に声掛けられているとは知らず、沢村の背中を見た。
「おうい」

部筑は僕の目の前で手を振っている。もちろん、別れ際に僕を見
送っているわけではなく、正気なのかを確かめているのだ。

「ああ、ちよつと眩暈がしたただけだ」

上の空で、ページを捲った。目次、中身、丁村の『希林寿』は掲

載されていない。金子大輔が殺された時にあつた、百十箇所の傷も、総ページ数、三百四十四のこの本とは関係がなく、百十ページ目は北海道の旅館が掲載されていたのを確認した後、巻末にある発行日の文字がぶれはじめた。

震える手で、ガイドブックを返した。

怖かった。

精神病にでもかかったのか？ 誰かの霊がとりついたとか？

いったい、あの感覚はなんだったんだろう。思考が排除され、他人が僕の脳の中で小説を音読している、あの感覚は？

心の中で反芻してみた。《父の知り合いから命令されて》
確実な言葉だった。

もしか、被害者が訴えかけなかった無念なのか。

「沢村さん——」

僕の声が小さかったのか、「呼んだ？」と確認してくる。

「被害者の金子大輔さんが殺される前って、本当に万引きしていたんですか？」

「ん、どうのことだい？」

沢村は顔を斜めにしている。

「ほら、その、いじめがあつて、誰かに命令されて万引きしていたとか？」

「何人かに聞いたけど、ないと思うよ。もつとも、いじめていましたって言う生徒もなかなかいないだろうけどね」

「では、他の人とか。例えば、金子大輔さんの父親の知り合いとか？」

その質問で、沢村の目じりは微動した。

「君が、なぜそれを知っているんだ？」

「いえ、推測ですよ。推理小説の真似ごとです」

苦し紛れのいいわけだった。沢村は「うーん」と唸る。

「命令されていたかはまではわからないけど、本を万引きする前後の着信履歴を調べたんだ。そこには、普段電話で話をするような間

柄ではない人物の名前が拳がっていた。それも、金子君の父親の知り合いだった」

「名前は教えられないんですか？」

「残念ながら」

「遺体は、他の場所から運ばれてきたんですね？」

「そう断定しているよ。実は、神社の近くに血痕が残っていたんだ」
「変な機械がおちていなかったかという質問も出かったが、その前に沢村が言った。」

「トイレ、借りていいかな？」

部筑は奥にあるトイレに案内した。

「おい」空気を吐くついでのような声だった。

「あまり出しゃばるなって。捜査してるのがばれるぞ」

「悪い。つい」追求せずにはいらなかった。

「気をつける」と言われ、身が引き締まった。

僕はふと、書斎を見上げた。鏡に映った代わり映えのない自分の顔、しかし、その後方では、僕達の背中に沢村の冷たい視線が注いでいた。

まず、おかしな点がある。忙しくて手が回らないイメージの捜査一課が不法侵入に興味を示しているのだから。さらには、僕達への情報提供だ。部外者に対して、事件のことはしゃべらない。その証拠に、新横浜でも、阿武隈川でも、捜査員は肝心な話しまではしてくれなかった。

「君達が興味を持っているこの事件は共犯だと思っているんだ。どちらも殺された後、現場に運んだ痕跡が見られる。一人が遺体を運び、もう一人が通行人の目を反らした。若しくは、二人で運んだ」

刑事から疑われている。直感だった。が、僕の取った行動は、疑いを促進させるものだった。

「こ、今度、城島博志さんの持っていた本も見せてもらえませんか？」

「あの本はどここの書店でも平積みされているだろ。買ってくれない」

かな？」

「ダメなんです。実際、本人が持っていた本でなければ」

沢村は、唇をへの字に曲げた。

「かまわないよ」

二〇一〇年二月五日は、僕的能力が覚醒した日だった。

H・捜査の結束

あの本からの訴えは、事実に基づいたものに思える。金子大輔のことはどこまで報道されているか把握していないが、僕とやりとりをした沢村の反応は、明らかに驚きの色があった。警察内部が犯人にしかわからない情報が含まれていたからかもしれない。そうなら、金子大輔の父の知り合いの件だ。

特別な能力を持つと、こんなに戸惑うものなのか。恐怖もある。あの頭が割れそうになったときを思いだすと、書店に並んでいる本を手軽に触れなくなってしまうそうだ。今更ながら、部筑の気持ち が少しわかったような気がした。

変な機械って何だ？

遺体に無数の傷があったのは、変な機械のせいなのか。

使われる直前には、首筋を切られている。想像しただけで、鳥肌が立ってきた。

「はっ」

つい最近みた、夢に似ていないか。体を切られて、変な音が聞こえてきたあの夢だ。予知夢なのか？

そんなはずはない。だが、こうして特別な能力を意識しているうちに、それもありえるとも考えられる。自分がどうにかなくなってしま う恐ろしさがあった。

気を紛らわそうと、ネット検索した。結果、金子大輔は平塚の大学に通っている学生、城島博志は東京にある会社に勤めていた。いずれも具体的な名前が記されている。自殺した小園猛、失踪している小園由美子のことは載っていない。もちろん、本を手にして訴えかけられたあの感覚も、検索に引っ掛かることはなかった。

という、大した情報も得られず、携帯電話の液晶を見る。午前四時二四分、眠りについた。

僕が奇をてらった推理小説を読んでいると、インターホンが鳴った。部筑はスナック菓子を饅頭品にもってきて、上がり込んでくる。「ちよーきたねえ部屋だな」

部筑は洗濯した衣類が放置されているのを見た。その先には本だのCDだのが散乱している。ここ最近、家事をサボっていた。

「来るなら、連絡いれろよな」

「いいわけが通用するか。女が突然きたらどうするんだ？」

「そんな経験……ないし」

俗に言う、きちゃった攻撃だ。僕は何度あのシチュエーションに憧れていたことが。

「うわっ、寂しっ！」

部筑はベットに腰をおろし、自らの肩を抱いた。

「被害者にあつた傷の数と、持っていた総ページ数は関係なかったね」

「俺の推理が外れたって嫌味か？」

「別に」

それから、持っている本は出版社別にならべると美しく見えるからだの、もつと大きな本棚を使うべきだの、と言ってきた。適当にやり過ごした。

「なあ、あの長い髪の毛って、小園由美子のものじゃないか？」

「俺も考えた」

「小園由美子と美佐江って、実は仲悪かったとか。恨みでもあつて侵入した。彼女なら、あそこの土地勘も、建物の構造も知っていそうだし」

「それで書斎を荒らすようなことするか？」

読みかけだった本を、部筑は読みだした。

「殺人事件をやらかす子だぞ。何しても不思議じゃない」

「小園由美子が犯人と決まっているわけじゃない」

「妙に肩を持つな。考えでもあるのか？」

頭を横に振る。ただ、金子の父の知り合いと、小園由美子が結び

つかないのだ。

部筑は小説に読み入っていた。こうなったら、ちょっとしたことは、彼を小説の世界から引き戻せない。仕方なく故障したテレビに手を置いて窓の外を眺めると、制服姿の学生が歩いてきた。瞬発力のある会話のキャッチボールが聞こえて来る。なんか随分と年を取ったように思えた。

一人でパスタを茹でて、一人で食べた。皿洗いをし、食器を定位置に戻すまでをやり終えたら、部筑は口を開いた。

「『ブビリオフィリア』を読んだことのある人間は義男さん。小園猛さん。左近字図書館から盗んだやつも、当然読んでいるだろう。あとは可能性として小園由美子とその家族だな。容疑者を上げるとしたらそんなもんだろ？」

「消去法でいったら、小園由美子か盗んだやつだろ。で、盗んだやつとか含めて、本を粗末した人間が殺されているんだから、小園由美子しかいないか？」

と言う。僕の願望でもあった。

「浅はかだな。『ブビリオフィリア』通りに殺人が行われているのかも怪しいんだぞ」

「なにを信じていいかわからなくなるよね。人の魂ってさ、他のものにも乗り移るのかな？」

「話が飛ぶね」

部筑は小説から目を離した。

「人が死んで、輪廻を繰り返すとか言うけど。それは新たな生命に宿るものでしょ。僕が訊きたいのはそうじゃないんだ。人の魂が生命を持たない物体に移るものなのか？」

話してみ、ハツとした。僕は何を言っているのか。

「移るんじゃないか」

「えっ？」

「わかる奴にしかわからないだろうけど、民俗学とか心靈系の話しにありそうじゃないか。日本人形なんか、典型的だろ。生命がなく、

しゃべれなくても、魂は宿っているかもしれない。乗り移るって信じて、損はないと思うぞ」

「そうか」

「とにかく、調べていくしかないんだよ。じっとしているよりか、動いていた方がましだ」

バチンと本を閉じた。

「城島博志の通っていた大学にいくのか？」

「事件現場だ」

「でも」僕は下を向いた。「刑事に疑われているみたいだし……」事件現場に足を運ぶのは控えたかった。

「俺達は何もしていないんだから、ビビる必要はない」

それを証明するためか、部筑は阿武隈川の下流に案内しろと言ってきた。

「いつまでいるんだよ？」

日はとつくに落ちていた。この時期は日が短いものの、部筑と二人で阿武隈川の下流に来てから二時間は経過している。

「この草木は捜査で刈られたものなんだろう？」

振り向いた部筑は月明かりに照らされて、一層堀が深い顔になっている。

「だぶんね。僕と美佐江が来た時に、捜査員が刈っていたらからな」

「なあ、この歩道から歩いて、水死体が見つかるか？」

「なぜ？」部筑の質問を質問で返す。

「五郎さんの身長は美佐江よりも低い。あの日に草木が残っていたとしたら、川の水面も殆ど見えなかったはずだ。あの日は曇りだった。今日みたいに明るくない。それに、五郎さんの視力は0.1」

「そういえば、部筑も裸眼でそれぐらいだったけ？」

眼鏡嫌いなのは、五郎さんと同じだ。

「ああ」

すると、部筑は人指し指で眼球に触れた後、目を細めたりしてか

ら、言う。

「水面が黒くぼやけている」

僕達は商店街にいた。

不動産屋のテナントで、五郎さんは椅子に仰け反っている。

「部屋でも探しに来たの？」

部筑は先程の推理を説明した。

「というわけで、あの河川敷の歩道からでは、水死体を見つけられないではありませんか？」と言い切る。もちろん、全体に見つけられないかは、部筑にも確信がないはずだ。

「ち、ちがうんだよ。本当に見つけられたんだ」

「どうやって？ 河川敷の歩道から見つけたと言いましたよね？」

あの状況で見つけるのは不可能ですよ。あなたが犯人か、彼が殺されることを知っていたれば別ですが」

「……言い忘れていたんだが」

蛍光性のカバーの本を、水死体は胸に抱えていた。五郎さんは高くまでおい茂っていた草木の間から、その本が放っている黄緑色の光を確認し、草木をかき分けていったら見つけたと言う。推理小説に出て来る、ダイニングメツセージのようなもののなか。両手を直角に曲げた状態で死後硬直があり、浮かんで来た死体に本を持たせたのだと警察は推理しているらしい。部筑の顔が歪んでいる。

「だから、夜でも発見できた——こ、これはまだ、公表するなど言われている」

気が動転したのだろうか、五郎さんは慌てて弁明する。

「落ち着いてください。しゃべりませんから」

「約束してくれ。あの取り調べを受けるのは、もううんざりだからな」

「ただし、俺達に真実の情報を流してください。それが条件です」
五郎さんはロボットのような動きで頷いた。

美佐江が戻ってきたその日は彼女の部屋に泊まり、日曜日に低雲丘のあるT村を訪れる予定になっていた。宿泊地は鹿野紀子だけで切り盛りしている『希林寿』だ。義男も出張期間中は『希林寿』に宿泊することになっていたのだ。

三名分で三泊、もしかすると週末までになるかもしれないとの予約を入れると、急な申し出にもかかわらず快く承諾してくれた。

僕達の捜査結果を聞いた美佐江は、

「蛍光性のあるカバーの本か……」

と、つぶやいた。蛍光性のあるカバーの本は、美佐江の書斎から無くなった本に含まれていた。

「そんな本、滅多にないからな」

部筑はその本を何回も触っていた。

「犯人は、俺を犯人にさせようとしているに違いない」と、被害妄想まっしぐらだ。

「待つて。犯人がブックの存在を知らなかったら、わたしに罪をなすりつけようとしているんでしょ？」

普通に考えれば、美佐江を犯人に仕立てようとしている何者かがいることになるだろう。でもどうして？ やはり失踪した小園由美子の仕業なのか。

重苦しい空気を払拭させようと、僕はリモコンを握った。

なんだか久しぶりにテレビをつけた気がする。それもそのはずで、新横浜の定食屋以来、ずっと見ていなかった。話題になっている事件の報道は、見逃してはいけないという義男からの教訓もあり、チャンネルを回し、ニュースを見ていた。

午後七時四十分頃、新横浜であつたあの殺人事件が放映された。連日放映されているのだらう。液晶テレビの中にいる女性アナウンサーは流れるように説明し、慣れている様子だ。

状況説明の後、『新たな情報が入りましたのでお伝えします』早口で言う。

新横浜支店のK書店が映っていて、次に監視カメラに映っていた

万引き現場の映像と被害者、城島博志、五〇歳の会社員、男性を照らし合わせている。

その顔写真を見た瞬間、疲労が吹き飛ぶぐらいの衝撃があった。

「こ、この人、みたことがあるかも」僕は思わず口にする。

「マジかよ？」

横になっていた部筑が、急に起き上った。女性アナウンサーは遺体の発見現場にあった所有品を説明している。その中にハンドバックがあった。

「……どこでだっけ？」

「俺に訊かれてもこまるって」

「そうだ！」

この人は、新横浜で美佐江と会う前、K書店の入り口付近で出会いがしらにぶつかったおじさんだ。絶対あいつの顔を忘れないぞと思っていたのに、なんで直ぐに思いだせなかったんだ。

僕はトランク스가やぶけた理由で一度帰ったこと以外をすべて話した。

「もっと早く言ってよ」

僕は日常に起こった非日常の対応に追われていて、世情を把握する余裕なんてなかった。ちょうど大学の講義とアルバイト生活に追われていて、テレビを見たり、ネットをするまで気が回らなくなっている状態のように。しかし、そんな悠長なことを言っている場合でもなかった。

もっと大切なことを思い出したからだ。

「そうだな。俺達は事件を追っているんだからな」

部筑が言う。感情が籠っているか定かではない。

新たな証言、顔にモザイクがかかった、藍色の前かけをしているK書店の店員だった。

『万引きしているのに気が付いて、入口まで後を追おうとしたら、就職活動でもしていたのでしょうか。二十歳を過ぎたぐらいの男性とぶつかったんです』

彼の声は弄られていて、くぐもり、巨人のような太い声をしているが、それはどうでも良かった。

『この辺りですね？』

僕がぶつかった位置に立ち、よく見かけるインタビューアがモザイク男にマイクを向けている。さらに彼の証言しているその時間と、K書店の前にいた時間が一致している。

『ええ。そうです』

女性アナウンサーの映像に切り替わった。

『いずれも、犯人逮捕に注力しています。神奈川県警は、被害者とぶつかったその男性が、何らかの情報を持っていないかも含め、捜査を進めています。それでは次です』

リモコンでテレビの電源を切った。その後、全身が脱力した。

「気を落とさないで」

素直にそうだねとは言えない。

「僕達三人以外の人間に、これからしゃべることを言わないと約束してくれるか？」

自分で言ってみて、安っぽい約束のように思えた。ところが、そ

の他に一生のお願いぐらいしか思いつかなかった。

「どうしたの。まだ何かあるの？」

「当たり前だろ。親友じゃないか」

部筑は軽い口調で、しかも肩を揉んできた。

「ぶつかったとき、被害者の持っていたハンドバックに触れたんだ。もしかすると——指紋が残っているかもしれない……」

皮製のハンドバックの感触、出来れば消されていることを願っている。

「おいおい。それじゃあまるで……」部筑は言い淀んだ。

「僕が指名手配犯みたいだ」

スウェットの裾に両手を隠しながら、美佐江は言った。

「警察に捕まったらヤバイね」

警察が僕に辿り着くには時間がかかるだろう。K書店員の記憶だ

ってそれ程正確ではないはず。もし、ぶつかった瞬間にトランク스가破けていなければ、時間つぶしでK書店に立ち入っていたかもしれない。

「ヤバイどころじゃないよ」

肩を落とした。事情徴収、ハンドバックに残っている指紋、僕の指紋との一致、美佐江にばったり会う前の時間、一人で行動していたので、アリバイを証言してくれる人間はいない。

「捕まらなければ大丈夫でしょ」

頭を抱えた僕に、そう声をかけてきた。

「でもどうやって？　ずっと警察から逃げ続けるって言いたいのか？　僕は就職も決まっているし、四月から新横浜に通うことになっているのに。どうしてこんなことになるんだよ」

——犯人を探さなければ、僕が疑われる。冤罪になるかもしれない。就職を控えた今、もしそうなったら内定取り消しどころか、今後の就職活動も闇に葬られる。

つまり、事件を必ず解決しなくちゃならないのは、好奇心を持っている美佐江でも、それに便乗して許してもらおうとしている部筑でもなく、僕だ。犯人のせいで人生を台無しにされたらおしまいだ。「落ち込むなつて。指紋が残っているかもしれない状況は、俺もおなじなんだからさ」

「部筑は殺人が起こった時、T村にいただろ？　それを証言してくれる人だっている。僕は被害者と直接接触までしているんだ。全然違う」

「悔んでいてもしょうがないでしょ。だから、早く事件を解決するのよ」

美佐江の「私達の事件かもしれない」という予想は、的中したことになる。しかし、それは大した問題ではなかった。

すべてを二人に打ち明けていなかった。

打ち明けられなかった。

大分落ち着いてきたころ、城島博志とぶつかった前後の記憶が、

鮮明に蘇ってきた。彼は僕という障壁があり、本来進むはずの進行方向とは逆の、大手銀行のある方へ向かった。つまり、

僕とぶつからなければ、犯人の待っている場所に行かなかったかもしれない。

犯人は誰だ？ 誰だ？ 誰だ？

。

僕とぶつからなければ、犯人の待っている場所に行かなかった。

僕とぶつからなければ、万引き犯で済んでいた。

僕とぶつからなければ、犯人に殺されなかった。

あの日の僕が、城島博志を殺した。

そして、僕は疑われている。

その夜、本当の意味で事件捜査の結束が固まった。

I・事件予定地へ

一睡もできないまま夜が明けた。明け方の部屋の隅で膝を抱えていると、美佐江が起き出しそんな気配があつたので急いで寝ているふりをした。

丁村へと向かっている車中は頭を悩ませていたが、到着してみても踏ん切りがついた。もし、なんて言葉を多用しても、捜査のあげ足を取られるだけだ。

迷っていても仕方なく、待っていても解決にはならない。

実際美佐江の父親は狙われている。犯人を探し出さなくてはいけない期限は最悪週末まで、殆ど時間は残されていなかった。

寒さは一段と厳しさを増していた。東北方面の田舎から出てきた学生は関東の冬を寒いだの、地方と比べれば甘いだの賛否両論で当てにならなかつた。移動の車中は数日間で様変わりし、白く彩られた山々の景色を堪能してきた。しかし、こうして駅に降り立って実感する冷気は吐く息も凍結させるのではないかと思わせる。部筑はとび跳ねて身体を温めていた。

僕達は暖房で空気が歪んで映っている駅の待合室にお邪魔し、連絡を入れた。通常、チェックインは午後三時からになっているのだが、到着した午前中でも、客足が少ないからと、快く迎え入れてくれた。

鹿野紀子は三十分足らずで迎えにきた。美佐江は愛想よく挨拶を交わし、僕達はバンに乗りこんだ。

「また来ていただけるなんて思いませんでしたよ」

「はい、丁村を気に入りました」

助手席に座っている部筑が言った。

「嬉しい限りです。どうかくつろいでいてくださいね」

『希林寿』に到着すると、用意されていた部屋は整っていた。荷物を下ろし、ロビーで待ち合わせをし、鹿野紀子がお茶を運んできた。

そのタイミングで僕達三人が気になっていたことを、部筑が切り出した。

「丁村でたったひとつの旅館なのに、大変ですね」

前も同じようなやりとりをしているが、今とではまったく違う意味をなしていた。

「その分、やり甲斐がありますから」

「小園猛さんという方は、以前ご宿泊されていませんか？」

「こそこのたけるさん？」

美佐江は上目使いで口を開いた。

「はい。父の知り合いなんです。父の石崎義男は週明け、ここにお邪魔すると思いますけど」

「そうでしたか。予約は受けていますよ。親子揃ってのご宿泊ありがとうございます」

「小園さんは四十四歳の会社員なんです。三ヶ月ほど前に、丁村を訪れていて、もしかしたら、ここに宿泊されているのではないかと思いますして？」

鹿野紀子は天井を見上げ、受付にあった宿泊客の名簿を捲り始めた。その動作は四ページでぴたりと止まる。

「ああ、ありました。去年の十月二二日に一泊されていますね」

記憶が蘇ってきたのだらう。鹿野紀子はつづけた。

「確か、皆さんと同じ、神奈川県から来ていたお客さんだったと記憶しています」

僕達は顔を見合わせた。

「何か変わった様子はありませんでしたか？」

「変わった様子ですか——休日の宿泊でしたし、……一人で旅行されていたみたいですけど」

「小園という名字の方は、丁村に住んでいましたか？」

「待っていてくださいね」

鹿野紀子は町民名簿を持ってきて、僕達の座っているテーブルに広げた。その名簿は彼女が丁村に来て、『希林寿』を始めた七年前

に発行されたものだ。人口は千人にも満たないと聞いているだけあって、調べ終わるのに時間はかからなかった。

「コの行にも、オの行にも小園はないか。結婚して名字がかわったとかない？」

「ないよ。由美子は亡くなったおばあちゃんも同じ名字だったから」となると、小園猛がなぜ丁村に愛着があつたのかわからなくなってくる。

「お知り合いなら、美佐江さんのお父様が来てから聞いてみたらどうですか？」

鹿野紀子の言う通りだった。僕達は大事なことをいくつか聞き逃していた。

「まさに、その通りですよ」

「だけどさ。美佐江の父さんだって、大学生以来、殆ど会っていなかったんだぞ」

「まあ、そうだよね『ブビリオ……』」

唐突に横腹を抓られた——危ない。『ブビリオフィリア』が彼の大学時代に書かれたもので、その通りに事件が起こっていることまでしゃべってしまうところだった。まあ、他言したところで、信じてもらえないと思うが。

「いろいろ事情がありそうですね。良かったら聞かせてもらえませんか？」

「実は、小園猛さん、丁村の低雲丘で自殺しているんです」

「えっ？」

鹿野紀子は言葉を失った。

「地元で騒がれませんでしたか？ 小さな村ですし、人が死ねば噂はすぐにでも広まると思うのですが」

「——い、いえ、全く知りませんでしたよ」

鹿野紀子の顔からは、本当なのか、隠しているのかが判別できなかった。

「つい最近の出来事なんです。思い出してみてください」

「小園さんがなぜ自殺したのかを知りたいんです。お願いします」
美佐江は頭を下げる。すると、鹿野紀子は自分もお茶を頂きます
と言ひ、開いている席に座った。

「お気づきかもしれませんが、私一人の力で旅館を建てるのは無理
です。この旅館を初めてしばらくは、二人で経営していました」

鹿野紀子は夫と経営を始めたことを明らかにした。後部座席の下
にあった、プリクラに映っていた男、あれが夫なのだろうか。

「何かあつたんですか？」

離婚、の二文字が浮かんだ。

鹿野紀子の夫である鹿野隆かのたかしはある事件に巻き込まれ、刑務所に入
っていた。二〇〇五年から四年間、そこその大罪を背負っている
数値である。それにしても、何処かで聞いたことがある名前だ。た
かし、たかし……そうだ。沢村だ。漢字は違うようだ。

「事件はこの村で起こりました。主人は殺人罪で逮捕されてしまっ
たんです」

僕達三人は姿勢を正した。

「殺人罪、ですか？ 詳しく教えてください」

「ある出版社から観光スポットの特集を組むから協力してほしいと
いう要請があつたのです——村長は大喜びでした。観光客が増えて
ほしかったのだと思います。でもすぐに倒産してしまったとかで、
話は流れてしまいました」

「その倒産した出版社の名前は知りませんか？」

「知らないです」

「わかりました。つづけてください」

「数ヶ月後に、別の出版社から旅館の特集をしたいと申し入れあつ
たようでした。この村で唯一でしたから、『希林寿』が珍しかった
のでしょうか。それで取り上げられることになりました」

「その言い方だと、鹿野さん達には知らされてなかったんですね？」

「はい。本が出版されてから知りました。なんでも、普通の旅行者
を装って、宿泊した時の感想を述べるという形式を取りたかったみ

たいですから」

「どのように書かれていましたか？」

鹿野紀子は眉を潜めた。

「……匿名の方が『希林寿』を酷評していました。旅館に値しない場所だとも書かれていました」

「ひどい……全然そんなことないのに」

美佐江は辺りを見回す。僕も同感だった。

「匿名の方が誰だったのか、知っていたんですか？」

「ええ。わかっていました」

「丁村にはもう一つの旅館があつた。親の代から継承されていた旅館で、かなりの老舗だったらしい。しかし、『希林寿』ができて一年後ぐらいに潰れてしまった。その要因として、お客さんを取られたからと、館主は目の敵にしていた。その館主が匿名の方なのだと、鹿野紀子は言う。

「それで匿名の検討がつかますかね？ 誰かから聞いたとかもありましたか？」

「それもありましたけど、旅館経営者でなければ書けないような内容も記されていたんです。また、丁村に詳しい人物でなければ、知ることも出来ない内容もありました」

普通の旅行客を装いながら、玄人でしか書けない酷評、その細かい矛盾はたいして問題ではなかった。

「ある日、その館主は自宅で死んでいたんです。包丁で胸を刺されて倒れていました」

「ご主人と争った形跡でもあつたんですか？」

「主人は何度も直訴しに行きましたし、それを見ていた方もいましたから、そのすぐ後に起こった事件です。真つ先に疑われました。自分はやっていないと訴えても、他に動機のある方もいませんでしたし、死亡推定時刻の前後に、主人のアリバイを証言できる人はいませんでした」

「鹿野さんはもちろん、ご主人が無罪であると信じているんですね

？」

「はい、夫は罪を犯していない。そう信じています」

鹿野紀子が一人で『希林寿』を切り盛り出来ているのも、本の出版と事件があり、極端に客足が遠のいているからという因果関係があった。

「主人が出所したのは去年の十月初旬なんです」

彼が四年間で刑務所から出てこられたのは、事件が起こる前の、出版物にあらぬ酷評を書かれた経緯があった。

「今はどこにおられるんですか？」

俯いた鹿野紀子は、しばらくしてから口を開いた。

「犯人を追うために、姿を消しているのです」

「失踪しているんですね？ 行き先はわからないんですか？」

「ええ。ある日、突然いなくなってしまうて。連絡も取れなくなりました…… 搜索願も出しているのですが、今のところ何もわからないんです—— そのことがあって、丁村の方々との関係は一旦回復しつつあったんですけど、また距離を取られるようになりました」

最初に訪れたときに言っていた、地域住民との触れ合いは、僕達に不安を与えなくなかった為の嘘になる。鹿野紀子は唇を震わせた。
「もし丁村の低雲丘で自殺があったとしても、情報が入ってきていない、か」

「ええ、察して頂いてありがとうございます」

「失礼ですが、酷評を書かれた本のタイトルを教えてくださいませんか？」

「『ホテル、旅館ソムリエガイド』です」

僕と部筑は顔を見合わせた。美佐江にも、昨日刑事にあった話を伝えている。沢村が持っていた本のタイトルと一致して—— いや、「当時の事件が起こってから、『ホテル、旅館ソムリエガイド』は絶版になりました。でも最近になって内容を改訂させたものが再出版されています」

「だから、僕のみたその本には、この旅館のことが書かれていなか

った……」

「見ていたのですか——ええ、再出版されたものには、書かれていないはずですよ」

第一の被害者は『ホテル、旅館ソムリエガイド』を万引きして殺されたのだ。僕達が考え込んでいると、古時計が鳴り、午前十時を知らせた。

「いけない、もうこんな時間」鹿野紀子は自分を奮い立たせるように言い聞かせた。

「すみません。用事はあるもので」

仕入れやら、旅館の用事しかかった。引きとめてしまったことをわびた。ごゆつくりどうぞ、小走りの鹿野紀子に声をかける。

「黒岩さんはご存じですか？」と聞いた。

「ええ。あつ、そうだ。黒岩さんなら、小園さんのくわしい事情を知っているかもしれませんよ」

入口付近に止めてあったバンに乗り、鹿野紀子は出かけて行った。

「被害者の持っていた本と同じタイトルだったよな？ オレンジ色のカバーのやつ」

「どうしてこう、偶然が重なるんだろう……」

美佐江は神妙な面持ちになっている。

「いや、必然かもしれないぞ」

部筑は根拠のない自信があるようだ。

Ｊ・生き字引

「もう歩けないよ」

美佐江は駄々をこねた。獣道を進んで、もう一時間近く経っている。小川を跨いだかと思えば足場の悪い登り坂があり、僕もきつかった。

「おぶってやれよ」

部筑が顎で美佐江を指す。

「お願い」

甘えた声、僕は高鳴る鼓動を意識しつつ、美佐江を背負った。

黒岩の住居は、こじんまりした古屋敷風の建物だった。屋根には、二本の煙突が設えてある。登り坂を上がりきったところに木製の郵便ポストがあり、『黒岩』と彫刻刀らしきもので掘られていた。森林の奥地にこういった佇まいは、どこかの妖怪漫画を連想させた。すべてが歪んでいた。美佐江が背中から降り、息を整えていく内にそれらが正常に見えて来る。

インターホンはなく、僕達は反応があるまで声を掛けつつけていた。

「二階へあがつてこい」

と、ひどく籠った声が聞こえてきた。加えて、ムード歌謡らしき音楽も聞こえる。

開きっぱなしの玄関のドアを通り、通路の右手側にある階段を登っていく。美佐江は、なかは普通ねとつぶやき、慌てて黙るよう注意する。先頭を歩いていた部筑は二階に上がってすぐの、ガラス窓のところまで止まった。彼の視線の方向には『？エコノミーテクノ』の裏側の眺めがあった。会社へと繋がっている斜面に、生えていたはずの森林が禿げあがっているせいもあるだろう。正面の門から見た景色よりも、敷地が大きく思える。

「早く来るんじゃ」

聞こえた先には障子があり、開けた。

着物を着ている男は背中を向けていた。顎の左右から白いひげが垂れ下がっている。それに、耳に引っ掛けられている紐から、何かの面を被っていた。僕達は軽い自己紹介をした。すると、黒岩は手の届く範囲にあるオーディオセットのボタンを押し、音楽をとめた。

黒岩は、自らを仙人だと自負していた。

「仙人様、聞きたいことがあります」

黒岩は小さな肩を痙攣させる。

「だは、ははははあ！」癩癩でも起こしたかに思える笑い方だった。僕は心配になり、歩み寄った。

「どうしました？」

「明日、鬱になるかもしれない。だから今を楽しんでいるんだ、ははははあ！」

こういうときに限って部筑と美佐江は無口になる。こういうときとは、自分たちよりも扱い憎そうな人を相手にする場面だ。どさくさにまぎれて、僕の背中では二人に押されていた。

仙人は振り返った。白粉を塗りたくっている般若の面だ。半分から上は怒っていて、半分から下が笑っている、奇妙な表情だ。

般若の面からはみ出している白ひげが靡いた。

「……はあ。あの」

「冷めているなんてクソだ」

クソを強調した。その演出に驚かなかったからか、僕らの態度を言っているのだろ。正確には冷めているのではなく引いているのだ。

「くそ——ですか？」

「つまらん。生きている死人じゃ」

「それは……」

「すまん。度が過ぎたな。話を戻そう」

戻すもなにも、始まってもない。まず図書館で調べたことを話した。

仙人は煙草に火をつけ、紙が燃えている音が聞こえてくるまで吸った。吐かれた煙が輪っかを作って上昇し、通気口の前で逃げるように去っていった。炎の部分に目を持っていき、一日二箱に決めているんじゃないと言う。この歳まで健康でいる秘訣だからと言わんばかりの自信であった。

「低雲丘に関するその資料は嘘じゃな」

「えっ、なぜですか？ 資料にあることは信じられると思うのですが」

「焚書は実際に行われていた。焚書の歴史、古くは一五二一年、フランソワ一世が高等法院に印刷所や書簡商の取締を命じたときに始まる。宗教をめぐる戦いが、ヨーロッパ全土に広がるに連れ、本は権力者達から敵視されるようになった。本に関わる職業はすべて取締の対象となった。特定の分野の本の出版・販売・輸入の禁止、日常語の本を読むことの禁止、著者や印刷業者や書簡商の告発、そして焚書じゃ」

御経を読んでいる坊さんのような抑揚だった。

「あの〜それと、資料の嘘の繋がりはあるんですか？」

「馬鹿もの！」

灰皿に押し付けた煙草はし字になった。

「す、すいません」

「最後まで聞け。最後まで！」

どうやら、独特の間に慣れないと怒られるらしい。ただ、彼の発している覇気は、どちらが年を食っているのか分からなくさせるものがあつた。

「資料を発行するのに、書きなおしがあつたんじゃない。歴史を辿っていく作業をしていくうちに、低雲丘の、いや丁村の歴史さえも改ざんされているじゃろう。閉鎖的だった村が、外に目を向けた際、我らの村が異質な儀式を行っていたことを知るようになったのも、あるじゃろうな。だが、あんな曖昧な表現をしているのだから、部外者だとしても、わかりそうなもんだが」

「信二、どうなの？」

美佐江は上目使いだ。

「あ、怪しいとは思っていましたよ！ でも……」
咄嗟に出た言葉に、先はなかった。

「まあよい。ドフトエフスキーの『白痴』に出てくるような人間がいても、人畜無害じゃからな」

仙人は般若の仮面をとった。皺だらけの皮膚に埋もれた瞳は閉じられていた彼の表情から、感情を読み取ることは不可能だ——ドフトエフスキーの『白痴』？ そう形容されても、まったくわからない。訊いたら、また怒られそうだし。

「歴史を完全に隠ぺいしなかったのはなぜですか？ あんな曖昧な表現を使う意味でもあるのでしょうか？」

「いくら負の遺産と考える者がいたとしても、歴史を完全に抹消することは、この村を否定することになる。しごくまともな意見と思いがちだが、根底には焚書の儀式をとり行う村としての売名行為、私利私欲を全うする意識が混在している。両者が争った結果、あのような資料になってしまったんじゃない」

「負の遺産だとしても、七十年前までの過去話だし、隠す必要があつたのかな」

部筑は腕を組んだ。いや、二十五前に発行されたものだから、正確には九十五年前になる。しかし、仙人は自らの経歴を話し始めたので、訂正するタイミングを逃してしまった。

「七十年前なら、生まれた年だな」

意外だったのは、五十歳から数年間、会社員をしていたことだった。彼は出稼ぎといっているが、その前後は職歴が曖昧というか失業者だったので、どうやって生活していたのかとか、どうやって会社員になったのかが疑問だった。

「豊作を願う儀式なんてものは建前じゃ。当時の思想は村民の弾圧だった。出る杭を打とうと、お偉方や関係者が村に入ってくる書物を監査し、悪影響を及ぼす書物は焚書の対象になった。そして、終

戦を迎え、その風習も沈下していったんじゃ」

「終戦のおかげだったのか」

「戦争中にはもうひとつの策略があった。焚書に限らず、定期的に山の森林を燃やす行事もあり、戦争の被害にあっているよう見立てた。命を守る手段とはいえ、丁村にあった森林の、大部分が燃やされていた。結果、村は焼け野原みないな姿になってしまった」

「そこら辺の森林は、植え直したというのですか？」

「そうじゃ。彼らの希望は、豊かな森林を蘇らせ、村を再建させることだったんじゃ」

「小園猛さんという人が、三ヶ月前、低雲丘で自殺しているのって、ご存じでしたか？」

仙人は髭を摩った。

「知っている。だが、墓場を掘り返す真似をしたところで、何も生まれない。自害した者のお節介は誰も望まないぞ」

「どうしても知りたいんです」

僕は仙人に掴みかかろうとしていた。

「ふん、やっと熱が宿ってきたようじゃな」

口角を上げた仙人は、ゆっくり立ち上がり、傍らにある押入れの戸を開けた。押入れの内壁は鉄板で仕切られていて、何かしらの燃えカスと炭が散乱している。そこにゴミ箱の中身を放り込み、煙草に火を付け、ひと吸いしてから同じように放りこんだ。置いてあった扇子で仰ぎ、押入れの戸で隠れていた網戸を閉める。煙は上昇していき、僕達の部屋には入ってこない。恐らく外から見た煙突に繋がっているのだろう。仄かに部屋が暖まってくる。

「小園猛の父親とは知人でな。あいつは丁村の再建計画を率先していた人間だった」

彼が亡くなったのは二十七年前、小園猛が『ブビリオフィリア』を出版するずっと前だ。

「あいつと最後にあつたとき、村を一望できる山頂で『私の夢はかなったんだ。この村での役割はすべて果たした』それは遺言になった

た。死を目前にして、あいつは幸せな顔をしていたよ」

仙人は若くして妻も亡れていたと補足する。となると、親子揃って同じ運命を辿っていたことになる。そういうのは、遺伝するものなのだろうか。

小園猛は高校生まで、丁村に住んでいた。彼が高校時代といえは二十六年前、父親が亡くなった次の年、鹿野紀子が知らなかったのも無理はなかった。

「小園さんが丁村に愛着があったのは、父親の影響なんですかね？」

「ふふ、あのガキはいつも親といたからな」

小園猛が村を出たのも、父親の死が影響していたんだろう、と仙人は語った。

「自殺と断定したのは、何故なんでしょうか？」

「あの日は、雪が降った後じゃった。降り積もった雪は凍ったまましばらく残る。発見者は低雲丘に向いていた、足あとを辿っていたのじゃ。帰りの足跡、他の人間の足跡はなかった。最初から自らの命を、そこで断つつもりだった。丘の上で油を被り、自らの身体を燃やしてしまっても、やがて雪が炎の力を奪い、周りにある森林まで飛び火することはない。そこまで計算づくだったはず。彼が自殺してから三日後に発見されたのじゃ」

死亡推定時刻から三日後になって発見されたいらしい。詳しく知っているということは仙人が発見者だったのか。を問うてみた。

「違うな。発見者から聞いたんだ。丁度、君たちぐらいの歳の、女の子が尋ねてきた。何でも、丁村に住む動物の生態を調べようとしていたみたいだったがな。聞き込みをしていて、誰かに黒岩なら詳しいだろうとでも、教えてもらったんじゃない。ここら辺だと、熊が出る。やつらは冬眠しないから、気をつけろとは助言したな」

いつ熊に襲われても文句言えないのか。唾を飲んだ。

「だが、真意は違っていた。実は焼死体を発見したとかで、警察に連絡した後、しばらくしてから尋ねてきたらしい」

「しばらくとは、どのぐらいですか？」

「発見してから一週間後ぐらいじゃないか。今思えば、不思議だ。焼死体は生前の面影が焼失している、ひどい状態だというのに、彼女は怯えとは違う、憤っている感じじゃった」

「どうしてでしょうか？」

「さあ、警察の対応が遅れていたからか。あるいは——発見したとき、焼死体が誰だか知っていたのかもしれない」

「遺体の状況を詳しく、説明してきたんですね？」

「いろいろとな——」

そう前置きした仙人は、自らの体で状況を再現した。しかし、僕らの反応が今一だったのか、舌打ちをしてから、元の体勢に戻った。「うつ伏せに倒れていて、抱きかかえるように持っていた一冊の本が、燃え残っていたと聞いている」

その本のタイトルまでは知らなかった。

「小園猛さんの子供と会ったことはありませんか？」

「ない。小園猛とも、彼がガキの頃に会ったきりだからな。子供がいたのも知らなかったぐらいじゃ」

「その女の子は、小園由美子という名前ではありませんでしたか？」

「いや、吉村加奈子と名乗っていた」

偽名を使っていたとしか考えられない。美佐江は外見の様子を訊き出し、それが由美子と酷似していたからだ。燃え残っていた本は、恐らく『ブビリオフィリア』だろう。それなら、発見時に父親の遺体かもしれないと、特定できる。

小園由美子が失踪する前から、あまり連絡が取れなくなつたと、美佐江は言っていた。父親を捜しに、影のように行動していたんだとしても可笑しくはない。悩みの範疇を超えてしまうと、親友にも簡単に打ち明けられないことは、身をもって実感している。あの本を手に取って起こった現象、部筑や美佐江にいつ打ち明けられるようになるのか。

「そうか。あの子は小園の孫だったのか」

決定付けるのは早いかもしれませんが。部筑はやんわり否定した。

「小園さんの実家は知りませんか？　もし、小園由美子が発見者だったとすれば、そこに住んでいたかもしれないし」

「とつくに取り壊されているよ。もう二十年以上前にな」

だから彼は、丁村に来て自殺する前日に『希林寿』へ宿泊していたのだろうか。ならば、小園由美子も泊っていたのかもしれない。

「小園さんに、何かあったのでしょうか？」

「なぜ自殺なんぞしてしまったのかはわからん。だが、以前と比べて変わってしまったこの村に、失望していたに違いない」

そして、失踪している小園由美子は天涯孤独の身になった。

鼻を嚼る音がする。振り返った。美佐江の瞳は潤んでいて、急に立ち上がったと思えば、その場を立ち去ってしまった。

僕は追い掛ける。美佐江は玄関を出たところで立ち止った。

「こないで！」

「でも」　追い掛けたものの、慰めの言葉が浮かばない。

「お願い……少し、一人にしてほしいの」

「わかった。落ち着いたら、戻ってきて」

僕は二人に事情を説明した。

「二階の窓から見える『エコノミーテクノ』が建てられてから、村に何か変化はありましたか？」　部筑は訊いた。

「ひどいものだ。丁村は元々林業で成り立っていたからな。あの会社が設立してからというもの、楮、三桧、雁皮は次々と切り倒されて行った。あの禿げあがった斜面を見ただろう？」

僕達を叱った時とは違う、恨みを含んだような感情が込められていた。

「ええ。楮、三桧、雁皮は何に使われているのですか？」

「紙の原料じゃよ。主に和紙で使われている。あの会社はここらへん一体の敷地を買い占めたんだ。数年前まであった旅館も、取り壊されて、あの会社の敷地になっている」

「それって、金子さんという館主がやっていた旅館ですか？」

仙人は身体全体で息を吸った。

「そんな名前だった気がするがな。この住居も、立ち退きを迫られたんだが、断り続けた」

エコノミーテクノと、潰れた旅館の関係？ 僕にはまったく想像がつかなかった。

仙人は棺桶に入るまでずっと住み続ける、なんてさびしいことを言った。

「でも、あの会社の関係者は、自然破壊をしているわけではないと言っていますよ」僕はフォローを入れる。美佐江に聞こえているかもしれない。

「口ではなんとでも言えるんだ。だがな、やっている行為を見ていればわかる。あれは自然破壊と村民への侮辱だ」

火に油を注いでしまった。僕は話を変えた。

「一度、丁村のことを書こうとして倒産した出版社があると聞いているんです。その名前は知りませんか？」

「『藁久保社』だな。それを聞いてどうする？」

「いえ、知りたかったただけなので」

仙人は深く追求してはこなかった。

美佐江は戻ってきた。声をかけてやることも出来ず、沈黙が走る。すると仙人は音楽を掛け始めた。

「無音という音がする。あれが嫌いだ」

どんなときであっても、音に囲まれていないと彼の生活には支障をきたすらしい。寝るときでさえ、誰かの寝息か音楽をかけっぱなし、もしくは二十四時間、誰かといなければならぬ体質だという。そんな調子で、話は脱線していき、延々つづいた。

『希林寿』に戻ったら、夕食の用意がされていた。鹿野紀子は僕達の顔を見て、一瞬、緊張を含んだ表情をする。そして、直ぐに旅館の女将の表情に戻った。近寄ると、泣いていたのだろうか、目が充血していて瞼が腫れぼったい。

黒岩を尋ねて行ったことで疲労困憊になっていたせいもあり、せ

つかくの美味しい料理を食べていても、僕達の口数は少なかった。ふんわりした湯気を放つ浴場につかっていると、気分はましになった。鏡に映っている顔色も、だいぶ良くなっていた。

一通りの作業を済ませ、食堂に姿を現した鹿野紀子も含めて、テーブルを囲んだ。

「何か飲み物は如何ですが。お酒もありますよ」

飲みまくって、すべてを忘れてしまいたい衝動に駆られたが、

「いえ。アルコールは頭を鈍らせますので」部筑は断り、

「私は水を貰えますか？」美佐江はタオルを髪の毛に巻いた状態でそう答えたので、僕も水を貰った。

小園由美子の宿泊記録はなかった。ならば、父親の自殺を発見した前後は、どこに宿泊していたのだろうか。いや、それよりも、T村で殺人事件を犯そうとしている今は、どこに身を潜めているのだろうか。

「今朝の話しのつづきをしましょう」

「わかりました」

「『希林寿』の酷評をした館主の名前も教えてくれませんか？」

「金子さんです」

たいした驚きはなかった。もう、驚きの感覚が麻痺し始めているのかもしれない。

「金子さんの子供さんは、大学生ですか？」

「そうです。一年前にT村を出て、確か、神奈川の大学に通っています」

「名前は金子大輔？」

鹿野紀子は頷いた。そして、目を見開く。

「えっと、お知り合いですか？」

「知り合いではないんですけど、横浜で殺されました」部筑は戸惑っている鹿野紀子に構わずにつづけた。「連続殺人事件の被害者なんです」

「えっ？　で、ですが、本名が同じだけの、べ、別人じゃ？」

「それはわかりません。顔写真は持っていないから、ここで証明はできません。でも、今までの情報を聞いている限り、九十九パーセント別人ではないでしょう」

「そういえば、映るチャンネルの殆どが地方番組だったね。もしかして、こつちでは、その事件の報道されていなかったんじゃない」

部屋で一人になった時、美佐江は確認していたらしい。そして、
「わたし達はその犯人を探しているんです」

「しゃべって……いいのか？」

僕は恐る恐る訊ねた。

「鹿野さんなら、いいの。もう、ここまで来たら、黙っていても仕方ないでしょ」

美佐江は、横浜での事件を話し始めた。

「だから、わたし達はある本のことを知っていたんです」

「なんと、いつていいか……あの本を万引きまでしていたなんて」

僕達が数日間であつた衝撃をものの数分で味わっているのだ。

鹿野紀子が言葉を失うのも無理はない。

「実は、先ほど主人から連絡があつたんです」

それで、泣いていた痕跡があつたのか。

「今しばらく神奈川にいます。たぶん、金子さんの子供を追っているでしょう。金子さんの死の直後のことを、彼が知っているかもしれないから。私が戻ってきてちゃんと話してほしいって伝えたら、心配するなと——切られてしまいました」

鹿野紀子は口を抑えた。必至で涙を抑えているに違いない。慰める術をとるべきだ。しかし、僕は、聞いていてある憶測を思いついてしまった。これは、殺害動機として筋が通る。躊躇している暇はないと、自分に言い聞かせた。

「彼は万引きの常習犯だと報じられていました。ただ、あの本に限っては、犯人に命令されて万引きしたんだと思っています」

六つの目は、特に部筑と美佐江の目は泳いだ。

「どうして？」

沢村から借りたあの本を手を取ったときの、死者の無念を訴えかけて来るみたいなあの感覚。

《俺ハ 殺サレタ——》

《——父ノ 知り合イ 命令 サレテ》

《恨ミヲ モツテイタ 出版社ノ 本ノ万引キハ モウ止メタノニ

——》

《——過去ヲ 忘レ 本ノ万引キハ シタクナカッタノニ》

《二度ト 見タクモカッタ アル本ヲ盗ミ——》

《——ソレヲ持ツテ アル場所ニコイト 指定サレタ》

《母親二ハ ソノコトヲ言エナカッタ——》

《——友達ニモ 先生ニモ イヤ 友達ナンテイナカッタケド》

《誰カニ 言ツタラ 万引キシテイタコトヲ バラスッテ 脅サレ
タカラ——》

《——学校ニバラサレタラ 省カレル 母親二ハ 迷惑ヲ 掛ケタ
クナカッタ》

《モウ ワスレタカッタ 父親ガ 悪イコトヲ シテイタコトモ
スベテ——》

《——家ノ 近クデノ公園デ 着信ガアッタ》

《指定サレタノハ 神社デ 本ヲ 持ツテ 行ツタ——》

《——誰モ イナカッタ ト思ツテイタラ 後カラ 首筋ヲ切ラレ
タ》

《何ガ 起コツタノカモ 分カラズ カハ抜ケテイッタ——》

《——俺ハ 変ナ 機械デ 切刻マレ》

「金子大輔さんは万引きの常習犯であることを犯人に知られていた。それで犯人に脅されていた」

「脅されていた」

と言った部筑は以前自分で提案してきた推理を思い起こしているのだろう。深く頷いた。

「金子大輔さんが万引きの常習犯だとわかるまで執着する人物がいるとするならば」僕は鹿野紀子を見つめた。

「鹿野さんの、ご主人ではありませんか？」

僕は歯を食いしばった。これは憶測だ。推理だ。鹿野紀子の傷口を広げている。しかし、もうこれしか考えられなかった。

K・雪

カーテン越しに白い光が漏れていた。バルコニーにこんもり積もった雪の塊があり、降ってくる結晶が積み重なっていく。太陽は遮断されているのに、目が眩むほどで、それは見えていた景色を妨げると同時に、見えなかった景色の輪郭をはっきりとさせていた。

「雪だ！」

僕の声で部筑が起きた。腫れぼったくなっていた目を、白い光から背ける。

「寝ている場合じゃないぞ。起きろ、雪だ雪」

雪を見たのは二年ぶり。しかも、これだけの積雪は生まれて初めてだった。部筑はゆっくり起き上がると、服を脱ぎ始め、ボクサーパンツ一枚の姿になる。窓を開け、エビ反った体制で積もった雪にダイブした。

「くおー」

彼なりの目を覚まさせる方法らしい。寝起きとは思えないテンションを感じしていたのだが、彼は股間を抑えてうずくまった。僕も背中から飛び込んでみる。身体に冷たい粉が染み込んでくるようだ。そのままの姿勢でいると、眼球に雪の結晶が入ってきた。

どれも気持ちよかった。

少しの間、事件を忘れた。雪と友達になれるかもしれない。

事件がなければ、現実を忘れさせてくれるぐらいの、楽しい楽しい三人で行く旅行だ。

僕という人間が存在しなくても、地球が回るように、まったく関係ないところで事件が起こっていて、勝手に解決してくれれば、どれ程、気が楽なんだろう。

そんな、あらぬ想像をしていた。

部筑は低雲丘の偵察に行った。義男が狙われている場所がそこだとすれば、犯人は必ず現れると考えているのだろう。鹿野紀子は仕

入れに出かけている。『希林寿』のロビーには僕と美佐江の二人きりだった。

「話、聞こえちゃったんだ」

「えっ？」

「昨日の黒岩さんがしていた話。あの人、そうとう憎んでいたみたいだった」

「気にするなつて。美佐江が悪いわけじゃないし」

「けど、あの会社を建てようと提案したのは父さんよ。それに……」
美佐江の言いたいことはわかっていた。僕は黙って頷いた。

「余り考えない方がいいね。ありがとう信二」

「ねえ、美佐江の父さんつて、『エコノミーテクノ』でも偉いの？
横浜では部長でしょ？」

「取締役員だったかな」

「偉すぎる……」

「殆ど顔を出さない役員だからね。大学だと幽霊部員みたいな存在かな」

両手を振った。

「全然違うつて」

「そうかな。父さんは父さんと思えないし。偉すぎるなんて考えたこともなかった」

「じゃあ、父さんが大統領だったらどうなる？」

「やだよ。そんなの」

金髪が揺らめいた。美佐江の笑い声は、耳を癒してくれた。

午前が終わる頃、五郎さんからの連絡があった。正直、盛り上がっていた僕達の会話を邪魔されたので、苛立つものがあった。美佐江が持っている受話器に顔を近づけた。

『田中満高のことなんだけどな』

「何かわかったの？」

『彼とは面識なかったの？』

「初めて聞いた名前だよ」

彼は声を潜めるように言ってきた。田中満高は半年前に、働いていた工場をリストラされ、会社の寮からも追い出されていた。顔写真も見せてもらったらしく、どこかで見た顔なんだよな、なんて五郎さんは呟いていたが、結局、思い出せない、と肩すかしを食らった。

そして、頭髪の話をした。

『美佐江ちゃんの書斎にあったものと一致したらしいぞ』

あの長い髪は小園由美子じゃなかった。被害者の持っていた本が、美佐江の書斎にあったものだと思っていたのもあり、どこかで五郎さんの言うことが真実であつても不思議ではないと思っていたのだけれど。

『不法侵入してから殺されてしまったんだな。でもよ、なんで美佐江ちゃんの書斎だったのかね？』

「わたしに訊かれてもわからないよ」

美佐江は視線を投げてきた。僕は頭を横に揺らした。

『彼らと一緒にいるのか？』

「うん。一人は出かけているけどね」

『なら伝えておいてくれよ』

もし、僕が死者の持っていた本から魂を読みこむ力があつたとするならば、阿武隈川へ合流する川で拾った本は彼の魂が宿つていかなかった本ということになる。魂が宿つていけるとするならば、あの蛍光性のカバーの本しか考えられなかった。

五郎さんが電話を切るうとし、美佐江の携帯を奪った。

「すいません。ちょっと話が」

『あゝ君か。えっと』

「信二です。それより、今の情報は誰に教えてもらつたんですか？」

『刑事の沢村だよ。前に話しただろ？ 君達二人で来た後、商店街の人間に聞き込みをしていて、俺のところに寄つたんだって』

携帯を握る力が強まった。

「僕達のことは何か訊かれましたか？」

『ああ、訊かれたよ。君達と知り合いだったらいいじゃないか。まあ、君達とは最近あつたばかりでたいして知らないし、しゃべった後が面倒だろ……適当に答えておいたよ』

彼が間を開けたのは、美佐江が部筑の機嫌を損ねないようにしていたからだろう。

「沢村さんと連絡は取れますか？」

『連絡先は知っているからな。どうしてだい？』

「ええ、ちよつと。では、伝えておいてください。今度、阿武隈川での被害者が持っていた蛍光色の本を、貸してくださいと」

五郎さんに連絡先を聞いてもよかったのだが、逆探知されて居場所を特定されるのを懸念していた。

『ダメだ。蛍光色の本は誰にも教えていないことになっているんだからよ』

「ねえ信二。どうして、そんなものが必要なの？」

——死者の魂を読みこむため。

とは言えない。

「美佐江の本だったかもしれないんだろ。本人の手に戻るのが普通じゃないか？」

「そうね。貸して」美佐江に手渡す瞬間に接触があり、手のぬくもりを感じ、身体の内からも熱を感じた。

「五郎さん。さっきの話、ちゃんと伝えておいてね」
唸っている。

『わかったよ。で、美佐江ちゃん達は今どこにいるんだ？』

「教えてほしい？ ひ・み・つ」

『えっ、ちよつと』

美佐江は一方的に切ってしまった。下手をすると、自分の孫ぐらいの人間に翻弄されている五郎さん、少し憐れみがあった。

「前から考えていたんだけどね。田中満高って、ストーカーしていた人かもしれない」

それは部筑も考えていたことだ。五郎さんがどこかで見た顔だと呟いたのは、美佐江を辿って商店街に足を運んでいたからなのかもしれない。僕は敢て知らなかったふりをする。

「マジで。心あたりがあつたの？」

「うん。被害者の聞いている様子と、わたしが見た限りの姿が似ているの」

「そもそも、なんでストーカーにあっていたんだ？」

ボディーガードに僕ではなく、部筑を選んだ。僕はそんなに頼りないのか。なんてことは、言えない。

「由美子が失踪する前にね、公園で蹲っている人がいたの」

それが五カ月ぐらい前、美佐江は由美子と二人で遊び、その帰りだった。ストーカーになる前の彼は、心配して声をかけた二人に、首を横に降り、無言で立ち去っていた。

「それから由美子は、彼の姿を頻繁に見るようになったの」

彼は声をかけてくる様子もなく、ただ由美子の後をつけてくるようになっていた。住んでいる部屋のドアに、携帯番号だけ書かれた紙が挟まれていたこともあった。

「誰かなんて、直ぐにわかるでしょ？ そんなことするの、ストーカーしかないし」

「被害は？」

「実際、被害にあつた話は聞かなかつたけど、あるときから急に連絡が取れなくなったから、不安だったの」

彼は最初、小園由美子のストーカーだったが、彼女の失踪を境に、美佐江のストーカーに代わった。

「部筑はそのストーカーを見た記憶がないって言っていたよ？」

「影でコソコソ観察でもしていたんでしょ。わたしが部筑を連れて歩くようになってから、姿を見なくなつたし、彼氏がいるのを確認してあきらめたんじゃない。けど、そのストーカーは、わたしに執着していたんじゃないって、由美子の消息を聞きたかつたんじゃないかって思っている」

「美佐江は、声掛けられなかったの？」

「一度もないよ。何か話そうとしている感じもあつたけど、避けちゃったから」

僕の中でひとつのストーリーが浮かんた。

「こつも、考えられないかな——」

美佐江にストーカーをしている最中に、小園由美子の消息がわかつた。再びストーカーをしていくうちに、彼女がやろうとしている殺人も、盗聴とかで知つた。それで、美佐江を追うのをやめた時期と、部筑を連れて歩くようになった時期が重なつた。止めようとしても、何らかの理由があつてできなくて、しかし、小園由美子の行動を止めさせるため、彼は美佐江の住んでいる書斎に向かつた。美佐江に相談をするために。でも、美佐江は海外旅行中だつた。僕と部筑はこのT村にいた。ストーカーは自棄を起こして侵入し美佐江の書斎を荒らしてしまふ。自分の計画が知られたかもしれないと思つた彼女は、ストーカーを追つて、連絡し、阿武隈川で殺した。

「あまり信じたくない話だね」

確かに、彼の状態からすると、美佐江が殺したように見せかけている。彼女が義男さんを狙っているのならば、美佐江に罪をなすりつけようとしても、何ら不思議ではない。

「他の事件と殺害方法の手口が違うでしょ」

僕の考えでは、横浜、新横浜で発生した事件は違う人が行つていて、小園由美子はT村での事件だけをするつもりだつた。

沢村が疑つていたように、横浜、新横浜の事件は女の子一人で行える事件ではない。死体を他の場所から運んで、しかも人通りが多い場所だ。考えたくはないが、鹿野隆の単独犯か、他の人間と協力してやつた犯行だと思う。誤逮捕だつたのなら、出所してから金子の子供である金子大輔と会い、いざこざがあつたかもしれない。殺す直前に、事件のきっかけとなつた本『ホテル、旅館ソムリエ』を盗ませて、当時のことを思い出させようとした。

そして、全身に百十箇所の傷を負わせた状態で殺害した。被害者

の状態は、第一、第二の事件と酷似している。城島博志にも何らかの恨みがあつて、同じ方法で殺害した。

「そこで、田中満高という、思いもよらない人間に殺人計画を知られてしまい、仕方なく、殺した。美佐江がいくら親友であれ、殺害計画なんて知られたくないだろ？」

「うん、わかつていたら、止めようとしたし」

美佐江は時計を見た。午後二時、義男が返ってくるまで時間があつた。

L・手直し前の原稿

部筑が偵察から帰ってきて、改めて、僕達の考えを話した。そこで美佐江は、小園由美子が『密造書展』の合鍵を持っていたことを打ち明けた。その結果、『ブビリオフィリア』通りに、失踪している小園由美子以外にも殺人を犯している人間がいるのだと、考えが固まりつつあった。あるいは、左近字図書館で万引きした人間か、小園猛と個人的に繋がりのあった人間が『ブビリオフィリア』を手に入れ、その通りに殺人を実行している。出所して失踪中の鹿野隆なら、それを実行しえるだろう。その際、イレギュラーな阿武隈川の事件が起こった。

夜、仕事が終わった義男は荷物と共に、『希林寿』へと姿を現した。美佐江の強張っていた表情は緩んでいく。

「参ったよ。初日から大雪だからね」

コートに付着している白い粉を振り払った。

「ちよつとは連絡入れてよ。休憩時間ぐらいあるでしょ？」

「おいおい、無茶言うなつて。今日は出張の初日だぞ」

まるで、新婚夫婦のような会話を耳にしてから夕食を終えた僕達は、食堂で義男を交えて他愛のない会話をし、僕と部筑の泊っている部屋に集まった。

義男はスニーカーから、緑色の色紙を取り出した。持ってくるようお願いしていたカバーだけの『ブビリオフィリア』だ。素材はビニール製だろう。手に取って眺めてみると、タイトルが印字されているだけで、ISBNコードも作者も印字されていない。

美佐江が話し始めたのは、鹿野隆と第一の被害者に関係がありそうだという話ではなく、美佐江の書斎の本が何者かに荒らされたことと、阿武隈川であった事件だった。ただ、大まかな説明だったので、被害者のストーリー説や殺害された状態は省かれている。

「なんで黙っていたんだ？」

大人しく聞いていた義男の眉は中央が途切れているVの字になる。
「怒らないでよ——だって、心配かけたくなかったから」

「後は、『ブビリオフィリア』と関係ない事件だからだろ？」

部筑の助け舟に、美佐江は頷いた。

「いや、怒っているわけではないんだ……」

と口を噤む。心なしか、義男は青ざめていた。

「どうしたの？」

「うん、私は根本的に間違っていたのかもしれない。小園が発行した『ブビリオフィリア』通りに殺人が起こるとばかりに考えていたが——まったく違ったのか」

ここへきて、義男の信念がぐらつき始めた。元々、『ブビリオフィリア』とは関係ない殺人事件だったのか。そう思うと、今までの事件が小説をなぞっている説は、ただの偶然になる。それはそれでよかった。義男が狙われているという事実も帳消しになる。しかし、なぜ義男は別の事件と思われる阿武隈川の事件を聞いて、考えを改めるようになったのか。別の、イレギュラーな事件だとは思わないのか。

「じゃあ、丁村で父さんが狙われていないのかもしれないのね」

口角を上げた美佐江は、顔色の優れない義男を元気つけようとしている。

「いや、私が狙われている事実は変わらないよ」

「どういうこと？」

義男は咳払いをする。

「小園が手直しをする前の『ブビリオフィリア』の原稿には、阿武隈川の事件も書かれていたんだよ」

と、静かに語る義男に対し、皆、一様に驚きを隠しきれなかった。
「手直しをする前？ それって小園さんが完成させてすぐのやつだよね？」

頷いた義男は、

「なぜか、阿武隈川の事件だけは違和感があつたんだよ——」冗談

めかしてあてつけを言っているふうだ。

「十九数年後の設定にしては、殺害方法として原始的過ぎるし、他のものと比べて浮いていた。だからその内容は削除しろとアドバイスした——戸惑いはしていたけどね。出来あがった本を読んでみると、阿武隈川の事件は書かれていなかった」

「殺害方法はどう書かれていました？」

部筑は椅子から腰を浮かして身を乗り出した。

水死体。縄に括られた本と首。被害者は二十代の無職、義男の口から出た言葉は、現実を起こっている殺害方法とまったく同じだ。

「……そんな」

「要するに、今起こっている事件は、私がアドバイスする前の原稿の内容をなぞっている」

「けど、他の事件には、殺害方法の詳細が書かれていなかったんですよ？　なんで阿武隈川の事件だけ……」

「理由は簡単だよ。他の事件の殺害方法は書けなかったんだ。本が人を殺したように見せかける方法は、十九年後ぐらいになってみると書けないと思ったんだろうね」

ただ、十九年後の今となっても、少なくとも僕達の間で、殺害方法はまったく思い付いていない。

「他に違いはなかったの？」

「原稿と発行された本との違いはそれぐらいだったよ」

「その原稿を読んだのは、小園さんと石崎さんだけですか？」

「わかりません。彼が手直しをする前の原稿を残していれば、家族も見えていたかもしれませんが」

当時はパソコンが普及していない時代だ。手直し前の原稿用紙に阿武隈川の事件に赤線を入れていたとしても、文字は読めるだろう。コピー機ぐらいはあるだろうし、残っているのは、充分に考えられる。

鹿野隆の話をした。新たに浮上した犯人説に、義男は神妙な顔つきになった。

「そんなことがあったんですね」

「訊き忘れていたんですが。小園さんが勤めていた出版社の名前を教えてください」

「『藁久保社』です」

『どん底からの億万長者への道』の著者が、本を出した出版社でもある。

「実は、六年前、丁村の特集をしようとしたのも、『藁久保社』だったんです。小園さんと繋がりがあるように思いませんか？」

「彼がそれで丁村の取材をしていたのなら——明日から、私も捜査の協力をしますので」

と力強い握手をしてきた。

M・死者は語る

火曜日の朝、昨日と同じく、部筑は低雲丘の偵察に出かけた。適当に頷いて、彼を見送る。調査報告をしてこないのは、めぼしい結果が得られていないことが垣間見られた。

ロビーで待機していると、忘れもしない人物が現れた。身を隠そうとしたが、遅かった。沢村だ。

——なんでここに？

五郎さんにも居場所は教えていなかったはず。丁村へ旅行した話としてはいたが、一回行けば、当分訪れることはないと考えerのではないか。いや、刑事にはそんな常識が通用しないのか。

僕の顔を確認し、ほほ笑んでくる沢村は建物内に入ってきた。

「いや、冷えるね」

「ええ、まあ」

「もう、本を持ってきてほしいってお願いしておきながら、いなくなるんだから」

「そのために来たんですか？」

「と、言いたいところだけどね——」僕の顔から視線を外し、旅館内に目を配らせた。

「あれ？ 女将さんは留守なのかな？」

「いえ、さつき見かけたので、旅館内にいると思いますけど」

事前に連絡を入れていたのだろうか、沢村は『希林寿』の女将さんを知っている様子だ。なら、僕達が宿泊していることも鹿野紀子から聞いていたのかもしれない。

「どうして沢村さんがここに？」沢村は、それはこっちが訊きたいと冗談半分に答えてから、

「被害者の金子大輔さんと城島博志さんは丁村出身なんだよ。聞き込みにくるのは当然だろ？」同意を求められても困るばかりだ。

「城島博志さんも、ですか？」

「あれ。その様子だと、金子大輔さんが丁村出身だったのは知っていたのかい？」

——しまった……

どう誤魔化そうが迷っていると、沢村は口角を上げる。

「ここで会えるなんて奇遇だね。実はね、君たちに丁村の話を聞いてから、被害者の経歴をいろいろ調べてみたんだ」

僕達に執着しているとでも言いたいのだろう。頭の中は、この場面をどう乗り切るかでパンクしようだった。

「城島博志さんは六年前まで、丁村に住んでいたんだ」

わけあって、城島博志は神奈川の方に移っていた。ここ数年のことらしい。それで、本の万引きを繰り返していた。だけど、中流家庭みたいだし、どうして本の万引きをする必要があったのか。を自問自答してから問いかけてきた。

「金に困っている様子もなかった。どう思う？」

「そうですね」

万引きが常習化しているのなら、味を占めていたのかもしれない。お金よりもスリルを求めていたりして。

「そうだよね——」彼なりに納得していた。

「あ、約束の本、持って来たよ」

沢村が本を持っていたのは、いつ僕にあっても良いようにとのことだった。沢村の持っている『どん底からの億万長者の道』は文庫本だった。

触れてみる。待っていても、あの感覚がこなかった。

胸をなで下ろした。本を触る度に激しい頭痛を味わってしまったら、トラウマになりそうだ。

ページを開いた。総ページ数が被害者の傷の数と違うのはすでに知っていたが、気になってはいた。二百七十ページ目、文字の脇には線が引かれていた。しかも、義男が指摘してきた箇所と、殆ど一致している。

「この本、少しの間、貸してくれませんか？」

時間が経てば、あの感覚が来るかもしれない。

「ここにいる間だったらいいよ」

沢村は何日か下損に滞在する予定らしい。

ただ、あの感覚がなかったのは、なぜだ。いや、城島博志が死んだ後になって、犯人が彼に持たせたものじゃないのか。殺害された時間を考えれば、本人が万引きして、読み、線を引いている時間もなかったはずだ。

鹿野紀子は浴場のある方から歩いてきた。警戒しているのだろうか、僕達を見て、片目を歪ませた。

「ちよつと、この女将さんに用があつてね。君は席をはずしておいてくれないか？」

半ば、強引にその場を追いやられ、二階に駆け上がり、僕の会った刑事が来ていることを知らせた。

「マジで！」

「しつ。声がデカイって」

沢村と鹿野紀子はロビーを抜け、食堂で話しあっているようだった。

僕達は忍び足で廊下を歩き、彼らから見られない角度の位置で、聞き耳を立てた。

断片的だが、その話声が聞こえて来る。どうやら、ご主人の失踪した経緯を説明しているらしかった。

話を聞きながら、文庫本を捲っていた。

城島博志が死んだ後になって犯人が彼に持たせたのだとしたら、傷の数と同じページ数の、線の引かれている箇所の意味があるはずだ。

■お金はどこにでも転がっているの項目を読む。これは、出版社の売上を落とすような結果になる。『どん底からの億万長者の道』のハードカバーが出版されたのは七年前、鹿野隆は、部筑がそうであったように『希林寿』を繁盛させたいがために、読んで、失望したのかもしれない。

鹿野隆と小園猛は知り合い以上の関係で、鹿野紀子はたまたまそれを知らなかった。『藁久保社』が倒産したのも、この項目に書かれているような内容の本が出回っている責任だと思い始めた。鹿野隆が出所した後に、小園が自殺していた。

そして、横浜、新横浜と事件が起こった。『どん底からの億万長者の道』の著者に脅迫状を送ったのは、鹿野隆だろう。しかし、指定した場所に現れたのは城島博志だった。誤って、恨みもない彼を殺してしまった。こじつけでも、一応筋が通る。

二人の会話は、ひと段落ついたようだった。

『・・・・・・は、神奈川の方で殺害・・・・・・た。彼は・・・・・・の・・・・・・いた・・・・・・ったみたいで』

『・・・・・・さん、あの・・・・・・。だっただんですね。知りませんでした』
沢村の声はこもってあまり聞こえなかったが、金子大輔が殺された話をしているのだろう。そうだとすれば、鹿野紀子は知らなかったふりをしていることになる。

『・・・・・・に・・・・・・申し訳ありません。できれば・・・・・・を・・・・・・にお願いしたいのですが』

『ええ、・・・・・・はしません』

なぜ、沢村は謝っているのか？ 営業時間外の聞き込みをして、悪いと思っているのか。いや、違う。金子大輔の殺人を止められなかったことに、良心の呵責があるのだろう。T村民にはまだ告げ口はしないでくれとお願ひしていて、鹿野が承諾しているに違いない。
『ぜんぜん、聞こえなくない？』

美佐江は顔を近づけてきて、息を吐く音にも負けそうな声で言った。

『うん』もう少しで、唇が触れ合いそうだ。足元がおぼつかなくなっている。

『もっと近づいてみよう』

『バレるよ。それより、後から鹿野さんに聞けばいいだろ？』

下を出した美佐江は、そっぽを向き、階段に足を降りようとして

いる。勢いは止まらなかった。

——ダメだ！そこは食堂から見えてしまう。
話は中断した。

「お客さんなんですよ」

「ああ、どうも」

彼らは顔の向きを変えたからか、声はつきり聞こえるようになった。美佐江は階段を下り、沢村に話しかけた。よく考えれば、彼女が席をはずしてくれとは言われていないし、僕の友達だとも紹介していないのだ。焦っている自分が情けない。

「こちらは刑事さんです」

「へえ、はじめまして」

「この時間にお客さんを受け入れるのですか？ 受付時間は確か午後だったような」

「ええ。長く宿泊して頂いていますので。そのようなお客様に、受付時間は設けていないんです」

「ああ、なるほど」

沢村が、僕も長く宿泊していることを知ってしまったのを意味していた。

「すいません。お邪魔してしまつたみたいで」

「あの、失礼ですが、お一人で宿泊されているのですか？」

「いえ、父親とです。父親の出張先が近くなもので。ついでに遊びに来ているんです」

「親孝行なんですね」

「女房役ですよ」

美佐江は階段を登ってきた。

腕を掴まれる。そのまま部屋まで引き寄せられた。

「階段を二歩降りた辺りなら、食堂からは見えない。信二はそこで本でも読んでいるふりして、話を聞いていて。で、何で神奈川の刑事さんがここにいるか、ちゃんと説明してよ？」

「わかった」

階段に、そつと座る。さつきよりよく聞こえた。話の流れから、城島博志が引き合いに出されていることを確認できた。彼は五十歳の独身であり、T村に住んでいたときの城島博志を知っているかを訊いていた。

『直接、お話したことは殆どありませんが、噂なら』

『どんな噂ですか？』

『すごく真面目な方だと。文句も言わず仕事もちゃんとしていると誰かに恨まれているような話は聞きませんでしたか』

『いえ。悪い噂は知りませんよ』

沢村は頭を悩ませているのだろう。しばらくしてから、

『あまり見たくない品かもしれませんか？』

テーブルに何かしら着地して、鈍い音がする。本だろうか？

ご存じですねと訊き、鹿野紀子は肯定した。

『『ホテル。旅館ソムリエ』の絶版になった本ですよね？』

『ええ。実はこの本、城島博志さんの持っていたハンドバックの中に入っていたんです』

——ん？

どうしてだろうか。城島博志と鹿野隆の事件に何か関係があったのか。

『もう一度、思い出してみてください。何かご主人と関係があったとか、知りませんか？』

長い沈黙。沢村は時間を持て余したのか、失礼と言って立ち上がった様子かと思うと、入口へ歩んでいく足音がする。僕は慌てて立ち上がり、駆け足で隠れた。沢村は入口を出ると、携帯を掛けた。その後ろ姿は、やがて見えなくなる。

駆け足、階段を下りた。鹿野紀子は目を見開いている。

「ちよつとその本貸してください」

偏頭痛、あの感覚が襲ってくる。ページを捲り、見ているふりをしている。

《——金子ヲ 許セナカッタ 金子ヲ 殺シタノハ私ダ》

《私ハ旅館ノ 従業員ダッタ——》

《——旅館ガ ツブレテカラ 一年経ッテイルノニ》

《給料ノ 未払イヲシタイタ金子ヲ 許セナカッタ》

《——旅館ハ 新シクデキタ会社ニ 売却サレ 資金グライ アツ
タハズ》

《私ハ 最後ノ一人ニ ナルマデ 旅館ヲ 支エテイタノニ——》

《——話シニモ 応ジナカッタ タダ コノ本ヲ 渡サレ 勉強シ
ロト》

《偉ソウニ言ツテキタ 金子ヲ 殺シテイタ——》

《——信ジラレナイコトニ 別ノ人間ガ 犯人トシテ 逮捕サレタ》

《私ハ 不幸中ノ幸イダト 隠シ通シテキタガ》

《——突然 私ガ殺シタコトヲ 知ッテイル人間ガイタ》

《証拠モ アルヨウダッタ——》

《——私ハ 誰ニモ バレテイナイ トイウ 自信ハ 無カッタ——
——》

《ソノ人間ハ 脅迫 シテキキタ——》

《——私ニ 指定ノ本ヲ盗ンデ 指定ノ場所ニ 来イト》

《書店ヲ出テ アル青年ト ブツカッタ——》

《——彼二ハ 悪イト 思ッテイル》

《指定ノ場所デ 待ッテイタ 新横浜ノ 裏路地ダッタ——》

《ソシテ サバカレタ——》

M 1・死者はさらに語る

偏頭痛が収まり、深呼吸してから本を開いた。僕が原因で、殺されたのではなかったと知り、安堵した。ただ、すべてを信じるまでに、時間がかかりそうだった。

百十ページに『希林館』のことが書かれている。ひどい酷評だった。

「あの？」

「すみません。ありがとうございます」

元のあった位置に戻す。

階段を上がっているとき、沢村の視線を感じた。気がついていないふりをして、自室へ入った。

旅館の元従業員である城島博志が金子を殺した。

鹿野隆は、何かしらで情報を掴み、城島博志を脅し、殺したのだ。思考が固まり、いつまでも繰り返される。その他は何も考えてはならない脳になったかのようだ。

僕はその呪縛から解き放たれなくて、テレビをつけた。地元のキヤスターらしき人が、熊の被り者をしたマスコットキャラに襲われそうになり、笑いながら黄色い悲鳴をあげていた。

夕方、仕事を終えた加藤は図書館の駐車所で待っていた。昼前に沢村が出ていったのを見計らって連絡し、『希林寿』にいるから来てくれないかとお願いしたところ、断られたのだ。美佐江を残して僕は図書館に出向いた。傘が重い。道中、除雪車のおかげで、道に積もった雪は浅かったのが幸だった。

挨拶をしても、うつむき加減であまり目を合わせようとしない。彼女の車なのだろう。フロントガラスに積もった雪を手で掃くと、なかに入るよう誘われた。

「すみません、急な話で」

加藤は首を横に振る。僕がその仕草を確認していないかもと不安になったのか、

「いえ」と、言葉で否定した。

「黒岩さんと会いましたよ」

「そうですか。癖のある人だけど、あれでけっこう優しいところもあるんですよ」

「何となくわかります。色々教えてもらいました」

辺りは暗くなっているが、駐車場に積もった雪明かりで、車のライトを付ける必要がないぐらいだ。ヒーターによって、悴んでいた手が生きかえる。

僕は前に話した時となるべく矛盾が生じないように、事情を説明した。友達の父親と作者が知り合いである。そんなところだ。

「万引きされた本のお話をしましょう。誰が盗んだのですか？」

「万引きをした人の目星はついていません。いつか、彼が返しにきてくれることを願って、大事にはしていなかったんです」

彼、目星がついている、か。その前に訊きたいことがあった。

「小園猛さんという方は訪ねてきませんでしたか？『ブビリオフイリア』の作者なんです。その人も左近字図書館から自分の本を盗まれたことを知っていたんです」

「ええ、来ました。三ヶ月前ぐらいだったでしょうか。必要になったから、戻してほしいとおっしゃっていました。ですが、事情があって、この図書館に置いてないことを説明したと思います」

加藤が対応していなかったこともあり、変な様子だったかは知らないらしい。

「では、盗まれたのはもつと前ですね。いつですか？」

「小園さんが来る、えっと、一ヶ月前ぐらいです。丁度、私もいたんですけど、彼の姿を見て、驚いてしましまして。本を持って出ていく彼を止められませんでした」

「彼とは誰なんですか？」

「万引きをしたのは、『希林寿』の女将の夫、鹿野隆さんです」

予想通りだった。彼が出所してから『ブビリオフィリア』を盗み、その通りに殺人を実行している。ならば。

「鹿野隆さんと小園猛さんに繋がりはあったんですかね？」

「さあ、そこまでは、知りません」

鹿野隆さんが、なぜ本を盗もうとしていたのか訊いても、今の反応と同じだった。ただ、

『ブビリオフィリア』を盗んでいる時点で、二人に何らかの関係があったと考えるべきだろう。

「だから、『希林寿』で話を出来なかったんですね」

「ええ。前にご連絡頂いたときも、勤務中で、聞かれては困る内容だったのだ」

「ついでで、申し訳ないんですけど、小園さんの実家に案内してもらえませんか。ここの近くにあったと黒岩さんが言っていたので」
「ですが、今は取り壊されていますよ？」

車は、雪道の機嫌を損なわないよう、自転車をこぐぐらいのスピードで走った。海や『希林寿』のある方角から登ってきて、左近字図書館、そのさらに奥の道を進む。そして、加藤は路肩に停車させた。歩くのか、と思えば、車を降りた僕は、小園の実家があった敷地の目の前に立っていた。

長方形の敷地があり、森林がそれを囲んでいる。ところどころに小さな枝が、雪から顔を出している。知っている人と一緒にこなければ、民家の跡地であることすら気がつかなかったかもしれない。

僕は適当に敷地を歩いた。

「ねえ、小園さんって……」

と声を掛けてきた。

「知っています。三ヶ月前に低雲丘で自殺しています」

加藤は白い息を吐き出した。

「そう——左近字図書館に、あの人の本が置いてあれば、自殺しなかったかもしれない、なんて考えるんです」

自殺の動機にしては、あまりにも軟弱な理由に思えると僕は反論

した。加藤は小さな積み重ねが、当の本人を追い詰めていくのかもしれないのだと、眉を沈ませた。

「誰の責任かは、本人にしかわかりませんよ」

「万引きされそうになったら、勇気を振り絞って声をかけなくては いけませんね。図書館の本は村民の方の本ですし、私達もその責任を果たすって強く思っただんです。ダメですか？」

「これからでも遅くないですよ」

照れ笑いした鹿野は、随分と若くみえた。

「そうそう。ちよつと前に刑事さんが来たんですよ」

神奈川県警の沢村だった。加藤は見覚えのある顔だなと思って いたが、沢村の方は初対面ですよと否定していたらしい。

「気のせいだったみたいで——同年代だったし、誰か同級生に似て いたのかもしれませんが」

年齢を聞かれて嫌な顔をしなかった加藤は沢村と同じく四一歳だ った。言われてみるとそれ位に見えるから不思議だ。

「図書館の本の話でもしたんですか？」

「いえ。鹿野隆さんの話は何もしていません。ある事件の捜査をし ているらしくて、その聞き込みでした」

加藤の目は、僕の顎の辺りに集中していた。

「顔に、なにかついていますか？」

「その刑事さんと、同じようなことしていると思っただけです」

「僕の場合、刑事もどきですから」

僕は白い地面に正座して、下腹に手を当てて「なんじゃこりゃ！」 と叫んだ。やってみて赤面したが意外に、加藤は笑ってくれた。

『希林寿』で待っていたのは、温かい夕食でも、二人の親友でもな く、沢村だった。

黒岩に会ってきたらしく、疲弊した面持ちだった。

「初対面のことん説教されてね。散々だったよ」

適当に相槌を打っていると、考え込んだ様子で、

「警察か刑事に恨みでもあるのかな」と独り言だった。

何となくその場面が想像できる。ただ、沢村は愚痴をこぼしに來たわけではなさそうだ。話を切り上げ、蛍光性のカバーの本を取り出した。

「この本も渡すつもりで忘れていたな。五郎さんから聞いてね」
受け取ってみたが、偏頭痛は襲つてこなかった。ごく自然に、身体の中に言葉が染み込んでくる。

《——俺八 脅迫状ヲ 書イタ》

《世ノ中ニ 捨テラレタ存在——》

《——ソレデ 女ノ子ト 付キ合エルノナラ》

《女ノ子ノ 才願イヲ 喜ンデ ヤッタ——》

《——シカシ ソノ女ノ子ハ 突然 消エタ》

《脅迫状ヲ ダス 前カラダッタ——》

《——消エテイタノカモシレナイ 何処ニモイナカッタ》

《友達ノ 金髪ノ子ニ 訊キ出ソウト 商店街ヲ 訪ネタ——》

《——金髪ノ子ハ 不在ダッタ ヨウニ 見エタガ 少シ 違ッタ》

《明カリガ消エテイル 二階カラ 声ガ聞コエテキタ——》

《——外カラハ 何ヲ言ツテイルカ マデハ 分カラナイ》

《俺八 一階ノ戸ヲ 開ケタ 鍵ガ開イテイタ——》

《——身体ガ勝手ニ 二階ヘト 進ンデイタ》

《ソシテ アル 犯罪計画ヲ 知ツテシマッタ——》

《——俺八 驚キ 物音ヲタテテシマイ 明リガ ツイタ》

《中年ノオトコト 一緒ニイタノハ——》

《——金髪ノコ デハナク 俺ノ追イ掛ケテイル 女ノ子ダッタ——》

——

《俺ノ存在ハ 知ラレテシマッタ 動ケナカッタ——》

《——二人モ 俺ヲ見テ 言葉ヲ失ツテイタガ》

《女ノ子ノ方ガ 直ニ 落ち着キヲ 取り戻シタ——》

《——携帯ニ 連絡シテキタトキ ウスウス 勘付イテイタノダロ

ウ」

《俺ガ シャベレナイコトニ——》

《——失業シタ ショックデ 失語症ニ ナツテタ》

《急ニ 首ヲ絞メラレタ——》

脅迫状は『どん底から億万長者の道』の著者に書かれたもので、中年の男とは、鹿野隆なのだろう。なぜ小園由美子と話をしていたのかは分らない。もしかすると、あの日、美佐江を襲う気だったのかもしれない。脅迫状を送った田中満高、彼に犯罪計画を盗み聞きされなかったとしても、いつかは殺そうとしていたはずだ。

無念の量なのか、本から詳細まで読み取れるようになったことに驚いた。ただ、田中満高がなぜこの本に無念を込めたのだろうか。

美佐江の書斎にあった本だし、死んでから持たされたのではないのか。いや、死の直前も、死後も関係なく、本を持っていたタイミングも関係なくて、本に込められた思いが一番強いもの、それがこうして訴えかけてくるのだろうか。

「何ですつと見つめているんだい？」

沢村の声で我に返った。

「いえ、ちよつと珍しい本だなと思ひまして」

苦し紛れのいいわけ。沢村に通用しているのかはわからなかった。彼は腕を組んだ。

「確かに、カバーが蛍光性のある本だからね」

「指紋とかついていなかったんですか？」

「あつたよ。だけど、誰のもののかはわかつていないんだ」

部筑か美佐江の指紋だろうか。だったらわかる。過去に逮捕歴があつた者と指紋照合する。どこかで聞いたことがあつた。借りた本を返す際、犯人を特定出来ていなかった場合は、僕の指紋をすべて消し去る必要がある。ふと、そんな考えが浮かんた。

「沢村さんって、一人で丁村に来て、聞き込みしているのですか？」

「そつだよ。何で？」

「いえ、部下といか、その……」

「ああ。わかったぞ。自分ぐらいなら、本部のデスクで指示する側とか、部下が何人かいて、そいつらにやらせる立場じゃないかって思っているのдар？」

「ええ、まあ」

「聞き込みは簡単なようで難しいんだ。それに、現場が好きなんだよ」

「勉強になります」

「忠告しておくよ」

耳元に近寄ってきた。

「君達が事件を捜査していて、自分が安全であると思っているのなら、改めるべきだ。捜査は命がけだ」

さっきの質問がまずかったのかもしれない。捜査はそんなに甘くはないと、言わんばかりだ。確かに、どこか犯人を捕まえるという使命感で動いてきた。ただ、この刑事は『ブビリオフィリア』という小説のような殺人事件が起きていることは知らないはず。僕達に残された、唯一の有利な点だ。

「あまり首を突っ込まない方がいい。君が犯人なら、話は別だがな」
瞳に映った僕の顔が、光に包まれた。息を飲んだ。沢村はまだ聞き込みがあるからと、肩をいからせながら出かけてしまった。

二階の部屋で、部筑と美佐江が話をしていた。二人でいる姿はいつみても、僕より親しいように思える。胸の中で点火した嫉妬の炎を咳払いで吹き消した。

「刑事にうるつかれたら、やりづらいよな」

挨拶代わりに、そう言ってきた。

「まあな」

曖昧に答える。死者の無念が込められた本を持ってきてくれた手前、彼の存在を完全否定できない。借りた本を見せた。美佐江の書斎にあったものと同じだった。

「城島博志さんが、金子さんの旅館の元従業員だったのか……」

鹿野紀子と沢村の会話から聞いたことにしておいた。

「『ブビリオフィリア』を盗んだのが、鹿野隆だったとすれば、由美子は殺人を犯しているのではなくて、狙われている方なのかも」
彼らは、僕の話でそう推理している。

違う、違う、違う。

本当は二人の共犯なんだ。

でも、言えない。証拠がない。

どうすればいいのか？ 結局この日も、結論が出なかった。

N・会社訪問

水曜日、僕達は『？エコノミーテクノ』にいた。義男が出勤し、脅迫状が届いたとの連絡があり飛んでいったのだ。

会社に着けると、入口で立っていた守衛さんに連絡して、義男を呼び出してもらった。駅の改札口の構造と似ている。社員証を通さないと、会社内へは入れなくなっていた。僕達は顧客がつける仮社員証を胸に下げた。

入口を右手側に曲がり、長い廊下が続いている。いくつかのドアの上には。課や、。研究室などと書かれた札が設えてあった。通りかかった社員が義男に挨拶し、廊下を進んでいたら、打ち合わせスペースがあった。中央には重厚なガラスケースが腰を据えていて、三段ある棚になったガラスケースの中には何かしらの機械が並んでいた。

「あれは弊社の開発した製品なんです」

会社という空間がそうさせているのか、義男は事務的な口調で言った。

上段には小型のチェンソー三台ある。中段には作物を刈る装置なのだろうか、上部が幅広で支柱があり、螺旋形で先端が極薄の刃が支柱を取り巻いている、巨大なネジのようなものが四つ。巨大なネジは、中心より上に円形の突起があり、さらに上部は持つ部分だろうか、スポンジで囲まれた支柱があった。下段には楕円形のランプが七つ。それぞれ大きさやモデルが違いうようで、等間隔で置いているように思えたが、中段の製品の二つ目と三つ目の間に、空間があった。

「あまり大きな声で言えませんが、中段に飾ってあったもののひとつが、盗難があったんです」

一ヶ月前に盗まれていたらしい。盗難された分が空間になっているのか。と、部筑がつぶやいた。

義男は足早に通り過ぎ、エレベーターのボタンを押した。四階まである階層の二階で、扉が開いた。半分の面積を社員食堂で絞めていた。ほのかにめん汁の匂いがする。

案内されたのはエレベーターを降りて、右手側にあった十畳ほどの個室だった。入口の手前にカーボン製のテーブルと両脇にあるソファ、観葉植物の隣にデスク、脇に本やファイルが格納された棚、その奥にはドアがある。常に掃除されているのではないかと思えるぐらいの、綺麗に整った部屋だ。

僕達は義男と対面する位置で座った。

「どこで投函されたのかは、わかりません。会社の郵便受けに直接入れたでしょう。差出人はアルファベット^オとだけ」

来るとき、門を入ったところで見た郵便受けに入っていたらしい。守衛さんに確認をとったところ、誰が投函したかもわからないそう
だ。

デスクの引き出しから取り出された茶色の封書、その中にA4サイズの白い紙、鉛筆で書かれた文字があった。

——Oは『？エコノミーテクノ』の不正を知っている。ばらされたくなかったら、二〇一〇年二月十日午後六時、低雲丘まで一人で来い。警察には連絡をするな。もし連絡をすればどうなるか、わかっているな——

文面は男っぽい。最後の文字が引つ掛かる。犯人と義男の間で暗黙の了解でもあるのだろうか。それとも、曖昧にさせることで、恐怖を増幅させる意図があるのかもしれない。

今日日付の午後六時だ。つまり八時間後、犯人は低雲丘に現れる。ついに、ここまで来てしまったのかと思っていたら、部筑は脅迫状から目を離した。

「不正に、心あたりがあるんですか？」

「以前お話した環境破壊のことを指しているのでしょうか。不正などありません」

黒岩の話を聞いた手前、完全に義男を信じていいものなのか。や

っている側は、案外盲目になっっていることがある。その主観の違いで、犯人と義男に摩擦が起こっているのだとしたら……

「なら、この脅迫に応じる必要はありませんよ」

「ええ、ですが、犯人が納得するようになるまで、説明したい気もあるんです」

取締役の責任感がそうさせているのだろうか、義男は犯人の脅迫に応じるつもりもあるようだ。デスクの片隅に、懐中電灯が置かれている。午後六時に合わせて、低雲丘の散策用だと、義男が言う。

「一昨日と昨日、低雲丘に足を運んだのですが、誰かが来た形跡はありませんでした」

「どうして、言い切れるの？」

美佐江は、手で髪の毛をすいてから言った。

「足跡だよ。雪に残っているものは俺の足跡だけだった」

「犯人はブックの足跡から外れないように歩いていたとか？」

「だとしてもだ。変わった様子はなかった。例えば殺人のため、事前に何かを用意している感じではない」

低雲丘周辺をくまなく探し、怪しいものはなかったと言う。降りつついている雪が、僕達の捜査を手伝ってくれていたのだ。

「ぶつつけ本番で殺人をやるような犯人じゃなさそうだしね。ある程度、土地勘がないと、出来ない犯行か」

「この村は、猟師はいるんですかね？」

「私の知っている限りでは、猟師さんとか、何かの猟をしているという話は聞きませんね——銃を懸念されていますか？」

「ええ、熊が出るって聞いたものですから」

銃を使われたら、どうしようもないだろう。周りには身を隠すには打って付けの森林が聳えている。

「傾向からするに、現場には必ず本が置いてあります。義男さんに何かしらの本を持ってこいとは命令していないから、たぶん、犯人が持ってくるんでしょうね」僕は言う。

「はい、まあ、そうですね」

「会社にまつわる本とか、出版されていませんか？」

「ないですよ」

「とすると――」

言葉を切る。殺人が起こったとして、遺体に添えられるのは鹿野隆が盗んだ『ブビリオフィリア』としか、考えられなかった。

「話し、微妙にずれてないか？」

「あ、ごめん」

「ねえ、おとり作戦はどう？」

美佐江の表情は本気のようなのだ。

「おとり？」

「うん。警察には連絡するなって書かれているけど、なにも事情を知らない人を装って、父さん以外の誰かが午後六時に低雲丘へ行くのよ。もちろん、止める役をする人は、森とか雪の中で身を隠しているの。おとり役は――例えばわたしとか」

「ダメだ！」

声が室内を駆け巡る。その主は僕だ。

「信二？」

「美佐江は犯人に仕立てられようとしているんだ。女の子が午後六時に低雲丘を歩いていたら不自然すぎる。行くなら小園由美子に存在を知られていない僕か部筑だ」

視線が注がれた。頬の内側から、熱が出てきた。

「悪いが、その作戦はなしにする」

部筑は、場をクールダウンさせるように冷静だった。

「石崎さんは『？エコノミーテクノ』の不正がないって主張している。不利なのは、脅迫状を送った犯人だぞ。放置しておこう。ばらされたとしても、事実無根であると主張すればいい」

「いや――」

義男はひと言で遮った。席を立ち、デスクにある会社名の入ったプレートに触る。

「事実無根であったとしても、人々の反応は我々の思う通りには行

きません。疑惑のない場所に噂が立たないように、いくら潔白を証明しようとしても、犯人の主張を信じてしまう方もいます。信用を失ったら、会社としての経営が危ぶまれる」

信用を失うのは簡単だが、失った信用を回復させるのは相当難しい。と、朝礼で何度も社員に吹き込んでいそうな言葉を放った。

「全社員の生活にだって影響してしまいます」

それが、僕達を説得する決め手となった。

「立場を知っていて、警察に連絡出来ないことも知っているのね」

もし、警察に捕まれば、犯人は『？エコノミーテクノ』の不正を話してしまう。脅迫状の最後にあつた、『わかっているな』は、それを意味しているのだと、義男は推測していた。

しかし、犯人は殺人罪や脅迫罪をしたことに変わりはない。ならば、警察より早く対面して、説得した後に自首させる考えなのか。ただ、

「そう、上手くいきますかね？」

振り向いた義男の頬は引きつっている。

「何人も殺している殺人鬼ですよ。義男さんがいくら説得したところで、素直に受け止めてくれるとは思えません」

「無論だ」

敬語を解除した。僕に対する怒りではなく、そのタイミングで携帯が鳴ったからだ。義男はディスプレイを見つめ、

「出なくていいんですか？」

「ああ、後でかけなおしますよ」

と電源を切った。仕事や知り合いではないのだろうか。相手の着信を確認し、最初から出ないと決めていたような様子だ。大きく深呼吸をする。なぜか安堵しているようにも見えた。

「とりあえず、今日は俺達と帰りましょう。出来れば今日一日だけでもこの会社に居させてください」

「ですが」

「その方がいいよ。お父さんを一人にしたら、いつ狙われるかわか

らないし」

十二時を示すチャイムが鳴る。そして、多くの足音が聞こえてきた。

〇・万引きは誰かに見られている

海沿いの道と駅の間地点をあらわす場所、そこに丁村唯一の書店がある。鮮度が命である週刊誌は、五十二週間以上も前の発行年月が印字されている。並んでいる本が中古ではなく新刊の値段で売られている事実を知った者は、かなりの確率で開いた口が塞がらなかった。

無精ひげに充血した白目を隠したサングラス、頬がこけている風防は、我ながら不信だった。刑務所内で鍛えるずっと前から維持している肉体は、まだ衰えてはいない。と思った鹿野隆は返却期限を過ぎた『ブビリオフィリア』をポケットに忍ばせて、書店へ入店した。冷やかし以外にも、目的があったからだ。

『あなた持っているでしょ。図書館から盗んだ本。それと殺した犯人知っているの』

九日前、神奈川のマンションの郵便受けに投函されていた葉書があった。それに書かれていた一行目の内容だ。自分が盗んだ事実を知っているのは、彼にも大体想像がついていた。

左近字図書館の職員の誰か。文面は女のようなうた。

あの本だけは、どうしても読んでおく必要があった。

図書館で読んでしまう手もあったが、顔がばれてしまう。

だから、万引きをして、手に入れた。

ここで捕まるわけにはいかない。少なくとも、本当の犯人を捜し出すまでは。

しかし、金子を殺した犯人を知っている人間となれば、たちまち特定は難航する。いや、結局は左近字図書館の職員なのかもしれない。

鹿野隆は、気が済んだら、図書館へ本を返しに行くつもりだった。本の背にはラベルが残っているし、戻ってきた本を見て、万引き犯を探し出そうとはしないだろうと、高を括っている。問題は、なぜ

マンションの住所まで知っていたのかだ。こちらに知り合いはいない。見当もつかないことだ。消印がなく、直接投函した形跡があった。妻にはしばらく神奈川にいと伝えてある。それも、つい二日前だ。だとすれば、別の誰かが自分の行動までを把握している。ようやく情報が手に入り、探し求めていた金子大輔、城島博志は、相次いで殺されていた。それ以外の誰か。誰だ？

『犯人を知りたければ、T村にある、低雲丘まで来て』

二行目の内容。

書店には、いつもの若い女性店員ではなく、腰の曲がったおばあちゃんが、読んでいた本から目を離れた。

「いらつしゃいまし」

控え目に頭を下げる。あまりにも健気だったので、決まり悪かった。

雑誌を捲っているうちに身体の震えが収まった鹿野隆は、店を出た。

「ありがとうございます。またお越しくださいます」

おばあちゃんは足を滑らせないよう気を付けてと見送ってきた。

『日時は二〇一〇年二月十日の水曜日、午前十時』

三行目の内容。三十分後だ。

バス亭には、しばらく運休しますの文字、この時期は良くあることだ。スリップしたバスと心中したい乗客だっていないはず。ただでさえ、荒っぽい運転手がいるぐらいだ。バスの冬眠ならわかるが、その間の運転手はいったい何をしているのだろうか。と考えを巡らせている内に、変な足跡が視界に入った。足跡は大きく、先端には五本の爪がある。熊のつけたものだったとしても、四足歩行というより、二足歩行で規則正しく歩いている感じだ。

鹿野隆は首を捻った。

山道をひたすら歩いていく。トンネルを抜けた。開けた丘に、帽子で顔の半分を隠している者がいた。色白で、長い髪の毛が顔の輪郭をばやけさせている。毛皮のフード、その位置からは、胸から上

のあたりまでしか確認できない。

——あの子なのか？

『ついたら、盗んだ本を手を持ち、高く上げて』

四行目の内容。本人確認のためだろう。体に積もった雪を振り払い、冷え切った汗を吸い込んだ本を持ち上げる。

『そして、本以外の荷物は、その場に置いてきて』

最後の行。財布と鍵を置く。その他の持ち物はない。鹿野隆に、相手をどうにかするつもりはなかった。ただ、真実を知りたかった。四歩進んだ。すると、雪に埋もれるように。

倒れた。

倒れる瞬間、白目をむいていた。

鹿野隆は駆け寄った。丘の上にいたのは、女の子だ。

——この女の子は、なんでこんなスリッパをはいているのか？ 背中にはリュック、そして右手には、スリッパ、に似た……

これは、まるで……

肩に手を置いて、揺すった。目を見つめ、やがて抱き締めるように揺すった。彼女の意識を確認できたのは、敵意だった。

どうしてだろう。

低雲丘から見える景色が、今までと違うように思える。いや五年ぶりだ。錯覚なのかもしれない。

意識が朦朧としているせいだ。

視界から外れていた横腹を、五本の爪が襲ってきた。鹿野隆は、そのまま倒れて女の子にかぶさらないよう、白い地面に膝をついた。衣服の下に手を入れる。鮮血で染まった手のひら。いくら呼吸をしても、体全体が拒否している。

女の子は歩きにくそうに、後ろへ下がりが、大きく息を吐いた。鹿野隆の全身を舐めまわすように視線を動かし、手が離れて落ちた本で止まる。

「この本は読んだよね？」

当然だ。返事をする前に、

「父はこの場所で死んだの。この本と一緒に」

どこか他人事に思えた——父？

「だ……だれだ？」

一言が命を削っていく感覚があった。だが、鹿野隆はその名前を聞いて愕然とした。あの事件の真実を突きとめるために、出所する前から協力してくれていた人だ。彼の著作、つまり落ちている本を読み、会ったときにでも、感想を述べようとしていた。彼がここで死んだ……どうして？ 目の前にはその子供がいる。

「あなたのせいだった。あなたが起した事件のせいで、父は死んでしまったの」

——この子は何を言っているんだ？ 事件とは、金子のことなのか。違う違う。あれは、私がやったことではない。犯人は……あなたが知っているのではなかったのか？

鹿野隆の出した声は、言葉になっていなかった。

「刑務所に入っている間、どんな思いで過ごしていたかは知らないけどさ。事件はやった本人が罪を償っていたとしても、それで罪の意識が薄らいていったとしても、周りの人達の傷は、永遠に癒えないの」

膝を折った状態で、仰向けに倒れた。

「父が死んでも、発見は遅れた。三日間、ここで倒れていた。地元の警察はその日に自殺したんだって言っていたけど、信用できなかった。私が発見しなかったら、もっともつと遅れていたわ。あなたのように、この村にはいないことになっていたせいでしょうね」

女の子は携帯をチェックしている。数秒間いじって仕舞った。

「金子を……犯人は……」

「はあ、金子？ 何を言っているの。死の直前でこわれちゃったわけ？」

——金子を知らないのか？ どういうことだ……

「犯人は？」

「あなたでしょ——」

女の子は、小園猛を殺した犯人が自分であり、誰にも知られたくないから、自分の言う通り、ここに着たんだのと感情のない声だった。

「ち、ち」

ゆっくりもった鹿野隆を遮るように、いや、もたついているのが苛立ったのか、女の子は口調を強めた。

「わたしに連絡してきた警察は、父を自殺なんて言ってたけどさ。違った。あれは、捜査不十分だったの。だいたい、一ヶ月近く経ってから、わたしのところに連絡が来たのも可笑しいと思っていただよね。父に自殺する気配なんてなかったし、むしろ取材の仕事で家に帰れないぐらい忙しかったみたいだったから。で、別の警察所で調べている途中なんだけど、本当は殺人事件だった」

——私がここに来たのは……金子を殺した……犯人を知っている者にあうため……小園猛を殺した犯人なんて……知らない。

「父を殺した犯人はあなた。発見したのはわたし」

——この子は勘違いを……四二年間の人生は、こんな形で終わってしまうのか……

「このまま死んでもらうのは……」

そこで声が途切れた。

鹿野隆の瞳めがけて降ってくる白い結晶があった。反射的に目を閉じる必要はなかった。

……

…

P・焚書（ふんしょ）

個室で昼食を終えた頃だった。

「小園猛さんは、本当に自殺だったのでしょうか？」

部筑が言いだした。社員食堂から借りてきた食器をまとめていた美佐江は、

「どうしたの急に？」

と、動作を止めた。

「まずは自殺を志願した動機ですよ」

部筑は黒岩が話していたこと、『？エコノミーテクノ』をあまりよく思っていないことを含め、小園猛がなぜ自殺したのかを疑問に思っていた。

「以前と変わってしまったこの村に失望していたのなら、父親を見習い、再生計画を考えそうな気がするんです。たった一人の娘さんを残し、自らを死に追いやる動機としては不自然すぎる」

「出版事情とか、自著が盗まれた影響も絡んでくるんじゃないの？」

「それは置いておくとして——」

美佐江の問いかけをさらりとかわし、義男に向き直った。

「神奈川県警が小園猛さんの携帯電話を持っていたんですよね？」

「——そうですね」

「変じゃありませんか？ 焼身していたのなら、携帯電話も一緒に燃えているはずなのに、使える状態になっていた」

「携帯電話は、実家に置いてたんじゃないの？」

僕も部筑の着眼点に疑問を持った。

「いや——仮に、小園由美子が警察へ搜索願を出していたとしてもだ。その前に実家とか、小園隆さんがいそうな場所ぐらいいは調べるだろ？ それに、小園由美子らしき人が第一発見者だった。なのに、神奈川県警が携帯電話を持っていた」

美佐江が首を傾げている。

「こうは考えられませんか。焼身自殺しても、携帯電話は小園の家か、遺体発見現場の傍にあって無事だった。小園由美子がそれを見つけていたが、捜査のため、神奈川県警に渡した。例えば死の直前に連絡を取っていた人物を特定しようとして」

義男と同感だった。

「んん、どちらにしても、疑問ですね」

部筑は顎に手を置いた。

「なぜ、丁村であつた自殺なのに、神奈川県警が調べていたのか。」

丁村に警察がない、なんてことはありませんよね？」

「ないですね。警察がなかったとしても、近隣の警察が調べるでしょうし」

「発見者が通報した地元警察が自殺と断定していたけど、神奈川県警が他殺として捜査しているんじゃないかって思っています」

部筑お得意の、根拠のないひらめきだった。

「自殺と断定できない、何かしらの理由があるはずです」

一階の打ち合わせスペースで、食後のコーヒーを飲んでいた。奥の窓際の席は、日本人の平均身長ぐらいはあるだろうか、ついたてのような薄い壁で仕切られている。廊下やその手前の打ち合わせスペースから隠れるようになっていて、そのパイプ椅子に座っていた。小園猛が殺されていたのなら、小園由美子がその関係者を殺している動機がしつくりくる。という話を、義男が仕事で個室を出ていくまでしていた。

——ただ、なんのために？

小園猛は、『ブビリオフィリア』を回収するため、動き回っていたのではなかったのか。違ったのなら、犯人にとって都合の悪い事実を知ってしまったのか。

彼が残した本さえ手に入れば、きっとわかるはずなのに。

悔いていたら、社員らしき男二人の会話が聞こえてきた。

《最近入ったあの子、今日もいないじゃないか》

《ああ。今日も地質調査とかで、どこかに出かけているらしいぞ》
その後、二分ぐらいつづいた。知らない専門用語が出てきた。ただ、話の脈絡から、地質調査の専門用語ぐらいは読みとれた。

《そんなに調べることあんのかね。やってもらいたい仕事は山ほどあるのに》

呆れている。

《さあ、お偉いがたのお気に入りだからな。ちょっかい出すなよ》

——最近入ったあの子？ お偉いがたのお気に入り？ もしや。

いや、そんなはずはない。義男は小園由美子の顔は知っているのだから。もしそうだったとしたら、僕達を会社に招いたりはいしないはずだ。

紙コップをゴミ箱に捨て、個室に戻った。

僕は目を疑った。

ドアからの位置に部筑の後頭部があり、それと重なるように、美佐江の顔が少し見えた。

「な、なにを……」

美佐江の顔が、横にスライドした。

「どうしたの。怖い顔して？」

「い、いや。今二人して何をしていたんだ？ 顔を寄せ合って」

——キ……ス……

膝から崩れ落ちそうになっている。

「ああ。ブックのコンタクトにゴミが入ったみたいで。見てあげていたの」

瞬きしながら振り返った部筑は、もう大丈夫そうと言う。

「お前、俺達が内緒でキスしていた、なんて思ってたんじゃないの？」

「なぜ、わかった？」

「図星かよ——違うって。テレビドラマでもっと勉強しろ」

ドラマのキスシーンは、俳優、女優が必ずしもキスをしているわけではなく、カメラアングルの角度で、キスをしているように見せ

てかけている。か。二人にその気はない。一人で高ぶっていた自分が恥ずかしくなった。

「ええ、そうなの？ もう、落ち着いてよ」

深呼吸してみる。上手く笑えなかった。

午後四時三四分、皆に内緒で会社を出ていた。仲良さそうな二人に嫉妬している自分が嫌になったのも、認めるしかない。ただ、犯人へ歩み寄るには、下手に計画的より、たまたま居合わせた観光客ふうにした方がいい。つまり、低雲丘に張りこんでいた部筑や、小園由美子に知られている美佐江が同伴するよりも、一人で行動すべきだと判断したのだ。無断で拝借した懐中電灯がなくなっているのだから、もう気が付かれる頃かもしれない。

バス亭からの入り口には、人の足跡と、動物らしき足跡がつづいていた。雪が積もって足跡の輪郭がぼやけているが、かなり大きな動物のものだとわかる。熊か？ 道路には車体のタイヤ跡があるが、それらしき足跡はなかったので、道路を横断してきたわけではなさそう。じゃあ、どうしてここから足跡が始まっているのだろうか。まさか、車が運んできた熊を、この位置で放ったのか。

いや、人の足跡を気にするべきだろう。まだ新しいものに思える。犯人かもしれない。バス亭に来る前の歩道にも似たような足跡があったのは、ずっと歩いてきた証拠だ。

懐中電灯を照らす。肝試しとは違う恐怖が混合している。様々な情報が錯綜し、歩を鈍らせていく。早くも、一人で来たことを後悔しはじめた。

僕は足跡を踏まないように歩いた。会社を出て五分以上経過しているのに、携帯電話は鳴らない。ちょっと悲しくなってくる。

トンネルを抜け、低雲丘の雪景色を目の当たりにしていた。足跡はまるで人間が熊の散歩をしていたかのように、並んで丘の上へと伸びていた。丘を登っていたら、頂上に窪みが見えた。いろんなものが焦げた匂いが漂っている。慎重に近づく。

そこには、人体らしきものが置かれていた。

いや、人体だったはずだ。

脈動が身体全体を動かし、地震を体感しているような気分だった。黒焦げた遺体だ。仰向けに倒れている。がっしりした体格は男だろう。厚い胸板に太い腕が、焦げた皮膚からでも目立っている。雪に埋もれているというより、燃えた勢いで周りの雪が溶けているようだ。

足の部分だけ完全には燃えてなく、足の甲の皮膚が禿げあがり、ピンク色になっている。いや、尻の部分も履いていたであろうGパンの生地が残っている。全身に燃え移るまえに仰向けで倒れ、雪の接地面の一部は燃え切っていないのかもしれない。

胸には、焦げたたいまつらしきものが置かれている。横っ腹には五つの小さな空洞があった。

心臓の弁が不規則に動き出した。

「……死んでる」

ようやく、呟けるようになった。雪が降っているというのに、傘も持っていなかったのか。それとも、燃えてしまったのか。

そばに本が落ちていた。

身体が燃えたときに、手放したのだろうか。カバーの半分は焦げた跡がある。

『ブビリオフィリア』の印字がある。

僕はその本を手を取った。本は、ふやけていて、水浸しになっていた。

あの感覚がこない。

自殺で、無念がないのだろうか。あるいは万引きした本で、後ろめたさがあつたのだろうか。わからない。知りたくもない。まず、この状況をどうにかしないと。

本を開いた。水を含んだ紙は、ちよつとの負荷で破けそうになっている。加えて明かりの乏しい夜、とても文章を読める環境ではなかった。

辺りは、裸の枝に雪が積もった景色が広がっていた。裸の枝は闇の中に溶け込んでいて、緩やかなカーブを描いた雪達が、空中に浮いているように見える。低雲丘という名の由来を体感していた。ところが、景色を味わっている余裕はないと諫め、視線を丘の真下へと走らせた。

丘の斜面に滑り落ちたような跡があり、その摩擦で削られた箇所から、地面が薄ら顔をだしている。その下に熊の足跡があった。はつきりしないが、足跡は森の中へと続いているようだ。

深呼吸をする。僕は携帯の電源を入れた。

「お願いがあるんだ」

「今、どこにいるんだよ？」

信二と、後ろから聞こえて来る。

「後で説明する。それより、どこからでも良い。公衆電話で通報して欲しいんだ。匿名で」

「わかった。どう通報すればいい？」

「低雲丘で人が死んでいる。と伝えてくれ」

携帯のデジタル時計は、十八時一分を示していた。

遺体に背を向けた。永遠とも思われる二十分間を過ごしていたが、犯人の現れる気配はなく、心底冷え切った体を動かす。

どうして、こんなに落ち着いているのか、自分でもわからなかった。悲しむわけでも、畏怖するわけでも、叫ぶわけでもない。ひよつとしたら薄情な人間なのか、不安になる。

通り過ぎていくテールライトを茫然と見つめ、淡々と帰路を辿っている。脳から思考停止命令を出されているのならば、皆と合流するまでつづいてほしかった。

『希林寿』で、鹿野紀子が迎えてきた。部筑達はまだ帰ってきていない。

「夕食はいりません」

「体調でもくずされましたか？」

「大丈夫です。ただ……」

僕は持っている本に目を落とした。

「いえ、何でもありません。ちょっと部屋で休んでますので。帰ってきたら知らせてください」

『ブビリオフィリア』の前書きがあった。

——この本は亡き父親に捧げる。

自然破壊は災いを齎す。

どうかこの書によって、災いが防げることを——

「災い、か」

呟いた。防げることを願って書かれたものが、逆効果になってしまっているのと知ったら、どう思うのだろうか。あまり考えたくはなかった。せめて、死後の世界で彼の父親と再会しているのを願った。次のページを開こうにも、ひつついて上手くいかない。本文を読むのは、水気が引いてからでもいい。布団に身を投げた。目を閉じる。

低雲丘の光景が蘇ってくる。すると、目撃したもの達が一斉に襲いかかってきて、震えあがらせた。なんでもっと早く来てくれなかったのかと、叫び声が聞こえてきそうな気すらする。死体を発見した後の精神安定法を、五郎さんに聞いておくべきだった。

駄目だ。

目の前を暗闇で満たすと、何を考えてもあの光景が蘇る。さらに、人体が燃えている姿を、丘の下から傍観しているところまで想像が膨らんでいく。僕はその場を一步も動けない、気の弱い野次馬だ。なぜだ。犯人でもないのに、こんなにはつきりと炎の中でもがいている人間までもが頭の中に描かれているなんて……

目を開ける。これが終われば、低雲丘の遺体の第一発見者だと、名乗りでるつもりだ。そうでもしなければ、いつまでもあの光景に震えてしまいそうだ。

結局、一階に降り、鹿野紀子をつかまえた。低雲丘の遺体は鹿野隆なのかもしれない。それとなく、外見の特徴を訊き出すつもりだ。「鹿野さんのご主人が捕まったとき、どんなお気持ちでしたか？」
「いったい、何が起こったのかも把握できないまま、すべてが終わってしまった。彼女の心境は、遺体を発見した瞬間と似ている。もちろん、それは勝手な想像だけれど、力になってあげたい衝動に駆られる。しかし、あまりその話を掘り下げるべきじゃないと、彼女の表情が語っていた。」

鹿野隆は体格が良く、僕より一回り大きな体をしている。休日、隣町にあるスポーツジムに通っていたらしい。肉体を維持することで、歳の差をカバーする意図があったと言う。鹿野紀子は夫を思い出してしまったのか、いや、どんな時であれ、忘れたことなんてなかったが、彼の優しさを口に出し、相反する権力を呪う力が余計に強まったのか、瞳に影をおとしていた。

低雲丘の遺体に繋がる。もちろん、断定はできなかった。

外が光った。タクシーがUターンしている。

部筑が先頭に、美佐江と義男が帰ってきた。

Q・解決の合図

「まさか——熊に殺されたなんて言うんじゃないよな？」

部屋に集まった三人に事情を話し、部筑は片目を細めた。今頃、低雲丘は現場検証されているのだろうか。複雑な気持ちだった。

「まさか、じゃないって。襲われた衝撃で、持っていたたいまつが炎が身体に移った。それしか考えられないんだ」

僕だって、そんな嘘みたいな推理をしたいわけではない。

「熊らしき足跡が森に続いていて、横っ腹に爪の跡があつたのなら、考えられなくはないですね」

と言った義男はスーツ姿のままだ。

「ええ」

「争った形跡とか、被害者が逃げようとしていた形跡はなかったんだろ？」

「そうは言っていない。血痕もなかったけど、燃えた勢いで周りの雪が溶けていたし、それに」

「それに？」美佐江は顔を寄せて来る。離れるのが惜しかったが立ち上がった。

「この本が落ちていたんだ」

暖房の近くに置いておいた『ブビリオフィリア』を見せた。

「これは……」

最初に反応したのは、義男だった。念のため、小園猛が出版したものかを訊ね、彼は肯定した。

「犯人が小園由美子だったとしたら、父の作品を燃やそうとはしない。だろ？」

「背の部分に、ラベルがあるね。図書館のやつかな」

美佐江が触れた。なぜか匂いまでかく。

「濡れていて、開けない」

「あんま、触らないで。乾いたら読めるようになるから」

取り上げると、元の位置に戻した。

「僕が発見した遺体は鹿野隆さんだっと思うんだ。体格も良かったし、鹿野紀子さんに聞いた外見の特徴とも繋がる。左近字図書館員の加藤さんだっつて、『ブビリオフィリア』を万引きしたのは鹿野隆さんって言ってたし」

「うーん、どうも解せないんだよな」

「私も」ついでに義男も部筑の意見に賛成している。

「義男さんに脅迫文を送っておいで、なんで鹿野隆さんが殺されているんだよ」

何回か考えていたことだ。午後六時を過ぎても、僕の他に人気はなかった。低雲丘までの道にあった足跡がそれを証明してくれる。答えは出ていた。

「犯人にとつて予期せぬ出来事だったからじゃない？ 本当は義男さんを待っているはずだったんだけど、熊が現れてしまつて」

「たいまつは、何のために持っていたんだよ？」

「温まるから。とか、言いづらいんだけど——義男さんを殺す手段に使うとしたとか」

落ちていた『ブビリオフィリア』を手に取り、あの感覚がこなかったのは、不慮の事故だったからだと考え始めていた。逆に、誰かに殺されたときのみ、あの感覚が来るのではないか。

「あるとしたら、後者でしょう」

義男の表情は硬かった。

「どちらにしても、義男さんが無事だったんですから。良しとしましょうよ」

僕は残酷なことを口走ったとは思っていない。後は小園由美子を見つけるのみだ。これで本当に事件解決するのかなと思うと、幾分気持ちは楽になった。

午後十時頃、風呂上りで階段を登っていたら、下から着信音が聞こえてきた。鹿野紀子が出たようだ。それに後ろ髪を引かれて、立ち止まっていると、徐々に、泣き声が混じった応対になってきた。

思わず、引き返した。鹿野紀子は電話器の前で膝まずき、両手で顔を覆って泣いていた。

「どう、しました？」

待った。いつまでも待つつもりだった。しばらくしてから言った。

「主人が、遺体で発見されたみたいです」

場所は低雲丘だ。尻ポケットに入っていた財布の中から、鹿野隆さんの身分を証明するものが見つかったらしい。発見したのは僕です、現場に残されたものを預かっています、とは言えず、言葉を失った。

「すいませんが、少しの間、旅館を開けますので。何かあったらこちらにご連絡ください」

鹿野紀子が指したのは、電話器の後ろの、十一ケタの番号が書かれた張り紙だった。こんな事態でも、僕らを気遣っている彼女を前に、居たたまれなくなった。

「まだ、決まったわけじゃありませんよ」と声をかけるのが精いっぱいだった。

警察に呼び出された鹿野紀子は、『希林寿』を出ていった。

部屋にいた部筑は、『ブビリオフィリア』の背を摘み、中をひらひらさせるように動かしながらヘア 드라이ヤーを当てていた。

「おい、何やってるんだよ」わずかだが、焦げくさい匂いが室内を漂っている。

「早く乾かしたいんだ。結局、事件に振り回されている俺達は、元凶のこの本を読んでもいないんだからな」

「元凶とか言うな。小園猛さんに失礼だろ」

静かにドアを閉める。部筑はドライヤーを固定したまま、話をそらした。

「本のテイストは、乾いた状態じゃないと出来なさそうなんだ」作者は小園猛だっけわかってるのに、本のテイストをする必要なんてない。鹿野紀子の境遇と、部筑の呑気さの落差に、苛立った。

「だから、焦げるって」

部筑から奪い取る。

と、何かしらを愚痴っている部筑の声が遠のいた。

《私ノ犯シタ罪ハ ニツダケダ——》

《——盗難ト ヤツテモイナイ 殺人容疑デ捕マツテシマイ 妻ヲ
一人ニシタコトダ》

《服役中 一通ノ手紙ガ 届イタ——》

《——小園猛サン トイウ方カラ 私宛ニ》

《旅館ノ主人ヲ 殺シタ犯人 ソイツヲ捜シテイルト 書カレ——》

《——出所シタラ 左近字図書館ニアル アル本ヲ借りテ 欲ホシ
イトモ》

《真相ヲ訊クコトハ 出来ナカッタガ 彼ナリノ 事情ガアツテ
——》

《——アルイハ 私ガ 出所シタコトノ 合図ヲ確認スル為 ダッ
タノカモシレナイ》

《彼ノ 指示通り 出所シテ直 アル本ヲ 借りヨウトシタガ——》

《——盗難シテシマッタ 図書館員ニ 身分ヲ晒スノハ マズカッ
タカラダ》

《結局 小園猛サントハ 会エナカッタ——》

《——ソシテ 犯人ヲ知ツテイル者カラ 葉書ガ届イタ》

《約束ノ低雲丘ニ 向カウト 女ノ子ガイタ——》

《——女ノ子ハ 私ヲ 父殺シノ犯人ダト 勘違イ シテイタ》

《混乱シタ 事件トハ 金子ガ殺害サレタコトト 無関係デアリ
——》

《——女ノ子ハ 私ヲ 殺害スルツモリデ 呼ンデイタノダ》

《奇シクモ 彼ノ子供カラ 彼ノ死ヲ 告ゲラレタ——》

《——女ノ子ノ 名前ハ 小園由美子 小園猛サンノ 子供ダッタ》

《初メテ会ッタノニ コンナ形ニナルナンテ——》

《——女ノ子ハ 熊ノ足ヲ 履イテイタ 低雲丘ニ来ル 途中デ見
タ》

《アノ足跡ハ ソレナノダロウカ——》

《——女ノ子ハ 右手ニ 熊ノ爪ヲ 嵌メテイタ》

《熊ノ爪ハ 私ノ 脇腹ニ 向カツタ——》

《——ドウシテダロウ 傷ヲ負ツテカラ 何モ感ジ無ク ナッテイ
タノニ》

《妙ニ 体ガ 熱イ——》

そこで途切れた。眩暈も感じる。

「おい聞いているのかよ！」

いつの間にか、部筑は激昂していた。もう、隠してはおけないと、全神経が訴えかけて来る。

「なあ、僕のこと、信じられるか？」

「はあ、シカトしておいて、何だそれ？」

「真面目に訊いているんだ」

僕の顔が相当怖かったに違いない。日頃、穏やかなキャラだったのが役に立っている。部筑は後ずさりしてから頷いた。

「まあ、信二は裏切ったりする奴じゃないよな」

「聞いてくれ——」

こんなにも、慣れ親しんだ部筑と話すのに緊張したことはない。

このまま黙っていると、吐しゃ物を吐き出してしまいそうだ。

「本から、死者の訴えを読みとれるんだ」

部筑の視線は、僕の目と『ブビリオフィリア』を往復した。

「僕は、何度も読みとった」

部筑から、初めて書籍ソムリエの話聞いたとき、しばらくの間、その能力を信じなかった。むしろ、異端の人間を色眼鏡で観察し、信じられるわけじゃないかと、強く反発していた。

世の中、霊能力者や超能力者といった、特殊な能力を持っている人は沢山いる。テレビに出て来る人だけでも沢山いるのだから、隠している人や、自称を含めたら、気が遠くなるぐらいの数がいるだ

ろう。

しかし、彼らは科学者によって否定されている。本当に能力を持っていたとしても、ひと握りに過ぎない。その下には、人を欺く術を研究しているだけの能力者がごまんといるだろう。そこにはエンターテインメントを重視した能力者も混ざっている。ある種、本当に能力を持っている人間を上層としたピラミッド構造の中で、嘘の能力者は下層だ。まして身近な人間、少し皆と違った雰囲気を持っている奴の、虚言だと思っていた。

信じさせるには、信じさせるための証明が不可欠であることも知っている。言葉で欠けたものは、行動で示し、行動でも欠けていれば、別の人をつかってでも。ただ、今の僕には、何も……なかった。「俺と似たような能力じゃないか。すげえな」

肩を叩かれた。やっぱり友達になっておいてよかったよ。同じものを前から感じていたんだと部筑は付け加える。

「えっ？ 信じてくれるのか？」

「しつこいぞ。お前が打ち明けたのにはわけがあるんだろ。話してみろよ」

やはり、部筑に打ち明けたのは正解だった。胸の奥で固まりになっていたものが、氷解してくようだ。僕は涙を堪えた。

「鹿野隆さんは人を殺していなかったよ。あの人は、単に殺されたんだ。小園由美子によってな。この本が訴えかけて来たんだ」

「犯人じゃなかった、ってことか？」

部筑は探るように問うてきた。

「ああ。小園由美子は動物学を専攻していたのは覚えているか？」

「美佐江が言ってたな」

「黒岩さんには、T村に生息する動物を訊いていた。それでピンと来たんだ。自分が熊になりすまし、鹿野隆さんを殺し、熊が殺したと思わせようとした」

「マジかよ」

「沢村が持ってきた本からも訴えを読みとった。それと合わせてい

くと……」

言葉尻を濁し、『ホテル・旅館ソムリエ』と『どん底からの億万長者への道』、蛍光の本を並べた。

「今も読み取っているのか？」

「いや、残念ながら、読みとれるのは一回だけなんだ。その後は何事もなく消えてしまうというか。たぶん、成仏してしまうんだと思う」

「ふーん、不便なんだな。で？」

蛍光の本に触れた。

「田中満高が美佐江の書斎に侵入したとき、小園由美子ともう一人の中年が殺人計画を話していたらしいんだ。田中満高は彼女のストーカーだし、顔も知っていた。彼はそれを盗み聞きしてしまったせいで、殺されてしまった。で、一人の中年は鹿野隆さんじゃなかった。鹿野隆さんは、殺される直前、低雲丘で初めて小園由美子と会ったから」

「小園由美子は犯人確定として。別の共犯か……」

僕としては絶対、疑いたくなかったのだけれど、疑わざるおえない人物がいる。

「それと、小園猛さんは自殺したって言われていたけど、小園由美子是他殺だと思っている。鹿野隆さんが殺したんだと、誰かが小園由美子に吹き込んだんだ。部筑が疑問に思っていたことと同じだな。なぜだかはわからないけど。でも、そう思わせる要因が必ずあるはずだ」

「別の共犯が小園猛を殺したか、本当は自殺だったけど鹿野隆さんが殺したって教え込んだのか」

「後者であってほしいけど」

どちらにしても、鹿野隆は殺されてしまった。鹿野紀子の泣き顔が浮かんでくる。

「なあ、美佐江の書斎の話に戻るけどさ。あとき、俺が二階の窓の鍵を閉めていたとしたら、入口の鍵を開けられるのは大家であ

る五郎さんか……」

「義男さんだ」

商店街での聞き込みで、不審人物の目撃証言がなかったのも、そのせいなのか。美佐江の書斎に入って不自然じゃない二名のうちのどちらか、加えて小園由美子。いや田中満高が侵入している時点でも手掛かりがなかったのだから、不審人物の目撃証言は当てにしないでおくとして。問題は、なぜ美佐江の部屋に集まっていたのかだ。確かに、五郎さんか義男と、小園由美子が会う場所に適しているかもしれない。ただ、確実に殺人計画を話し合うのだとすれば、美佐江が海外旅行に行く情報も、部筑と僕が丁村に行く情報も掴んでいるはず。強いていうなら、僕達三人が留守にしていることも、知っている人間がいる。

僕は、金子大輔と城島博志から読みとった内容もすべて話した。随分身体が軽くなった気がする。部筑は、丁村を訪れる前あたりから、義男のことを疑っていたようで、理由は度重なる偶然があまりにも出来過ぎていたからだった。

廊下から、美佐江の笑い声が聞こえてきた。足音は二つ、恐らく義男のものだろう。

記憶を遡っていく。テレビの報道より先に現場を訪れていた。

やはり、美佐江も加担しているのか……小説通りに殺人事件が起こるなんて、本気で信じられる者なんて、条件は限られている。その条件を満たしているのは、石崎親子だ。

部筑は『？エコノミーテクノ』で、僕が抜け出している間、義男と美佐江に事件当時のアリバイを確認していた。第一の事件が起こった二〇一〇年一月二〇日、義男は海外出張から帰ってきて、会社に寄らずに直帰していた。死亡推定時刻は午後五時から六時までの間、その間、義男は夕食中だったと言う。美佐江は部筑と一緒にいたのでアリバイはある。第二の事件が起こった二〇一〇年一月二十八日、義男は会社で仕事だった。美佐江はスリランカへ行く前に僕と会っている。その日の夜、『密造書展』での密会。これらは、関

係者と口合わせさえしていれば、犯行しえることを意味していた。

「それにしても、読みとった内容を良く覚えていたな。読みとれるのは一回だけなんだろう」

部筑にこれ程、褒められたのは初めてだ。

「まあね、記憶力には自信があるんだ」

「前に、竹取物語の一節を丸暗記していたっけ？」

「そうそう。就職の面接でも、何回か披露した」

「就職面接ってさ。半自伝的小説みたいだよな」

「はっ？ 思わず訊き返した。」

「また、わけわからないことを」

「だって、全部がノンフィクションじゃ、なかなか内定もらえないだろう？」

「わかるように説明してくれ」

「例えばだぞ」

話しには起承転結がある。就職面接で、学生時代に取り組んだ活動を質問されたとする。僕がある研究の取りまとめ役をやっていたが『起』、ある研究の成果を『結』。何となく他の人に役割分担をするが『承』、計画性がないうちから研究に取り組み、予想異常に苦労したが『転』。

真実だったとしたら、全部がノンフィクションだ。それでは面接官のつける評価が低く、受かる見込みもなくなる。

各個人の適性に合いそうな役割分担をし、やる気が薄い人を説得させて、全体の研究意欲を高めたが『承』、ちゃんとした計画を立ててから、先を想定して研究に取り組んだが『転』に作り替える。つまり、『起』と『結』を偽っていなければ、『承』と『転』をリアルティーのある嘘に作り替えても、罪にはならず、面接で受かる見込みが上がるというのだ。

これが半自伝的小説だと、部筑は説明する。確かに一理ある。

「てか、研究も、取りまとめ役もしていないし」

「例えばだって」

部筑は就職活動を甘く見ている、とは思えなかった。

R・疑惑

深夜、『ブビリオフィリア』を読んでいた。僕らと同じぐらいの年齢で書かれた自費出版本とはいえ、内容はかなりしつかりしたものだった。義男の言うように、肝心な殺害方法だけは欠如している。これでは、どんなミステリーマニアだったとしても、謎を解く前に犯人が死んでしまうだろう。

それとは裏腹に、僕達の調べていった丁村や横浜、新横浜の描写が、現実と殆ど変らない点は驚きだった。あのビル群だって、二十数年前とは様変わりしているはずなのにだ。

どの事件も二〇一〇年に起こっていることになっている。義男が未来を予想出来ていたのではないかと考えたのも無理はないだろう。

丁村の自然破壊を行う企業があり、犯人はそこの全社員を憎んでいる。身長、服装といった外見的要素から、住んでいる場所までを克明にしている。それに比べたらストーカーなんて可愛いものだと思うされ、殺人計画を練っている箇所は鬼気迫るものがあつた。

後書きには半自伝的な小説となるであろうと書かれている。僕は、こう考えた。

フィクション 人物（義男を除く）、殺人（第一、第二、第三の殺人事件）

ノンフィクション 場所（横浜、新横浜、丁村）、義男

← 一九年後

フィクション 人物（義男を除く）、殺人（第三の殺人事件）

ノンフィクション 場所（横浜、新横浜、丁村）、義男、殺人（第一、第二の殺人事件）

書き記してみても、くだらなくなり、発行日も発行出版社名も書か

れていない本を閉じた。

鹿野紀子は明け方になってから帰ってきた。放心状態だったらしく、居合わせた部筑は、何を声掛けていいのかわからなかったらしい。詳しい話しは当分聞けないかもしれないが、下手な慰めよりも、そつとしておく方が良い気がした。

朝、美佐江は義男と一緒に出勤した。もちろん、彼女が就職したわけではなく、ちょっとした手伝いがあったからだ。彼らには、鹿野隆の死を伝えていなかった。

丁村の住人に聞き込みをしたら、あつという間に日が暮れた。小園由美子らしき人物は、結局足取りさえわからずじまいだった。その間、低雲丘の入り口を通りがけると、バス亭からの入り口は立ち入り禁止になっていた。その中は大勢が立ち入った痕跡があり、きつと、僕の足跡も調べられていると思う。

足が棒になった状態で『希林寿』に戻る。目元に隈をまとった鹿野紀子は、しばらくの間、旅館を休館させると言った。僕達は金曜日まで宿泊延長しているが、それまではお世話をしてくれることになっていた。

午後八時過ぎ、美佐江達はまだ帰ってきてなかった。

部筑は持っていたマツチを取りだした。連絡したのは商店街にあるスナックだ。彼の受話器に顔を寄せ合った。

『ああ、この間の』

かすれた声が響く。スナックのママだ。後ろから、歌謡曲のカラオケ音が聞こえる。店を出たのだらう、それが遠ざかった。

「美佐江と五郎さんって、何か関係があるんですか？」

『予約かと思えば、関係って。エッチなこと言っんじゃないよ』

「違います」即答だった。

『冗談よ』手を立ててから、手首を軸として直角に倒す仕草をしている。という彼女の絵が浮かんだ。

「美佐江にはやさしいって、以前に言っていましたよね？」

『そのことね。美佐江ちゃんの父と五郎さんは知り合いでね。五郎さんの持っていた土地を高値で買い取っていたから、美佐江ちゃんにもやさしいんだよ。まっ、あの子が可愛いからじゃなくて、頭が上がないんだろっね』

さりげなく敵対心を燃やしている。

「五郎さんはそちらの店には飲み行ったりするんですか？」

『たまに来るぐらいかな。専ら、『モダン酒場』に入り浸っているみたいだし』

ライターの音がし、大きく息を吐く音もした。

「ここ最近、様子が変だったってことはありませんか？」

『阿武隈川の事件があつて以来、顔を合わせていないからね』

「ええ、阿武隈川の事件より前が重要なんです。知りませんか？」

『そうね——』

飲みに来てくれたら教えてあげる。なんて言われそうだ。

言われた。

「後で飲みに行きますから」

『男はすぐそう言うの。気を持たせておいて、ちつとも来やしないいわゆる社交辞令ってやつか。最近羽振りが良い客も少ないのよと、訊いてもいない愚痴が飛び出してきた。』

「時間がないんです！」

余りに大声だったので、僕は思わず顔を離れた。

「絶対行きますから！ 教えてください」

『わかったわ。イケメンに免じて教えてあげる』

去年の冬の時期、夜は冷えるからと、趣味の釣りは控えていたらしい。商店街の連中は、今年になり、どんなに冷えようが釣りに出かけている五郎さんを不信に思っていたと言うのだ。

『まあ、よそで女を作っている感じもなかったけどな』

五郎さんは、六十を過ぎた今、一度離婚歴があつて以来独身であつて、何時に帰宅しようが咎める者はいなかった。

「何かを、隠している様子はありませんでしたか？」

『さあ。それなら『モダン酒場』の店主が詳しいでしょうね』

部筑は鼻で息を吐く。これ以上話をしても膨らまないなと思った矢先、ドアの開く音と共に、カラオケ音が吸い込まれ、遠ざかった。『噂をすれば、なんとやらね。本人に聞いて頂戴』

スナックのママが、五郎さんと呼ぶ声がした。

『まだ、刑事の真似事をしているのか』

やや、不機嫌な声だ。

『忙しいところ、すいません』と下手に出る。

『ふん、仕事はとづくに終わっているよう』

部筑は、丁村にいることも、沢村が来ていることも含めて、しゃべった。応答をする代わりに、喉がなる音がし、「あゝ」と吐息を出した。

『ここ最近、小園由美子に会っていませんでしたか？』

『こそこの？ 誰だそれ』

『いえ、間違えました。石崎義男さんです』どうやったら間違えるんだ。心の中で突っ込んでいると、

『石崎さん、を知っているのか？』

緊張が伝わってくる口調になった。

『ええ、今、俺らの宿泊している旅館で一緒なんです』

『家族ぐるみの付き合いってことか』

『まあ、そんなところですよ』

『石崎さんにはいつもお世話になっているよ』酔った勢いなのか、義男が顧客を紹介してくれていることまで、しゃべってきた。

『頻繁に、美佐江の部屋を訪れているらしいですね？』

そんな話し、していたか？

『本人がそう言っているのなら、そうなんじゃないか』

なぜ、自分に訊いているのか、五郎さんはよくわかっていない様子だ。

『阿武隈川で事件があったあの日、石崎さんが美佐江の部屋に来て

いたと思うのですが、知りませんか？」

『知らんよ——でもよ、あの日は美佐江ちゃん、旅行中じゃなかったっけ？』

「ええ。美佐江の他に、部屋にいた人がいると聞いているんです。田中満高とは別の人間が」

『ははん。そいつが田中満高を殺した犯人だつて、勘ぐっているのか——ちよつと待てよ』

五郎さんは、大音量のくしゃみをしてから、

『もしか、沢村が石崎さんを疑っているのか？』

「いえ、あの人は別の事件で忙しそうですから」

『別の事件？』

「それはいいとして、商店街に防犯装置とかないんですか？ 古そうだから、設置を義務つけられているとは思えませんが」

『馬鹿言っちゃいけないよ』

ノリで、てやんでい、江戸っ子で的なセリフを吐くのではないかと想像した。吐かなかった。

『監視カメラが二台、設置されているんだぞ。知らなかったのかよ』
さも自慢気に話す。意外にも、商店街の天井付近に吊るされているというのだ。悔しいけれど、知らなかったし、部筑も同じだった。
『沢村が田中満高を調べ始めたときも同じ質問されたんだ。商店街に防犯装置はないのかつてな。んで、監視カメラの話をした。仕事場でその録画しているからな。見せてやったよ』

「その監視カメラは、美佐江の部屋の入り口も映っていますか？」

『角度から、一階は死角になっているな』

「なら、少なくとも二階から侵入した者がいたら、わかるってことですよね？」

『まあ、透明人間でもない限り、映るんじゃないか』

「なるほど」

つまり、鍵を閉めていた一階の入り口か、裏口なら、死角になっているのだ。監視カメラが二台といっても、商店街のすべてを見通

せるわけではなく、必ず死角はある。ただ、そんなことまで知っている人間は、商店街でも少数とのことだ。

「石崎さんと、美佐江は監視カメラがあつて、五郎さんの仕事場に映像が送られていることを知っているんですか」

「美佐江ちゃんはどうか知らねえが、石崎さんは知っているはずだよ。あの店舗を借りるときに、映像をみせたり、説明もしたしな」

五郎さんとの電話を切つて、僕は軽く放心状態に陥っていた。疑っていた者が、刻一刻と犯人像に繋がっていく。五郎さんには悪いが、彼に殺人計画を隠し通せるだけの頭脳と、実行する力があるとは思えなかった。

僕が鹿野隆の遺体を発見したとき、『ブビリオフィリア』を持ち帰らなければ、犯人は鹿野隆になり、一連の事件は本の内容と酷似している事実には驚愕するのだが、一件落着で終わっていたに違いはない。だが、それを考えても、もう遅かった。

義男が事件捜査で僕達を巻き込むようにしたのは、いざというときの証人になつてもらおうとしたのだろうか。重ねられた嘘に、すっかり騙されるところだった。

人は、小さなものから大きなものまで、優しいものから欺くものまでをひつくるめ、一日平均で六回の嘘をつく。どこかの心理学者が言っていた。義男の嘘の数は、平均値を若干高めている程度なのだろう。

しかし、大罪を隠すための嘘だ。

部筑は義男を犯人だと想定した、ある計画を話し始めた。

S・侵入（1）

一度、連続殺人事件の犯人だと疑ってしまえば、普段通りに接するのがいかに難しいか、食事中に思い知らされた。なるべく自然に接するんだぞ、と部筑に忠告されていたが、あえて事件のことから外れた会話をしている、片時も頭を離れることはなかった。義男も美佐江も、まさか僕達が疑っているとは思っていないのだろう。義男は美佐江に注がれた日本酒を、照れながら飲んでいった。

降りつづいた雪はやんでいた。

Ｔ村は積雪の多い地域と聞いていたが、後数日ふり続いていれば、映画『シャイニング』の設定に似た、缶詰め状態だ。窓の外を眺めながらそう思っていると、美佐江は浴衣姿で現れた。金髪を後ろに束ねていて、上気した顔の輪郭がくつきりしている。そして、チラリと覗いたうなじがたおやかだった。

「もうすぐ、旅行も終わりね」

美佐江は肩を並べてきた。

「ああ」

「ほんと楽しかった」

「まだ終わってない」

「うつん、もう充分。いろいろ有り過ぎたし」

まだ終わっていない。犯人を特定するまでは。

「今度は、事件捜査とか関係なく旅行したいよな？」

「そうね。やっぱり普通の旅行が一番だね」

どこか、悲しそうな面持ちだった。ここで、本当はわたし達が犯人なのと言ってくれば、僕は警察に通報しなかったと思う。

「初めて僕達があったときのこと、覚えてる？」

「うん。どうしたの急に？」

「わたし達、同じ匂いがするって言ったんだよね？」

「そうだった」

「あと、『ジプシーの日常』って本を、僕達が読んでいたのも知っていた。どうしてわかったのか、知りたくてさ」

「匂いフェチだから」

「それだけで」

「何となく、匂いで信二とブックが本好きな気がしたの」

「答えになってないし」

「『ジプシーの日常』も、何となく二人が読んでいたような感じがしたの。これじゃ、納得しない？」

「納得しない」

「……ん、もう面倒くさいな」美佐江は必死になって、記憶を遡っているようだ。しばらくしてから「忘れて」と素っ気なく言う。

窓ガラスには、部筑が階段を下りてくる姿が映った。

「丁度良かった」

美佐江はそう言うのと、昨日、会社で盗難があったことを話した。

最初、懐中電灯だと思い、僕は青ざめたが違ったらしく、盗まれたものの正体は鍵だった。美佐江と義男の帰りが遅くなったのは、鍵を管理していた人にいろいろと聞かれたせいもあったらしい。盗んでないかを質問され、僕達は盗んでない。と断言した。

「盗難事件、多いね」

「もう、わたしは関係ないのに、疑われるし」

美佐江の口から、疑われるの言葉が出て、鼓動が高鳴った。

「ねえ、由美子は殺人をやっていないかったって、信じていいんだよね？」

聞かれても困る。

「友達なんだから、信じてあげろよ」

僕の返事が詰まらなかつたのか、部筑は欠伸をしてから、今日は早く寝ると言い、部屋に戻っていった。彼は何のために階段を下りて来たのだろう。僕が計画をしゃべるといって、墓穴を掘ならないよう監視する意図でもあったのか。

「由美子、今頃どうしているんだろう」

「搜索願は、まだ考えていないの？」

「うん、けど迷ってる」

「犯人じゃないって、信じられるようになったから？」

「それもあるけど、なんか、一人で過ごしているって思うと可愛そうになってきて。わたしが疑っていたことも、ちゃんと話して、前よりもっと一緒にいたい」

「ねえ、由美子さんの母親って、亡くなったの？」

「そう。もの心つく前に、急死しちゃったみたい」

「急死？」

「小園猛さんは、あまり話してくれないんだって。どんな人だったかは教えてくれるんだけど、何で死んだかはいつも誤魔化されていたらしくて」

わたしだったら、あんなに強く生きられない。と、美佐江は遠くを見た。

深夜、旅館のバルコニーからこっそり抜け出した。飛び降りても、白い砂達がクッションになる。衝撃だけでなく、音も緩和してくれる。

向かったのは、『？エコノミーテクノ』だ。相変わらずの曇り空であり、空気を舞う雪が消えたせいで、夜の闇は一層濃くなっている。前を歩いている部筑が背負っている、ペシャンコのリュックサックが、背後霊のようだ。

「さっきの美佐江の話だけだな。盗んだの、俺なんだ」

「そんな気がした」

まさか、窓ガラスを割って入るわけにもいかないだろうし。

門を巡回し、頃合いを見計らって敷地内へと侵入した。黒岩の自宅からの景色、あの緑の面影はない。建物の裏口は除雪されていないのか、高らかに積もっている雪は一階の半分ぐらいに達している。足を踏み入れても、ちよつとめり込む程度で、あとは凍っていた。

二階の隅にあたる非常口から侵入する。わずかな天井灯がリノリ

ウムの床に染み込んでいた。鈍い足音でも、フロア全体に響き渡ってしまふのではないかという不安のなか、これでは、美佐江の書斎に侵入したやつと同じ発想だなと思い、頬が引きつった。

僕達は商店街に設置された監視カメラに気が付いていない素人なので、正直、一か八かの賭けだった。いつ、防犯アラームがなつても可笑しくはない。ただ、こうして内部の廊下をこっそり歩いているということは、とりあえず賭けに勝ったことになる。

部筑は一階に行こうと言ってきた。打ち合わせスペースの盗まれた機器と、金子大輔の持っていた本で読みとった変な機械を照らし合わせ、殺人に使われた凶器ではないかと疑っていたらしい。横浜と新横浜で発見された遺体にある無数の傷は、巨大なネジのような機器で使われている。この機器をよく見ると、刃となる部分が十箇所あった。遺体にあった傷も十の倍数、それが部筑の推理だ。

ガラスケースの前で中腰になる。スライド式の戸になっていて、盗難事件があつたというのに、鍵さえ設置されていない。たぶん、顧客との打ち合わせで直に取り出せるようにしているのかもしれない。部筑は躊躇いなく、巨大なネジのような機器を手を持った。手で持つ上部の部分の先端に、差し込み口があつた。差し込み口は携帯電話のバッテリー充電用のような形で、隅に置かれていたコネクタを装着したコードが、すっぽりはまる。

型式だろうか『U130』と小さくプリントされていた。

「どうするんだよ？」

「決まっているだろ」

リュックの中へと忍ばせた。

義男が使っていた個室の鍵を、持っていた鍵で開ける。当然、スペアキーもあるだろうから、施錠させられていても不思議ではない。ドアが閉まる直前に、遠くから足跡が聞こえてきた。

「やばい……」

咄嗟に内鍵を閉め、部屋を見渡してから、奥の個室へと向かった。懐中電灯の明かりを消し、ゆっくりドアを開け、最小限の力で絞め

る。完全なる闇が訪れ、そこで声を潜めた。

十分程度、待っていた。足音は消えている。正確には、この個室に入ってから、外からの音も、光も確認できなくなっていた。少なくとも、あの足音が義男の個室に侵入してきた形跡はない。すると、部筑は懐中電灯の明かりを付けた。

部屋は縦長のロッカーが五個並んでいて、その他は沢山の段ボールが積み上げられている物置になっていた。ロッカーを一つ一つ開けていく。

僕が聞いていた会話。

《最近入ったあの子、今日もないじゃないか》

《ああ。今日も地質調査とかで、どこかに出かけているらしいぞ》
《そんなに調べることもあんのかね。やってもらいたい仕事は山ほどあるのに》

《さあ、お偉いがたのお気に入りだからな。ちょっかい出すなよ》
会社への侵入計画を企てたとき、部筑にそっくりそのまま伝えていた。それが今、点と線で結ばれる。

女性ものの制服がハンガーに吊るされていた。女性社員が着ている制服とおなじやつだ。上着に吉村加奈子の名札が付いている。黒岩と会ったときに使っていた名前だ。帽子もあり、その下に本が二冊置いてある。カバーのない本とカバーのある本。カバーは見覚えがある『ブビリオフィリア』だ。

「小園由美子のものだな」

別のロッカーには熊の脚を象った、スリッパのようなものがあつた。剥製だろうか。中央にチャックが走っていて、どちらからでも閉められる構造になっている。底の部分は湿っていて、置き台は濡れていた。すべてのロッカーを開け終わっても、熊のつめらしきものはなかった。

部筑は二冊の本と熊の脚をリュックにしまった。女性ものの制服は迷った挙げ句に、置いておくことにした。

「この段ボールも、貰って行こう」

十五インチのモニタ大の段ボールを広げている。「どうするんだ？」

「さっきから、刃の部分が当たってたまらないんだ」

段ボールの中に、『U130』を詰め込んだ。「よし、持っていてくれ」

次第に、搜索の勢いが罪悪感を勝り始めている。ついでに義男のデスクの引き出しまで調べ、『社外秘』の印鑑が押してある書類やら、束になっていた名刺やらを調べていった。それについては、たいした発見はなかった。

部筑の盗んだ鍵は、義男のデスクに放置し、僕達は来た道を辿った。

会社を出たところで大きなため息をつき、無事生還したことを喜んだ。

『希林寿』の部屋に戻り、部筑は二冊の本を取り出した。

「読みとれるかどうか、試してくれ」

僕はまず、カバーのない本を手にとった。反応はなく、次にカバーのある本を手にとった。

《——丁村ヲ 訪ルト イツモ辛イ過去ヲ 思イ出シテシマウ》

《シカシ ソウモ 言ッテイラレナクナッタ——》

《——私ハ 丁村デ 起コッタ事件ヲ 調べテイタ》

《勤メテイタ 出版社ハ 倒産シテシマッタガ 特集ヲ組モウト——》

《——立案シタノガ 殺人事件ヲ起コシタ キツカケデハナイカ》

《ソウ思イ 責任ヲ 感ジテイタ——》

《——調べテ行ク内ニ 逮捕サレタ 鹿野隆サンハ 無罪デアルト知ッタ》

《彼ハ 犯人ニ サセラレテイタノダ——》

《——真実ハ 旅館ノ 元従業員ガ ヤッタコト》

《彼ガ 出所シタラ 会ウツモリテイタ——》

《——手紙ヲ送り 出所シタラ 左近字図書館ノ 自著ヲ借りテクレト 頼ンダ》

《悲シイコトニ 数年間 借り手ガ イナイノヲ 知ツテイタノデ——》

《——図書館デ 常備サレテイル状態ニ 等シカッタ》

《ソノ前二モ 連絡先ヲ 記載シタ 手紙ハ送ツテイル——》

《——シカシ ソノ手紙ハ 返却サレタ 理由ハ ワカラナイ》

《左近字図書館ヲ 訪ネルト 本ハ無クナツテイタ——》

《——図書館員ハ 才茶ヲ濁シテイタガ 恐ラク 盗マレタノダト 直感シタ》

《ソシテ 置カレテイタ棚ニ 私ノ名前ト 連絡先ヲ記載シタ 紙ガアッタラシイ——》

《——私ガ 本ノ中ニ 忍バセテ イタ紙切レ ダッタ》

《同時期 私ハ 『ブビリオフィリア』ヲ 回収シテイタ——》

《——實際ニ アッタ事件ヲ加工 書キ直シテ 出版スル 予定ダツタカラダ》

《私ガ 提案シタ規格ニ 出版担当ノ 編集者ハ——》

《——念ノ為 『ブビリオフィリア』ヲ回収シテクレト オ願イシテキタ》

《タダ 鹿野隆サンニハ 『ブビリオフィリア』ヲ 読ンデ貰イ——》

《——實際 合ッテ 私ノ企画ノ 許諾ヲ 貰イタカッタ——》

一旦停止し間延びしていた。

しかし、僕の思考をノックするように、新たなメッセージが入りこんできた。

《アル者ハ 私利私欲デ 動イテイルノダト知り 失望シタ——》

《——出世ノ為 不正ヲ働キ》

《人間ハ醜イ 将来ノ為ナラ 他人ヲ 犠牲ニスル——》

《——良心ガ欠ケタ行為 暴イテヤロウト 考エタ》

S・優入(2)

そこまでだった。自殺か他殺の状況は読みとれない。だけではなく、殺される直前のことも皆無だ。辛い過去とは、例の出版本が引き起こした事件なのだろうか。それなら、小園さんは関係ないですよと言っただけだった。

読みとった内容を話した。部筑は顎に指をあてる。

「事件を調べていたのか」

「小園猛さんは鹿野隆さんに責任を感じていたんだろうな」

「そういう理由で、回収していたのか」

「鹿野隆の以外は、全部見つかったのかな？」

「さあ。後半のくだりは、何だか感情的になっっている感じがしないか？」

人間が醜いと形容させられる力を持った、何かしらの不正を知り、私が暴いてやるとまで読みとれた。仕事とか関係なく、憤怒で小園猛を突き動かしているようにも思える。

「いったい、何を知ってしまったんだろうな？」

「義男さんへの『脅迫状』に書かれていた不正だと思うけど」

「俺、すげえこと思いついた！」

拳を握り、前に出す。彼の自画自賛にはついていけない。素っ気なく、「何？」と言う。

「実は小園猛さん、生きている説だ」

「はあ？」

身体の芯から脱力した。

「考えても見ろよ。今まで俺達は鹿野隆さんを犯人だと思い込んで捜査していたら、違った」

「なら、今度は義男さんと共犯っていう話も疑えと？」

「そうだ」

「でもさ、僕は今まで死者の訴えしか読みとれなかったんだぞ。鹿

野隆さんの訴えと照らし合わせたら、この本で読みとったものは、小園猛さんのメッセージに間違いはないんだ」

カバーのある『ブビリオフィリア』を指さした。

「お前は、自分の能力を過小評価しているんじゃないか？」

「どういう意味だ？」

「俺も、自分の能力を知って、いろいろ疑って、決めつけて、やつと自分の思っている以上の能力があることに気付いた。最初は、まさか本当に書いた本人がわかるなんて思わなかったからな」

部筑はある出版本を使って自分の能力を試していたとき、まったく知らない人物の名前が浮かんだらしい。仮に作者のペンネームをA、Aの本名がB、まったく知らない人物をCとして、書籍ソムリエの能力に疑問を持った。数カ月後、その出版本を巡り、作者と読者の間でいざこざがあり、裁判にまで発展した。メディアを騒がせる規模になり、調べていくうち、書いたのはAではなく、代筆屋に頼んでいたことが判明した。その代筆屋の名がCだったのだ。

「だからさ。死者の訴えしか読みとれないって思いこんでいるだけかもよ。実は、本に込められた強いメッセージまでも読めているとか。生前、死後関係なく。自分にとって、大切にしている本は必ず思いが込められている。無意識化だから、それに気が付かない人は多い。でも、信二はそれさえも読みとれる能力がある」

「まさか。僕だって、人波に本は読んできたんだぞ。それだったら、古本屋で売っている本を手にとって、もっと早くこの能力がわかっていたはずだ」

「大切にしている本を、古本屋に売るか？」

「大切にしていた本なら、売るかもしれないだろ。能力なんて、いつ目覚めるかわからないからな」

彼の口からそう言われると、説得力があるから反論できない。

「俺は抽象的な理屈を言いたいわけじゃないんだ。いいか――」

部筑は顔を近づけてきた。大きな瞳に真正面から見つめられ、唾を飲んだ。

「お前が言っていた、小園猛さんのメッセージに、死をほのめかすものはなかった。むしろ、誰かに復讐するぐらいの勢いがある。でも、金子大輔、城島博志、田中満高、鹿野隆の四者には、自分が殺される直前まで、克明になっていた」

「……それは」

「まだ、生きている証拠なんじゃないか」

小園猛が生きている。半自伝的な小説となるであろうと後書きにしたのは、予言したからであり、予言を外さないようにするには実行するのが手っ取り早い。その発想は、頭を殴られるぐらいの衝撃があった。

「ちよつと待てつて。T村の住民は、小園猛が自殺したことを知っているんだぞ。村ぐるみで共犯は考えられないだろ？」

「簡単じゃないか——」

小園猛は焼身自殺したと言われている。遺体だけだと、小園猛を証明するのは難しい。しかし、遺体の傍に身分証明書があれば確実になってくる。部筑は淡々と語った。

「じゃあ、小園猛さん以外の誰かを殺したってこと？」

「そうだ。昨晚だつて小園由美子は、鹿野隆に嘘を吹き込んで殺したとも考えられる。本当は生きている小園猛を殺したのはあんだだけと」

「小園猛さんが、刑務所にいた鹿野隆さんにコンタクトを取ろうとしたのではなく、『ブビリオフィリア』の存在を知ってもらったためだったのか」

「ああ。少なくとも、左近字図書館の職員には、鹿野隆が『ブビリオフィリア』を持っていることを印象づけられる。万引きするとは思っていないかったかもしれないけどな」

部筑は額をかき、つぶけた。

「そして、警察が捜査していくうち、必ず『ブビリオフィリア』に辿りつくだろうし。読んだら、起こっている事件に酷似していることもわかるだろ」

「刑務所員は、鹿野隆さんへ送った手紙の内容を読んでいる可能性だってある。ほら、連絡先を送っても、返却されたってあったし。もし、鹿野隆さんを犯人に仕立てるつもりだったら、そんな危険を冒さなくても、違った方法を考えないか？」

「例えば、話題性とか。連続殺人事件が『ブビリオフィリア』という小説に酷似しているのであれば、メディアが取り上げる。そして、自費出版本は再販になり、売れる。あわよくば商業出版になる可能性だってある」

「あまり意味はないよ。小園猛を自殺として、この世から消滅させたのだったら、なおさら」

「ま、今のは無理があるとしてだ。今までの度重なる偶然を構築するには、人数が多い方がやりやすい」

「いったい、どんな動機があるんだろうな？」

「さあ。出世の為、不正を働きしか、ヒントはないんだ」

「ただ、それなら、殺人計画の話し合いで、わざわざ美佐江の部屋は使わないだろ」

「ある者か」

部筑はそう言ったまま、口を閉じた。

「なあ、また読む必要あるの？」

『ブビリオフィリア』は、僕も部筑も読んでいた。それなのに、会社で手に入れた二冊を読んでおこうと提案してきたのだ。どんなに入れこんだ小説であっても、最低数カ月は間を置いておくのが普通だ。しかも、現実を起こっている事件に近い内容だし、そう簡単に忘れるものではない。正直、体を休めておきたかった。

僕の気持ちとは裏腹に、部筑はカバーなしの本を読み始めていた。「何のためにだよ？」

「念のためだ」

一度より二度読んだ方が、理解が深まり、見落としが減るという、あたりまえの理屈をこねる。僕は両手を広げ、カバーのある『ブビ

リオフィリア』を読んだ。

時計は午前二時になっていた。つまり、読み始めて三十分後くらい、部筑は本を閉じ、指の骨を鳴らした。

「えっ、もう読んだの？」

部筑は頷く。二百五十ページの分量を読破していた。僕はまだ、第二の事件が発生した部分で、全体の半分も読んでいない。急いで小説の中へと戻った。

「間違はなく、小園さんが書いたものだ」

カバーなしの本に、部筑の唾液が付着していた。どうやら、舐めたようだ。

本と同時に拝借してきた機械『U130』を取り出した。良く見ると、刃の表面に小さな穴が、いくつもあいている。電源を入れた。支柱を軸に、螺旋状の刃が高速回転する。それでいて、動作音は無音に違いぐらいだった。

「何に使うのかな？」

「さあ。木に切れ目を入れるんじゃないか。試し切りしてみよう」とすると、僕の方に近づけてきた。

「おい、止めろって……」

上半身を反って、身を引いているが、止めようとしないう。とつさに『U130』を入れていた段ボールを盾にした。鈍い音がし、直ぐ段ボールが擦れる音に変わった。

「はあ、すごい切れ味だな」

と言った部筑は、スイッチを切った。

「危ないだろうが……」

段ボールを持つ手が震えていた。「殺人犯の気持ちはわからねえ」

「おい。気持ちを確かめるために、やったのか？」

「鋭いな」

と欠伸混じりに言った。

「先に寝るからな。読み終わったら教えてくれ」

彼は数分で太い寝息を立てていた。

目を擦る。読書でこれ程の違和感を持ったのは初めてだった。僕は何度も何度も本の表紙や、巻末を調べてみる。どこからどう見ても間違いなく、『ブビリオフィリア』だ。

小説での第三の事件はT村の低雲丘で起こるはずだった。いや、T村までは同じだ。

しかし、T村の阿武隈川で起こった事件だった。脈略からするに、誤植でもなさそうだ。

「どういうことだ？」

思わず独り言が出る。殺害方法は田中満高とまったく同じだった。他の事件とは異なり、殺害方法が詳細に描かれている。又、神奈川にある阿武隈川の描写とは異なり、随分とこじんまりした川になっていた。

——低雲丘を横切るように、山の中腹を上流、下流から海へと合流する阿武隈川がある。T村の水源としては頼りなく、上流の川幅は三メートル程度であり、水深は一メートルにも満たない。ところが川边からは濃い青色とした水面に映る、下流の深さは最大で五メートルにも達している。遊水地には向かない構造だ——

それが引用文だった。T村に阿武隈川が実在するのは、後で聞いてみるとして。

二十代の長い髪の毛をした被害者とだけ書かれていて、男性とも女性とも書かれていなかった。しかも、他の事件は二〇一〇年に起こっているのに対し、阿武隈川の事件は二〇〇九年の一月二十に起こっていた。つまり、物語の進行上では第三の事件となっではいるが、時間軸では一番初めに起こった事件だ。

読み進めてみると、義男のことも確かに書かれていた。ただ、会社の不正をあらわす文章が省かれている様子だった。

結果的に、四つの事件が起こっている。鹿野隆が持っていた『ブビリオフィリア』は三つの事件までしか起こらない。しかし、後書きの内容や、ページ数はまったく一緒である。となると、義男の

言っていた原稿段階での内容なのだろうか。まったく理由がわからなかった。記念に二パターン製作したのだろうか。

が、驚くべきは、それだけではなかった。

部筑が読み終わった、カバーのない本を手にとっても反応はなかったのに、義男が持ってきたカバーを付けてみた。すると、あの感覚が現れたのだ。

《——一九九〇年一月二十日》

《アレハ 一歳ニナル 子供ヲ連レテ 丁村ヘ 旅行ヲ シテイル 最中ダッタ——》

《——妻ハ殺サレタ》

すべてを読みこむまでは、僕の思考の介入さえ許されなかったのに、そこで途切れた。

——妻が殺された。

心は、しばらくその言葉で満たされた。やがて、これで終わってしまったのかと、不安に満たされる。カバーの位置を微調整しながら待っていた。

《——丁村ニアッタ 阿武隈川デ 不可解ナ 殺害方法ニヨツテ》

《今トナツテモ 犯人ノ 見付ル 目途ハ 立ツテイナカッタ——》

《——タダ 殺害ニ使ワレタ本ガ 左近字図書館カラナクナッタ本ト 一致シテイタ》

《妻ノ本当ノ死因ニツイテ 由美子ニ言ワズ 墓場マデ 持ツテイ クツモリダッタ——》

《——イツシカ 隠シテイルコトガ 余計ニ ソノコトヲ 思イ出サセルヨウニナリ》

《私ハ ソノコトヲ 書カズニハ イラレナカッタ——》

《——虚構ノ 世界ナラ 書ケル 気ガシタノダ》

《小説ノ中デ 犯人ヲ殺シ 少シデモ 気ガ 晴レルノデハナイカ

ト 考エタ——》

《——丁村ノ自然モ守リタイ 万引キ犯ハ 減ツテ欲シイ》

《我父二八悪イト思ツタガ 元々 書キ始メテイタ 内容ニ手ヲ加エ》

《——最終的ニ『ブビリオフィリア』ヲ書イタノハ 妻ノ為ニトイウ意図ガアッタ》

《真実ノ 濃度ヲ薄メルノニ 幾ツカノ 殺人事件モ 加工タ》

《——他ノ事件ト比べ 殺害方法ガ浮イテイルト 友人ニ指摘サレタ》

《ソレデ 目ガ覺メタノダ 殺サレタ妻ヲ 題材ニシテイル 愚力サニ——》

《——友人二八 妻ノ死ノ 本当ノ理由ハ 教シエテ イナイ》

《出版モ 止メルコトモ 考エテイタガ 作品ヲ 褒メテクレタ——》

《——書キ直シ シテ 自費出版シタ》

まただ。明らかに途中だつてわかっているのに。まるで、考える間を与えてくれているかのようだ。一歳になる子供とは小園由美子のことだろう。まだ一歳だから、旅行中に母親が殺されたことは知らずにいるということが。

《——十五年後ノ 時効直前ニナツテ 私ハ 自ラ調べ始メタ》

《調べテ行ク内ニ 金子トイウ男ガ 心辺リガアルト 証言シタ——》

《——不信人物ガ 私ノ妻ト一緒ニ歩イテイタト ソノ不信人物ヲ知ツテイルト》

《ドウシテ 事件発生当時 警察ニ証言シナカッタノカ——》

《——ソレハ 丁村ニ 負ノ遺産ヲ 発生サセナイ意図ガアリ》

《村民全体デ 目撃証言ヲ 隠蔽サセル 動キガアッタラシイノダ——》

《——彼ハ 私が出版社勤務デアルコトヲ 知ツタ上デ 取引条件ヲ提示シテキタ》

《T村ニアル旅館ノ 記事ヲ書カセテ 案内本ヲ出版シタラ 教エルト——》

《——取引ノアツタ出版社ニ 懇願シ ナントカ 条件ヲ満タセテ 貰ツタ》

《シカシ 金子ハ 出版サレルマデ 教エラレナイト 言ツテキタ——》

《——アンナ記事ガ 掲載サレテイルトハ 思ワナカッタ》

《記事ノ 内容ヲ 確認スベキダツタト 悔ヤンデモ 悔ヤミキレナイ——》

《——結局 金子ハ コノ世ヲ 去ツテシマツタ》

《元々 不審人物ナンテ 知ラナカッタノカモシレナイ——》

ここで終わりなのか？

妻を殺した犯人を捜すためか、鹿野隆に謝罪したかったのか、書き直しの小説を書きたかったからなのか、あるいは全部を成し遂げるため。

やはり、小園猛はまだ生きているのか？

《——低雲丘カラノ景色ハ 五年前ト比ベテモ スツカリ様変ワリシテイタ》

《T村全体ガ 自分ノ故郷デハ 無クナツテシマツタヨウニ 思エタ——》

《——私ハ 死ヌ 奇シクモ 妻ノ殺サレタ T村デ》

《最後ノ瞬間 『ブビリオフィリア』ト 一緒ダツタノガ 救イダツタ——》

辛抱強く待ったが、それ以上を読み込むことはなかった。

「小園猛さんは、死んでいたんだ……」

口に出してみる。すると、引つかかっていたものが一つ、取れた気がした。自分が提案した企画がきっかけで、起こしてしまった事件があり鹿野隆に責任を感じていたのに間違いはないはずだ。

不審人物とは、義男のことなのか。金子が経営していた旅館の敷地を買い取り、『？エコノミーテクノ』を創立させている。だから知っているのか。しかし、事件があつたのは、会社創立から十年以上前の話だ。金子の証言の信ぴょう性は低いと考えるべきだと思う。

それに、『ブビリオフィリア』が書かれている時点で、犯人の目途が立っていないのであれば、小説内の犯人は架空の人物の可能性が高い。十五年後の時効直前で金子以外にも聞き込みをしているのだし、今も見つかっていないのかもしれない。

二冊の本に、重なる部分がある。その一つが後書きだ。T村の阿武隈川事件が本当に起こっていたのだから、小園猛さんは次の意図があつたのではないか。

フィクション 人物（義男と小園の妻を除く）、T村の会社、殺人及び殺害方法

（第一、第二、第四の殺人事件）

ノンフィクション 場所（横浜、新横浜、T村）、人物（義男、小園の妻）、殺人及び殺害方法（第三の殺人事件）

いや、これが本来の意図だったのだろう。

ただ、決定的に違うものがあつた。

カバーのある『ブビリオフィリア』には、T村にある阿武隈川での事件が記載されていた。憎しみが込められているようだった。カバーのない『ブビリオフィリア』には、阿武隈川事件が削除されている代わりに、義男が創立させる会社の不正が追加されている。訴えを読み込んだ限り、悲しみが込められているようだった。

T・本は生きている

——フォンハイキテ——

いつかみた夢の続きなのだろうか。記憶が斑となっていた。四方が真っ白に囲まれた場所で、聞き覚えのある言葉が耳に入ってきた。ただ、一つ一つの発音が独立していて、曖昧だった。

——本は生きている——

今度は明確に聞きとれた。瞬間、膝に毛布がかかっているのが、視界に入った。

僕は本を読んだまま、寝入ってしまったようだ。時計は午前四を示していた。大体一時間眠っていたことになる。部筑は布団の中で、夢でも見ているのだろう。

「本は生きているか」

そう呟くと、僕はなんでそんな夢をみたのか納得した。『ブビリオフィリア』に書かれている文にも、同じようなものがある。しかし、違った記憶を呼び覚ましていた。

祖母の言葉だ。

就職活動の面接で、尊敬する人は誰ですか？ 度々聞かれた質問だった。その企業色に合いそうな人物を答えていた。結果、祖母ですと答えた企業は必ず次の面接に進めるという経験則があった。これは他のとってつけたような嘘、偽りはいつさいない。

まだ僕が小さかった頃、実家の庭でプラスチックのバットを使って遊んでいた。すると蛾が飛んできて祖父の大事にしていた盆栽にとまった。バットで仕留めてやろう。振りかぶった矢先、蛾は次の目的地へと飛んで行った。でも、バットは盆栽を直撃した。

土と根っ子が離れ離れになってしまい、なんとか誤魔化そうと、根っこの上に土を被せてみたものの、何本かの枝も折れていて結局上手くいかず、庭にあったトタン板の押入れに隠した。

数日間、祖父は普段通りだったので、ばれずにすんでいると思っ

ていた。祖父は痴呆症の前兆があつたので、それも手伝つていたのだと思う。

僕は黙っていた。

祖父の記憶がすべて消えてしまえばいいとさえ思っていた。後から思えば、なんて残酷なことを考えていたのか。祖父に謝りたかつた。

介護の苦労は報われず、祖父は間もなく他界し、盆栽のことも忘れかけている頃だった。陽射しが強い昼下がり、縁側で祖母の切つてくれた西瓜を食べていた。

——悪いことをすると、お天道様が何でもみているんだよ——

背後から、軽く肩に触れるような、小さな声だった。でも、僕には何よりも胸に刺さる言葉だった。

——なに、それ？ ——

悪いことをして、生きているものを傷つければ、強く記憶に残る。生きていないものを傷つければ、記憶に残りにくい。相手がいないからだ。でも、お天道様がみているから、本当は平等なんだよ。

小学校を卒業して間もない時期、祖母の容態は悪くなった。布団から起き上がれないようになって、人や物に悪いことをしてはいけないという信念は変わらなかった。そして、

——本は生きている——

力ない声でそう言った。骨と皮だけの手が、祖父の神棚を向いていた。

祖母は、祖父の神棚に一冊の本を飾っていた。毎日のように線香をあげてから、必ずその本を手にとって、頭の上に掲げていた。真意はわからなかった。僕はいつも奇妙なものを見る眼差しをしていたからだ。

その本は、祖母の棺桶に納められた。

父親の話だと、彼女は読書家というわけではなかった。小さな茶色の棚に同化できそうな程、茶けた本が数冊置いてあった。タイトルやら、作家名が擦り切れていて、お世辞にも、読んでみようとい

う気が起こらない代物だった。ただ、一冊の本に取りかかったら数カ月間、ずっと同じ本を読み続ける。一語一句、暗記するようだったと聞く。

どちらかというと、本を読んでいる人の姿を見るのが好きな印象が強かった。眼鏡を眉毛の位置までずらして、目を細めて読んでいる祖父を、こっそり観察している祖母を見たことがある。

——本は生きている——

今の僕には、祖父の思いを祖母が読みとったのだと思える。たった一度きりだったとしても、いつかまた、最愛の人の思いを読みとれるのではないかと考え、幾度も手に取っていたのではないか。だから、生きていないものでも大切にしろって、教えてくれたのだ。

部筑は心地よい寝息を立てていた。起そうか迷ったが、頭の中に渦巻いているものを取り除いてもらいたくて、彼の肩をゆすつて起した。半目の状態だったのが、話をしていくうちに、ぱっちりしてくる。

「小園猛さんは、殺されていたのか……」

いろいろな新事実を知って驚愕しているのか、自分の推理が外れて悔しかったのか、部筑は言葉を失っていた。

「間違いないよ。そう読み取ったんだ」

鹿野隆が殺される直前、小園由美子が『父は殺された』と言っていたのも、やはり本当だったのだ。

「小園猛さんは、何かしらの不正を暴こうと調べていくうち、低雲丘にも足を運んだ。それが、他の場所で殺された後、低雲丘に放置された」

「とりあえず、油を被って焼身自殺の話は嘘だったことになるか」

「義男さんが故意で嘘を付いていたのだとしたら……」

いろいろな辻褄が合う。

「原稿の段階で、義男さんが阿武隈川の事件を削除しろと言ったのは、他の事件と違って浮いていたんじゃないかって——書かれては困る

「思ったからじゃないか」

「ああ。小園猛さんは、妻の死の真相について、義男さんには話していない様子だった。でも、義男さんは、話してもらう必要さえなかった——義男さんが、小園猛さんの奥さんを殺したから」

「小園猛さんが殺されたのも、何かを掴んでしまったからなのかな？」

「時効が成立しているんだぞ」

そう、時効が成立しているのだから。なぜ、殺されなければならなかったのか。部筑は、小園夫妻の結婚記念日に注目した。一月二十日と言えば、

「そうか。横浜で第一の事件があった日と同じだ」

「でも、小園さんの奥さんが殺された日と、何か繋がりはあるのかな？」

丁村阿武隈川の事件は、二〇〇九年の一月二十日と書かれていた。田中満高の殺された日とはずれている。しかし、二十年前に起こった事件を書こうとしていたことを考えると、一九八九年一月二十日としても、小園の妻が殺された一九九〇年一月二十日とは一年のズレがある。

「完全に再現させようとは思っていなかったんじゃないか？」

「辛くなるからかな？」

「何かしらの意図があって、やっていたのかもな」

「意図か……」

「妻殺しの犯人は、それがきっかけで次々に殺人を犯していくとか」「少なくとも、書いている当初は犯人の特定が出来ていなかったとすると——」

ただ、証拠はなかっただけであって、僕達が置かれている状況のように、疑っていた人達はいたのではないか。頭の中にある豆電球が光ったような気がした。

「小園さんが犯人になりきって、実際に起こった事件の犯人候補になりそうな人間を、小説の中で殺していったって考えられない？」

そうやってカタルシスを得ようとしたのではないか。二十年前なら、小園猛は二十四歳だったはずだ。小説での殺人犯とは違う。阿武隈川の被害者を除くと殺されたのは三人。となれば、第一の被害者である大学生の男性、第二の被害者である五十代会社員の男性、第二の被害者である四十代の男性、つまり義男が含まれている。ただ、義男は四十代の男性とされているので、二〇一〇年の時点では六十代の男性ということになる。どんどん遠ざかっているようで、その推理事態は危険なものがあつた。

「信二の能力からすると、死の直前に持っていた本はこれだな」

部筑はカバーなしだった本を手につめた。

「そうだと思う」死してもなお、抱きかかえて、我が子を守るように持っていた本だ。彼の望みは叶っていたことになる。

「で、こっちは」

「どうして、本にしようと思ったんだろうな？ それほど、犯人が憎かったのかな」

「当然だろ。妻を殺されたんだぞ」

部筑は丁村での阿武隈川事件が書かれている『ブビリオフィリア』を舐めた。

「こ、これは……」

「どうした？」

「不正の味がする」

U・凶器

僕達は、一階からの声で目が覚めた。

金曜日の朝から、沢山の来客が『希林寿』を訪れていたのだ。もちろん宿泊客ではなく、噂を聞きつけた村民が、鹿野紀子を心配しに来たのだ。話を聞いて愕然としている人もいる。鹿野紀子は葬式の日程とかの説明で、休まる暇がなかった。

村民が鹿野紀子を囲んでいた輪が崩れた。黒岩の姿が現れたからだ。皆それぞれ驚きの仕草をしているものの、話しかけようとする者はいない。彼の頼りない足取りは、僕達のいる方へと向かってきて、ゆっくり通り過ぎる。

「こつちへ来い」

と指図してきて、食堂の椅子に腰かけた。

「まったく、上っ面だけで悲壮感漂わせているのがみえみえじゃ」

「黒岩さんは違うんですか？」

ちよつとからかつてみる。黒岩は煙草を取り出し、火を付けた。

そして、紫煙を僕へと目掛けて吐いた。

「まったく、最近の若者は教育がなつておらん」

年寄りなら、若者よりも自由奔放でいられるのかと突っ込みたくなつたがやめた。

「申し訳ありません。失礼なことを聞いてしまいました」悲壮感漂わせて謝る。

「黒岩ではない。仙人と呼べ」

——そつちかよ！

「仙人、訊きたいことがあります」

と言つた部筑は、仙人の前に灰皿をさし出した。

「その前にお茶をくれ。ずっと歩きで喉がカラッカラ」

素っ頓狂な抑揚で指示され、あり合わせの茶を入れた。ふんわりした湯気が立っている茶碗を仙人が啜る。

僕達が丁村について引き続き調べていることを、部筑が切り出した。その話しになると機嫌が良くなることを、前回会ってから知っていた。

四年前まで、丁村の阿武隈川は存在していた。しかし、今はないと言っ

「子供が遊んでいて、溺れることが多々あったからな。水源は残し地下水にして、川を埋め立てたんじゃ」

「本当の理由はそれだけでしょうか？」

「本当の理由はそれだけでしょうか？」

部筑の問いに、仙人はおうむ返しで眉を潜めた。

「ええ。危険だから川を埋め立てたって話は、聞いたことないんですが」

「それは、お前の偏見じゃろ？」

「いや。普通なら、川の周りを立ち入り禁止にするとか、遊泳禁止を呼び掛ける看板を立てるとかをするでしょう」

灰皿に煙草を押し付けると、腕を組んだ。

「下流で人が死んだんだ」

「死んだ？ どんな理由で？」

「もう、二十年以上前の話になる——丁村を訪れていた観光客が、何者かによって殺された。阿武隈川の下流でな」

やはりだ。

「犯人は見つかっていないのですね？」

「そうだ。阿武隈川はもう存在しない川じゃ」

「無くなったのですか？」

「五年前だった。縁起が悪いからと、村長は埋め立てる決断をした」つまり、小園猛が妻を殺した犯人の時効直前になって、金子とコンタクトを取っていた後になる。

「村長が決めたことなのでしょうか？」

僕は身乗り出すように訪ねる。村長と仲が良かった社長の関係が成立していたから、『？エコノミーテクノ』が創立されていると

鹿野紀子から聞いていたからだ。もしかしたら、義男の意見だったのかもしれない。だが、

「知るか」で、一掃された。

「阿武隈川は、低雲丘の頂上から見える位置にあった。訪れる者が減ったのも、埋め立ててしまったからだと思っている。川の流れが、周りの景色を引きたてていたからな——あれは風流じゃった」口髭を摘まんだ。

となると、小園猛が殺されたとき、失望していたのはそのせいに違いない。

「悲しい、ですね」

「図書館の資料が嘘だと言われていたのは覚えているな？」

僕は頷いた。

「あれは阿武隈川のこと書かれていなかったのも含まれていた」

「それを言いに来たんですか？」

「まさか。年寄りの言い忘れは日常茶飯事。いちいち気にしていたら、寿命がいくらあっても足りん」

だろうね。言われてみれば、僕らが観光客なのは知っているから、『希林寿』に泊っていることぐらいは分りそうだが、学生が月曜から金曜まで連泊しているとは思わないだろう。

「じゃあ、どうしてですか？」

「沢村という刑事が、ここにいるんじゃないかと思って来たんだ」

「え？」二人揃って素っ頓狂だった。

沢村が金曜日には下村を出ると聞いていたらしい。「沢村さんは、来ていませんよ」

「見りゃわかる」

「どうして沢村さんに？」

「大人の事情だ」

どんな事情なんだよ。余計知りたくなる。

「僕らももう、大人ですよ。教えてください」

「馬鹿もの！」

全身がピクリと動く。建物じゅうに響いた仙人の怒声で、残っていた人の全員がこちらを向いた。

「二十歳そこそのガキが、大人なんて名乗るな」

気まずい空気が流れたところで、村民たちは『希林寿』を出ていった。仙人はそれらに目もくれない——この人の地雷はどこにあるのだろう。

ある意味、僕達が捜査している事件なみにミステリーだ。

部筑は話を変えた。

「小園猛さんが発見されたとき、まず、雪が降った後だと、おっしゃっていましたよね？」

「それがどうした？」

「いつ頃から、降っていたのでしょうか？ それと、遺体には雪が積もっていましたか？」

「一気に質問するな。まったく」

仙人は煙草をくわえる。すると、部筑はライターを持って立ち上がり、煙草の先端に着火させた。

「雪は、だいたい二日前ぐらいから降っていただろうな。発見された日の朝方には、もうやんでいた」

「遺体には？」

「雪は、殆ど積もっていなかったらしいぞ」

「積もっていない？ おかしくありませんか？」

「なぜじゃ？」

「死亡推定時刻は三日前だったんですよ。発見者が低雲丘に行った日の朝方には、もうやんでいた。のなら、その前の二日前は雪が降っていて、遺体にも雪が積もっていたはずなのに、積もっていないかった」

「んん」

先生に怒られている生徒のように、仙人は頭を垂れた。

「雪が降る前、小園猛さんは死んだ。誰かに殺されたんです。発見される日、低雲丘に誰かが足を踏み入れたはずです。そうでないと

足跡の説明も付かない。そして、その誰かは小園猛さんの遺体に積もった雪を、取り払った」

「何のために？」

「辺りに雪が積もっている状態で、片道だけの足跡を残し、自殺と見せかけるためです。帰りの足跡がなかったのは、たぶん、来たときの足跡を外れないようにして帰ったからでしょう。でも、それがあだとなってしまった」

「お前さんは、自殺じゃないと思っていたのか？」

「ええ。小園猛さんは殺されたんです。小園猛さんの履いていた靴のサイズも、知っていた人間によって」

当然、警察の誰かはそのトリックに気が付いているのだろうか。小園由美子も知っているかもしれない。仙人が持ってきた煎餅をパクつきながら、時間が過ぎるのを待った。

昼時になって、渋い顔をした沢村が姿を現した。顔を見るなり、仙人は舌打ちをする。どうやら、相当嫌われているらしい。

「おい、刑事よ」沢村を手招きした。

「ああ、黒岩さ、いや仙人。どうしてここに？」

流石の沢村も怯んでいるようだ。

「T村で何件の事件が起こっていると思っているんだ。いいかげん、犯人をつかまえろ」

「ですが。何度も言ったように、自分は神奈川県警なんですよ。捜査するのは地元のこと……」

「いいわけはするな」

言い終わる前に遮った。

「彼らにも聞いたぞ。小園猛は殺されたんだってな」

——し、しまった！

目の前の老人は僕達が話していた内容を、グイグイとしゃべっている。

「君達は、なぜそこまで知っていたんだ？」沢村は僕達の目を見てきた。

「いや、その、小園猛さんは知り合いでして。いろいろ調べていたんです」

部筑は諦め混じりに言った。

「甘い気持ちで捜査するなって忠告したのに」

「大人の事情を話したい。近いうちに、自宅へ寄れ」

仙人は捨て台詞を吐いて、『希林寿』を出ていった。なんだか、嵐が去っていった感覚だ。

「やれやれだ」

沢村の体が幾分小さくなったように思える。

「何で黒岩さんは、沢村さんにつらくあたるんですかね？」

「それは、こっちが聞きたいよ。T村に来てても死体が見つかるんだからな。発見者も見つからないようだしさ」

発見者と聞いて、僕は身震いした。悟られないよう、大変ですなと眉を潜める。だろうと言った彼なりの予定が大幅に狂ってしまったらしい。

「黒岩さんに、いろいろ聞いたんだね？」

「はい」

「神奈川県警も、小園さんのことは水面下で調べていたんだ。自殺にしては、いくつかの矛盾点があつてね」

部筑が聞いた状況から判断した他殺説以外にも、何かあるのだろうか。

「矛盾点？」

沢村は、皮の手袋をしている手を横に振った。

「いや、何でもなし。とりあえず、今回の事件は担当から外れそうだから、ほっとしているよ」

はぐらかされたのは気になったが、僕もほっとした。

「女将さんはいないの？」

「いると思いますけど、その前にお時間貰えますか？」

第一、第二の事件で、被害者の状態を聞いた。無数の傷がどうなっていたか、知れたかったからだ。

「あの傷は、ナイフのような刃物では不可能だろうな」

「どうしてですか？」

「切り口があまりにも均等だったからだよ。いくら犯人が殺しの達人だったとしても、百か所以上の切り傷を、同じようにつけることは出来ない」

「なるほど」

「それに――」と言葉を切り、沢村は顎に手を当てた。

「皮下脂肪が薄い、額の部分にも傷はあったんだけど、骨が削られていた形跡があったから、特殊なものを使ったんだだろうな。例えば業務用の電動のこぎりとか。でも、切り口が薄いから違うか。うーん、わからないな」

放置しておけば、いつまでもマッチポンプを繰り返そうだった。

「均等ってことは、等間隔で切り傷があったんですか？」

「鋭いね」

十箇所単位で等間隔だった。傷と傷の感覚は約二センチになっていた。十個の刃を持った機械でつけたような、と沢村は形容する。刑事さんの方が鋭い、と感心している場合ではなかった。

「そんな機械に心あたりはないかい？」

「ありません」部筑は即答で、僕も便乗して否定した。ただ、部屋を家宅搜索されたら、完全にアウトだ。

「だよな」

「鹿野さん、呼んできますよ」

気をきかせているように演技するので精いっぱいだった。

「あ、そうだ。貸していた本、返してくれないかな？」

借りていた三冊の本を渡そうとすると、沢村は食い入るような視線を送ってきた。蛍光カラーの本をサンドイッチ状態にしているのが、気になっているのか。

「確かに。受け取ったよ」

階段付近で見張りをしていた。部筑はいざとなったとき、リュックを持ってバルコニーから逃げられるようスタンバイしていた。が、沢村は鹿野紀子と立ち話をして、忙しくその場を後にした。そのタイミングを見計らって、鹿野紀子に声をかけた。

「沢村さんとは、何を話していたんですか？」

「……夫婦のことをいろいろです」

「あれ？」

疑問がふつつつと沸いてくる。

「どうしました？」

「いや、今回の事件は担当から外れそうって、おっしゃっていたので」まず、神奈川県警の刑事が丁村の低雲丘であった事件を調べる方が不自然だ。

「夫と小園さんに何かしらの関係がなかったかを調べているみたいですよ」

沢村は、どのぐらい小園猛のことを調べているのだろうか。

「それと、沢村さんは一時期、丁村を管轄している警察所に勤めてきたことがあるんです」

「本当ですか？」

「はい。古い仲間と再会ができるとかで、喜んでいたみたいですよ」
沢村が丁村にいたのは、約七年前から二年間だった。元々神奈川に住んでいた沢村に異動の話があったわけではなく、彼自身が率先していたらしい。

「だからか……」

自ら納得している僕の顔色を伺ってきた。

「左近字図書館員の加藤さんが、沢村さんの顔に見覚えがあるっておっしゃっていたんです」

沢村が丁村に滞在していたのなら、一度や二度は顔を合わせていても不思議ではない。

「縁があるみたいですね」

僕達は神奈川と丁村で何度も顔を合わせている。少し、仲良くな

りつつもあつた。

「あまり嬉しくはありません」

苦笑いした。どこかで疑いを掛けられているはずだから。

「ところで、鹿野さんは、何故沢村さんの事情にくわしいんですか？」

事件捜査の一環なら、不思議ではないのだが。

「くわしいというほどでもないですよ」

謙遜しているのか、探られたくないのかは判断できなかった。用事がありますからと立ち去ろうとした鹿野紀子を引きとめた。僕は邪な考えを持ち始めていた。

「この事件がある前から、沢村さんに関わりがあつたとか？」

不倫とか……

「ありません」即答だった。あつたとしても言えないだろう。気まぐずなつてしまい、僕はお礼をして、その場を離れた。

V・ブビリオフィリア

ここ最近に有った出来事は、今までの平凡な生活を相殺するため
に詰め込まれているのであって、また、平凡な生活を送れるよう
になるのだと、自分に言い聞かせた。そうでもしないと、体がバラ
バラになり、その欠片が他者への告げ口をしかねないぐらいに、告
げ口をしないと精神が保てなくなりそうならいに、追い詰められ
ていた。

部筑と話しあっている間は、それらの強迫観念は和らいだ。

能力に自信を持っているかと言うと、嘘になる。どこか、都合良
い方向へと導いている、作り出した思考に過ぎないのかもしれない。
凶悪犯罪の捜査よりも、誰かを裁こうとしている方がよっぽど怖
い。

真実を暴くことに、意味があるのだろうか。

大切なものを奪おうとしている。引き返すのは今しかない、も
う一人の自分が訴えかけてくる。このまま事件を終わりにしておけ
ば、平和な日常が訪れるような気がしてならない。

支えているのは正義感だった。いつもぐらついていて、ネット状
では名無しの人間として正論を書きこんでも、実世界では何ひとつ
実行にうつせないでいた、矛盾だらけの正義感だ。ただ、被害者を
少しでも知ってしまった事実が、背中を後押ししてくる。大袈裟か
もしれないけど、その正義感が彼らの人生を狂わせてしまう道筋を
作るうとしているのは知っていた。

二人で出した答えに背を向けなくなった。

確かな道しるべを教えてくれる誰かに縋りたかった。

迷宮にでも迷い込んでしまったようなこの迷いは、殺人を犯した、
または殺人に加担した人間にとっては、とるに足らないものなのだ
ろう。彼らはとくにその迷いを振り払って、殺人という残虐な行
為を犯している。

駄目だ。少しでも殺人犯を尊敬しようとした瞬間を恥じるべきだ。大きな決断のときが迫っていた。

午後五時、義男と美佐江は仲好く帰宅した。これから荷物を整理して、僕達と一緒に神奈川へ帰る予定だった。

「もう、準備は済んだ？」

美佐江が声をかけて来る。

「ああ。準備が済んだら、義男さんを連れて僕達の部屋に来てくれないか？ 話があるんだ」

「新幹線の時間とかあるし、話なら車中でいいんじゃないの？」

「駄目なんだ」

怪訝な表情をした美佐江は、しぶしぶ承諾した。

四人がテーブルを囲んでいた。互いの息遣いが、重苦しい空気を変えてくれる言葉を欲していた。部筑と僕が険しい表情をしているので、美佐江と義男にも伝染している。

「ねえ。話って何なの？」

苛立ちとも取れる表情で、美佐江は言った。

「犯人は、鹿野隆さんじゃありませんでした。そして、小園由美子さんだけでもない」

「犯人探しは終わったんでしょ？」

「いや、終わっていないよ——」言葉を切り、ゆっくり間を持たせた部筑がつづける。

「ここにいる、半数の人間が共犯だと、俺は推理しているんだ」

親子揃って、目を見開いた。その言葉が、もう引き返せないところまで来ているのだと自覚させた。

「どういうこと？」

「その前に、義男さん。あなたは小園猛さんですね」

部筑は平然と言つてのけた。昨晚、不正の味がすると言つた正体

がそれだった。僕は丁村の阿武隈川事件が書かれた『ブビリオフィリア』をテーブルの上に置いた。

「この本は、あなたが書いたものだ」

ただ、一部の内容を除いて、すべてが同じづくりの本。会社に侵入し、ロッカールームから拝借したことも話した。美佐江と義男の表情はみるみるうちに険しくなっていた。

「作者の名前が書かれていないのだし、証拠がない——第一、あの個室にその本が存在していたのすら、知らなかったんだ」

「知らなかったにせよ、見つけてしまったんです」

「阿武隈川の事件が書かれているのなら、小園が別口で出版したと考えるだろう」

義男の口調は怒りが混じっていた。鍵まで盗んで侵入したのだから、当然だろう。

「俺も、調べてみるまでは、小園さんが書いたのだと思っていましたよ」

「調べてみるまで？」

「ええ。俺は本の作者がわかる能力を持っていますから」

部筑は、小園猛が書いた原稿を、ワープロ原稿として書き込んだのが義男ではないかと推理していた。

「以前、『ブビリオフィリア』の作者を言い当てたときも、そのような能力があるといつて小園の名前を言い当てたね。私が信じていたと思うかい？」

美佐江と小園由美子に繋がりがある限り、部筑が本力バーから無情報で『ブビリオフィリア』の作者を言い当てたと証明するのは難しかった。

「それは義男さんの自由ですよ」

「わかった。仮に信じるとしよう。だが、私が『ブビリオフィリア』を書いたとして何のメリットがあるのかな？」

「普通に考えて、メリットはないでしょうね」

「だろ。私が書くべき理由なんてどこにもないんだよ」

「無利益だから、絶対書かないという理由にはならないと思うのですが」

「誰かに依頼されて書いたとしても言いたいのかね？」

「そうかもしれないし、違つかもしれない。本当のところはわかりません」

「潔いな」

「義男さんは横浜の阿武隈川で事件が起こった話を聞いたとき、手直し原稿に書かれている内容と一致していることを指摘しました」
義男は頷く。

「でも、この本には丁村の阿武隈川で起こった事件が明記されています。手直し原稿にも同じ内容が書かれていたのなら、実際に起こった事件との相違も指摘できるはずですよ」

「私はそれをしなかったと？」

「ええ。指摘してはいけない理由があつたから」

鼻で笑った。

「忘れていた、と言つたらどうするんだ？ 約二十年も前に読んだ原稿の内容を、すべて記憶している頭は持ち合わせていないよ」

「少し、話しを変えましょう——」理屈ではどうしようもない範疇の議論になると思つたのだろう。部筑は険しい視線を解き、指の関節を鳴らした。

「阿武隈川の事件は、小園猛さんの奥さんが殺された、実在の事件をモデルに書かれていました」

「実在の事件って？」

美佐江は言う。すると、部筑は僕の顔を見てきた。頷く。

「小園猛さんは、原稿を書き上げた段階で、奥さんを殺した犯人を、小説で登場させていた。最終的に犯人を殺すことによって、少しでも気が晴れるのではないかという意図があつたからです」

「さつきから、君達は何を根拠に話をしているんだ？ 小園の奥さんは、若くして病死しているんだぞ」

「死者の訴えていることを読みとれるんです」

僕は、二冊の『ブビリオフィリア』から読みとった内容を、事細かに説明した。突拍子もない話を、他人の顔色を伺わずにしゃべりつづけている。いつもなら適当に誤魔化して、実は嘘でした。と、オチをつけて終わりにするだろう。しかし、脈打つ鼓動がすべてを吐き出してしまえと訴えかけて来るように、死者が抱いていた無念を、犯人にぶつけてくれと訴えられているかのように、無心に近い状態だった。

「正気なのか？」

「はい。すべて本当です」

「冗談じゃない」

義男は膝を叩いて、立ち上がった。

「さつきから、聞いていれば――ふざけているのか？ 君達には能力があつて、本の作者がわかる？ 本から死者の訴えを読みとれる？ 信じられるわけがないだろう」

「最初は自分の能力を信じられませんでした、今は信じる以外にないんです。被害者にしかわからなかった情報も、本から読みとつたんです。刑事さんに事実確認をしたら、その通りでした」

「君は言葉を使い間違えている。被害者にしかわからない情報は、犯人にしかわからない情報だとも思わないのか？」

「わかつていますよ」

「ならば、疑われるべきは君達なのではないかね？ 鹿野隆さんを発見したのに、匿名で通報したそうじゃないか。なぜなんだ。疾しい事情がなかったら、そうする必要もないだろう」

「それは――」

直接疑いを受けることが、これだけの嫌悪感を抱く結果になろうとは思わなかった。今の義男や美佐江の気持ちを理解した気がする。と感情に浸っている場合ではない。僕は咳払いをした。

「誤解を恐れずに言いました。こうでもしないと能力を証明できないと思いましたので」

美佐江は頭を垂れていて、表情まではわからない。僕はつづける。

「鹿野隆さんの件は、明日、自ら申し出るつもりです」

「ふん。何かを証明したいのなら、するだけの準備を整えてきなさい。これから社会人としてやっていくのなら、なおさらだ」

「ご忠告ありがとうございます。『？エコノミーテクノ』に不法侵入したことも、謝らせてください。有るまじき行為をしてしまい、申し訳ありませんでした」

部筑は深く頭を下げた。

「処分は後で考える。で、何か言いたそうだな」

「吉村加奈子さん、という方は働いていませんか？」

僕達から目を離れた義男は明らかに狼狽していた。

「……最近入った、派遣社員の子だが」

ふた月前に、派遣されてきたらしい。僕が、社員同士の会話を聞いていた話しをすると、義男の推薦で、入社してきたことがわかった。実際、地質調査の仕事もあり、彼女がそれで会社に顔を出さなかったとしても、不信にはならないと、美佐江が言う。

「その子が、小園由美子さんじゃありませんか？」

ノックする音が聞こえてきた。美佐江が返事をしたら、鹿野紀子が顔を覗かせた。

「お時間、大丈夫でしょうか？」

午後六時になろうとしている。確か新幹線の終電時間が午後九時十分だったはず。

「はい。すいませんが、もう少し、居させてもらえませんか？」

「こちらはいけません。それでしたら、何かお食事でも」

「いえいえ、お構いなく」

ドアが閉まる。すると、美佐江は大きく溜息をついた。

「会社にいたのは由美子なの」

「おい」義男は両手を美佐江の肩に置き、慌てて諫めようとした。

「大丈夫。あの子はこれ以上、何もしないと思うから」諦めたのか、義男は両手を下げた。

「わたしは、そのことを二日前に知ったの」

「義男さんの手伝いだと言って、会社に行ったのは？」

「そう。由美子かどうか、確かめたかったの。初めは信じられなかった。父さんが勤めている会社に、由美子がいるなんて——でも、由美子は会社に姿を見せなかった」

そう言うと、美佐江は義男に視線を送った。

「彼女は『ブビリオフィリア』に書かれていた会社の不正が、実際に行われていないか、確かめようとしていたんだよ」

ふた月前、つまり失踪してすぐ、義男に入社させてほしいとお願いしてきた。そのとき、新規プロジェクトが発足されていて、人出不足であつたらしく、アルバイトの募集をしていた。小園由美子は動物や植物の生態の知識を持っていたので、大学生の肩書があつたが、面接を行った。

彼女は必要以上のスキルを持っていた。義男は彼女の父親が自殺してしまつたことも把握していたので、同情心も手伝つて、採用したという。

「良く働いてくれていたよ」

勤務態度も火の打ちどころがなく、周りからも可愛がられていた。しかし、あるときを境に、状況は一変した。

「横浜の事件が起こる少し前ぐらい。彼女は予言するかのように、こう言いだした。近々『ブビリオフィリア』通りに殺人事件が起こっていくと——そして、実際に事件は起こってしまった」

「だから、義男さんは信じていたんですね？」

「ええ。正確には、信じるしかない状況だった。それと、彼女が犯人ではないかということも疑い始めた。あの本を読んでいる人は少数だから——しかし、横浜、新横浜の事件があつたとき、小園由美子は『？エコノミーテクノ』に勤めていて、社員の証言からアリバイもあつた。夜中なら神奈川まで戻る時間があるだろうが、どちらも勤務時間内に行われた殺人事件だった。あの子が殺人を犯すのは不可能だ」

義男は、横浜での事件が起こってから、美佐江にどんな子だったかを聞きだした。理由は、これから『ブビリオフィリア』通りに殺人事件が起こり、彼女を犯人候補としていたからだ。そこで、小園由美子が失踪していたことを知る。ただ、義男は小園由美子の居場所を知っていたし、驚きはしなかった。美佐江が前から予定していた海外旅行に出発する前に、新横浜の事件現場の近くへ寄ったのは、義男の話がきっかけだった。

「私は必ず共犯がいると思っていた。君達が調べていくうちに、鹿野隆さんの名前が挙がり、それらしき人物だと考えた」

「ただ、鹿野隆さんは犯人ではありません」

と、僕は念を押した。義男はまだ信じられないといった態度だ。「どうして隠していたんですか？ 少なくとも、第一の事件が起こった矢先、警察に相談していれば、第二の事件は起こらなかったかもしれません」

「言ってしまうば、美佐江を殺すと、脅迫されたから」

脅迫されたのは、第二の事件が起こる直前だったらしい。警察に限らず、君達に小園由美子の素状を明かしたら、美佐江は殺されていたかもしれない。と義男は言う。

「それだけではなかった——」

彼女は二つの勘違いをしていた。一つは『？エコノミーテクノ』が自然破壊をしていると。もう一つはT村長との癒着があつて、不正取引の末に会社を創立させたのだと。

もし、美佐江を殺す前に、警察に捕まってしまうば、すべてを話すとまで言ってきた。会社の存在を、あまり良く思っていないT村の誰かに聞いたのだろう。社内の人間はそんな不正があるはずもないと知っていたのだから。

つまり、我が子の生命と会社の評判を同時に守ろうとした末、殺人計画を実行している者の存在を誰にも相談できず、沈黙の狭間に立ちすくんでいたのだ。

「僕達が事件の捜査をしていることについては、何も言われなかつ

「たんですか？」

「ああ。君達には、あまり期待していなかったから。いや、気を悪くしないでくれ。素人が捜査したところで、この事件を解決できるなんて思わないから。むしろ、事件捜査を言い出して、聞かなくなつた美佐江の傍にいてくれるだけで安心できると考えたんだ」

利用されていたのか……ただ、薄々は勘付いていたが。

「巻き込んでしまったのは、すまないと思っている」

「小園由美子には会えたんですか？」

「今週の出張中、私は会社の不正が潔白であることを説明しようとした。しかし、勤務しているはずの小園由美子はいなかった」

「いなかった？」

「週明けから欠勤をしていたんだ。私の部屋にメッセージが残されていて、『他の社員には、しばらく戻らない旨を、それらしい理由で説明しておいて。もし、低雲丘に用事がある社員がいるのならば、木曜日まで絶対に立ち入らないよう、呼びかけておいて。あなたなら出来るはずだから。今週の水曜日に連絡を入れる。手紙が届いたら、その電話に出ないで』とあつたよ」

『？エコノミーテクノ』の社員は、地質調査や環境調査のため、定期的に低雲丘へと足を運んでいた。丘の周りにある木々の葉の発育は止まっていて、その成分やらを調べるためだ。その頻度は、地元や観光客よりも多いらしい。

「確か、僕達が会社を訪問したとき、義男さんの携帯に着信がありましたね？」

あのととき、なぜが義男は安堵の表情を浮かべていたのを覚えている。

「番号は非通知でしたが、恐らく、小園由美子からの連絡でしょう」

「ならば、俺達を会社と呼んだのは、低雲丘に行つて欲しくなかったからですね？」

義男は頷いた。

「あえて、義男さんに脅迫状を送つたのは何のためだったのでしょうか」

うか？」

「一番、私が行きそうな気がしていたんでしょう。待ち合わせ時間を午後六時に指定しておけば、少なくとも、その前の時間は自由になる——誰にも殺害を邪魔されなくなかったからだと思う」

「小園由美子は、どうしても父の死んだ低雲丘で、鹿野隆を殺す必要があったから。か」

「メッセージにはつづきがあるんだ。『事件の主導者はわたし。金曜日になったら、吉村加奈子は会社を辞めましたと伝えてほしい。それでわたしの事件は終わる。警察に連絡しても、美佐江を殺そうとはしないし、会社の不正も言わないから。どうか、それまで大人しく待っていて』とね」

小園由美子は、すべてをやり終えた後、義男の個室に証拠となる物を置いていくつもりだったのかもしれない。しかし、物的証拠はなくなっていた。僕達が会社に侵入して持ってきてしまったからだ。「もう一度、聞きますけど」

「ああ。この『ブビリオフィリア』は私が書いて発行したんだ」

義男はそう言うと、T村の阿武隈川事件が書かれた本を手にとった。

「小園由美子に依頼されて発行したわけではない」

義男の手元には、小園が書いた原稿のコピーが残っていた。読み終わった後、彼は適当に処分してくれと言っていたが、どうしても捨てられずにいた。

時代が小説の舞台設定に追いついてきた頃、義男は再読してみた。すると、物凄く面白い作品であることに気が付いた。十九年前、初めて読んだときには感じなかった、言葉の色香と言えいいのか、そういうのもひっくり回して、すばらしい作品だった。

自分の意見で消されてしまった箇所に、ある種エネルギーも感じた。このまま、眠らせておくのは惜しかった。それで、彼を驚かせてやろうと考え、手書きの原稿をワープロに起こして、自費出版を請け負っている会社に頼んだ。その会社とは、付き合いがあったら

しい。和紙の原料を取り扱っている『？エコノミーテクノ』だけに、いくつかの出版社や印刷会社とも付き合いがあると言う。

「いつ頃の話ですか？」

「半年ほど前。二百冊作って、百九十冊は全国流通させるようお願いした。まあ、名もない者が書いたものだから、ネット上で販売してもらうのが関の山だったけどね。それでも、出来るだけ多くの人に読んでもらいたい気持ちはあった」

「実際に発行した本を渡したんですか？」

「いや、私からは渡さなかったよ。そのかわり、売れた分の印税を贈呈しようと思っていたんだ」

全国に流通しているのなら、少なくとも『ブビリオフィリア』通りの殺人事件を犯す犯人候補は数人いるはずだ。しかし——世に氾濫している推理小説は数えきれない。その一つ一つに推理小説と全く同じ殺人事件を犯す人間がいるとしたら。いや、一般論で考えてもいるはずはなく、終始、義男は小園由美子が犯人であると疑っていた。

美佐江もそれらのことは今初めて知ったようだ。

「なぜ、今まで隠していたんですか？」部筑が瞳の光を義男に向ける。

「私が、小園を殺したから」

僕は、義男が真犯人だと確信した。

V1・書物愛は親子愛に勝るのか

小園由美子は事件が起こる前にこう打ち明けていた。

彼女が父親の元を訪れたとき、『ブビリオフィリア』を読んで泣いていたところを目撃していた。父親が泣いている姿を見た経験はなかったので、驚愕に値する出来事だったらしい。なぜ、自分の作品で嘆いていたのかまったくわからず、理由を聞いても、何も答えなかった。

彼女は父親が寝静まったところを見計らい、こっそり読んだ。小園猛が発行していた『ブビリオフィリア』とは、一部の内容が違っている小説があり、しかし、それが泣いている理由とどう繋がるのかはわからなかった。

次の日、彼女はしつこく問いただした。すると、父親はこう言った。自分の知らないうちに、十九年前に書いた原稿の内容が盗作されていると。しかも、ネットで全国流通していた。それを購入していた。

小園由美子は父親が大事に持っていた、ボロボロの原稿用紙を読んで確認した。確かに、全く同じ内容であった。

盗作が作者にとって死活問題になりえるのはプロの話であって、無名の趣味で書いたような作品が盗作されようが、騒ぎ立てる程でもない。小園由美子は考えていた。

反面、相当思入れのある作品なのかもしれないと考え、その辺を慎重になって訊いた。すると、新たな作品を出版するのに、回収していたことを知った。そして、作者も明記されていない、誰が出版したかもわからない『ブビリオフィリア』を回収するのは不可能なものも知った。当然、発行元に自分が作者だと申し出ても、聞く耳を持ってもらえなかったらしい。

小園猛は誰が盗作したのか、薄々はわかっていたらしい。原稿用紙を持っているのは、義男しかいなかったからだ。しかし、小園猛

は問い詰めようとしなかった。あるいは、別の目的があつて、それを解決してから、問い詰めようとしていたのかもしれない。

その後、アパートを引き払って、父親の住んでいる実家に住もうか検討していた矢先、小園猛は仕事のため、と丁村を訪れた。誰かに手紙を書いて送っていた事実も、返却されてきた手紙で知っていた。宛先は、鹿野隆がいた刑務所になっていた。

小園由美子は盗作によつて消されていた、丁村にある会社の不正に注目した。それと同時に、予定を過ぎても帰つてこない父親を心配し、丁村を訪れた。

奇しくも、父親の遺体を自ら発見してしまった小園由美子は、登場人物にも出てきた石崎義男を調べた末、『?エコノミーテクノ』に入社することを決意する。鹿野隆が出所してから、失踪していることも、知った。

ただ、小園猛が泣いていた理由は、本当は妻の殺人事件の箇所を読んだからだろうと思われる。娘には、本当の理由を打ち明けずにいた。それなら小園猛は、妻の死因を墓場まで持つていったのだ。

「好意のつもりだった行為が、小園を自殺へと導いてしまったんだ」まるで半自伝的小説のように、義男の話はどこまでが真実なのかわからなくなっていた。

「小園さんはなぜ、義男さんに盗作の話をしなかったんですかね？」僕は探りを入れた。

「わからない。だが、私が内緒にしておくべきじゃなかったのは確かだ」

義男は頭を抱えた。

「奥さんの死を、義男さんに打ち明けられなかったからじゃないか」「えっ？」声が裏返った。

「どこまで内容を変えるはずだったのか知らないけど、実際に起こった事件を書こうとしていたのは事実だ。タイトルと表現の仕方を変えるだけでも、全く別の本になる。義男さんが言っていたように、十九年経てば感覚はかわる。新たに書き直そうとしていたのなら、

なおさらじゃないか。しかも、十冊しか作っていない自費出版だし。小園猛さんは、本の回収にはそれ程、拘っていなかったと思う」部筑は、小園猛の妻が殺された事件の描写があったから、新たに発行した本の回収をしたいとは言えなかったのだと推測していた。義男に言えば、美佐江にしゃべるかもしれない。そうすると、友達である小園由美子にも伝わってしまう可能性もある。

静寂がおとずれた。

美佐江は、置いてあった二冊の本を手にとって、鼻に近づけた。音を立てて、吸い込んだ。

「あれ？」

「美佐江？」

「この匂い、どこかで……」そう言った美佐江は、T村の阿武隈川事件が書かれている『ブビリオフィリア』を見つめる。「……思い出せない」

張り詰めている空気を、緩和させようとしていたのだろうか。美佐江は僕達が出会った頃の話をしだした。

「『ジプシーの日常』を、二人が読んでいたのは、匂いで分かったの」

「図書館員に聞いた、とか勘じゃなかったんだな？」

「違う。何となく、わかったの」

初めて、美佐江に声を掛けられたとき、『ジプシーの日常』を返却してから二日は経過していた。部筑は、図書館で借りてから一カ月以上は経っていると言う。いくら嗅覚に優れていたとしても、匂いがそこまで残っているとは思えない。

部筑の目は、金髪の美人を食い入るように見つめた。

「もしかして、美佐江も能力があるのか？」

「かもしれない」

自分が能力を持つてみて、完全に否定することはできなくなっている。むしろ、信じられる。不思議なことでも、何でもないのだと。「やっぱ、俺達は同じ匂いがしたんだよ。能力を持っている者同士

の匂いがあるんだ」

能力、と聞いて僕は本から読みとった言葉を反芻した。

《アル者ハ 私利私欲デ 動イテイルノダト知り 失望シタ——》

小園猛は、盗作した者を特定せずに逝ってしまったから、『ある者』と形容していた。

《——出世ノ為 不正ヲ働キ》

《人間ハ醜イ 将来ノ為ナラ 他人ヲ 犠牲ニスル——》

出世のため、自然破壊、村長との癒着を行ったりして『？エコノミーテクノ』は不正を働いていた。しかし、その不正を隠そうと、作者には内緒で別バージョンの『ブビリオフィリア』を発行した。将来的にも、知られてはならない事実が、小説として書かれているからだ。何とか、十冊の小説だけでも、葬り去ることを考えた。幻の本にする必要があったから。

《——良心ガ欠ケタ行為 暴イテヤロウト 考エタ》

しかし、小園猛が取材でT村を訪れていたとき、いろいろな事実を知ってしまった。義男は、止むを得ず、不正が書かれている『ブビリオフィリア』の所有者、小園猛を殺した。そして、本も同時に葬ったはずだった……

「違うよ、部筑——」

僕なりの推理をすべて告白した。それは義男の話を覆すことになる。

「私の言ったことが信用できないんだね？」

「はい」

「わかった。ならば証拠を示してもらおうか？」義男は高圧的な口

調になった。考える間も与えんばかりに、つつけた。

「ないのか？ え？」

「……」

「話しにならないな」義男は腕を伸ばし、Ｙシャツが捲れたところにある腕時計をみた。

「もう、こんな時間だ。美佐江、出発するぞ」立ち上がろうとする。
「まだ、話しは終わっていませんよ」部筑が制した。

「この機械は何に使われているのでしょうか？」

『U130』を見せた。

「弊社の製品じゃないか。なぜ君が持っているんだ？」

「侵入したとき、拝借しました」

義男は大きなため息と共に、目を細めた。

「樹木に切れ目を入れるんだよ。そこから、弊社が開発した成長促進剤の液体を染み込ませていく。液体は、支柱の先端部分から入れれば、自動的に刃の部分から噴出していく仕組みなんだ」

「成長促進剤には、どんな原料が使われているのですか？」

「楮、三桠、雁皮等の樹脂だよ。それ以上は企業秘密だ」

黒岩は、和紙に使う原料だと言っていた。森林伐採と思われるいたのはそのせいだ。

「殺人につかった機器ではないんですか？」

「どうということだ？」

「こういうことです」

部筑は『U130』の電源を入れ、段ボールを削いだ。

「段ボールには、等間隔で十つの切れ目が出来ます。金子大輔さんと城島博志さんの遺体に、それぞれ何か所の傷があったかは、ご存じですね？」

「二百七十箇所と百十箇所だったはずだが」

「その通りです。俺達は刑事さんに協力してもらい、被害者の持っていた本を貸してもらった。確認してみると、傷の数と同じページ

数の箇所には気になる引用がありました。金子大輔さんの持っていた『ホテル・旅館ソムリエ』には書かれていませんでしたが、絶版の百十ページ目には『希林寿』の酷評がありました。城島博志さんの持っていた『どん底からの億万長者への道』の二百七十ページ目には、■ お金はどこにでも転がっているという項目があり、出版業界に悪影響を及ぼす内容が書かれていました。ご丁寧にも、横に線まで引かれていた」

「何が言いたい？」

「傷の数と持っていた本のページ数に何かしらの意味を持たせようとしたんです。犯人である人間が、自分がやったとは思わせないように仕向けた二つの意味です。調べていけば、いつか『希林寿』の酷評に行きあたるかもしれない。恨みを持つ者は、鹿野隆さんか鹿野紀子だと特定できますから。でも、それだけでは弱いと考えた。わざわざ、『どん底からの億万長者への道』の二百七十ページ目に横線まで引いたのは、それらをわかりやすくするためだったのです」

『どん底からの億万長者への道』を見せたとき、義男は二百七十ページ目を指摘した。あれは、小園由美子の殺意をにわせせる演技だったと思われた。

「金子さんの子供である金子大輔さん、金子さんを本当に殺した城島博志さん、普通なら、両者を殺したのは関係のある鹿野隆さんだと思うでしょう。でも——義男さん、あなたも両者に関係ありますからね？」

「確かに、旅館の金子さんとも、従業員だった城島博志さんとも関係がなかったと言えば嘘になる。会社を設立させる前に、旅館の立ち退き交渉をしていたからな。だが、彼らと確執はなかった。殺す理由なんて、あるはずがない」

「わかりました。傷の話しに戻しましょう」

美佐江は、さっきからずっとうな垂れていた。声を掛ける言葉も、タイミングも見つからずにいた。

部筑は沢村に聞いた話をした。約二センチの等間隔の傷があった

こと、ナイフの切り口ではないであろうこと、そして、特殊な機器が使われていたのではないかと疑っていたこと。すべての条件が『U130』に合っている。

「傷の数が十の倍数であることが、何よりの証拠になります」

「盗難された機器が殺人に使われた。君はそう言いたいんだな？」

「ええ。盗難されたのはひと月前だとおっしゃっていましたし」

「偶然の一致かもしれないぞ」

「この機器は出回っていないんですか？」

「一部の業者にしか出回っていないはずだ」

小園由美子が持ち去ってつかったかもしれないと、最初は考えていた。しかし、事件当時の小園由美子にはアリバイがあった。

「ふん——私が犯人だったら、そんなへまをやらかさない。自社の製品を使っていたとしたら、君達が疑っているように、真っ先に疑われるはずだからな」

「俺が殺害方法の話を持ちかけたとき、義男さんは興味を示さなかった。それは、既に知っていることですし殺害方法を検証する必要がなかったからじゃありませんか？」

「勘違いにも程がある」

「美佐江……僕とあったとき、スーツケースの中に『U130』が入っていた？」

美佐江は弱々しく、首を横に振った。

「小園由美子の居場所は、知らないのですか？」

「知らない。今頃、自首しているんじゃないか」

「本当に知らないんですね？」

「何度も言わせるな」

「警察に通報できなかったのは、美佐江の生命を守るためや、会社の嘘の不正を暴かれるのが怖かったのではなく、小園由美子を自殺と見立てて殺そうとしたためではありませんか？」

「違うに決まっているだろ」

「彼女が捕まってしまうえば、あんた達が共犯であると、自白してし

まう可能性があつたから」

「違う。違う」

「小園さんは自殺なんかじゃありません」

「……小園を、自殺に追いやってしまったただけだ。私が殺したんだ」

「いえ、義男さん、あなたが殺したのは」

「もう、止めて……」

美佐江はぼつりと言った。

声が途切れ、小さな嗚咽になった。抑えよう、抑えようとしても、込上げてくる気持ちの強さに押しつぶされそうになりながらも、それでも必死に戦っているように、美佐江は切れ切れの声を出した。

「ど。どうして……お父さんの……言うことを信じてくれないの？」

ひどい。あんまりだよ」

「美佐江」部筑は、風船の空気を抜いてしまったかのように、さっきの勢いはなくなっていた。

「……ブツクと……信二は、そんな人だったなんて……知らなかった」

僕達は、美佐江が落ち着くまで、無言のままだった。

美佐江が泣きやむと、意識が遠のいて、遠くを見ているようで、心ここにあらずになった。瞳が壁を通り抜けた遠くの空を、いや、僕達が見えない、美佐江だけが何かを見えてしまっている、そんな表情をしていた。

大きな瞳は何を意味しているのか？ 蛍光灯に反射している、潤っている半開きの唇が、すべて固定されている。

理解しようとしても、わからない。彼女の気持ちを理解したいのに。理解したいと願っているのに。ますますわからなくなる。

どうしてそんな表情をするの？

どうすればいい。血管が張りさけそうだ。

なんでなんでなんでそんな表情をしているの。

否定してくれ。僕と部筑が考えた推理なのだから。

「警察に話すよ」

美佐江の肩を抱いた義男は、そう言った。

「元はと言えば、私が巻き込んでしまった事件だ。私が犯した事件だ」

持ちつづけていた荷が下りた。僕と部筑は軽くなり、美佐江と義男は重くなっているのだろう。

一同はしかるべきところへと散会した。

W・平凡な日々もある

丁村で鹿野隆の第一発見者として取り調べを受けてから、二週間経っていた。あの日は、美佐江と義男は神奈川へと帰り、盗んだ物品は彼らに返した。

部筑は丁村にある最寄の警察所まで付き添いで来てくれた。かなり怪しまれたのは言うまでもない。匿名で通報し、『?エコノミーテクノ』への侵入やら、拝借した物品やらを突き詰められると、言い逃れは出来なくなっていたが、義男が対応してくれ、証拠不十分として釈放された。

結局、証拠が不完全の状態で、石崎親子を疑ってしまったのは良かったのか、未だに答えが出ていない。義男が言った、『私が犯した事件』の真意も聞けていなかった。ただ、決断を早まっていたなんて考えたりする反面、今でも義男達が犯人としか考えられなかった。

美佐江と仲直りできるかは、部筑もわからなかった。考えても仕方ないだろ、と彼は面倒くさそうだが、その眼差しは、どこか不安気だった。美佐江は親友に裏切られたと思っっているのだろうか。大学のキャンパスで、三人が顔を合わせられる時間は、後わずかだ。皆で協力した事件捜査を、語り合える日を願うばかりだった。

三度目の丁村来訪は鹿野隆の告別式が目的だった。すっかり雪解けの景色が広がっていて、初めて訪れたときの記憶が蘇った。鹿野紀子は気丈に振る舞っていた。僕が第一発見者だった話をする、と通報してくれてありがとう、と感謝された。

加藤や黒岩も出席していた。挨拶をかわす以外、話すことは何もなかったかのように日常へと溶け込んでいった。

ゆっくりした時間が流れた。

テレビの修理を出したり、内定した企業にも用事があつたり。新横浜の街並を散策しては、何度か新横浜のあの定食屋にも足を運ん

でいた。置いてある雑誌からも、もしかすると、死者の訴えを読みとれるのではないか。そう考えたら不思議な気がした。今度、古本屋で自分の能力を試してみるのも悪くない。

定食屋の店主とは顔見知りになり、常連客へと向ける顔をしてくれるようになった。僕が生姜焼きを食べていると、店主はその顔を、のれんをくぐってきた客に向ける。テツさんだった。

ブラウン管に映っているニュースがつまらなかったのか、二杯目の麦酒を運んできた店主に話しかける。

「やあ、さっき歩いていたら事故があつてな。すげえ渋滞していたよ」

「ああ、サイレンが鳴り響いていたのはそれでしたか」

僕はまったく気が付かなかった。

「歩道に人垣ができていて、通り辛いつたらありゃしないよ」

話が済んだのを見計らい、会計を済ませた。

「おい、若者よ」

いい加減、顔ぐらいいは覚えてほしいものだけど、テツさんの赤ら顔を見て、その望みは先送りにした。

「なんでしよう？」

「野次馬はやめておけ」

「当然ですよ」

もう、事件に巻き込まれるのはこりごりだから。

「ふふん。それがいい」

「ねえ、テツさん？」

「おつ、何で俺の名前を知っているんだ？」テツさんはしらばっくれている。

「だって、いつもテツさんって呼ばれているじゃないですか」

「そうかい」

「照れているんですよ。テツさん」店主は頬笑みながら言った。

「人間関係で、大事なことってあります？」

「えらい抽象的な質問だな。悩んでいるのか？ 悩んでいそうだも

んな」

「どういう意味ですか？」

「悪い悪い。シャレだ」自分で発した笑い声が咳に変わる。

「今年の四月から新入社員で。人生経験豊富そうなテツさんにアドバイスもらいたくて」

「ふーん。そうだな——人間関係で大事なのは、先送りにしない。それに尽きる」

「えらい、抽象的な答えですね。考えろってことですか？」

「ああ。簡単には教えられない」満面の笑みをたたえ、喉を鳴らしながら麦酒を飲みほした。

「プハ」。おかわり」

気が向いたらまた来よう、と僕は思った。

『ブビリオフィリア』という小説をなぞった殺人事件は、報道され一人歩きしていた。犯人が特定できていないのに、マイナーな小説を取り上げている報道は滑稽だった。第一、第二の事件が神奈川で、第三の事件がT村で起こったのを、小説の引用文と照らし合わせている。

作者名も書かれていなかった自費出版本だったのに、作者である小園猛の経歴やら、顔写真が公開されていた。加えて、若くして妻このかよの小園佳代が殺されていることも、一人娘の所在が不明であることも紹介されていた。警察は小園由美子の搜索に入っているようだ。恐らく、大部分は義男か美佐江が証言した証拠なのだろう。

モノクロで映っている彼の顔もあった。ただ、小園由美子は母親似だ。セーラー服を着た小園佳代の写真とそっくりだ。事件捜査していたというのに、良く考えたら彼の顔を初めて見る。

「事件捜査には向いていないな」

つぶやいてみた——待てよ。意外にイケていなかったか？と満更でもなかった。

暖房なしでも快適に過ごせる日だった。時の流れに身を任せられるとは、こんな長閑な時間を意味するのだろうか。横たわっていれば、無心でいられるような気がする。

部筑と僕の部屋にいた。彼は相変わらず住む場所がなく、難癖つけては居座ろうとしていた。

ポテトチップをコーラで流し込んで、止められなくなっていたとき、知らない市内局番で着信があった。

「どうも」

沢村からだった。僕のこの番号は、美佐江から聞いたらしい。

「前に、石崎義男さんと美佐江さんが出頭してきてね」

出頭したのは鹿野隆の告別式があった日の九日前だった。彼らは自首して、何を言ったのだろうか。

「君たちは今、どこにいる？」

「僕の部屋ですけど」

「話がしたい。これから、指定する場所に来てほしいんだ」

神奈川県警察がある場所だった。僕達には取り調べを受ける覚悟はできていた。真実を話すのも、美佐江達のためだ。それとは別に報道されている内容から、犯人特定は出来ていない。警察は彼らを犯人だと断定してないのだろうか。いや、僕達の話聞いてから、判断するに違いない。

「わかりました」

部筑は傍らで本を読んでいる。

「誰？ 女？」

「話し聞いていて、わかるだろ」

「わかんないよ。信二なら、女に敬語つかいそうだし」

「どんなイメージだよ」

目的地への途上には、横浜での事件が起こった公園があったが意識的に反れた。事件のことを話しに行こうとしているのにも関わらず、事件のことを忘れようとしている。

「緊張してきたんだけど」

しかし、強張った脳は、事件のこと以外の思考を停止していた。

「あがるなって。挙動不審だと怪しまれるぞ」

「わかつているんだけどさ」

「張り手してやろうか？」

「いない」

「体、ほぐれるぞ」

「部筑も少しは緊張しろ」

僕が呆れたら、部筑はわざと両手を震わせた。

「お、俺だって、き、きんちょうし、しているんだ」

「勝手にやってろ」

建物自体が居丈高に僕らを迎えているような神奈川県警察所に足を踏み入れた。柄の悪そうな男が背を丸めて座り、それを、窓越しに受付の女性が眺めている。傍らの部筑は腕を組みながら歩いていた。

受付で、沢村を呼び出してもらい、指定の部屋まで来るように言われた。そこでは、ここ最近の生活について聞かれ、正直に答えた。

沢村は腕を組んだ。そして大きく息を吸う。

「君達を殺人容疑者として逮捕する」

僕の中で、何かが砕けた。

X・取り調べ

——どうして……

ふざけるな。俺達はやっていない。部筑の怒声が、スニーカーの擦れる音が、激しい息づかいが、背後から聞こえてきた。僕はといえば、息をしているのさえわからない。振り返る気力もなかった。

四角くて無機質の空間で、沢村と対峙した。昼だというのに、恐ろしく暗い。僕の心はもつと暗いはずだ。耳を塞いだ。血液の脈動が聞こえてくる。

冤罪^{えんざい}という言葉が頭を過った。満員電車で良く起こる出来事ぐらいは知っている。しかし、痴漢とは罪の規模が違う。悪い意味でだ。「義男さんか美佐江が、僕達を犯人だつて、言ったのですか？」

「答えられない」

短く答えた沢村はバインダーに引つ掛けられている書類に目を落とした。まだ現実を受け止められずにいる部位が弛緩しているかのように、力が抜けていった。

「僕が何をしたつて言うんですか？」

んうんと、喉を鳴らした沢村は、顎をあげた。自分の置かれている状況を考えろ、と表情に表れている。

「連続殺人事件だ」

「待ってください」

「時間はたっぷりある。君次第では、疑いが晴れるかもしれない」と言った沢村は、ラッキーストライクのパッケージを取り出し、美味しそうに煙草を吸った。その弛緩している顔に、引いていた血の気が蘇ってくる。

「ですが。やっていませんから」

「T村の『？エコノミーテクノ』という会社で盗難事件があつてね——なぜ……」

「客先展示用に飾られていた製品だ。盗まれたのは二つ。身に覚え

はあるよね？」

僕はうな垂れるように頷いた。

「どちらも、信二君が盗んだのかな？」

「いえ。ひとつだけです」

義男に引き取ってもらったことも話した。T村の警察には話が付いているはずなのに。沢村は否定も肯定もせず、ボールペンで何やら書き込んでいた。

「どうして盗んだのかな？」

「いや——」

事件捜査をやっていて、殺人の道具に使われたのではないかと推測していたことを話した。

「その話は後で聞こう。次に不法侵入だが」と彼なりのペースになる。

『？エコノミーテクノ』の不法侵入、低雲丘で発見した遺体の、匿名での通報とつづいた。

確かに、盗難も、不法侵入も、処分は義男に委ねていた。しかし、義男はなかったことにしようとしていた態度だった。どこで狂い始めてしまったのか。

「それらは、事件捜査のために行ったんだね？」

僕は頷いた。

「悪気があったわけではありません」どうしても、そうする他になかった。

「悪気がなかったら、やって良い行為ではないんだよ」

「わかっています」

「新横浜で事件があった日、君は現場付近にいたよね？」

知っていて、質問してくる口ぶりだ。しかも、僕が返答に困ることも予想済みのようだ。

「それは……」

「K書店員さんが、君の写真を見せると、身に覚えがあったらしいんだ。あの日、君は何をしていたんだい？」

「就職活動で、企業面接をしていたんです」

「何時ごろから？」

「ええと……」言葉を濁す。余計なことを話してしまい、企業の内定取り消しが思い浮かんだからだ。

「企業名を覚えてくれるかな。連絡するから」

「止めてください——十五時からです」

「ふーん。なるほど」ボールペンを使って、書類をトントンと叩いた。

「十二時頃、K書店の前を歩いていて、被害者にぶつかった。それで、一旦家に帰り、十四時三十分頃、石崎美佐江さんと駅のエスカレーターで偶然会ったと。うん、食い違いはないね」

被害者、城島博志の第一発見者の通行人は十三時に通報していた。沢村が言うには、死亡推定時刻が十二時から十三時。まるで、証言者と発見者の言葉で成立したような死亡推定時刻だ。二者の証言を除いた空白の二時間半なら、殺人を行うには充分だと、沢村は考えているのだろう。

「だが、一旦家に戻った証拠は無いんだね？」

「一人だったから」

「君の髪の毛と思われるものが本に挟まっていたんだ」

「挟まれていた？」

沢村は城島博志が持っていた『どん底からの億万長者への道』の二百七十ページ目に、僕の髪の毛と同じ物が挟まっていたと真面目に言う。『希林寿』で借りていたときに、偶然抜け落ちてしまったとしか考えられない。

「いや、事件当時に挟まっていたものだ」

あのページには横線が引かれていた。他のページより熱心に読み込んでいたのではないかと示唆している。だから、髪の毛が挟まっていたのだとも。人間は一日に五十本の髪の毛が抜け落ちるとの蘊蓄も出てきた。

「事件前、あの本には触れていませんから」

「殺人遂行に集中していて、抜け毛を振り払うまでは気が行っていなかった。とか？」

「違います」

沢村は眉を上げる。いつの間にか、煙草のフィルター以外はすべて灰になっていた。

「君達がない間、『希林寿』の浴掃を調べさせて貰ったんだ」

鹿野紀子の話だと、宿泊客は一週間以上途絶えていた後、僕達が初めて『希林寿』を訪れ、再び宿泊するまでの間も、宿泊客はいなかった。

「部筑君がボウズで、信二君が短い髪の毛だからね。何本か落ちていた」

——もしか……

美佐江から、話があると言って、公園で失踪した小園由美子の話をしたあとき。僕の白髪を抜いてから、化粧ポーチを取り出していた。あれは、化粧直しをしようと考えていたのではなく、僕の髪の毛を持ち帰ろうとしていたのか……

偶然、新横浜で出会ったときに「話があるの」と言ったのは、本当は僕を犯人に仕立ててしまったことなのか……いや、そうだとすると、話せるはずはないのだが。

「僕はやっていませんよ！」感情を込めた。

「誰も、最初はそう言うんだ」

しかし、軽くかわされてしまった。

「挟まっていたのは、白髪ではありませんでしたか？」

「さあ。それは鑑識に聞いてみないとわからない。どうして？」

「いや、何でもありません」

説明する気力が失せていた。沢村はパイプ椅子に座った状態で背延びをした。

「君に貸してあげた『どん底からの億万長者への道』は誰かに見せたりしたかい？」

「『希林寿』に置いていたので」

僕の目が届く範囲では、誰も見ていなかったはずだ。死者の訴えを読みとった事象については、喉元で堪えた。

「そうそう、後、蛍光色の本か」

部筑が見ていた。

「だろうね」

沢村は貸していた本から、指紋を採取していた。『どん底からの億万長者への道』からは僕の指紋を、蛍光カバーの本からは、僕と部筑の指紋を。返すときになって、沢村が食い入るように見つめていたのもそのせいなのだろう。

—— やってしまった……返す時は指紋を拭き取ろうと思っていたのに。手袋をしていたのもそうなのか。訊いた。

「そうだよ」素っ気なく、沢村は答えてからつぶけた。

「城島博志さんの持っていたハンドバックに、君の指紋が付着しているね」

「ぶつかったとき、触れたんだと思います」

「ぶつかったときね」

含み笑いをしている。彼の表情を見て、何もかもが信用して貰えないように思えて仕方なかった。

「阿武隈川で発見された縄と、被害者が持っていた本には、部筑君の指紋が残っていた。君は何か知らない？——それに、あの蛍光色の本は、友達の書斎にあったそうじゃないか。部筑君は一月辺りから、けっこうな頻度で泊めてもらっていたみたいだね。事件のあった二〇一〇年一月三十日も、君と一緒に『密造書展』にいたんだろ」

「彼はやっていません」

「どうして？」

「あの日は、『希林寿』に宿泊していたので」

「それは女将さんに聞いたよ。ただ——」

あの日、鹿野紀子が僕達の姿をみたのは午後七時頃が最後だった。次の日は、午前九時半頃に顔を合わせている。午後八時の新幹線に

乗車したとしても、二時間で神奈川に到着する。田中満高の死亡推定時刻は、午後十一時〜午後十二時。つまり、『希林寿』を抜けだして、神奈川に戻り、田中満高を殺してから車を使うか、朝方の新幹線を利用しても、犯罪が成立する時間がある。

「君達は夜中に『希林寿』を抜けだし、『？エコノミーテクノ』に侵入しているからね」

「ありません」

「阿武隈川で殺人に使われた本に、『限界文芸店』の刻印があった。調べていくと、美佐江さんの代理で部筑君が前日購入したそうじゃないか？」

「それは聞いています。しかし――」

「手慣れた犯行とも呼べる」言葉を遮られる。

「やっていません」

「被害者、金子大輔さんが持っていた本の百十ページ目にも、挟まっ

つていてね」
沢村の視線は、僕の胸元から上昇し、頭のとっぺんあたりで固定された。全身がふるえていくのを感じた。

「君の髪の毛だ――」

金子大輔が殺された日は、僕の人生の大半がそうであるように、何の変哲もなく、何をしていたのかさえ思い出せない日だったのを記憶している。ただ、部筑と美佐江と一緒にいたことは聞いている。沢村の何をしていたかの問いに、適当に誤魔化すわけにもいかず、記憶を手繰り寄せる。家でエントリーシートを書き、近場の牛丼屋で夕食を済ませた。その他はどうしても思い出せなかった。

「その日は誰にも会っていなかったか。そうか」沢村は勝手に納得している。

「念のため、指紋も、髪の毛も、後で採取させてもらうよ」

と言いながらも、僕に髪の毛を抜くよう指示してきて素直に従ったら、部屋を出ていった。一人になった数十秒の間、僕は現実を実感し始めていた。

——このままでは、本当に殺人事件の犯人になってしまふ。

逃げる手段と、石崎親子を疑っていた事実をしゃべってしまう手段、その葛藤がある。

もちろん、前者が何の解決にもならないことぐらいは、平常心が消えかかっているこの状態でも感知は出来ていた。

部筑がどう証言しているのが気になったが、共犯として疑われているのであれば、どうしようもない。

誰が本の間に、僕の髪の毛を忍び込ませていたのかをつき止めるしかなかった。いや、それが出来るのは限られているし、話しの流れからすると、石崎親子しかない。

——じゃあ、なぜ？

疑ってしまったからいけなかったのか。美佐江が流した涙は、僕達が思っている以上に根深かった。だが、殺人をやっていないければ、感情に流されて僕達を殺人犯に仕立てるなんて、するような二人じゃないと思える。

——やはり、あの二人が犯人としか……

沢村は戻ってきた。ついでに部筑の様子を見てきたらしい。

「気丈なんだね、彼は」

部筑の取り調べは、多くの人に恐れられている刑事がやっているらしい。彼を憐れんでいる雰囲気伝わってくる。

「いつまでもつことやら」

もちろん、部筑の精神力の話をしているのだが、取り調べをしている刑事も、いつ頭の血管が切れ兼ねない、という意味も含まれているらしかった。

「さて——」自分を発起させるように、沢村はそう言った。

「残念ながら、人通りの多い横浜、新横浜、阿武隈川からは、君達の足跡を検出することはできなかった——それはさて置き、雪が降っていた数日間だろうな。低雲丘への道に足あとが残っていた。スニーカーの形状が、君の履いていたものと同じだったんだ」

僕の履いていた『アドダス』のスニーカーを見やった。

「被害者の鹿野隆さんのものと、熊？ らしき足跡もあつたかな」

「僕は発見しただけです」

「そうか。まあ、低雲丘で起きた事件は、まだ詳しく捜査されていないから、ここまでにしよう」

沢村は、隅にあるデスクまで歩み寄り、引き出しを開けた。

「決め手となるのはこの本かな」

沢村は透明なビニール袋に入っていた『ブビリオフィリア』を取り出した。

「今話題になっっているの、知っている？」

僕は答えなかった。

「手に入れるの、大変だったよ。予約が殺到しているのに、出版社の生産が追いつかないんだって」

自費出版本を復刻させたいところが多いと言うのだ。義男の発行していた別バージョンはすべて回収されていた。他人に回収ついていたのは数冊であり、ネット販売していたサイトに協力を仰ぎ、迅速な対応が行われていた。また、その本の扱いは盗作疑惑とせずに、隠蔽する方針になっていた。

「犯人は今年で二十二歳だ。君の年齢と同じ」

沢村は親指に唾をつけ、ページを捲っている。

「それが、どうしました？」

「小説の内容とあまりにも酷似しているからね。読んだら？」

「ええ、まあ」

「だけど、世の中があればだけ小説通りに殺人が行われているって信じられているのが、信じがたいよな」

とマスコミ報道の仕方も含めて呆れた。沢村は『ブビリオフィリア』を題材にして何が言いたかったのか不明のまま、事件の証拠説明がひと通り終った。膝がしらをペチンと叩き、沢村は鼻から大きく息を吸う。

「あとは殺人動機なんだよな」

「そんなのはありません。やっていませんから」

許せない。

目の前にいる刑事は殺人犯になってもらうよう僕を説得してくる。説得マニュアルがあつて、その範囲内で事足りている余裕すら感じられる。

他人の人生を左右して面白いのか？

僕のこれからを想定しているのか？

無罪の可能性は考えていないのか？

捜査を仕損じたところはないのか？

殺人動機について、しつこく尋問された。あるわけがないのだ。

彼らを殺す理由なんてない。事件を知らなければ赤の他人だったし、そもそも、人を殺す勇気なんてものはない。

「サイコパスの心理実験は知っているか？」

その名ぐらいは知っていたが、僕は首を横に降った。

「君の祖父のお葬式にある女の子が参列した。君はその女の子に一目ぼれをする。弟も惚れてしまったと告白して来る。寝ても覚めても、女の子のことが頭を離れない。そしてその翌日、君は弟を殺した。どうしてだと思ふ？」

「弟はいません」

「想像してみるんだ。君がその立場になったら、どう思ふか？」

想像するのは容易かった。きっと、嫉妬してしまうに違いないからだ。

「弟に彼女を取られたくなかったから。殺した」

自分で発した言葉に、敏感に反応してしまう。殺した。殺した。

いや、僕はやっていない。すると、沢村は顎に手を置いた。

「なるほど。サイコパスは、葬式でもう一度女の子に会えると思つて弟を殺すんだよ」

「無茶苦茶です」

「君は美佐江さんに気があつたらしいじゃないか？」

その事実を知っているということは、プライベートまで根掘り葉掘り調べられている気がした。

「誰が……そんなことを」

「悪いが答えられない。でもね、誰かを好きになるのは素晴らしいじゃないか」

「――」

部筑も美佐江に気がある前提で話を進めていた。普通の恋より、ライバルがいた方が燃えると沢村は語った。

「恋敵を押しつけて、手に入れる方法がある」

僕は聞き耳をたてていた。

「それは――対象となる人を支配してしまうんだ」

「支配？　と言いますと」

「サイコパスを真似るんだよ。極論だけどね」

あまりにも、非現実的過ぎる。沢村は僕の中にある狂気を表に出させようとその話を持ちかけたのかもしれないが、逆効果だ。支配なんて言葉を軽々しく口にする人を、信用しない。権力で弱者をねじ伏せられるとでも考えているはずだから。真剣に聞いていた自分が馬鹿だった。そんな自己嫌悪に陥っている僕を尻目に、沢村は言う。

「彼女は事件捜査に興味を持っていた。もし、事件と連なりのある人が殺されれば、一緒にいれる時間が作れるから、殺人を犯したとか」

「本気なのですか？」

「例えば、の話だ。だが、誰しも心の中ではサイコパスを飼っている。そう思わないかな？」

「思いません」

沢村は頼杖をした。

「ボランティアをやっている最中に、ボランティア団体の中で気に食わない人間がいる。鬱屈が積み重なって殺してやりたくなる。その直後に恵まれない誰かを救い、家に帰ったら、気に食わない奴を思い浮かべてしまう」

反応を伺ってきた。僕が無言でいたら、

「——そんな人間にボランティアをやるなという権利はない。善、悪が混同した胡散臭い側面を持っているからこそ、精神のバランスは保てたりする」

「完璧な人は存在しないんですね？」

「ああ。要は危ない感情を表に出すか否かの違いだけなんだ」

殺意と殺人は大きな境界線が引かれているのだけれど、ちよつとしたきつかけでタガが外れ、境界線を飛び越えてしまう人間は沢山いるというのだ。彼の経験から得た犯罪心理学の到達点なのかもしれない。

「沢村さんは、サイコパスなのですか？」

彼は自分の顔を指さしている。

「まさか。サイコパスが刑事なんてできないよ」

「刑事は人の心を殺せますよね？」

「参ったな」

僕は現実に殺意を持っていた。

状況を変化させるための殺意だ。神奈川警察所を爆破させるでもいい。僕なんかに構っていらなくなる犯罪が、戦争が起こってくれたら、他に望みはない。連続殺人事件の疑いを掛けられた経緯をすべて紛失させるための殺意。

だが、結局は沢村に殺意を持っていた。

XX・心の中で殺す。それなら自由

身柄を拘束された。

手錠を掛けられ、牢獄のようなバンに乗せられて、刑務所に送られた。同席していた人達の放つ危険な雰囲気も、屈辱的な検査も、どこか他人事になっていた。外の景色を今の内に焼き付けておくと、沢村は忠告してくる。それ程意味のない忠告は、他にはない。すべてがモノクロのように移り、生きた心地がしなかった。

これから、どれぐらい入っているのかはわからない。しかし、無罪を主張しても、誰かから信じてもらえる気はしなかった。早めに認めた方が、刑は軽くなるというアドバイスを受けた。

雑居房が並んでいる部屋に繋がっている、大きな部屋があった。『物品置き場』と書かれている。

「ここにはな。殺人にあった被害者の遺留品が安置されているんだ。その本棚に並んでいる本のいくつかも、遺留品だ」

「遺留品……」

「捕まっている者達はこれを見て、自分の犯した罪を認識することもある」

「……ここにいる間、本をいくつか借りてもいいですか？」

「いいけど、遺留品の読書が趣味なの？」

「ええ」

「変わった趣味だな」

独房に入った。差し込んでくるわずかな陽射しは冷たい。部屋に流れている空気はもっと冷たい。僕の心は、もっともっと冷たい。

僕はやつてもいない犯罪を認めていた。独房に入っていること自体、半分は認めているのだと、思えたからだ。

夜は暗く、朝昼は暗い。

当たり前のようにあった者と物が失われ、行動範囲が制限されていくと、当たり前のようにあった感覚さえも失われていくのだと気

が付いた。天井を見つめて過ごした一日、膝を抱えていた明け方、過去を振り返ることが、唯一の財産だと思われる日常生活になっていた。

隣の部屋には、叫ぶおじさんがいた。ノイズでしかなく、周りからは言葉で止めても意味がないという暗黙の了解があった。看守に止められては再び叫び声をあげる。枯れた喉を労わろうとする手段は、彼にはないのだろう。僕は放置しておくという手段をとった。番号で呼ばれることに、抵抗はなかった。それ以上の難題を抱えているのだから、当然なのかもしれない。むしろ、自分個人とこの場所との距離がある感じがして、その方が楽だった。

精神が水分補給を求めている。僕に、受け皿とスポンジの役目を果たす何かがあるかはわからない。部筑のように、反発心をむき出しにすべきだったかを考えたが、あのときの僕には出来なかった。

これも、やがては慣れてしまうのだろうか。カメレオンのように色を変え、強者に怯えて生きていくのか。生きているうちは、主張も出来なくなってしまうのか。嫌だ。嫌なのに、どうしていいのかさえ思い付かない。

日を跨いでいた。昨日と同じことを、新たな思考をしているかのように繰り返していく。思考によって精神をすり減らし、到達した答えもまた、いつもの答えだった。

四回目の取り調べの日、相手に沢村を指名した。もちろん、融通が効くような場所ではないことぐらい薄々はわかっていたが、沢村が承諾してくれたのだ。

「元氣そうだね」

——そんなわけない。

心の中で悪態をついた。

「殺人動機は相変わらず掴めないと聞いている」

他の取り調べでは殆ど黙秘していたから当たり前だ。むしろ、プライベートなことばかり聞かれていたので、閉口させられていた。

僕は沢村を無視して、話しの方向をかえた。

「いくつか、聞きたいことがあります」

「かまわないよ」

小園猛のことを調べているか訊いた。すると、沢村は顔全体の皮膚を下に移動したかのような表情になった。それも一瞬だった。

「あの事件捜査は片手間でやっていたから」

いいわけ、とは少し違うニュアンスがあったのを、僕はそのとき気が付かなかった。

「小園猛さんは自殺と断定される予定だよ」

「なぜですか？」

「こちらにも、色々な事情がある」と約束を翻した。

「自殺には矛盾点があったって、言っていたじゃないですか？」

戸惑った間を埋めるように、沢村は煙草に火を付けた。不自然なその一連の動作を訝った。

「小園猛さんの奥さんが殺されたのは知っていますよね？」

言うつと、沢村は煙を吸い込んだまま、動きを止めた。

「誰から聞いたんだ？」

「黒岩さんです」テレビの報道もされていたが、あえて言わなかった。

「あのじいさんか……君は足を突っ込まない方が良い」そうはぐらかされると、余計に追求したくなってくる。僕は前かがみになった。「小園猛さんは、奥さんを殺した犯人を探している最中に殺されたんだと思うんです。T村を管轄する警察署に勤めていた沢村さんなら、何か知らないんですか？」

紫煙をくゆらせた。

「——あの事件が起こったのは、まだ大学生だった」

当たり前なのだけれど、沢村に学生時代があったことが、少し信じがたい。

「奇怪な事件として報道されていたから、薄ら覚えているよ」

刑事を目指していた沢村は、世間で起こっている事件を隅々まで

観察していたらしく、その事件は衝撃だった。聞いたこともないような村で、殺人事件が起こる。しかも、本の束と首を縄で括り、水死させたのだから。

「旅行中は子供も一緒にいたらしいですね？」

「子供も？」

沢村の喉仏が上下し、手に挟んでいた煙草の灰が、デスクへと落下した。

「どこで調べたんだ？」

「どこでって……」

小園猛の訴えていたことを読みとった、とは言えず、左近字図書館に置いてあった新聞で調べたと誤魔化した。沢村は目を瞑って首を左右に振り、煙草を灰皿に押し付ける。

「それは嘘の記事だな」

「ちゃんと書いてあったんです」こうなったら、嘘の上塗りをするしかなかった。

「いや、違う」

小園夫婦は金子の経営していた旅館に二人で二泊していた。当時、捜査を行っていた者からの情報もあり、裏付けがあるらしい。

「……ですが」

「何でもマスコミを信用するのは悪い習性だ」

彼が嘘をついているようには思えず、自らの能力を疑った。本から読み取った内容と現実には差異があった経験は初めてだったからだ。

「金子さんに聞いてんですか？」

「ああ。捜査を担当していた者が聞き込みを行っているはずだ」
今となっても、犯人が見つかっていない事実は、共通の認識だった。

「金子さんは心あたりなかったんですか？」

「さあ、死人に口なしだ」

僕の持っている疑問は三つあった。一つは小園佳代が阿武隈川で殺されたとき、小園猛はどこにいたのか。二つは旅行中、小園由美

子はどこに預けられていたのか。そして、小園佳代はなぜ殺されなければならなかったのか。

「一つだけなら答えられる——」と、腕を組んだ沢村は、息を吐きながら言った。

「小園猛さんは旅館の部屋にいた」

しばらく無言のまましていると、沢村は腕時計をしきりに確認するようになった。

「沢村さんはどんな学生でした？」

「世の中を変えたいって考えていたよ。自分の力で。青臭いだろ？」
「いえ。素晴らしい考え方だと思います」

少なくとも、僕にはそこまでの野心はない。カテゴリー分けするなら、草食系男子そのものだ。

「考えるのは簡単だよ。しかし、君に言われたように、人の人生を左右することばかり行ってきた。理想と現実には上手くかみ合わないものだね」

「小園由美子さんは見つかっていないのですね？」

「んん」

沢村は曖昧に答える。刑事のプライドなのだろうか、行方不明になっっている彼女を見つけれない状況に憤りを覚えているようだ。

ただ、僕の無罪を証明するには、小園由美子の存在が必要不可欠だ。
「お願いです。絶対見つけてください」無罪を証明するには、もう彼女が見つかるしか方法はない。

「ああ——全力は、尽くすつもりだ」

歯切れが悪い。どうも、今日の沢村は本調子ではなさそうだった。
「本を前より楽しんで読めなくなりました。どうすればいいんですか？」

刑務所に入っていたせいだ。

「君が、書いてみる立場になればいい」

「その気も起きなかったら？」

「人を殺してみる」

「無理ですよ」

「心の中で殺すんだ。それなら自由だ」

Y・釈放の意味

重厚な門は開かれようとしていた。

その傍らは、乱立した鉄条網が敷かれている。その下は人々の怨恨が溶け込み、深い汚れとしてあらわれたかのような塀が取り囲んでいる。踵を返すと色を失った建物が聳え立っている。

どれも見慣れた光景だけれど、門の外は別世界だった。

視界がかすんでいる。

かすんでいるのは涙のせいではない。涙は枯れていた。陽のあたる境界線を越えたからだろう。空は広くて、どこまでもつづいていくように思えた。

どれだけ、この瞬間を待ちわびていただろうか。苦しくなるまで息を吸い込んだ。

塀の中にいた面々とは、誰一人として話が合わなかった。影として存在しようとしていたのに、僕の素状は無料情報として知れ渡った。連続殺人犯はどこか英雄扱いをされ、やがて異端の者になった。与えられた書籍をただただ読みふけては、時間が過ぎていくのを待った。遺留品の本もいくつか借用して、死者の訴えを読み取ったこともある。しかし、一語一句が夢を見ている時のようにぼやけていて、直ぐに忘れてしまった。自らの心身が充実していないと、この能力は発揮されないのかもしれない。若しくは、読みとろうとする意思がないと駄目そうだ。結局、その答えは出ず、今こうして五十日ぶりに出られたのだ。

部筑とは、刑務所内の運動場で何回か会った。抜け殻同然となっていた彼は、前よりも痩せて、短期間でひどく老けた印象になっていた。僕の問いかけには大概、生返事で答え、日課となっている労働には、無理やり参加していた。部筑も僕と同様、美佐江達を疑っていた事実を、取り調べで話している様子はなかった。ただ、このまま刑務所に拘束されていれば、完全に壊れてしまうのではないか

という心配が過るほどになっていた。最も嫌っていた精神的な奴隷に、彼はなりつつあったからだ。
ある日の早朝、休憩中の彼に声を掛けると、カサついた唇が開かれた。

——住む場所ぐらいは選びたい——

切実なる願いだった。飛び交っているカラスの鳴き声に負けそうな声でそう言ったのだ。僕達の傍には一生を塙の中で暮らす連中もいれば死刑囚だっている。彼らの精神は酷く不安定で、皆、ガラス細工を扱うように接していた。

——いつか、絶対に出れるから。それまでの辛抱だよ——

当てなんて、存在しない。しかし、彼を励ましていないと、自分まで可笑しくなりそうだった。

その数日前、美佐江達は親子揃って面会に来た。釈放されたのは、美佐江達の働きかけのお陰だった。彼らを完全に信じていたわけではなかったけれど、取り調べ中に余計なことまではしゃべらなかったのが、功を奏した。

僕達が逮捕されて合わせる顔がなかったのか、初めは挨拶もままならなくて、悲愴な面持ちをしていた。彼らは部筑とも面会を済ませていた。

——ごめんね——

開口一番だった。それに習って、義男が謝罪してきた。

彼らは僕らを売ったりはしていない。事件発生で調べてきたことを正直にはなし、僕達はそれに協力してもらっていたことも話していた。そう釈明した二人は、僕達が塙の中にいることが驚きだったらしい。となれば、警察内部の人間が、事実を改ざんしていたのかと問うたら、二人は返答に困っていた。

——ここでは、言いつらいのかな？——

探りを入れた。すると、美佐江は口を開いた。

——わたしが『ブビリオフィリア』の匂いを嗅いだのって覚えてる？——

僕は曖昧に頷いた。覚えていなかったわけではなく、何故その話をするのかがわからなかったからだ。

『希林寿』を出払う前、僕達が石崎親子を疑っていたときだ。T村の阿武隈川で起こった事件が書かれた本の匂いから、美佐江は何かを思い出そうとして思い出せなかった素振りをみせていた。神奈川に帰り、ここ最近に会った人間の中から、同じ匂いを感じたのだと言う。

——美佐江が最近にあった人と言うと——

鹿野紀子、黒岩、沢村だった。この三人から、『ブビリオフィリア』の匂いを感じ取っていたという。

——意味がわかったの——

僕達が捕まってから、調査をつづけていた。くわしい話しは後日話すといった素振りで言葉を切り、美佐江は目を配らせた。僕の背後には看守がいる。

——真犯人がわかったから——

囁いた。看守の耳に届いていたか、定かではない。

——誰？——

早く教えてくれ。早く、早く、早く。

——誤逮捕した人——

——もしかして……——

頭をよぎってきたものが一点に集中する。そんなことがあっていいのか？

いや、違う。何故、今まで気が付かなかったのか。

——信二と部筑と、鹿野隆さんを誤逮捕した人——

美佐江ははっきりとした声で言った。看守は咳払いをした。

Z・役目（前書き）

今回で最終回になります。

読んでくださった方々には感謝します m (- -) m

Z・役目

Z Z Z Z

道行く人の視線が気になり、皆、噂しているような被害妄想が沸いてくる。釈放された、とはいえテレビでも報道されているかもしれないからだ。こんなことで有名にはなりたくない。

携帯電話の着信は電源を入れている間で十二件あった。そのうち三件が内定した企業からの着信だった。

留守電のメッセージを聞くのが正直怖い。意を決し、再生ボタンを押すと、四月からの研修の案内だったので、安堵する。残りの二件のメッセージも聞いた。一件目は無言だった。刑務所を出たその足で商店街の中に向かった。釈放されたら『密造書展』に来てくれ。もう一件の吹き込まれていた声が言っていたからだ。

商店街のスナック前で、立ち話をしている二人組みがいた。スナックのママと五郎さんだった。五郎さんは人の気配を横眼に察知したのか、口を動かしながら首を曲げる。僕は反射的に目を反らした。「よう」

聞こえていないふりとは裏腹に、体はピクリと反応した。

「こっち来なさいよ」

いつの間にか、彼らに囲まれる形になっていた。

「大変だったらしいじゃないか？」

「いろいろと」美佐江達は、二人にも協力を仰いでいたらしい。となれば、商店街中に噂が広まっていることが想像に容易かった。

「箔が付いたじゃない」

スナックのママは、入所した経験がのちになって武勇伝になると、励ましてきた。

「はは、男ってもんは、武勇伝を語りたがるからな」

「最近の五郎さんは、喧嘩の話しばっかり。作り話っぽいし」

「ばかやろう、作り話のわけないじゃないか」

若い頃は毎晩飲み歩き、気に入らない連中には必ず喧嘩を売っていた話をする。はいはい、聞きあきたよ、とスナックのママは諷める。

「どこまで聞いていますか？」

「それは、美佐江ちゃんから聞きなつて」

温かく迎え入れてもらっているのは理解できた。そうだ。自分は悪いことはしていない。ただ、ちよつとやり方が不器用だったただけだ。大分気持ちになり、地面を向いて歩く姿勢を正した。

「よし、俺も仕事するか！」

五郎さんの、威勢の良い声が聞こえた。

中央の本棚には、新しい本が補強されているのが見えた。ストレスを抱えた犬のように『密造書展』付近を歩きまわる。入口をノックする。それにも勇気が必要だった。

美佐江が姿を現した。

「お疲れ様」大粒の涙を、目じりにため込んでいる。

「ほんと、疲れたよ」

やつとの思いではほ笑んだら、彼女は抱きついてきた。肩口に冷たい液体が触れる。僕は抱き返して良いかもわからず、ただ立ちすくんでいた。

「良かった」美佐江の声はくぐもっていた。

「美佐江達のおかげだね」

二階には義男、部筑、そして、紹介された小園由美子は、部屋の隅にいた。こんな形で出会うとは思わなかったので、どう話して良いかわからず目が合わないようにしながらも目線を走らせるという奇妙な初対面になった。痩せていたからだろうか、写真の印象とは少し違い、あどけないのだけれど、シャープな印象の女の子だった。「お勤めごきょう」

皮肉も含めていつもの部筑だった。彼は一足先に釈放されていた。柄にもなくハイタッチをして、抱き合った。それを見ていた義男は

微笑んでいる。

「もう一人くるの」頃合いを見計らった美佐江は言った。誰が来るのかは、聞かなくてもわかっていた。

小園由美子は、『エコノミーテクノ』に荷物を置いた後、資金がなくなるまでホテル暮らしをしていたが、お金が底をつき、美佐江を訪ねてきたらしい。殺人罪は認めていて、この話し合いが終わったら、自首する予定になっていた。

「その前に」

場を仕切る美佐江や、僕の居ない間にいろいろ調べていた義男の口からは、いくつかの新事実が浮き彫りになった。僕らの捜査してきた内容にも、それらを匂わすものが多々あったので、抵抗なく受け止められた。

「由美子も、来たらすべて話してよね？」念を押された小園由美子は頷いた。

「——遅いよ」

不機嫌に言う。そこで、小園由美子の声を初めて聞いた。美佐江に案内されてきた沢村の表情は引きつった。

「どういっつもりなんだ？」

「まあ、座ってください」

義男は諷めた。沢村は、失踪していた小園由美子がいると、美佐江から連絡を受けていたらしい。その美佐江は、電話を掛けている。相手は五郎さんらしい。

「君らを誤逮捕させたことを言いたいのか？」僕はまだ、何も言っていないのに、沢村は口を開いた。

「それもありますけど」

部筑は呆れていた。誤逮捕を証明できたのは、小園由美子の存在も大きかった。逆に、誤逮捕という彼の杜撰な行為がなかったら、僕達はここまで辿りつけなかった。

「沢村さん。あなたが本当の犯人ですね？」

美佐江の口は、そう発した。沢村は当たり前のように、否定する。
「今、五郎さんに聞いたの。沢村さんがここに来るとき、商店街の監視カメラに映っていないって」

とすれば、彼はここに来た証拠も作りたくないように思える。

「偶然だ」

「わたし達が警察に話をしに行ったとき――」

石崎親子の対応をしていたのは沢村だった。『ブビリオフィリア』を見せ、彼は初めて見る本だと珍しがっていた。書かれている内容と、実際に起こっている事件が酷似している説明をし、かなりの驚きを示していた。しかし、美佐江は沢村が以前からその本を手にしていてことを悟った。例の、能力でだ。

「能力って……頭は大丈夫なのか？」

反発する。そして、付き合っていられないと、目を反らす。

「その本は、小園のかわりに私が発行した本です」

原稿をワープロで起こし、全国流通させたことを義男が説明する。そして、彼に内緒であったことも。

「なら、著作権の侵害ですよ」沢村は頬を上げた。しかし、目は笑っていない。

「もう、ちゃんと話そう」

小園由美子は縋るように語りかけた。それは、深い仲にあったものに向ける懇願だった。しばらくしてから、沢村は言った。

「君とは初対面じゃないか」

「やめよう……わたし達は共犯なんだから」

「違う！」顔はみるみるうちに歪んでいく。

「認めよう」

「勝手なことを言うな」

沢村は必至に否定していた。醜かった。それがつついて、大人をいじめているようで哀れにもなっていた。「わたしが殺したのは田中満高さんと鹿野隆さん」

「ふ、ふざけるな」

「あなたが殺したのは、金子大輔さんと城島博志さん——」

「それと——」

美佐江が何かを言いかけた矢先、沢村は飛びかかった。男三人は、寸前になって彼の勢いを止めた。美佐江は小園由美子に覆いかぶさる形になった。部筑は後ろに回り、羽交い締めにする。

「暴力は良くありませんね」

義男は静かに威圧するような口調だった。「これ以上、罪を重ねるつもりですか？」

最初は抵抗していたが、やがて諦めたのか、沢村は息を整えてから、

「……わかったよ」と肩を落した。部筑が腕を離すと、土下座をする前のような姿勢でうな垂れていた。

小園由美子は静かに語り始めた。鹿野隆を殺してすぐに、遺書を残して自殺するつもりだった。

「酷いことをしようとしたのに、美佐江達は……」

かばっていた。美佐江達が警察へ話しに行った後、沢村から連絡をもらった内容を聞き、彼女は自殺を思い留まった。美佐江と義男は、小園由美子から受けていた脅迫をいっさい取り除いた状態で証言していたからだ。もちろん、僕や部筑が不利になるようなことも話していなかった。

「後は警察がやる仕事ですからね」

義男はそう言うが、どう考えても意図的にかばっていたことがある。

「自分の罪を、誰かに押し付けて死ぬなんて……出来なかった」

美佐江が小園由美子の頭を撫でている間、僕は言った。事件現場に置いてあった本に、後から髪の毛を忍ばせておけられるのも、犯人であり、刑事という職業があつてこそ可能だ。金子大輔と城島博志を殺し、隠れて通報を待つ。たまたま近くにいた、とされていた沢村がいち早く現場に駆けつけて、本を証拠品として押収する。

「君の推理はだいたい合っている」

「僕らを犯人に仕立てようとしたのは何故ですか？」

「君達が知り過ぎていたからだよ」

沢村と初めて会った横浜の事件現場を思い出す。僕はあるとき、神社で殺されてから公園に運ばれたのではないかと尋ねた。

「もちろん、それだけではない」

新横浜で事件が起こった日、沢村は終始、城島博志を尾行していた。金子殺しの疑いを掛けられていたから、彼の単独行動は警察内部で怪しまれることはなかった。そして、僕達が事件捜査に執着していることも手伝っていた。

それとは別に、小園由美子は新横浜の殺害現場にいた美佐江を目撃していた。

「美佐江を攫うつもりだった」

沢村と小園由美子は、田中満高が殺害された日、ここにいた。商店街に監視カメラが設えてあることも、それには死角が存在していることも仲間内の情報から把握していた。小園由美子は合鍵を持っていたので、侵入は容易い。小説『ブビリオフィリア』通りに殺人事件が起こることを知っていたのは義男だけだ。攫おうとしたのは、黙って見ているようにと脅迫したのが嘘じゃないことを証明しようとしていたのだ。

当初、殺人犯を美佐江親子に仕立てる計画があった。『？エコノミーテクノ』に入社し、凶器となる『U-130』を盗み出した。だが、計画の矛先は僕達に転じた。小園由美子が勝手に脅迫するという行為を二度もしていたからだ。しかも、自ら犯人ですと告白しているような内容だ。まず、脅迫されていた者を犯人にするわけにはいかない。鹿野隆を殺した後、連絡を受けるまで、小園由美子は誰かに犯人を押し付ける計画を知らなかった。

「美佐江はいつも両親の話をしていたの。大好きだった——」

小園由美子は美佐江と義男に視線を走らせ、俯いた。

「家族の話をされるのが許せなかったの」

美佐江は声を詰まらせる。

「……ごめん」

「ううん。本当はわたしがいけないの」

親と上手くやっているように振る舞っていた。普通の家庭があつてこそ、上手く人間関係を構築できると考えていたのだらう。嘘の上塗り、彼女を苦しめる結果になつてしまった。

「由美子」

「父親を恨んだ。恨み続けた。子供と思つてくれない父親を」

小園由美子は、学校で自分だけ母親がいない現実に失望し、夜な夜な泣くようになっていた。小園猛はその姿をみて、一緒に寝る日が多くなつていった。

ある日、過ちを犯してしまった。

親子の関係が崩れていった。彼は娘に対し、悪戯をし始めたのだ。太い指が体へと侵入してきたり、舌が這いずり回ってくる。それがエスカレートし、ついには体の関係を持った。

「体を求められていたの」

自分がどんどん普通からかけ離れていっていることを察した。中学生になり、やっとの思いで体の関係を拒んだ。いや、その前から拒もうとはしていたが、少しの反抗では動じなかったのだ。ただ、流石の小園猛も、警察に相談するとまで言われたら、逆上したらしい。

「父さんは、とても怖い顔をして言ったの。あんな怖い顔は見たことがないくらい——お前は自分の子じゃないって」

小園由美子の声は、乾いていた。まるで、他人の遠い過去の話をするように。

彼女は高校に入学し、父元を離れて一人暮らしを始めた。彼の呪縛から逃れられるのなら、いくらお金に困っても耐えられそうな気がした。小園猛は過去を清算しようと努力はしていたが、心は通じ合うことはなかった。信用出来るのは人間ではなく、動物だけだと思ひ始め、大学では動物学を専攻した。

「それで？」部筑は先をせかした。

反抗の寿命は短かった。仕送りをしてくれる父親の有難味がわかるようになり、胃を悪くして病院にも通っていたのを心配し、年に数度は父元を訪れるようになっていた。

ただ、主目的は他にあった。いくら探しても、自分の出生届けが見つからなかったので、彼女はある決心をしたのだ。

「DNA鑑定を受けたの。父とはあまり似ていないし、もしかしたら違って」

小園由美子は寝ている父親の口内から、指定された麵棒で細胞を採取した。

検査結果は一致しなかった。

——お前は自分の子じゃない。

自分のことのように、その言葉が頭を駆け巡る。

「本当のお父さんとお母さんは誰なのか……」

当然、殺されている母親のDNAは調べようがなかった。「まだ

わからないの」

「由美子ちゃんの母親は佳代さんだ」

沢村は小園由美子の肩に触れた。

「どうして言い切れるの……沢村さんだって、他人でしょ？」

小園佳代が母親であることは、前から聞かされているらしかった。

「答えてよ！」

「由美子ちゃんの、本当の父親だからだ」

「——沢村さんが？」

義男が訊く。一同の視線は、沢村に集中した。

「隠していて悪かった」

ただでさえ色白の小園由美子は、血の気が引いていき、真っ青になっていた。

三ヶ月前、沢村は小園猛が他殺だと疑い始めた。小園由美子と知り合ったのは、その頃からだった。

「彼とは、鹿野隆さんが逮捕されたあたりから、話すようになって

——ご主人の誤逮捕については申し訳ありません。できればこのことを内密にお願いしたいのですが。

——ええ。○○○○はしません——
は、

ええ、訴えたりはしません。

だったのか？ を問うてみたら、沢村は頷いた。

「良く覚えていたね」

「いや、まあ」

満更でもないと思っているうちに、部筑は咳払いをした。

「生前の彼に、謝っておくべきだった」

「誤逮捕以外にも、小園猛さんに謝るべきことはあるんじゃないですか？」

美佐江が言う真意は彼の書いた小説をなぞり、殺人を犯していたことだと思っていたが、違った。

「ああ。佳代さんを殺してしまったことが」

小園由美子は虚ろな目になっている。フラついた上半身を、美佐江が抱きかかえた。

二十年以上前、大学生だった沢村と小園佳代は不倫関係にあった。小園猛は仕事で帰らない日も多く、彼女の寂しさを紛らさすような恋から始まったらしい。二年つづいた関係だった。その間、体の関係を持つて生まれたのが小園由美子だ。

しかし突然、終わりを切りだされた。いずれ離婚するのではないかと考えていた沢村は納得がいかず、予定していた夫婦旅行に着いていったのだ。

「佳代さんは、旅行中なのにも関わらず、金子の経営していた旅館で小説執筆に夢中になっている小園猛を取ると言いだしたんだ。信じられなかった——」

執筆していた小説は、『ブビリオフィリア』の原型になるものだ。その内容を期待に満ちた顔で話す彼女を見て、溢れんばかりの衝動

が生まれた。その衝動とは、彼ら夫婦の関係を、告げ口という形で壊すのではなく……

「殺意が芽生えていた」沢村の目は、憎しみを映し出していた。

僕は唾を飲んだ。

二人が話し合いに使ったのは左近字図書館だった。公衆電話で旅館に連絡を入れ金子が電話に出た。当時、二人の間で連絡をする際、フルネームを明かさないという決まりがあり、沢村はこうやりとりをしていた。

「宿泊客で、佳代さんという方がいると思うのですが？ おつなぎください」

「佳代さんですか？ 小園佳代さんでよろしいですか？」

「はい」

「失礼ですが、あなたのお名前は？」

「たかしです。本人におつちやつてもらえば、わかると思うので」

「……わかりました。少々お待ちください」

と、彼女を呼び出した。

小園佳代は散歩に出かけて来ると言っていたらしい。不倫の負い目があったので、夫である小園猛に左近字図書館に行くとは言えなかったのだろう。

沢村がいくら説得しても、彼女の心は変わらなかった。妊娠を打ち明けられたとき、沢村は戸惑ったまま答えを出せずにいた。おろしてほしかったのが本心だ。しかし、小園猛は躊躇いもなく産もうと言った。それが大きな分岐点だった。と沢村は語る。

小園佳代は沢村と別れてから、阿武隈川の下流に行き、一人で物思いにふけていた。散歩に出かけた証拠を示す意図があったかもしれない。

「殺害には、図書館から盗まれた本を使っていたらいいですね？」

「盗んだのではなく、焼却用に束ねられたものを拝借しただけだ」

沢村はどうせ捨てられる運命の本なら、もらった方がましだと思っていたのだ。

本に夢中になっていた恋敵への当て付けとして、沢村は盗んだ本を使って小園佳代を殺した。そのとき、彼女はなぜか抵抗しなかった。

捜査の手から逃れた沢村は、刑事になった。刑事は事件を追う側の人間である。社会的な信用も得られる等、殺人犯にとって打って付けの隠れ蓑になった。

警察で事情徴収を受けた金子は、死の直前に『たかし』という男から小園佳代に連絡があった事実を証言している。沢村は丁村への委任を自ら志願し、金子をマークした。

他方で、丁村には不穏な空気が流れつつあった。

金子の経営していた旅館は、阿武隈川の水を使っていた。経営が危ぶまれてきたのは、丁村に『希林寿』が建つもつと前であり、誰かしらが阿武隈川で殺人事件が起こったという噂を広め始めたからだと疑っていた。

「金子さんにそんな噂を広めた奴を探せと言われたときは驚いたよ。捕まえて、名誉棄損で訴えるとも言ってた。警察にそれを依頼する住民も可笑しいし、普通は犯人を探せって思うだろう？」

部筑は頷いてから、

「あと、殺人事件の犯人に依頼していたんですからね。それは驚きですよ」

当然、噂を流したやつなんてものは見つからなかった。

「金子さんは、鹿野隆さんを憎んでいたからね。『ホテル・旅館ソムリエ』の本を使って、怒りの矛先を『希林寿』にぶつけていたんだ」

同時期、刑事訴訟法改正があり、時効に安住しようとした沢村の計画は狂った。そして、都合良く金子は何者かによって殺された。

聞き込みを行っていくうち、沢村は自分と同じ名前である鹿野隆を犯人にしようと企てた。彼は『ホテル・旅館ソムリエ』が出版されてからというもの、金子とは話し合いをしていたし、金子の死亡推定時刻の前後にアリバイがなかった。誤逮捕の末、小園佳代を殺

した犯人としても疑いがかかるかもしれないと考えたのだ。

誤逮捕までの計画は上手く遂行された。鹿野隆が誤逮捕されてから、沢村は小園猛と出会うようになる。彼は自作『ブビリオフィリア』を紹介してきたり、読んで感想を述べたりで仲良くなっていた。鹿野隆は四年で出所した。沢村にとっては意外な結果だった。

小園猛は金子殺しの真犯人を突き止めていたと共に、獄中の彼へと手紙を送っていることも沢村は知った。

「佳代さんを殺した事実を掴んでいそうな関係者全員を、殺してしまっししか残されていなかった。金子の息子である金子大輔、元従業員であり金子殺しの城島博志、鹿野隆、そして小園猛」

この四人は鹿野隆の無罪をはらすため、いつか繋がりを持つ可能性がある。計画を練り、実行のときを待っていた矢先、小園猛は低雲丘で遺体として発見された。

通報したのは小園由美子であり、それから沢村と繋がるようになった。唯一、他殺の可能性を示唆していた沢村に、小園由美子は心を許した。話をしていくうちに、彼女は酷い仕打ちをしていた父への愛情を取り戻していることがわかった。

「自分が父親だと打ち明けられずに居た状態が歯がゆかった」

沢村はそう言つと、拳を握り絞める。僕が思うに、二人の間では自然と親子の絆が形になつていったのかもしれない。

部筑は言つた。小園猛が雪の残っている低雲丘で殺されたトリックだ。

「なかなかの推理力かもしれないけど、違うな。小園猛さんの死亡推定時刻は、発見される三日前じゃなかった」

「嘘をついていたのね？」

美佐江の体から離れた小園由美子が言つた。沢村は頷いた。地元の警察は、小園猛が発見された日を死亡推定時刻として断定していた。

「死亡推定時刻は地元の警察の言う通り、由美子ちゃんが発見した日だった」

焼失によつて死亡する人の死亡推定時刻を正確に判断するのは難しい。しかし、三日も誤差が生じるとはまずないと言う。小園由美子は沢村を睨んだ。

「鹿野隆さんが殺した話しも嘘だったの？」

「ああ——」

沢村は阿武隈川の事件が描かれている『ブビリオフィリア』を小園猛から教えてもらっていた。読んだ沢村は驚愕した。自らが犯した殺人が克明に描かれていたからだ。彼はそのとき二十一歳、犯人と同じ年だ。しかも全国流通されている。

小園由美子は不正を確かめる意図があつたが、実際『？エコノミ―テクノ』に入社するよう指示したのは、沢村だった。小説内に唯一実名で登場し、手直し前の原稿を持っていた義男を監視するためだ。

小園猛の他殺説は、鹿野隆を殺すためのこじつけだった。

「小園猛さんは、子供と一緒に心中したんだ」

「意味がわかりません？」部筑は言う。

「彼にとっての子供は小説『ブビリオフィリア』だけだった」

病的なまでの書物愛者は、自らが作り出した本を、本当の子供と言い切る者がいる。もちろん、作家の中でも、自分の生み出した作品を子供と形容する人間はいるが、本気で思っている人間は極小だ。その極小の人達は心理学でも証明されていて、精神異常と判断されるには微妙な位置にある、と沢村は講釈した。大人しく聞いていた義男も、美佐江も、そして小園由美子も、皆一様に現実を受け入れられないでいた。

「小園猛さんはあるとき、『ブビリオフィリア』がたったひとりの子供であると打ち明けてきたんだ。それを聞いて、殺意は鈍った。自分と同じく常人から逸脱した人間かもしれないと、心躍ったよ」

沢村は自らを精神異常者だと告白した。殺人に味をしめてしまったサイコパス。心の中で飼ひ慣らしていた。もし、この殺人計画に

支障をきたす者がいたら、すべて殺すつもりだった。僕の腕には鳥肌が立ちはじめた。

しかし、小園猛は、沢村の犯した不正にも気がつき始めている様子だった。鹿野隆の誤逮捕。小園佳代の殺人。もしかしたら、これから行う殺人事件、そして、その犯人を誰かに仕立て上げ、出世する道を歩もうとしている計画までも知られてしまったかもしれない。と沢村は言う。

「関係者全員、殺してしまう以外に、そんな魂胆があっただんですね？」 部筑は言う。

「ああ——本気なのかを確かめるため、いや、彼を殺す前提で、借りていた本を低雲丘で燃やした。それが、小園猛さんが死ぬ三日前だった」

小園猛は子供に母の死因を知られないため、阿武隈川の事件を書き直したのかもしれない。彼にとっての子供は『ブビリオフィリア』だ。小説に事件を書いている、ということは、子供の心に、母の死因を刻んでいることにもなる。生まれて一年なら、記憶には残らないと考えていた。

「私が悪いのです」 義男は懺悔するように言った。「私が、別バージョンの本を出版しなければ…… 小園は自殺しなかったかもしれない」

「いや」

沢村は否定した。

「小園猛さんは一冊の子供が死んだことを知り、絶望した。そして、残った子供と心中した」

「ですが。別バージョンの『ブビリオフィリア』を読んで、小園が涙を流していたと聞きました」 義男が目を向けると、小園由美子も同意した。

小園猛にとっての子供は『ブビリオフィリア』なら、別バージョンを発見した瞬間は相当精神的なダメージを受けていただろう。義男はそれを嘆いている。

「泣いていたのは、そのせいじゃない——小園猛さんに送った別バージョンの『ブビリオフィリア』の中に、脅迫状を挟んで置いたからだと思う」

「えっ。じゃあ……」小園由美子は、驚愕した。

子供が燃やされなくなかったら、低雲丘に來いと沢村は脅迫状を書いていた。しかし、指定日より三日前に、沢村は『ブビリオフィリア』を燃やし、そのときに残っていた油をつかって、小園猛は自らの命を絶った。

だから、別バージョンの本を出版し得る義男さんに問い質そうとしなかった。

『ブビリオフィリア』の内容通りに殺人を犯そうとしたのは、小園由美子に対する、せめてもの報いだった。沢村は、小園猛の人格を変えてしまった人物を金子大輔と城島博志に、殺してしまった人物を鹿野隆だと嘘をついて、彼女を利用していた。

「殺人を犯していくうちに、父としての、由美子ちゃんに対する愛情が強くなっていった。異常者だった自分が変わるかもしれない」と

殺人を犯し続ければ、二人の関係は持続していく。二人で共有していた秘密がいつしか彼女の心をも支配できるのではないかと、沢村は思っていた。

「……沢村、さん」

小園由美子は潤んだ瞳で、彼の姿を映し出していた。

「終わりだ。これからすべてを話しに行くよ——へへ、心配しないでいい。こうなってしまったら逃げも隠れもしないから——いつかは殺人を隠しきれなくなってしまうと思っていたよ。本当なんだ。由美子ちゃんと同じ運命を辿れるなのだから」

「由美子でいいよ」

「えっ？」

「お父さん。行こう」

「由美子、今度、スリランカに行こう」

戸惑いながらも、彼女は頷く。美佐江と小園由美子の約束だった。沢村と小園由美子は肩を並べ商店街を歩いていた。その姿は小さくなり、曲がり角で消えた。彼らがどこに向かっているかはわからない。警察かもしれないし、どこか遠くかもしれない。心中も考えられた。彼らが行き着く場所まで見送る選択だっただろう。しかし、僕達には僅かな親子の時間を邪魔することは出来なかった。

「失踪した話を打ち明けてくれたとき、僕の白髪を抜いてくれたの、覚えてる？」

「うん」

「あれってすぐに捨てたの？」
「当たり前でしょ」

美佐江は母親の白髪を見つけると、随時抜いてあげる習慣があったらしい。

「すごい気にしていたの。老けて見えるから」

「そういうことか」僕は声を上げて笑った。

「変なの」

書斎に戻ると、部筑は表面が真っ黒になった布巾を、義男は叩きを持って作業をしていた。

「お前達も手伝えよ」

「私の書斎だぞ。綺麗に扱ってもらわないと」

僕達四人は、『密造書展』の掃除をした。

Z・役目（後書き）

参考文献

- 『本の歴史』ブリュノ ブラセル著 「知の再発見」双書
『書物の敵』ウィリアム・ブレイス著 八坂書房
『売文生活』日垣隆著 ちくま新書
『鑑識の神様』須藤武雄監督 二見書房
『本（あたらしい教科書2）』永江朗著 プチグラフィックブリッシング

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0140n/>

ビブリオフィリア

2010年10月8日12時25分発行